

---

# 幻獣の主

らく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻獣の主

### 【Nコード】

N8976J

### 【作者名】

らく

### 【あらすじ】

ポケモン世界の住人が死んだらゼロ魔の世界に転生。異世界に来たはずなのにポケモンが居て・・・生まれた地はポケモンと共存している土地でした。

という感じの話です。

原作は49話より。

\*ポケモンにストーリーが無いのでポケモンは原作からキーワード

に変更

**キャラ設定 (50話時点) (前書き)**

ネタバレを含む。

読んでない人は目次へバック。

もう読んでる人は、見なくても良い。

オリキャラ及び、原作と差異がある人物のみ紹介。

## キャラ設定 (50話時点)

リリアーナ・デュ・テリエ (16歳)

オリ主。

髪の色はエメラルドグリーン (コードギアスの魔女さん)

胸は豊か、スタイルも良い。

身長166 سانت (モンモランシーと一緒に)

美少女。

\* レズではない。

得意系統は『水』『火』のスクウェア。

『風』はトライアングル。

『土』はライン上位

名目上は『火』系統。

精神力はそこのスクウェアよりも遥かに多い。

2つ名は『幻獣』だが非公表。

リリアーナが幻獣だと知っているのは今の所、デュ・テリエの屋敷の人間とカトレア、エレオノール、カリーナのみ。

腕輪の力を使う事で、自分の所にポケモンを呼び寄せる事ができる。  
送るのは無理。

必殺技は、極大消滅呪文『メドロア』。

1発撃つだけで、精神力を半分消費。

「ダイの大冒険」よりパクリ。

メドローアの練習のおかげで、魔法の2重行使が可能。

水の精霊と個人的に盟約を結んでいる。

使い魔はファイヤーのペルセフォネ。

ノエル（25歳）

オリキャラ。

リリアーナ専用メイド。

そこらの商人や貴族よりもよっぽど良い教育を受けており、頭もいい。

綺麗な金髪ストレート。

10人居れば、10人が美女というThe美女。

元々肌が綺麗、デュ・テリエに来て更に綺麗に。

出るところ出てるのに、着痩せするというわがままボディ。

14歳の時、リリアに気に入られ無試験でデュ・テリエに就職。

最初は700エキューノ年だったが、今では1000エキューノ年。金を使わないので金が有り余って大変。

毎日リリアーナと一緒に寝ていたがリリアーナの魔法学院入学に伴い、一人寂しくリリアーナの部屋に寝ている。

ノエルにとってリリアー又は、妹・恋人・友人 e t c  
とりあえず、リリア大好き。

不治の病を患う。

エレオノール・アルベルティーン・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・  
ド・ラ・ヴァリエール（27歳）

原作キャラ。

大体は原作通り。

原作との違い。

不治の病を患う、既に末期。

リリアー又によって治療は諦められた。

リリアに対してはデレ120%、その分ルイズにツンが行き原作以  
上にルイズには怖がられている。

リリアの魔法学院入学に伴い、ダイヤのイヤリングを贈る

モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ  
（16歳）

原作キャラ。

大体は原作通り

原作はどうか知らないがこの話では『水』のライン。

リリアー又大好き。

ライバルはノエル。

モンモラシーにとってリリアは、姉・友人。

エレオノールと同じく不治の病を患うかは作者のテンション次第。  
ギーシュの扱いは上記次第。

使い魔はカエルのロビン。

エステル・デュ・テリエ（36歳）

オリキャラ。

髪の色はエメラルドグリーン

リリアの母親。

子供は3人。

リリアのパーツはエステル譲り。  
スタイル諸々は、娘になど負けない。

『水』のトライアングル

ほんわかフワフワ。

リリアーヌは絶対エステルに勝てない。

パートナーはシャワーズ

使い魔は水竜。

存在するのか知らないけど……。

大人っぽい雰囲気から若い頃は実年齢よりも上に思われていた。

アーデルハイト・ド・ゲエテ（16歳）

オリキャラ。

栗色のポニーテールで清楚な美少女。

スタイルは良い。

胸は平均より少し大きい。

ゲエテ伯爵の娘。

魔法学院でリリアーヌに一目惚れする、その時の衝撃は雷に打たれたかの様。

現在の目標はリリアーヌに抱き締めて貰う事。

リリアーヌに対しての想いは、キュルケさえ怯ませる本気っぷり。それはもう、本気。

『水』のライン上位。

使い魔はウォータサラムンダー。

デュ・テリエ侯爵

オリキャラ

話には出てくるが、設定は金髪ダンディーのみ。  
名前すら不明。

『火』のスクウエア

サモン・サーヴァントの使い魔は火竜。  
パートナーはヘルガー。

カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴ  
アリエール（24歳）

原作キャラ

多才。

病気は水の精霊のおかげで、日常生活を送るのには不自由しない。  
そのため、名前はヴァリエールのまま。

魔法学院入学に伴い、リリアーナにオルゴールを贈る。

カトレアにとってリリアーナは、姉であり妹・友人。

ルイズ・フランソワーズ・ルブラン・ド・ラ・ヴァリエール（  
15歳）

原作キャラ。

原作以上にエレオノールに苦手意識を持っている。

リリアーナに対しては、カリーヌに近い苦手意識（怖がっている）  
原因は会う度にお尻をペンペンされたり、勉強でのスパルタ教育の  
ため。

アンリエッタ・ド・トリステイン

原作キャラ

リリアーナの事を「リリア様」と呼ぶ。

## ポケモン設定（前書き）

ポケモンの名前とか

今後もポケモンは都合よく増えていく気がします。

現時点で追加登場が決まっているのは5匹程

## ポケモン設定

コーティ（ウインディ）

- ・1歳の時に侯爵に貰った。
- ・「貰い火」を使えば火の粉がリリアーナがトライアングル時代の全力『フレイム・ボール』と同じ
- ・進化してもモフモフに変わりなし、度々リリアーナの抱き枕に
- ・名前は、名前に困った時にたまたま手元にあったラノベより。

・初登場は12話

イルシオン（ギャロップ）

- ・リリアーナが最初に召喚したポケモン
- ・色違いであり蒼い炎
- ・時速240Kmで走る
- ・蒼い炎は美しい
- ・名前はフランス語で『幻想』。

・初登場は18話

セリア（ハクリュー）

- ・リリアーナと同じ時に生まれ、リリアーナと共にあるべくしてある。
- ・天候を操る。
- ・電撃・炎・氷・竜技、何でもござれ
- ・目がクリクリで可愛い
- ・名前は作者の青のイメージより。

- ・初登場は15話

#### ティア（パルシエン）

- ・ノータイムでの<オーロラビーム><冷凍ビーム>はチート技
- ・最硬クラスの防御力
- ・作者はパルシエンが好き
- ・名前は『涙』より

- ・初登場は29話

#### ガイア（ドサイドン）

- ・錬金でプロテクターを作ったらなんか進化した
- ・<角ドリル>は最早音波攻撃
- ・某世界ではドサイドン先生と呼ばれる
- ・攻撃力がばねえです
- ・通常抱くイメージ程遅くない、人間からしてみれば充分速い
- ・名前は『大地』より

- ・初登場は29話

#### エクレール（サンダース）

- ・雷の石で進化したときになつき度が2下がった
- ・言わずと知れたスピードスター
- ・雨の日は、ほぼ無敵だと思う
- ・名前は『稲妻』より

- ・初登場は35話より

#### アーロン（ルカリオ）

- ・リリアーナのゴレムとの組み手は5VS1でも余裕
- ・波動でなんか色々解る
- ・名前はポケモンの映画でルカリオの主がこんな名前だった気がする

- ・初登場は37話

#### アクア（シャワーズ）

- ・抱き締めると冷たくて気持ち良い
- ・<水鉄砲>で狙い撃ち
- ・身体がほぼ水分と同じであるため水の精霊と同化出来る
- ・水中ではダメージ受けないと思う
- ・名前は『水』より

- ・初登場は46話

#### コスモ（スターミー）

- ・<念力>を使う事で誰かを空戦仕様に出来る
- ・<バリアー><光の壁>など、防御もこなせる
- ・スターミーの<ハイドロポンプ>はやってる最中に回転しながら空を飛べると思う
- ・名前は、スターミーって宇宙から来たとか何とか

- ・初登場は46話

### ブレード（ハッサム）

- ・空戦が出来る
- ・「テクニシャン」・・・。
- ・火メイジ相手にはチームを組もう！
- ・名前は、アニメのハッサムこんな名前だった気がする
- ・初登場は46話

### はまちゃん（ヤドキング）

- ・〈念力〉で空戦の補助が出来る
- ・イメージは映画版のなかなか知的な感じで
- ・名前は、映画版の声優より
- ・初登場は46話

### ペルセフォネ（ファイヤー）

- ・ゲームの初代では哀れすぎた伝説の鳥ポケモン
- ・他とは文字通り格が違う
- ・リリアの使い魔
- ・名前はアスラクラインより〈春の女神〉

## 1話 くプロローグく（前書き）

処女作+こういった文章を書くのは初めてなので文章稚拙+ご都合主義的なのは見逃していただけると幸いです。

あくまで、ゼロの使い魔の世界にポケモンが入っただけですのでポケットモンスターのストーリーにご期待の人はバツクを推奨します。

## 1話 くプロローグ

多くのジム戦を経験し、各地方のバッジを8つ以上集めるという厳しい条件を必要とする大会にも出場し、そこそこ名も売れてきて、早くも三年目を迎えた長年のパートナーでもあるポケモン達との旅。そして今は、故郷がすぐ近くなのですが大会で顔を会わせるだけだった彼と初めて大会以外で会ったのでバトルをしています。

長い付き合いだから私が指示を出さなくても阿吽の呼吸というやつで私の意図を読み取ってくれるんだけど、技名を叫ぶのは夢があるからなのです。

「トゲキッス！<破壊光線>！」

「不味い！リザードン、<ブラストバーン>！」

「無駄です。」

莫大な熱量を持つであろう炎が禍々しい光線と接触するも一瞬の膠着さえ許されず霧散し、その発射主にぶち当たり、爆発した。

「グギャー！！！」

彼のリザードンが5・6mの高さから落下しその落下音と共に砂埃を発生させた。文句無しの決着だ。

「解っていた事ではあるが、君のトゲキッスは化物か？俺のリザードンの<ブラストバーン>がああも容易くブチ抜かれるとは。」

「彼方も失礼ですね。あんなに可愛いあの子をつかまえてどの口が化物なんて言いますか。」

「いや、あの威力は反則だろう？最早賞賛よりも呆れの方が強い。」

<破壊光線>と<ブラストバーン>は同格の技だと思ってただけど、ちょっと自信が無くなったよ。」

「愛が足りないのです。」

「いやあ愛と言うけど、そんなレベルの話じゃあんな化物みたいな威力にはならないと思うんだけどねえ。」

「……化物……。」

「すまない、そんなつもりで言ったんじゃないけど謝るよ。」

見るからに落ち込む私を見て金づり・対戦相手が謝罪をして来ました。

「許しません。私とあの子は酷く傷ついたのでお昼ご飯を要求します。」

「……インスタントで良い？」

「舐めてんですか？」

昔であれば有り金半分奪い取るのが違法でない時代だったので今となってはそれも違法。

私の故郷の赤い人は私より年下にも関わらずロケット団とか言うマフィア・犯罪組織を壊滅させたという逸話があって、ただだけ儲けたのかと会う度に詰問しているのですが教えてくれません。私の計算ではどんなに少なく見積もっても10億くらいは筆取りするはずなのですが……。

彼が旅をしていた時代はポケモンセンターが無料とかいう意味分からん制度だったので尚更です。入ってくるばかりでウハウハです。当時12か13だった彼は税金払ってませんし、不当利得もいいます。

まあポケモンバトルに負けたら相手に小額ではあるけどお金を渡すというのは今でも慣習として続いているのですが、大した額にはならないので私の場合はご飯を奢らせるのが常となっております。ポケモンのご飯はバカになりません。

そんなわけで、街です。食事です。

「あの子達さあ……………まだ食べるの？君もだけど……………ちょっと持ちが……………」

「この店に入るまでに（ポケモン金融 年利10%）って看板がありましたよ。良心的ですね。それに彼方はけっこう稼いでるって噂ですからATMで卸してくれば良いでしょう？」

「……………」

「まあ、食べ過ぎると美容にも悪いのでこのくらいにします。10万はいつてないのでこの人なら余裕で払えるでしょう。」

「……………感謝するよ。」

「これでも一般常識は身に付けてるので食いすぎってことくらいわかってますが、マサラに近いトキワ出身なのに（榊さん家の雫ちゃんとそのポケモンはお店の味方、財布の敵）という標語を知らない彼方が悪いのです。私は正当な権利を行使しただけです。私は悪くありません。」

「大会以外で会った事無いのにそんな噂知るかあ！！！」

「他には（榊さん家の雫ちゃん）は天才で、いずれあらゆるタイプのポケモンのエキスパートになる」とか（5歳の時の夢は魔法使い）つてのが有名です。」

「……………」

彼は啞然として、固まっています。

「……………」

「……………」

返事が無いただの屍のようだ。

そんなこんなで彼を放置し、今は以前捕まえたバリヤードがある程度戦えるレベルになったのでトゲキッスと最終段階の実戦訓練中で、

トゲキツスは自由に動いて貰って私はバリアードにのみ指示を出していています。トゲキツスに攻撃技の威力だけは加減するように言っていますが、それを差し引いてもバリアードが予想以上に成長していて嬉しい限りです。

そろそろ締めということを感じ取ったのであろうトゲキツスが大技の<破壊光線>を撃とうとしているので少し焦りました。いくら何でも<破壊光線>はやりすぎです。後でオシオキすることを誓いながらもバリアードに指示を出します。

「全力で<光の壁>！絶対に堅持して！」

「バリ！」

数瞬後、禍々しい光線が放たれました。ぶっちゃけ怖いです。<破壊光線>ってあんなに恐ろしい技だったのかと改めて再確認した所で光線が<光の壁>と接触しました。

「パリンッ！」

先ほどの<ブラストバーン>と同じく一瞬も耐えることなく<光の壁>が砕け散り<破壊光線>は貫通してきた威力そのままバリアードの脇を抜け、バリアードの後ろに居た私を……貫きました。

## 2話 誕生

トゲキツスの<破壊光線>に身体を貫かれて、夥しい量の血が流れ出るのを見て誰かに言われるまでもなく「死ぬ」ということを半ば他人事のように感じながらも受け入れた私が最後に見たのは私に駆け寄るバリヤードと反動で動けなくなり、宙に浮いているトゲキツス。そして、空を飛ぶ虹色に輝く「何か」から私に向かって光が放たれる瞬間だった。

私は死んだ筈なのだが、死ぬという事を初めて体験したものである。本当に死んでいるのかすら分からない。しかし、生きてはいないのだと確信があった。

気付けば私はコポコポと音のする真つ暗な「何処か」に居た。

そこは、何も無いのに全てが充たされている様な不思議な感覚のする場所。全てが充たされているが故に私は眠りについた。

誰かの歌声が聞こえた気がしたが、今の私には些細な事だった。

私が次に気付いた時最初に見たのは薄ぼんやりとしているものの、確かな光だった。何も見えなかった暗い場所から外に出てきたのだと、産まれたのだと、理屈でなく感じ取った私が最初にしたことは感覚に任せて泣き叫ぶ事だった。

「旦那様、奥様元気な女の子でございます。」

「女の子か！よくやった、エステル！」

「ええ、私もこの娘も頑張りましたからね。」

「そつだ名前を決めねば！早く決めねばこの娘が拗ねてしまう。」  
「貴方、焦りすぎですよ。急がずともゆっくり決めれば良いのですから。」

「いや、しかしだな・・・その・・・早く名付けてやりたいではないか。」

「早く名付けてやりたいと言ってますけど、産まれてからゆっくり名前を考えようって譲らなかつたのは貴方ですからね。」

「確かにそつだが・・・。」

「領民への発表をせねばなりません。10日程で決めて頂ければよろしいかと。」

「そ、そつだリュシーの言つとおり領民にも発表せねばならんから急がなくては！」

「そうですね。リュシーの言つとおり10日後までに決めれば良いのですから急がずゆっくり考えましょう。」

未だ視界のはつきりとしめない私の傍で誰かが聞いたことの無い言葉で喋っている。声の調子から喜んでるのだということだけは感じ取る事が出来たので意味も無く嬉しくなった。

何時の間にか眠っていたようで、目が覚めると私の意識もかなりはつきりしていた。そのおかげで今の自分の状態を確認することが出来た。

いや、感覚的に分かっていたことではあるのだが・・・そう、分かつてはいたのだ。今の身体は産まれたばかりの0歳児だと。

喋るうにも口から出るのは「アー」とかだけだし、身体は殆ど動かないし。視界だけはつきりなつたのは不思議ですが、不都合は無いのでラッキーだと思っておきましょう。

しかし・・・こう・・・改めて頭が働くようになって理屈で認識出来る  
と死んだけど生まれかわれて良かったかと思うよりも「有り得ない  
」という思いや戸惑いの方が強いのは仕方ないことでしょう。

それにしても、何故私は死ぬ前の記憶があるのでしょうか？

死ぬ前の記憶があるなんて人のことは聞いたことがありません。ま  
してや実際に会ったこともありません。

まあ、そんな人に実際に会ったら警察に通報するか病院に行くこと  
をお薦めするのですが・・・実際に自分がそんなモノになつてしま  
うと笑えません。

実は生前の記憶がある人は変人扱いがされるのが嫌で黙っていただ  
けであつて、極普通に生活していたのでしょうか。

私だけが生前の記憶を持つ特別であるなどということは無いでしょ  
うから。

話が逸れましたね。最後に見た光が怪しいのですが今となっては謎  
のままです。あと10秒で良いから意識を保っておけばあの光が自  
分に向けて降り注いだのか、たまたま光っていただけなのか確信が  
持てたのですが、今更言つても仕様の無いことです。  
動けるようになったら調べてみるつもりではありますが。

そういえば、ここは何処なのでしょう？

私が最後に居たのはエンジュシティの近くだったのですが。

「おお、目を覚ましたようだぞ。」

寝転がっていた私を30いくかいかないかくらいの金髪の男性が抱  
き上げて指で頬をツンツンしてきます。あと10年もすればダンデ

イーなおじ様になるのは間違いないと思わせるかつこいい人で嫌な気はしないのですが、微妙に痛いので抗議しましょう。

言葉で抗議したい所ですが、喋れないのは分かってるので頬を振って抗議の意思を表現します。

「貴方この娘嫌がつているじゃないですか。産まれたばかりの子供はデリケートなんですからもっと優しくしてあげて下さいね。」  
男性は私を取られてションボリしていますが些細な事です。

男性から私を奪ったのはエメラルドグリーンの綺麗な長い髪をアツプで纏めている20代前半くらいの綺麗な女性で、ほんわかした雰囲気を出していて心が和みます。私の知り合いに居なかったタイプの人です。

相変わらず何言ってるのか全く分かりませんがこの二人が私の両親のようです。

それにしても、全く聞き覚えの無い言葉です。海の向こうの国の言葉でしょうか？

しかしそうなるあの光が何か調べるのに余計な手間がかかりそうです。

「あらあら、どうしたの？そんなに難しい顔をして。お腹が空いたの？」

はっとした時には既に母の胸に吸い付いていました。これが本能というやつでしょうか。

母乳は味がしませんでしたがお腹一杯になった私は非常に満足です。

### 3話 く夢く

その夜私は夢を見た。

その夢の中で私は生前の姿で森の中を散歩していた。気の向くままに散策していた所開けた場所にトゲキッス、ウインディ、ガルーラ、ジバコイル達が居た。

夢を見ていると分かつてはいたのだが死に別れた皆を見つけた私のテンションは急上昇。

夢とは言え長年一緒に暮らし、旅をしてきた仲間達に出会えたのだ、誰も私を攻めることは出来ないと思う。

私にとって皆が大切なように、あの子達も私を大切に思ってくれていたようでトゲキッスとウインディが<神速>で突っ込んできたとしても私は責めることが出来ないのだろう。・例え激しい痛みにのた打ち回ろうとも・・・。

特にトゲキッスが酷く泣いていたため私は動けず大変だった。

そこでは不思議なことに皆と直に言葉を交わすことが出来て私が死んだ時の状況を知ることが出来た。

死因は当然トゲキッスの<破壊光線>。

私が倒れた後にホウオウがやって来て私の身体を<聖なる炎>で焼き払ったらしい。

伝説のポケモンが実在した事にも驚きだが私の身体がホウオウによって火葬され、きちんと弔ってもらえないのが少し悲しかったのだが、よくよく考えてみると<聖なる炎>で焼かれる以上の弔いが存在しない気がするのでよしとしましょう。

何故態々たかが人間の小娘の死体を焼くためにホウオウが来たのか不思議だったのですが、

なんでもポケモンが自らの意思で主と定めた者を意図せず殺害してしまった場合そのポケモンは罪悪感から、世界のバランスを壊す一因となり、それらが重なれば世界に対して悪影響を齎すので、いちいち甲いに出て来ているらしい。

そもそも、ポケモンとはただの動物ではなく<幻獣>と呼ばれる種であり生物の中ではセカイに最も近い存在であり、その管理をするのが伝説と言われるポケモン達であるとのことだ。

だからこそ、良くも悪くもセカイに対して影響を及ぼせる。

ホウオウの出動回数が多そうでご苦労様とっておいてとお願いすると、ポケモンがモンスターボール補正が無くても良い程の忠誠を人間に対して誓うのがそもそも稀で、そのポケモンが主を殺してしまふなど更に稀だという。

さらに現在はモンスターボールを利用することで昔と比較すると「広く浅い信頼関係」+「モンスターボールによる服従」が主体となつたためモンスターボールが発明されてからは未だに数回しか火葬を行っていないようだ。

火葬するのはトレーナーを「転生」させるためであり、トレーナーを「転生」させることによってポケモンの罪悪感がある程度浄化することが出来、ポケモンはセカイを壊すほどの罪悪感から解放されるらしい。

ある程度の説明が終わると、ホウオウが現れた。

出て来るなら自分で説明したら良いのにも思ったが、この夢には限界時間があり状況説明はその中に含まれないためこの子達が自分

で説明した場合お喋りする時間がその分増えるためこの子達が説明したとのことなので感謝した。

その後は皆とまったり過ごしていたのだが、お別れの時間がやって来た。

泣きました。

最後の最後にホウオウは「貴女が転生した世界は、異世界です。新たな生をお楽しみ下さい」と爆弾を落として去って行った。

・・・異世界？

#### 4話 くお披露目く

「皆の者！娘の披露式に集まってもらって感謝する。これが我が娘であり、我等がデュ・テリ工家の一員となったりリアーヌ。リアーヌ・デュ・テリ工だ。」

父が私を抱き挙げながら私の紹介をすると大きな歓声上がる。

只今、我が家の大きな広場で私のお披露目式の真っ最中です。

私の発表を観に来た多くの民衆が眼下にひしめきあっています。何故たかが娘の発表ごときでこんなに人が集まるのかというと、少し時間を遡ります。

ここが異世界だとハウオウからついでのように告げられ、目覚めた私が最初にしたことは周囲の状況を改めて確認することでした。

最初に今居る部屋の中です。

とりあえず広い、天井が高い。

異世界だと受け入れるとして、建築様式が違うのだと仮定したとしても一般家庭でこれはさすがに無いでしょう。転生前に何処その城主主催でやっていた大会の折に城に泊めて貰った時にしか見る事の無かったような、豪華な部屋です。

バトルが強くて大会の賞金やらを貰っていたからといって、所詮私はまだ18の小娘だったのですから貯金はせいぜい8000万円くらいです。

まあ小娘が持つてる金額じゃないのは分かってますし、8000万が大金つてことも分かっていたのですが……守銭奴だったんです、私……。

だから贅沢して高いホテルに泊まったこと無いんです。

バトルで勝った時にご飯を奢らせたのも実は財布からお金が出て行くのが嫌だったからという理由が8w……3割くらいです。ホントですよ？いくらなんでも、自分の財布からお金出すとポケモンのご飯ケチりそうだとかじゃないですからね！折角だから自分でご飯食べさせるよりも豪華なものを食べさせてあげただけなのですよ私は。

文句は受け付けません！

……私のお金。8000万が……。

泣いても良いですよね。

部屋に置いてある調度品も見ると高そうです。まあ私は芸術品とかまつたくわからなくて、以前「お前に見せるくらいなら、赤ん坊で見た方がマシだ」と言われたことがあるくらいなので当てにはなりません……。

今その赤ん坊ですし。

「おはよう私の娘。」

私が目覚めたことに気付いたのか母が朝の挨拶をしてきました。朝の挨拶は大事なので、私もおはようの気持ちを込めて「アー」と言います。

今日は髪を纏めずに、そのまま流している母の服装も見てみたのですが、これまた豪華です。朝だというのにドレスです。パーティーでもするのでしょうか。ドレスに対する憧れはあるのですがこれが普段着だとするとちょっと嫌です。

ネックレスに付いている宝石はルビーでみたいですね。私も欲しいです。

女の子ですから、食い意地ばかり張ってるわけじゃないのです。

母を観察していると、ノックの音がして女性が部屋に入ってきた。「奥様、御朝食の準備が整いましたのでお部屋へお出ください。」  
「ありがとうございます、リユシー。」

メイドさんでしょうか。 まんまイメージ通りの服装なので間違いないでしょう。

・・・奥様・・・？

というか・・・メイド？

何故にメイド？

若干混乱している私をよそに母に抱きかかえられたまま別の部屋に移動しているのですが、廊下が長い上に広い・・・。ホントに城みたいですよ。両親が余程の金持ちということは確定でしょう。貧乏よ

りは金持ちの方が良いのでラッキーですね。

ここが食事部屋なのでしよう。無駄に広い気がしますが。父は既にテーブルに付いています。やっぱりテーブルも広いですね、長いと言った方が適切な気もしますが……。

それに、あそこに居るのは執事さんでしょうね。そりゃメイドが居るんだから執事も居るのが当然な気もしますが。

「それでは頂こうか。」

「あら？お義父様方はご一緒ではないのですか？」

「父上と母上は泣きながら都に帰った。農作物の取引交渉の途中だと言うのにあの二人は孫を見たいと言って竜に乗って飛び出して来たらしいからな。」

「なんと言いますか・・・とんぼ返りとは流石ですわね。」

「見に来た孫がずっと寝ていたから泣きながら帰って行ったのだがな。」

父も母も呆れてるようで苦笑しています。

取引交渉ということは商売をしているのでしょうか。こんな家に住むとかどんだけ儲けてるんですかこの親は。

・・・・・・・・・・・・・・・・？

あれ？

言葉が解ります。

そういえば、母の挨拶も聞き取れていたような気がします。ホウオウのおかげでしょうか？

そんなこんなで日が過ぎていった。赤ん坊というのは暇だった、とてつもなく暇だった。すぐ眠くなるし起きてても動けないし喋れないし。まあ、すぐに眠くなるので実質起きていた時間というのはそんなに多くないのだけど。

「天気も良いですからお外に行きましょうか。」

相変わらずこの母に抱かれていると心地よくてほんわかしてしまう。今日はすぐにそのほんわかした気分がさめてしまう事になるのだが。

屋敷から出てすぐに目に入ったのは庭だ。本当に綺麗な庭だった。広さから言えば庭というよりも自然公園と言うべきなのだが、家の一部なのだから庭と言うのが正しいのだろう。

抱かれたまま庭にあるテーブルについた私は初めて今まで屋敷と思っていたモノの全貌を掴むことができた。

そう。これは屋敷ではなかった。

私の常識でこれは屋敷とは言わない。

間違いなく、「城」だった。

私の両親は城主だったのだ。

ポカンとしている私をよそに母はメイドにお茶の準備を頼んでいる。

お茶の準備をしに戻ったメイドは機嫌良さ気な父と後ろに付いてくる執事と一緒にテーブルまでやってきた。

「名前を決めたぞ！」

「あら、私に相談せずに決めてしまうなんて意地悪なのですね。悲しげに目を伏せるのだが、どう考えてもわざとだろう。」

「う・あゝすまない。とりあえず聞いて欲しいのだが・・。」  
狼狽する父。気付こうよ。明らかにわざとでしょ。

「はい。聞きましょう。」

ケロッとする母。やっぱりわざとじゃないですか。

「リリアーヌ。リリアーヌ・ド・ル・テリエ。というのはどうだろう？」

「あら、素敵じゃないですか。貴女はどう？ 気に入りましたか？ なんとなく気に入ったので「アー」と言っただけの承の意を表します。」

「では、お前はリリアーヌ・デュ・テリエ。我がデュ・テリエ侯爵家の長女だ。」

・ ・ ・ 侯爵？

「クレマン、予定通り3日後に領民にリリアーヌを披露する。」  
「承知しました。」

・ ・ ・ 領民？ 商売してるんじゃないの？

伯爵とか領民とかこの城とか、どーゆーことー!!という私の叫びは誰にも理解されることなくこうして、私のお披露目の日付が決定した。

抗議を続ける私をスルーした父は城に戻って行った。

その場に残ったのは

「あらあら。どうしたの？リリアーヌ」

という、のんびりとした母の声と「アーアー」と空しい抗議を続ける私だけだった。

他の事に注意の向かなかった私は遠くによく知った存在が居ることに気がつかなかった。

その時は・・・だが。

そして披露式。今に至るといっわけだ。

父が侯爵だから、こんなことになっているわけだ。

本来たくさんの方が集まっているのに驚くべきなのだが、私の目はある動物に釘付けだ。

それは私のよく知っている存在でもあり、転生前に一緒にいた子の進化前だったりする。

ガーディーだ。ガーディーがいるのだ。

異世界と言うからポケモンはこの世界にポケモンは居ないのだろうと諦めていたのですがガーディーが居ます。

他のポケモンを探してみるとデルビルやイーブイも居る。

どうやら異世界とは言っても前の所と似てるようで少し安心しました。嬉しい誤算です。

それにしても、民衆の服装が気になりますね。

余程田舎なのでしょうか。それともそういう世界なのか。

ポケモンを見ていると式が終了したようで、私としてはポケモンに近づきたかったのですが母に抱かれていたのでそれも出来ず・・・。

その夜お客さんが来た様でいつもなら寝かされている頃合なのですが金髪の知らないおじさんに会わされた。

「よくお出でになりましたヴァリエール公爵。」

「いや、夜遅くなってしまい申し訳ない。本当ならもっと早くこちらに来るつもりだったのだが。」

「いえ、奥様も妊娠中でありましょう？わざわざ来ていただいただ

けでも嬉しいですよ。」

「娘がどうしても一緒に来たいというものだから遅くなってしまうた。」

その娘はウェーブのかかったピンク色の髪をした女の子だった。

母よりもほんわかした雰囲気を醸し出す美少女だった。美少女か？

「カトレア。」

「初めましてデュ・テリエ侯爵。私はカトレア・イヴェット・ラボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールです。以前からル・テリエ領にのみ生息するという幻獣がこの屋敷で飼われているという話を父から聞きましていつかお訪ねしたいと思っておりました。女の子が産まれたとお聞きしましてそのご挨拶で父がル・テリエ領へ向かうと聞きまして、我俣を言っで一緒に連れて来て貰いました。」

名前長いなホント……。私の名前は短くて良かった。

「よくできたお嬢様ですね公爵。せっかく訪ねて来て貰ったのだが、今リリアーヌが産まれたばかりだからあの子らはいま庭に居るのだよ。屋敷の者に案内させるから、庭に会いに行ってもらえるかな？」

「ありがとうございます侯爵。」

カトレアさんがメイドさんに連れられて外に出て行った。

あれはコレットさんだったか？黒髪をアップに纏めた仕事の出来る感じの人だ。

部屋を出る前にカトレアさんが私に意味ありげに微笑んだのが印象的だった。

私も連れてって欲しいのだが、私の思いは誰にも届かない……。

こうして夜は更けていく。

## 5話 く異世界く

Siddeデユ・テリ工侯爵

私に一人目の子供が産まれてもう一年になる。

目に入れても痛くない程溺愛しているのは、執事のクレマンやエステル付きのリユシーに言われるまでも無く分かっている。

子供の成長は早いと聞くが、赤ん坊の成長はこんなにも早かっただろうか？

そんな事は無い。

その証拠に私の両親やエステルの両親だけでなく、領の視察を行った時にリリアの成長振りを領民に話すとリリアの成長は非常に早いと口々に言うのだから。

産まれてから3ヶ月でハイハイを始め、5カ月で掴まり立ちが出来るようになり、6ヶ月で伝い歩きが、8ヶ月で部屋を歩き回っていた。9ヶ月で言葉を話し、1年たつ今では意思疎通がきっちり出来るようになった。

そして今、私の家庭教師でもあったセバスチャンに文字を習っている。

何が言いたいかと言うと……つまり、リリアは天才なんじゃないかな

るうか？ということだ。

Side out

ポケモンがこの世界にいるのなら、前の世界と近いはずだとい  
う私の予測は脆くも崩れ去った。  
タイミング良く、というかその予測した次の日にはぶち壊されてし  
まいました。

一つは良い意味で。もう一つは悪い意味で。

その日に父の両親つまり私の祖父母が私の起きている姿を見にやっ  
て来たのだ。

竜に乗って……。

普通の竜なら私も驚かない。  
いや、この世界ではこれが普通なのだろうが……。

なんと言つか、竜の姿が生々しいのだ。

私の知っている竜はハクリユウ、カイリユウ、ボーマンダ、ガブリ  
アスといった面々で、確かに成長したドラゴンタイプは他とは隔絶  
した非常に強力な力を宿しているのだがどれも愛らしいのだ。

それと比べると世界の竜は非常に強面だし、何よりでかいのだ。

私のギャラドスよりも明らかにでかい。

私の世界の友人にこの竜の風貌を一言で説明するとしたら、即ち・  
・「ゲームにしてはヒットしたモンスターを狩るあれに出てくる  
竜」だ。

一言で済むとは言っても、それが何なのか分かる人間が非常に少ないのが悲しい所ではある。

そもそも、冒険やバトルが目の前に腐るほど転がっていたので空想の世界のゲームにはまる人間が少数派だったのだ。

そんなモノを女の子である私が何故知っているかと言うと、周りの環境がいけなかった。

私はマサラタウンの出身であり、はつきり行って田舎だ。  
同年代の子供が居らず遊び相手が居なかった私は研究所に通ってポケモンと戯れるのを日課にしており、テレビでは毎日ポケモンバトル講座やバトル大会他にもブリーダーの心得などが流されている。

そんな環境で育てば自然と自分でポケモンを育てたくなるのは当然で、直ぐに自分のポケモンが欲しいと博士にお願いすると、私が自分でゲットするのは危険だからということだ。ポケモンの卵を二つくれました。

それからというものの小さな身体で卵孵化機を常に両手に持ち歩きフラフラしている私の姿は名物の様なものになっていきました。

しばらくすると卵からトゲピーとガーディが生まれ、父には「その子達といつか旅に出るのだろう？」と聞かれました。私もそのつもりだったので元氣よく返事をしたのをよく覚えています。気の早い父は将来レッドさんみたいに立派なトレーナーになるにはバトルの特訓が必要だと教えてくれました。

今思えば6歳の子供にバトルの特訓は少々早いのではないのでしょうか。

父の言葉を真に受けた私はバトルの特訓が必要だと判断。

特訓するにも幼いこの子達を戦わせるわけにもいかず、研究所のポケモンを借りてその特訓を始めました。

強くなりたいなら相手は強いほうが良いと思った私が相手に指名するのは当然レッドさんです。

思えばこれがいけなかったのです。特訓するにも相手を選ぶべきでした……。

伝説とまで言われる最強の相手はなんと……でっかい子供だったのです……。

普段は研究所でポケモンの世話などをしたり、テレビの取材を受けたりとちゃんとした大人なのです。

それなのに、バトルを始めるとあの人が私にした配慮は自分の手持ちでなく研究所のポケモンを使うという1点のみでした。要するにポケモンのレベルを合わせる以外はマジバトルだったのです。

相手はポケモンバトル初心者の6歳児。自分は数多の死闘を勝ち抜いてきた最強のトレーナー。キャリアが違うのです。なのに、あの30歳のでっかい子供は完全無視です。

来る日も来る日も全戦全敗。挫折した私を誰が責められようか？

私だつて簡単に挫折したわけではありません。挫折する前に私も色々頑張ったのだ。

崩れかけた自信を取り戻そうとレッドさん以外と戦ったりもしたのだ。それでも全戦全敗だったのだ。

何故なら、これまたバカなことで町の人に迷惑をかけたくない私がバトルを挑んだのは町にやってくる旅人だったのです。

マサラタウンまでやって来る旅人の目的と言えば一つしかありません。それ即ち、最強のトレーナーレッドとの真剣勝負である。

生きた伝説に態々マサラタウンまで来てバトルの申し込みをするのだがから旅人は考えるまでも無くそれなりの経験を積んだ猛者であるのだが、6歳児にそんなことが分かるはずもない。

旅に出る年齢が15歳以上と決められた時代でそれなりの経験を積んだトレーナーとは当然成人した大人で、彼らの目には自分に挑戦してくる6歳児の姿はさぞ微笑ましいものに映っただろう。

おそらく、そのままバトルをすれば大人の対応をしてくれたのだろう。

……でっかい子供が余計な事を言わなければ、であるが。

つまり「自分の手持ちでないからと言って6歳児のその子に負けたら、俺と戦うまでもないから、バトルは諦めろ」である。

大人の対応をする道を塞がれた彼らが出来るとは私の黒星を増やし続けることだけだった。

そんなこんなで、3年が経過しました。

3年も耐えた私は褒められても良い筈です。

当時9歳の挫折した私が取った行動は自宅での読書、勉強、ゲームそしてトゲピーから進化したトゲチック、ガーディとの戯れ。

端的に言うところ……「引き籠もり誕生」……である。

当時既にレッドさんの「将来とんでもないトレーナーになる」という証言でマサラタウンでは天才扱いされていたらしいのですが私はそんなこと知らずに自分の才能の無さを恨んでいました。

その後両親が週1で無理矢理行かせたトキワのトレーナーズスクールで全戦全勝を果たすのだが、幼き日のトラウマを解消することは出来ませんでした。

スクールに行かない日は相変わらず読書、勉強、ゲーム、戯れのことなかで読書は自宅の本を読み尽くしたので研究所の蔵書を読み漁っていたし、勉強もグリーンさんのお古や研究所の蔵書で勝手にやっていた。卵が増えてコイル、コイキング、ガルーラが新たに産まれ湖に行くことも増えました。

結局引き籠もり生活は私が15歳になって旅に行かされるまで続いた。

その引き籠もり生活時にやったゲームで特にはまったのが「モンスターを狩るアレ」である。

そのゲームの竜はガンガン人を襲ってくるのである。

ゲームの中と同じ気質だったらと思うと恐ろしいことの上ありません。

と、まあ竜だけならそれなりにショックではありませんが生態系の違いというだけで済んだのです。

問題は良いほうの予定外「魔法」です。

そう「魔法」。

さすが異世界です。前と似た世界？んなわけありません。

祖父が竜から飛び降りた時に指揮棒のような物が見えたのです。

最初何に使うか全く分からなかったのですが、よく見てみると父も母も祖母もセバスチャンも大きさは違えども木の棒を持っているようでした。

祖父が私を抱きに来た時にその杖に向かって手を伸ばしてみたら「リリアはもう魔法に興味があるのか？」と言って、何か唱えたと思ったら杖の先から氷の矢が飛んでいきました。

「魔法」という単語に加え、この有りえない現象です。

私のテンションは急上昇で手足をバタバタさせると祖父はご満悦でした。

これに対抗心を燃やしたのが父と祖母で、父は火球を作り、祖母は石を宝石に変えました。

人間が呪文を唱えたら氷の矢や火球を作れ、石を宝石に変える。

・・・有り得ません。

それに、昔の夢は「魔法使い」です。テンションが上がるのは仕方のないことです。

その後の私は早く魔法をつかうために、動かない身体を動かし、

しまりの無い口を根性で言葉を話せるまでに持っていきました。

そして、父に魔法を教えて欲しいと頼むとお父さんでなく「お父様」と呼んで欲しいとお願いされ、呼んであげたのにまだ早いと言われ「お父様なんて嫌い！」と言うと涙を流して謝られ、結局読み書きが出来るようになってからということに落ち着いたのだ。

そして今セバスチャンに読み書きを教わっている。  
魔法まで後一步だ。

## 6話 く契約く

Side セバスチャン

旦那様の要請のもとリリアー又お嬢様に字を教えてさしあげてい  
ます。

1歳児がイスに座って熱心に字を習う姿を見れば驚かれるでしょう  
が、我が屋敷のお嬢様はそれだけではありません。

何故1歳児が字を教わっているかと言うと、事の発端はお嬢様のお  
願いでした。

「お父さん！魔法を教えてください！火の玉や氷の矢が出したいで  
す！」

いくらお嬢様の成長が一般水準と乖離していても1歳で魔法を使え  
るわけがありません。

お嬢様を溺愛していてもそのくらいの判断は可能な旦那様は、まだ  
早いからと一度は断ったのですが、どうしてもとお願ひするお嬢様  
に負けた旦那様が条件を出されました。

その条件が 読み書きが出来るようになること なのです。

私が文字を教えた最年少は当時5歳になったばかりの旦那様でした。1歳児に文字を教えるなど初めてのことで、どうすれば良いのか分かりませんでしたので嘗て旦那様に教えたように教えておりました。そしてすぐに私は驚愕させられる事になります。

今までもお嬢様の成長振りには何度も驚かされていたのですが、今回のこれは別格です。

何故なら、有り得ないくらいに文字の習得が早いのです。

私も旦那様も読み書きをマスターするには2、3年掛かるだろうと予測していたのですが、初日の授業が始まり3時間で文字をある程度覚えてしまいました。

このペースで授業が進んだとすると後1月もすれば条件をクリアしてしまうでしょう。

Side デュ・テリエ侯爵

初日の授業が終了し、また明日よろしくと元気良く去って行ったりリアを見送ったセバスチャンは嬉しいのだが嬉しくないという複雑な表情をしている。

おそらく私も同じような顔をしているのだろう。

「これは不味いぞセバスチャン。これでは2月もすればリアは読み書きをマスターしてしまう。」

「いえ、おそらくお嬢様は1月もあればあの条件をクリアしてしまうでしょう。」

「リリアのために教え上手なセバスチャンを教師役にしたのは失敗だったか……。どうしようもなく教えるのが下手なやつを草の根掻き分けてでも探してくるべきだった。」

1歳児に魔法……。

それ以前に杖の契約がそもそも可能なのだろうか？……。いや、実際の所杖の契約自体は出来ても構わないのだ。

杖の契約だけならば、という語尾がつくのだが……。

杖の契約は10歳前後に行うのが慣わしとなっているのだが、実際には子供の成長具合を見てそれ以前に親の判断で契約の儀式をするケースが殆どだ。

そのため自分の子供に他家より早く杖の契約をさせることで如何に自分達の血統が優秀かを声高に叫ぶ馬鹿な連中が居り、それに追従して競争を始める更に馬鹿な連中が居る。

奴等の薄汚い根性から想像するに、おそらく幼き頃から子供に契約の儀式をやらせて失敗が成功に変わったと同時にパーティー等で触れ回っているのだろう。

そんな奴等が多いにも関わらず私が聞いた所では7歳が最年少なのだ。それが、トリスティンでの公式での最年少記録でもある。

因みにデュ・テリ工家では、我が家に伝わる歴史書を信じる限りでは5歳が最年少記録である。

王宮に報告していただけないだけで、7歳以下で杖の契約を成した者は居るとのことだ。デュ・テリ工家以外にもおそらく居るだろう。

なんでも、時代的にはトリステイン王国建国から200年経った頃の話なのだが、当時の当主が息子の願いで儀式を行ったところ当時5歳の息子が契約に成功したとの事だ。

それからというもののデュ・テリ工家では5歳になったら試しに契約の儀式をやらせるようになり、何人かはその契約を成功させている。

その時契約に成功した者は男女の例外なく我が家に伝わる特別な「二つ名」を得ているので、あながち早く契約出来ると優秀というのは間違いではないのかもしれないが……。

5歳になったらリアにも慣習として1度契約の儀式をさせるつもりだが、くだらない事で競争させる気はないのでその後は成長するまで待つつもりであった。

問題は 杖の契約をしたことによる可能となる魔法の行使 である。

S i d e o u t

最初の授業が終わりました。

この分だと読み書きのマスターはすぐでしょう。

けれどもお父様に魔法を習ったとしても私にそれが使えるのでしょうか。

ゲームとかで魔法を使うのに必要なのは「精神力」と相場は決まっています。しかし、いくら精神が18+1の19歳だとしても私の身体は生後1年のロリロリボディ。精神力云々関係なく身体的要因で魔法が使えない可能性は充分あります。

出来なかった時は出来なかった時で代わりにガーディの卵でもお父様にねだりましょう。

というか、お父様はいつになったらあの子達と遊ばせてくれるのでしょうか。私のミニマムボディにはガーディがじゃれてくるだけでも危険だということくらい分かっているのですが目の前に居るのが分かっていて遊べないというのは辛いものがあります。

魔法ではなくてそっちを先にお願ひすべきだったでしょうか……。

そんなこんなで、只今杖の契約中です。

只今と言っても既に5日目なのですが。

どうやら、私が魔法を使うためには杖と契約しなくてはいけないら

しいのです。

お母様、お父様、セバスチャン、リュシーさんの4人を試験管に読み書きテストをクリアした私はすぐさまお父様に約束の履行を求めました。

それなのにお父様は今日は疲れただろうから明日にしようと言ってくれました。そんな気遣いありませんから早くして欲しかったのですがテストをやったのが夕食後だった事もあり諦めることにしました。

出鼻を挫かれるとは正にこの事。

翌日の私は朝からテンションが非常に高かったです。

メイドさんの私を見る目がいつもと比べて微笑ましさを割増しになるくらいはしゃいでいました。

朝食後、私は部屋に連れて行かれ木の棒とご対面。

ああ、杖です。これが私の杖なのですな。

私のテンションは更に上昇。

嬉々として杖を手に取ろうとする私にお父様が「リリア。魔法を教える前に杖との契約の儀式をする。」と言つので説明を受けました。

最初はウキウキしていたのですが説明が後半になるにつれて私の気分は降下して行きました。

何故なら 契約の儀式は長い時間がかかり、1月かかることもある だそうです……。

出鼻を挫かれる所じゃありませんでした。

そして今に至るといっわけです。  
杖と契約するだけで一体何日かかるのでしょうか。

本日の儀式終了という時間になって身体に強い違和感が……。  
なんででしょうこれは。

しばらくすると、違和感が無くなり  
「お、おお……これは……なかなかのフィット感……。」

先程までは手に持ってもただの杖の形をした木の棒という感じ  
だったのですが、今は何と言つかしっくりくる感じがします。

腕をブンブン振り回して杖を振ってみます。やはりさっきまでとは  
違います。

「おお、どうやら成功したようだな。」

「おめでとうりリア。」

「ありがとうございます。お母様、お父様。」

これでようやく魔法が使えます。

.....使えると良いのですが.....。

## 7話 く魔法く

S i d e デュ・テリエ侯爵

出来てしまった。

リリアが杖の契約をしてしまった。

歴史書通りであればリリアも杖の契約と同時に魔法を使えるはずだ。

魔法を使えばリリア程度の精神力では空になってしまつのは目に見えている。

初めて魔法を使った者が直後気絶する例は山ほどあり、その行使が若い程それは多くなる。

精神力は一定のレベルまでであれば年齢と共に増えていく。

元々少ない精神力な上に初めての魔法だ、精神力が空になって気絶してしまうのも当然ではある。熟練のメイジであっても精神力が空になれば気絶してしまうのだから。

歴史書には魔法の行使後に後遺症が残ったという記述は無い。その様なことがあれば5歳になったら契約の儀式などという風習は残らないし、逆に禁止するはずである。

しかしリリアは1歳なのだ。今回もそうであるという確証は無い。

「もつと喜んであげたらどうですか？1歳で杖の契約をするなんて快挙じゃありませんか。それなのに貴方ときたらさつきから難しい顔をして黙り込んで。」

「ん・・ああ喜んではいいるのだが。」

「ひよつとして、リリアが魔法を使えなくて拗ねるのを心配してるんですか？いくらあの子でも魔法を使えるのは数年後でしょうから。」

「ル・テリ工家には初代当主が爵位を賜ってからずっと受け継がれてきた歴史書があるのは知っているだろう？」

「態々専用の部屋まで作って大事そうに保管してある本のことでしょう？デュ・テリ工家以外の人間には国王であっても決して見せてはいけないという。」

「そうだ、あれには外部に知られると困ることやら歴代の当主の成した領地開発記録やらが色々書いてある。当然それにはデュ・テリ工家の子供が5歳になったら1度契約の儀式をするようになったかの理由も書いてある。」

「それに何か書いてあったのですか？」

「・・・5歳で杖の契約を成した者はその場で魔法を行使してしまっそうだ。」

「だとすると、リリアは」

「使えるのだろうな・・・。」

「でもまだルーンを教えてないのでしょうか？」

Side out

杖の契約も済んだことですし、早速セバスチャンに内緒で教えて貰ったレビティションでもやってみるとしましょう。

ああ・・・ついに人間が自分の身一つで空を飛ぶことが出来るので  
すね・・・世界は違いますが。待っていて下さい青い空。

お母様もお父様もあつちで何か話してますが一人娘の初めての魔法  
初めての御使いみたいですが　を見逃しても良いのでし  
ょうか。

というか・・・見せたいのでこっちに来てくれないでしょうか。気分  
はまんま親に褒めて貰いたい子供ですね、何か寂しいです・・・。  
精神が身体に引っ張られてるのでしょうか・・・不味い傾向で  
す。

お母様もお父様もこっちに来ました。

「では行きますね。では、セバスチャンに習ったレビテーションを  
ば」

あれ？どうしましたお父様。そんな苦虫でも噛み潰したような顔を  
して、娘の晴れ舞台ですよ〜

まあ気にせずいきましよう。

「リリア、少し待ってくれないかしら？」

いざルーンを唱えようとするとお母様が私を止めました。  
最近出鼻を挫かれてばかりな気がします。

「どうしました？お母様」

「リユシー、水の秘薬を持ってきてくれないかしら？」

水の秘薬とはなんででしょうか？

「お母様、『水の秘薬』ってなんですか？」

「初めて魔法を使うと気絶しちゃう事がよくあるから水魔法で治療をするんだけど、水の秘薬はその補助に使うの。」

「お母様が治療するんですか？」

「そうよ。私は水のトライアングルメイジですからね。」

さすが魔法使いです。治癒魔法も完備とは至れり尽くせりですね。

「『水』の『トライアングル』ってなんですか？」

「魔法には『火』『水』『土』『風』の4つの系統があるのだけれど、メイジには自分にあつた得意系統があるの。そして私の得意系統は『水』。水は治療したり薬を作ったりする時に便利なのよ。」

「じゃあ『トライアングル』は何ですか？」

「それは魔法のクラスのこととて幾つの系統を一度に足せるかっていうのを表すの。『水』や『火』しか使えないなら『ドット』、『土』

『火』みたいに二つ足せるのが『ライン』、『土』『土』『火』みたいに三つ足せるのが『トライアングル』、最後に四つ足せるのが『スクウェア』というわけね。」

「何故同じ系統を二つ足すのです？」

「『土』だけよりも『土』『土』みたいに二つ足すほうが強い魔法が使えるのよ。」

なんか色々ありますね。お母様は『水』ですか。なんか納得です。ナース服とか着せると白衣の天使って絶対言われますね。

「お父様の系統は何なんです？」

「私は『火』の『スクウエア』だな。」

「『スクウエア』はトリステインの中でも殆ど居ないのよ。」

「おお！すごいですお父様！一番多く足せるんですね。」

尊敬の眼差しでお父様を見ると、お父様が私を抱き上げて頬ずりして来ます。

何故か涙が浮かんでますが、何をそんなに感動しているのでしょうか。

「セバスチャンは何です？」

「私は『土』の『トライアングル』でございますお嬢様。」

『火』や『土』は何が出来るのか聞いているとリュシーさんが戻ってきました。手には瓶を持っています。あれが『水の秘薬』みたい

です。

それにしても今日の私は質問してばかりなのです。

リュシーさんも戻ってきたのでようやく魔法が出来ます。

「それではいきます。」

お母様とお父様が期待すると同時に不安の様な表情をしています。娘の晴れ舞台を見ている保護者としては正しい反応をやっとしてくれて私もやりがいがあるのです。

「~~~~~」

ルーンを唱えてみると何かが身体の中で渦巻いてるのがわかります。

わかるのですが、しかし・・・これは・・・足りませんね・・・無理です。

「リリアどうした！気分が悪くなったのか？」

「身体を見せて頂戴！」

ルーンを唱えるのを止めた私にお父様とお母様が駆け寄って来ました。

リユシーさんとセバスチャンも心配気です。

「ごめんなさい・・・精神力が足りないのです。」

魔法を使うのに必要なのは精神力だつてセバスチャンが教えてくれたのですが、絶対違いますね。精神力だけなら私19歳ですから。やはり体力も必要みたいです。

しかし、流石に1歳児のミニムムボディでは体力だけは鍛えようがありません。

根性論にも限界はあるのです。

「精神力が足りないって、リリアはそれがわかるのか？」

お父様が驚いています。

「分かりますよ？お父様はわからないのですか？」

お父様は困ったような顔をしているのですが、

「凄いわりリア。魔法を使う前から精神力の量が分かるなんて。将来はきつと立派なメイジになるわ。」

お母様は頭をナデナデしながら褒めてくれました。無性に嬉しくなるのですが、身体に精神が引っ張られてる気がしてちよっと複雑です……。

「そつだ！お父様、魔法を教えてくださいる代わりにお願いしても良いですか？」

忘れてました。壁の向こうのあの子達が待っているのです。

「言つてごらん。」

「私が歩けるようになってから庭に居た動物を外の人たちに預けちゃったのはマルツとお見通しなのです！あの子達と遊ばせて欲しいのです！屋敷に戻して下さいー！」

ついに言つてやりました。このミニムボデイがどうなるうと知つたこつちや無いのです。魔法が使えない以上私に残されたのはあの子達だけなのです。

お父様も困つてます。しかし、お父様が私を溺愛しているのはお見通し。となると、お父様に残された道は1つだけなのです。さあ！さあ！わかつたつて言つのです！

「ダメだ。」

………へ？

「あの子らがリアにじゃれ付いたら危ないからな。もう少し身体

が大きくなるまで待ちなさい。」

「…………泣いて良いですね。泣きます。」

「良いじゃありませんか。リリアも頑張って読み書きを覚えたんですから、それくらいのご褒美。」

泣いてる私を抱きしめながらお母様がお父様を説得してくれます。

お母様の頭の上に輪っかが見えます。さすがお母様です。

「ね、リリア。」

二人して「ねーー」と言っつて首を傾けます。

私とお母様二人でお父様を見つめます。

私にもお母様にも弱いお父様には今度こそ逃げ道はありません。

この後お父様が渋々頷いたのは言っつまでもありません。

## 8話 く驚愕く

午前中は色々ありましたが、お昼ご飯です。

これが終わればあの子達とご対面なのです。見た瞬間ガーディと叫びながら近づかないよう全力を傾けねなりません。この世界では違う種族名だと考えるのが妥当でしょうから。

毎度の事ながらさすがは侯爵家と言つべきでしょう。貴族なだけあって豪華なものです。

転生前は数える程しか見たことが無いレベルで、それが毎日出てくるのですから最初は驚いたものです。もう見慣れましたが・・・。

デュ・テリ工家の食卓は昼が一番で次が朝、夜の順で豪華になるよつなのです。専属の料理人を雇つてるだけあつて身体に良い、健康に気を使った食事です。

朝は重たくない料理が出てくるのですが、それでも良い物を使つてるといふことが解る。

昼は夕方までバリバリ働くためにしっかりと食べる。昼は毎日豪華なのです。

夜は消化しやすく、それでいて夜お腹が空かない量を出す。

計算し尽された食事の量なのです。

更に、栄養管理までこなす一流の料理人なのです！

彼が私の極貧時代の食生活を聞けば卒倒するでしょう。お金が無い上に守銭奴だったのですから・・・。まあ、それも鴨が葱背負つ

て歩いてくるまでの短い期間のことです。それ以降は守銭奴魂を發揮して、なるべく道具を使わずに勝ちまくっていたので懐は暖かかったですから。

回りは豪華ですが私のご飯は未だに寂しいものなのです。

前に1度隙を突いて食べてみたのですが無理でした。

あの時は本当に料理長に申し訳なくて……。

顎は喋る時に足腰と共に根性でどうにかしましたが、胃はさすがに無理でした。不随意活動はどうにもなりません。こればかりは身体の成長を期待するしかありません。

夜はデザートが出るので毎日それが楽しみなのです。

思えば私は、例え真冬であってもお風呂上りには毎日 旅に出から野宿の日は悲しみに暮れましたが アイスを食べて居たのです。ああ懐かしき日々……。

お昼も終わってついにご対面なのです。

私の傍にはお母様とお父様が居て、その周りにメイドさんや執事さんも居て厳戒態勢なのです。

門が開いて、ガーディ、デルビル、ヘルガーが連れられて入ってきました。

身体がウズウズするのを抑えて聞くべき事を聞きましょう。

「あの赤いわんちゃんは何んて種族なんです？」

「あれはガーディだな。」

・・・あれ？

「じゃあ、あの黒いちっちゃい方のわんちゃんは？」

「あれはデルビルだな。」

あれれれ？何故に？

「じゃあ、でつかい方は・・・？」

「あれはヘルガーだ。あの3体は『火』の系統に属する幻獣で3体とも強力な火のブレスを操ることが出来る頼もしい奴らだ。」

・・・・・・どうなってますか？

炎タイプなのは当然だとしても、名前までが一緒とは・・・。

「ちっちゃい黒いのでつかい黒いのは何処と無く似てる気がしますが、ひよつとして仲間なんですか？」

「その通りだリリア、よくわかったな。デルビルが大人になるとヘルガーになるのだ。大人になる時期が来ると突然光に包まれて、光がおさまるとヘルガーになっているのだ。ハルケギニア中探してもデュ・テリ工領にしか生息しない珍しい種だぞ。」

大人になる時期になると、光に包まれる・・・。

実際はレベルが上がると進化するのですがね。

しかし、デュ・テリ工領にしか生息しない・・・ですか。

「うちの領にしか生息してないってどゆことですか？」

「それは……いや、後で話そう。今はあの子達と遊んで来なさい。」

そうですね。そうしましょう。今はあの子達と戯りたいのです。

「ガーーーーーデーーーーーー!!!!」

てけてけ走ってダイブです!!

ああモフモフです。モフモフが気持ち良いのです。

お父様達が私のテンションにビックリしてるのが振り向かなくても解りますが無視です。断固無視です。

「あらあら、リリアったらお転婆さんね。」

お母様だけはのほほんとしてます。さすがです。

デルビルもヘルガーも可愛いですがやっぱり犬型最高はガーディとウィンディなのです。この間はイーブイも居ましたからブースターも……エへへ。

「リリアはその子が気に入ったの?」

「はい!」

ああモフモフ……モフモフは正義です。

『初めまして我等が主』

ん? 誰か喋りましたね。誰でしょう?

私が首をキョロキョロさせていると

『私です。貴女が抱きついている。』

・・・ほへ？

「喋った！ガーディが喋ってる！なんで！？どうして!？」

「どうしたの？リリア。」

「ガーディが喋ってるのです！お母様はなんでそんな冷静に・・・」

ひよっとしてこの世界のポケモンは喋るのがデフォなんでしょうか。そいえば夢の中でも喋っていたのを忘れてました。さすが異世界ですぬ。

『私達の言葉は貴女にしか聞こえません。我等の主たる貴女にしか。』

「へ？」

### S i d e    エステル

あの子はやっぱり元気が良いわね。

あんなにはしゃいじゃって、微笑ましい限りだわ。

「ほら、貴方そんなビツクリしないで私達もいきますよ。」

あまりにも元気なリリアに呆気にとられている夫を連れて行きます。

あら、リリアは私に似てガーデイがお気に入りのようね。晴れの日にあの子とお昼寝した時のモフモフ感はとても良いものなのよ。夫はヘルガーが好きなのだけど。

「ガウツ」

ガーデイが吼えるとリリアがキョロキョロし出したのだけど、どうかしたのかしら？

「喋った！ガーデイが喋ってる！なんで！？どうして！？」

「どうしたの？リリア。」

「ガーデイが喋ってるのです！お母様はなんでそんな冷静に……。」

ガーデイが喋った？

私には吼えてるようにしか聞こえませんでしたけど。

……あつ……もしかして……。

「貴方、ひよつとするとリリアは初代様方と同じなのでしょうか？」

隣の夫に話しかけると、夫も同じ事を思っていたのでしよう、頷いてきます。

「リリア、貴女にはその子が何を言ってるのか聞こえているのね？」

確認のためにもう一度尋ねてみましょう。

「えっ？はい。『私にしか聞こえない』らしいのです。」

リリアには聞こえているようです。

Side out

ノーーーーーーーーーーーー！！

やってしまいました！

やっっちゃいました！！

お母様に聞かされて、つい咄嗟に『私にしか聞こえない』らしいって  
言ってしまいました。

お母様の反応を見る限り普通はポケモンの言葉は解らないようです。

ポケモンの声が聞こえるなんて、電波な子もいいところです。

いくらお母様に包容力があっても流石にこれはダメでしょう。

ああ・・・私はお母様に変な子認定を受けてしまいます・・・。

どうせこれもホウオウの影響なのでしょうが、こうゆうことは先に  
言うてくれなきゃ困るのです。どうしてくれるのですか！

こうなったら、ここはもう1歳児という私のアドバンテージを活か  
して誤魔化すしかありません。

「お母様気のせいみたいです。わんちゃんの声が聞こえるわけない  
じゃないですか。きっと空耳ですよ。気のせいです。」

.....。

終わった、終わりました。全つ然1歳児のアドバンテージが効いて  
ません。これは最低ランクの誤魔化し方です。

ああ、どうしましょう。私は変な子としてお母様から一歩引かれて  
生きて行くのですね……。泣けてきます。

「凄いわリリア！」

ほへ？

「電波でも変な子じゃないのですか？変な子認定回避ですか？」

「？何を言ってるかよくわからないけど、リリアは変な子じゃない  
わ。」

お母様。お母様は天使なのです。私、お母様の子に生まれて良か  
ったのです。

「リリア。おそらくだが、お前は選ばれたのだ。幻獣達に、その主  
として。」

「どゆことですか？」

「デュ・テリエ家には極稀に幻獣達にその主として選ばれる者が出  
てくるのだ。そして、その者はあらゆる幻獣達を従えると言われて  
いる。」

なんか話が長そうですね……。

## 9話 く歴史く

「デュ・テリエ家には極稀に幻獣達にその主として選ばれる者が出てくるのだ。そして、その者はあらゆる幻獣達を従えると言われている。」

「お父様。ちょっといいですか？」

「どうした？」

「その話長くなりますか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「屋敷に戻ってからにしましょう。」

この子達と離れるのは辛いですがこの話は聞かなきゃダメな気がします。

長い話を外で、しかも立って聞かせるのは1歳児の身体には辛いものがあります。

お父様達は最近私が1歳児だということを忘れてる気がするのです。もっと気を遣って欲しいものです。

もっと子供らしく構ってアピールをすべきでしょうか。

・・・・・・・・・・っは、引っ張られています。精神が引っ張られています！

「そうだな。長くなるから中で話そう。」

「ガーディまた後でね。」

『はい。』

中に戻りましょう。

「そいえば、あの子達は誰のなんですか？」

「誰のものというわけでは無いが、ヘルガーは私が火の系統に目覚めたときに父上から貰った卵から孵ったのが大人になって今の姿だな。父上が私の系統に合わせてくれたらしい。子供の頃から一緒に育った家族の様なものかな。ガーディとデルビルは家に住み着いてる警備員という感じか？領民もけっこうな人数が何かしら飼ってるから、領の治安は良いのだぞ。」

「お母様は何を貰ったのですか？」

「私はデュ・テリ工家に嫁いだ時に義父様から『イーブイ』を頂いたのよ。」

イーブイですか。それは良いものを貰いましたね。

「お母様は水系統のじゃなくて良いのですか？」

「あら？あの子が水系統じゃないってよく分かったわね。」

またやつちやいました。

私は何も知らない。何も知らないのです。

「なんとなく分かつちやったのです。」

「ん、それも貴女に授けられた能力かしら？」

そゆことにしといてください。お願いします。

「水系統だったら嬉しかったのだけど、私には使い魔もいるから構わないわ。それに、あの子も可愛いからリアもきつと気に入るわ。」

使い魔ってあれですか？黒猫ですか？

「使い魔ってなんですか？」

「使い魔は私達メイジにとって生涯のパートナーのようなものね。魔法学院に入ったらリリアも呼び出す事になるから学院に入るのを楽しみにしててね。」

ほう。魔法学院……。

引き籠もり期間中でしたから学校にはあまり良い思い出がないのです。

今度は失敗しない様にしなければなりません。

まあ、この世界には引き籠もりの元凶が居ませんから大丈夫でしょう。

「それっていつ貰ったんです？」

「2年前よ。卵から孵ったのは4月後くらいかしら。」

シャワーズにしてあげたいのですが、不味いですね……。

この世界でもBボタンキャンセル出来るのでしょうか？

というか、それ以前にポケモン図鑑があるかどうかすら疑問なので。

出来なかつたら早くしないと進化しちゃうのですよ。

「お母様、水のい……。」

うおっとー！！

危なかつたのです。またやっちゃった所でした。私は何も知らない無知な子供なのです。

屋敷から出たこと無い1歳児が『水の石』でシャワーズになるとか知ってるわきゃないのです。

「ここだ。この部屋はどういうわけか、デュ・テリエ家当主にしか空けられないし、デュ・テリエ家の者以外は決して入ることが出来ない。おそらくドアに水魔法で細工がしてあるのだと思うのだが、調べてもまったくわからん。」

「私は入れるんですよね？」

「もちろんだ。リアは当然だがエステルも家に嫁いだから、私が空ければ中に入れる。」

「お母様は入ったことありますか？」

「何度かね。」

「それで、何の部屋なんです？」

「保管庫だ。」

「保管・・・庫？」

お父様が空けると中は真っ暗でしたがライトの魔法を唱えると明るくなりました。

中にあるのは並んだ大きな本棚と本、後は本しか無い部屋には不釣り合いな立派なイスと机でした。

「本ですか？」

「歴史書・・・だな。」

私とお母様がイスに座るとお父様が話し始めました。

当然私はお母様の膝の上です。

「それでは、話の続きだ。さつきも言った通り我が家には稀に幻獣達にその主として選ばれる者が産まれ、その者はあらゆる幻獣達を従えると言われている。歴史書によるとその最初の一人が、我々の先祖である初代ル・テリ工侯爵だ。」

「初代ってそれいつのことです？」

「トリステイン王国創世記、およそ6000年前だ。」

「……6000年って……。」

「信用出来るのですか？その歴史書。」

「わからん。しかし、歴史書は歴代当主がその時代にあつた主な事などがコツコツと書き足し続けていて、増えすぎたせいで歴史書保管専用の部屋が必要になる程だから6000年というのも領ける。」

私も当主になつた時、父から『当主になつたのだから書き足し作業は絶対に怠るな』と言われている。リリアが産まれた時に私もリリアの名前を書き足した。だから、今は歴史書が真実として話を進める。」

歴代当主がどの程度真面目にやっていたか疑問ですが、仕方ありませんね……。」

「初代は二つ名として『幻獣』を名乗り、その名の通り何処から連れて来たのか不明ではあるが、強力な幻獣を従えトリステイン王国へ多大な貢献をしたとして広大な領地と共に『侯爵』の位を賜り、その後も多くの戦いで勝利していった。そして初代は最後に自らの従えた幻獣達に『デュ・テリ工領をその地に住む領民を含め守ることに』『デュ・テリ工家の者と共に出る場合を除き決して領外に出ないこと』『デュ・テリ工家の者の命令であつても領外での攻撃命令には従わないこと』『他国からの侵略を防ぐ場合に限り領外であつても攻撃を許可する』そして、『全ての命令に優先してデュ・テリ

工家の者を守れ』という命令を遣した。これがさつきリアの聞いたデュ・テリ工領にしかガーディヤデルビルが生息しない理由でもある。」

「何でそんな命令遣したんです？」

「それも不明だ。その意図は歴史書には書かれていない。」

ふむ、何故でしょうか？

「ここからがリアに直接関係する話なのだが、初代は『幻獣』の二つ名を後世の者が自由に使うのを禁止し『幻獣』の二つ名を語るための条件を出したのだ。」

好き勝手に名乗っても構わないと思いますか……。

「1つは彼らの言葉を理解すること。そして、もう1つはブレスレッドを嵌めることが出来る事。」

「ブレスレッドですか？」

そんなもの誰でも嵌めれると思うのですが……。

「そのブレスレッドは資格を持つ者にしか嵌めれないと言われている。」

「どゆことです？嵌めたら焼かれるとかですか？」

「そんなことはない。……ふむ……見た方が早いな。こっちだ。」

お父様は更に奥の部屋に入っていました。

中に入ったのは透明なケースとその中にある白いブレスレッド。

「これは私が触ろうとする」と  
お父様がブレスレッドに触れると、白いブレスレッドが砕け散りました。

「こうなる。」

「……………貴方、これ大切な物なのでしょう?」

お母様がジト目です。

きつと私も同じ目をしていることでしょう。

「大丈夫だ。」

ケースを見てみると、砕け散った筈のブレスレッドが元通りになっています。

「エステルも触ってみなさい。」

お母様が触れるとお父様と同じようにブレスレッドが砕け散りましたがすぐに元通りになっていきます。

「これは……………錬金ですか?」

「それも良くわからん。一体どんなな材質でこれが出来ているのかも不明。分かっているのは初代当主と同じ『幻獣』はこのブレスレッドを嵌めることが出来るということだけだな。」

「それじゃありリア。」

「はい。」

私がブレスレッドに触ってみると……………普通に触れました。

「それじゃあ嵌めるのです。」

嵌めるにしても、私には大き過ぎるのですが……………。

「つな！」

「おお。」

「あら。」

上からお父様、私、お母様です。

嵌めようとする案の定大きすぎたのですが、突然腕輪が光り、その光りが収まると私の手首にピッタリ嵌っていました。

「綺麗……………」

そして、確かに白かった筈のブレスレットは……『鮮やかな紅色』に変化していました。

## 10話 く白の書

Side デュ・テリ工侯爵

リリアは歴史書通りにブレスレットを嵌めることが出来た。間違いなくリリアは当代の『幻獣』ということだ。

先代『幻獣』からおよそ2000年。

デュ・テリ工家当主としては喜ぶべきことなのだが、親としては複雑だ。

おそらく、リリアには平穏な人生は約束されないのだから。

ただでさえ我が家、我が領は他家、他の領よりもはるかに強大な力 爵位、軍事力、税収、資源等 を有してきたのだ。歴史を見ればその力が狙われた事など掃いて捨てる程ある。

幻獣達を解剖するためにやってきたアカデミー、幻獣達の力を欲した軍人共、貴族以外への知識の流出を恐れた馬鹿貴族集団、移住してきた領民を奪われたと叫ぶ阿呆共。

貴族連中だけでも軽く思いつくだけでこれだけあるのだ。

他にも幻獣達を自分の物にしようとしてやってきた盗賊。軍とは関係なく一兵士の僕として戦場に連れて行こうとした軍人。

本当に掃いて捨てる程あるのだ。

その中でも一番多いのが、当然とも言えるが幻獣達を狙う輩である。

そして、現在トリステインの国力は低下している。

そんな状況に突然『幻獣』が表れればどうなるかなど火を見るより明らかだ。

確かにデュ・テリ工家は国家の危機が訪ればその力を行使しトリステインの盾となったことは一度や二度ではない。

そして、その中で最も大きな功績を挙げているのは歴代の『幻獣』なのだ。

しかし、それはあくまで領民を守る為に国家を守っただけなのである。

王家に知られれば打ち首モノであるのだが我が家は王家に対して尊敬や敬愛の念こそあれども、王家に対して忠誠を誓っているわけではないのである。

更に、ロマリアに知られればいちゃもんをつけられて異端認定積極的に信仰しないだけで何も否定してゐるわけではないし、新教徒でもない。であるうが我が家はブリミル教を信仰していない。

勿論マナーとして人が居る場合は始祖への祈りのポーズはするし、ブリミル教を信仰しているフリもする。

全てをくまなく読んでゐるわけでも、全てを信じてゐるわけでも無いが、当家には6000年書き足し続けられた歴史書があるのだ。それを読んでしまつとさすがに始祖ブリミルを神と崇めるのには抵

抗を感じてしまう。

これが王家に歴史書を見せられない理由の一つでもある。

反面、統治者としての義務などは細かく書かれている。

我が家の人間からしてみるとブリミルはあくまでも何か良くわからないけど凄いことを成した人であって、決して神では無いのだ。

よって、その子孫だからといって無条件に忠誠を誓える筈も無い。

はっきり言って 王家への忠誠<<統治者として領民を守る義務である。

話が逸れたが、とにかくリリアが『幻獣』であると王家にばれてはならない。

『幻獣』の名の持つ力は強大なのだから。

「リリア。私と一つ約束しておくれ。」

「何をです？」

「私とエステル以外の人間に自分が当代の『幻獣』だと言わない事を。約束してくれるなら、私はリリアが魔法を使えるだけの力がついたら魔法を教えるし、幻獣と好きに遊んでも一切文句を言わない。どうかかな？」

「・・・分かりました。約束します。」

「エステルも良いね？リリアのために秘密にして欲しい。」

「当然ですわ。この娘を政治の道具にするつもりなどありません。」

Side out

先程の部屋から歴史書の保管庫へ移動すると一冊だけ他の本と違う、白い本があることに気付きました、

「お父様、あの一冊だけ白い本は何ですか？」

「それは、『白の書』と言われている。はっきり言ってよくわからん。」

「どゆことですか？」

「何が書いてあるわけでもない。中も真つ白なのだ。」

「見せて下さい。」

その本を開いてみると

「・・・・ん？普通に字が書いてありますが？」

「そんな馬鹿な。見せてご覧。」

「ほら、この通り。」

「・・・・。エステル見えるか？」

「私には真つ白に見えますが・・・・。」

「私もだ。リリア読んでみてくれるか？」

仕方ありません、困ったお父さんとお母さんです。私が読んであげましょう。

「この本は私と同じ存在にしか読むことは出来ない。・・・・  
あれ？」

「なるほど。つまりは、『幻獣』にしか読むことは出来ないし、それ以外の人間は例えデュ・テリ工家の人間であろうと読むではならんということか。」

「そうみたいです。ごめんなさい。」

「仕方無い。私達も一緒に読んであげたいのだがリアにしか読めないということは、私達が読むではいけない類の物のようだ。解らない字があれば調べて読みなさい。そして、私達にその内容を話してはいけないよ。」

お父様が済まなそうな顔をしているのです。中身を教えてあげたいですが私以外は読むではいけない本の様です……。

「わかりました。一人で読みます。」

「今日の話はまた今度にしよう。今日はその本を読むと良い。」

お部屋に行って一人で読みましょう。

### 『転生の秘密』

この本は私と同じ存在にしか読むことはできない。

つまりこの本は、私と同じ世界からこの世界に飛ばされ、パルキアのブレスレッドを嵌めた者だけが読むことが出来る。

この本には私が知ったこと等を書き記す。

私と同じ世界から来た者は、後の同胞のために新たな情報を書き記

す事を期待したい。

## 第一章 『自己紹介』

………一気に読む気が萎えました。。。

私はエルネスト・デュ・テリエ。初代デュ・テリエ侯爵。

『水』と『風』のスクウエアメイジだ。

二つ名は『幻獣』のエルネスト。

自分では『幻獣』と名乗ってないのにあのアホ王が人前で名付けやがったせいで、誰も呼ばないがメイジとしては、『吹雪』のエルネスト。

本名 若葉 啓徒<sup>ケイト</sup>

ジヨウト地方出身

今はトリステイン王国建国より62年。

今読んでるお前達が良い暮らしが出来たら大元は俺のおかげだから、感謝するように。

俺が遺した命令はお前達なら無視も変更も出来るが、守ることならともかく、他を攻めるためにあいつらを使わないで貰いたい。

これは、俺の願いだ。

私は死んだと思ったらルギアに助けられた。正確には1度死んだのだが記憶を持ったまま新たな命を授かった「転生」と言うものらしい。

その後夢の中で世界のバランスが崩れかけているから、異世界に私を飛ばしたと言われた。

あまりにも説明が大雑把なので詳しく尋ねてみると、私の相棒達の後悔を軽減させるために私をこの世界に送ったようだ。

また、私が飛ばされた世界に私と同じような死に方をした者を全員送るのはこちらの世界のバランスを崩してしまうため出来ず、その他多くの世界に分散して送っているらしい。

どうも時間が無いらしく、それ以外はそっちの精霊に聞けと夢から追い出された。

その時に白いブレスレッドを買った。

このブレスレッドは自由に形を変えることができる。

なんでも「白珠」という宝玉の劣化コピーを加工してあるもので劣化コピーではあるがパルキアの力が付与されているため空間を越えることが出来るらしくこれを使えば、卵の状態であればモンスター達をこちらの世界に送ることが出来る。

死んでも無くすな、との事だ。

貰った時は白かったのだが、私が嵌めると『透き通るような蒼色』に変わった。

その後はこの世界に来て何をしたとか色々書いてあったのだが読む

のに疲れてしまったので軽く流しておいた。

初代の後、結局8代まで続いたので私が9代目ということか。

どうやら、私と8代目の間には2000年の断絶があるようだ。

本の中に一度も『ポケモン』という名称が出て来なかった事から、全員モンスターボールが発明される前にこの世界に来ていたようだ。それにしても2000年と言うのは長い。それまでは長くても800年に1度は出てきているのでこれがハウオウの言っていたモンスターボールによる影響なのだろう。

他にも色々分かったことがある。

まず、どのポケモンに助けられたかとブレスレッドの色がリンクしている。

ファイヤー、エンテイなら私と同じ『紅色』

カイオーガ、なら初代と同じ『蒼色』

グラードンなら『赤褐色』

サンダー、ライコウなら『翡翠色』

そして、2代目と5代目以外は系統魔法の得意系統が2種類あるのだ。

お母様達の口ぶりからすると普通は1系統のはずだ。

おそらく、どのポケモンに助けられたかで1系統。

『炎』を象徴するハウオウ、ファイヤー、エンテイなら『火』

『海』を象徴するルギア、カイオーガなら『水』

『大地』を象徴するグラードンなら『土』  
『雷』を象徴するサンダー、ライコウなら『風』

そして、転生した身体の素質で1系統。

2、5代目は一日に異常に強力なスクウェアスペルを何発も打てたらしいので、二つが重なって魔法運用効率、威力が段違いになったのだろう。

そして、このブレスレッドでも杖の契約が出来る。

歴代の『幻獣』は杖と契約した後にブレスレッドとも契約していて、杖と違って奪われる危険が無いから重宝したようだ。

それにしても……なんて読みにくい本だ。

誰か「まとめ」としてどこかのページに要約しようとは思わなかったのだろうか……。

おまけに、初代が何故あんな命令を遺したかは「詳しくは精霊に聞いてくれ。私は彼女に詳しい説明を頼んであるし、彼女自身にもパルキアとの契約がある。」だ。

精霊に聞けと言われても、そんなもの何処に居るのか知りません。お父様に聞いたらわかるでしょうか？

……それにしても、私は助けられたのがホウオウで良かったのです。

カイオーガ、ルギアだったら魚のエサになってるところでした……  
。サンダー、ライコウだったらホウオウ程うまく焼けないですし……  
。グラードンは土葬ですし……。

私の家は火葬なのです。

そんなことを考えているとドアがノックされました。

「リリアそろそろ晩御飯なんだけど、読み終わったかしら？」

あれ？もうそんな時間ですか？

「さっき読み終わりました。お腹空きましたから行きましょう。」

部屋から出ようとお母様に近づくと、抱き締められました。

ちよつと驚きましたが、私の顔は全く締りの無い顔になってることでしょう。

良い匂いがしますし、お母様柔らかいですし。

「リリアにはお母さん達が付いてるから、もっと甘えて良いのよ？」

私もギョツとします。

ああ、幸せです。

動きたくないです。

もうこのままで良いですよね？ご飯とか要りませんから。

結局お母様との抱擁はリュシーさんが呼びに来るまで続きました。お母様と私を待っていたのだけれどあまりに遅いのでお父様が痺れを切らしたらしいのです。

ミイラ取りがミイラにとは正にこの事です。

・・・ちよつと違いますか？

リュシーさんに見られちゃいましたが別に恥ずかしくありません。だって私は1歳児なのです。

お母様に抱き締められていても全くおかしくありません。寧ろもっとこつゆう機会を増やすべきです。

晩御飯を食べに行く時も当然お母様と手を繋いで行きます。

なんか色々ありましたが、今日は良い一日でした。

## 11話 く齟齬く

今日の朝起きると、お母様もお父様も居なかった。

置いてけぼりをくらって悲しいのだが、今日は試したい事もあるので人が居ないのは好都合である。

しかし、何処かに行くのなら昨日の内に教えておいて欲しいものである。

教えておいても私以外の1歳児だったら絶対泣いてるだろうが・・・。

セバスチャンによると、補佐を一人つけて三人だけで領地の視察に行っているらしい。

領主というのは視察をする時に護衛を引き連れてゾロゾロと人の迷惑を考えずに視察をするものだと思っていたのだが、どうやら私の思い込みだったらしい。

その内、この世界の一般常識をきちんと教えて貰わねばとんでもないヘマをしてしまいそうだ。

それをコレットさんに言うと苦笑された。

何でも「デュ・テリエ領は平和」なんだとか。

と、言うことは他の領はそうではないのだろう。

他の領は領主が視察に行くと襲われるのだろうか？

だとすれば、領主というものは統治に文字通り「命を懸けている」ということになる。

魔法を使えるのは貴族だけだというのに、魔法を使っても命懸けとは……。

そういえば、お父様がデユ・テリエ領は治安が良いと言っていた。

ひよつとすると、他の領では裕福な領主は暴漢にとって格好の餌食なのだろうか……。

……なんて恐ろしい世界だ。

「コレットさん……。この世界はそんなに危険が一杯なのですか？」

「いえ……そんなことはありませんよ。盗賊や凶暴な獣が出たりもしますが、余程運が悪くない限り他の領でも平民が襲われることはありません。」

やはり、他の領では盗賊が出るのですね。

コレットさんが非常に言いづらそうに、言葉を選びながら教えてくださいます。

1歳児の私に教えるには辛い現実があるようですね……。

「運が悪ければ襲われるのですか……。」

魔法の使えない私には身を守る手段がありません。

早くポケモン達を育てないと領主の娘である私は良いカモです。

きつと莫大な身代金を要求してくるのです。

まさか、私がカモられる側に回る日が再び来ようとは……。

「大丈夫ですお嬢様。デュ・テリエ領ではそんなことは絶対にありませんから。」

「そうだと、良いのですが……。」

コレットはこの時「デュ・テリエ家の人間は魔法をひけらかして領民を虐げるようなことはしないので他の領の平民と違い、領民はそれに怯えなくてもいい暮らしが出来て平和。また、デュ・テリエ家の人間は領民に直接話を聞いたりして、視察は和やかなムードで行われるので、他の領と違い無駄に人を引き連れて領民を威圧することはない。」と言いたかったのだが、貴族の横暴振りを同じ貴族であり敬愛するデュ・テリエ家の人間であるリリアに知らせるのは憚られたために言葉を選んで「デュ・テリエ領は平和」と言ったのである。

もちろん、盗賊達がポケモン達によって秘密裏に排除されていたりして、平和というのもあるのだが……。

要するに、メイドにとってもリリアは可愛いので汚いものを見せたくないのである。

しかし、足りなさ過ぎるその言葉の裏を、全く違う方向にリリアが解釈してしまうのは仕方の無いことだろう。

リリアがこの時の自分の勘違いに気が付くのは数年後になる。

二人の間にある認識の齟齬はあまりにも大きい。

先程衝撃の事実を告げられた私は、気合を入れてポケモンの卵をこちらに呼び出さなければならなくなりました……。

私は本当に両親やメイドさん達に守られていたのだと知った今、私はせめて自分の身を守ってくれる相棒を呼び出さなければなりません。

使い方は解るのですが、やはり問題は使えるかどうかです。

このブレスレッドの使い方は魔法を使うのと同じ感覚らしいのです。

「ムムムムム……ん……。」

……。

「……無理。」

やはり、レビテーションも使えないこのロリロリボディではパルキアの力を行使するのは不可能な様です。

歴代の彼らは6歳くらいで呼び出していたようなので、それ程多くの力が必要なわけではないと思うのですが……。

……出来るようになるまで待つしかありません。

本格的にお父様にガーディの卵をねだる時がきましたね……。  
前の世界の皆の卵もあれば良いのですが……。

S i d e    デュ・テリ工侯爵

今日いきなり領地視察をすることになったのには理由がある。

勿論きちんとした理由として、学校や作物の出来具合、船の老朽化問題など色々あるが、あくまでメインはリリアのことだ。

我が家の歴史で最も輝かしく、誇らしい。しかし、最も謎に包まれているのが歴代の『幻獣』達の力である。  
リリアがその力に振り回されなかったためにも、リリアはその力の使い方を知らなければならない。

『白の書』がリリアにしか読めないのであれば、あの書にはある程度の説明が書かれている筈だ。

しかし、そうでなかったら？

もし、知られざる危険な力があれば？

あの娘は、その力を暴走させてしまうかもしれない。

だからこそあの娘の力が弱い間に、暴走したとしても私達で抑えられる間に、幻獣達との接し方を慣れさせなければならぬ。

慣れさせるだけであれば、屋敷のガーディ達と遊べば良い。  
しかし、出来ることなら私が父にデルビルの卵を貰った時の様に、  
卵が孵ったときの感動をあの子に味わわせてやりたい。

「侯爵様。それならつい先日、家のガーディが卵を産んだんで差し  
上げましょうか？」

「本当か！？感謝する。リアはガーディが気に入っていたような  
のでな。」

「後で屋敷に持って行きますよ。」

「礼をしたいが、すまんが今は手持ちが無いのでな、屋敷で渡す。」

「いりませんって。先祖代々お世話になってるんですから。」

「しかしだな・・・。」

「そんな事言ったら、家のガーディだって元を辿れば歴代の侯爵様  
方が我々に遺して下さったものですよ。」

「うむ・・・それなら、喜んで頂こう。」

### Side エステル

「最近の治安はどう？」

「盗賊が来ても治安部隊が幻獣達と協力して排除して、移住してく  
る者の中に変な奴が居たらこの子達が教えてくれますから、治安は  
良いですね。」

「あらあら、やっぱり優秀な子達ね。きちんとご褒美あげてる？」  
「勿論です。」

デュ・テリエ領は相変わらず平和です。

### Side out

てけてけとダツシユしてダイブです。

「お父様——!!」

次は

「お母様——!!」

うぎゅー!つとしがみ付きます。

「どうしたの?リリア。」

「良かったのです!お父様もお母様も無事で〜。」

私のおかしな行動にさすがのお母様も戸惑ってますがそんなことは  
どうでも良いのです。

「・・・何かあったのか?」

お父様がセバスチャンに何か聞いてますがそれもどうでも良いので  
す。

私以外の全員が戸惑うという時間がしばらく続きました。

この空間の発生原因のコレットさんが何か持ってやって来ました。

「そうだ、忘れていた。リリアにプレゼントがあるんだ。」

「それは、まさか!」

「ガーディの卵だ。」

「お父様ありがとう!」

お父様に抱き付きます。

頼むまでもありませんでしたね。  
素直に感謝です。

これで私は自分の身を守ることが出来ます。

「私、頑張ります！！お父様達には迷惑かけません！！」

私だけカモになるわけにはいきません。

リアアが去ってからもしばらく、皆わけがわからず沈黙していたの  
は言うまでもないことである。

「本当に何があったのだ？」

## 12話 く誕生日

「初めまして、ヴァリエール公爵。リリアーナ・デュ・テリエで御座います。」

実際は初めてじゃないのですが、産まれたばかりの子供がそんな事覚えてるわきゃないので初めましてって言うつくのです。

「デュ・テリエ侯爵。貴方の娘は私の娘と同じ年でしたな？」

「自慢の娘です。」

「はい。自慢の娘です。」

答えになってませんが、この場合意思疎通はばっちりですから問題ありません。

ヴァリエール公爵は私の2歳児っぷりに驚いていて、お父様は娘を自慢してるのです。

自分で自慢の娘です。

と言うのはちょっとアレな子ですが子供故の無邪気さでカバー出来るのです。

今日はヴァリエールさん家の長女エレオノールさんの13歳の誕生日パーティーなのです。

お母様は別の集まりと日程が被っちゃったのでそっちに行ってるのです。

2歳児といってもパーティーにはそれなりの格好が求められます。

母譲りのエメラルドグリーンの髪は自分で言うのもあれですが、白のブラウスに綺麗に映えているのです。

ドレスはまだなのです。

ブレスレットは今ネックレスになってます。

全体が紅色になるのかと思ってたのですが、そうではなく紅色の名残は紅色の宝石だけです。

つまり、今日の私はお母様の代わりにお父様にエスコートされる女の子なのです。

エスコートと言っても実際は、侯爵なのに誰もエスコートしてないのはどうなの？でも、妻が居る人間が別の女性を公の集まりにエスコートして行くのはよくないんじゃないの？

そうだ！だったら、娘を連れて行こう。  
って、だけなのですが。

本日のメインにも挨拶をしましょう。

「エレオノールさんも初めまして。そして、お誕生日おめでとう御座います。」

「……貴女本当にルイズと同じ年なの？」

ルイズというのはアレですね。  
私と同じ年の三女さんですね。

「はい。今年2歳になりました。」

多少身体に引つ張られてますが、精神年齢は貴女より上ですけど。

「貴女みたいな2歳児見たことないのだけど。」

まだ挨拶しただけなのですが、本日のメインに警戒されてしまいました。

以前普通の2歳児を見習って、知らない人に出会ったらお父様の後ろに隠れてみたのですが、お父様が血相を変えて水メイジを探し始めてしまったのです。

ですから、それを教訓に知らない人が居る場でも普段通り振舞うようにしているのですが、今度は警戒されてしまいました。

私にどうしろと？

屋敷の近くなら「リリア様は賢いですね。さすがデュ・テリ工侯爵の娘さん。」で済むのですが。

「エレオノール。そんなに虐めてはなりませんよ。」

お？このピンクは……。

「お母様、虐めてなどおりません。」

「初めまして、リリア又さん。私はカリーヌ、この子の母です。嫌いにならないであげてね、この子は幼い子に慣れてないだけなのよ。」

「勿論です。」

身体は2歳児でも、精神は20歳なのですから、ツンケンしてる13歳など微笑ましいものなのです。

「ありがとう。その子があなたのパートナーなのかしら？」

「はいガーディです。名前はコーティ、女の子です。」

そう、産まれたのです。

溺愛してこの子を屋敷でお留守番させるなんて出来ないので連れてきました。

「その子が、デュ・テリエにしか居ないっていう幻獣なの？」

「そうですよ。まだ産まれて1年経っていませんから、まだ強い炎は使えませんが。」

「こんなのが、トリステインでも有数の名家を支える幻獣・・・ねえ。ただの犬に見えるわ。カトレアが言ってた通り強そうってより可愛いし。」

「この子はまだ子供ですからね。大きくなれば、それはもう頼もしい子になりますよ。」

『リリア、この金髪焼いて良い？』

「駄目よ。」

あらあら、拗ねちゃいました。

撫でてあげます。

「後でカトレアとルイズにも会ってあげてね。特にカトレアは動物好きですから。」

そう言ってカリーヌさんは他の人の所へ行ってしまった。

残されたのは、エレオノールさんと私と拗ねちゃったコーティ。

「貴女「是非リリアって呼んで下さい」リリア。」

「なんでしよう？」

「その犬私に寄越しなさい。」

「はい？」

「だから、その犬私に寄越しなさい。」

2歳児に高圧的にものを言う13歳。  
嫌な光景です。

「カトレアさんにあげるんですか？」

「な！！な・・・なんであんたがそんな事知ってるのよ。」

自分で言っちゃいましたよ、この人。

「さつきカトレアさんが動物好きって辺りでエレオノールさんがピクツと反応してたので。」

「そんなk「優しいんですね。自分の誕生日なのに妹さんへのプレゼントを考えるなんて。」

だから、ちg「私もお姉さんが欲しかったです。」・・・もういいわ。」

「でも、ごめんなさい。この子達はデュ・テリ工家の人間が居ないと絶対に領外に出ないんです。」

「なにそれ。ますます変な幻獣ね。普通は人間が禁止しても関係なしなのに。」

そりゃ、普通じゃないですのよ。

「というわけで、この子達をカトレアさんにあげても逃げちゃうのであげれません。」

「まあ良いわ。あの子その内来るから会ってあげて。」

やっぱり妹想いです。

私も妹欲しいですねえ。

姉はもう無理ですが……………。

「…………エレオノールさん。」

「何よ…………。」

「お姉さんって呼んでいいですか?」

「…………は?」

「お姉さんは優しい人なんですからもっとにっこり笑った方が可愛  
いと思いますよ。」

「誰がお姉さんよ!誰が!!それに目つきがキツイのは生まれつき  
よー!」

目つきが悪いって言わないのはやっぱり気にしてるんですね。

「ダメですか?目つきは関係ないと思いますが。」

「ダメとかそんなレベルの話じゃないでしょう!?!」

「目つきを気にしてるなら、それを活かして落ち着いた雰囲気のカ  
ールビューティーを目指してみては?お姉さんならきっと引く手数  
多になりますよ?」

「なんであなたにそんなことをアドバイスされなきゃいけないのよ  
!?!」

「お姉さんの、その怒りっぱいは減点です。」

「なんであなたに評価されなきゃいけないのよ!?!」

奥の手です。

泣きましよう。

……………。

「うつ……。」

お姉さん言葉に詰まっちゃいました。

「お姉さんって呼んで良いですか？」

「もう、好きにすれば……。」

「枯れちゃダメです。ここは黙って私を抱き締める所です。」

「アンタはっ!!!」

そんなこんなで、カトレアさんです。

「お久しぶりねリリアーヌさん。カトレアですわ。2年ぶりかしら？」

ああ、カトレアさんはやっぱり良いです。

なんか周りにお花畑です。

恐ろしいのです。これが10歳の包容力とは……。

「初めましてだと思つのですが。」

ホントは違いますが。

「あら、本当にそうかしら?」

「すみません。」

クスクス笑う姿も素敵です。

「いいのよ。きっと人には言えない理由があるのでしょうか?」

「え?」

「本当は覚えてるのでしょうか?あの時しっかりと目が合いましたわ。」

「……何のことやら……。」

ツフ、私の誤魔化しスキルは1年経っても成長していないようです。。。

「あなたは初めましてね。名前はなんていうのかしら？」

「コーティです。」

カトレアさんが撫でたり抱きしめたりしているのです。

「ごめんなさいね、きつと姉さまが無理を言ったでしょう？」

「そんなことありませんよ。」

お見通しですか。。。

「エレオノール姉さまはツンケンしてるけど本当はすごく家族想いなよ。」

「さつきエレオノールさんにそれを言ったら照れて逃げられちゃいました。」

あらあら仕方ありませんね。と言って笑うカトレアさんの笑みはどつ見ても子供の無邪気なというよりも慈愛に満ちたそれだった。

私達二人と離れた所で、こっちへ来ようとするミニチュア版カトレアを「あんたはあそこに行っちゃダメ」と言って捕まえている本日のメインの姿があったのだが、私達は全く気付かなかった。

ダンスが始まってしばらく経ちましたが、私達はベランダに退避中です。

月が綺麗なのです。

流石に2歳児にダンスを申し込む阿呆はいませんし、カトレアさんは身体があまり丈夫でないらしくダンスはしないようです。

それにしても、この城はでかいですね。池までありますよ。まあ家にもあるのですが……。

「貴女のお父様のヘルガー、侯爵様に、というよりもリリアーヌさんに従ってる様に見えたのは私の気のせいかしら?」

「リリアって呼んでくれると嬉しいです。」

「じゃあ、リリア。私の気のせいかしら?」

「あはははは。確信してるのに気のせいですか?って聞くのはちょっとズルイですよ、カトレアさん。」

「ごめんなさいね。どうしても気になったものだから。」

「『幻獣』ってわかりますか?」

「それは、デユ・テリ工家に伝わる二つ名の方の、かしら?」

「よく知ってますね。」

「以前、貴方のお家に行く前に、私の家にある記録は一通り調べましたから。」

「まあ、そういうわけです。」

喋っちゃいました。

ま、初めからばれっちゃってたから関係ないですね。

「これ、秘密でお願いします。お父様によれば、今のトリステインに『幻獣』なんか現れたら政治利用されない筈が無いらしいのです。」

「私のお父様はそれを知ってるのかしら?」

「私に口止めするくらいですから、私に知らせず他の人に話す事はしないと思いますからその様にお願ひします。」  
「わかったわ。」

口元に手をあててクスクス笑いながら返事をされたのですが、細かい動作がいちいち絵になる人ですね。

それにしても、お父様は娘を放っておいて何してるんでしょうか。

結局その日はパーティーがお開きになるまで放置されました。

「それにしても、仕方のないお父様ですね。」

お父様のせいで今日はヴァリエール邸にお泊りなのです。

「でも、私はリリアやこの子と遊べるから嬉しいわ。」

「私もカトレアさんとお姉さんと一緒に居れるから構いませんが。」

カトレアさんが私の「お姉さん」発言にキョトンとしています。

一本取ったと思ったのはここだけの秘密なのです。

「お姉さん？」

けれど、さすがはカトレアさんです。

エレオノールさんの方を見て、私を見て……。

すぐに意味を察してしまいました。

「お姉さま、妹が増えてよかったですわね。私、ルイズ、リリア。三人目です。」

「この子が勝手に言ってるだけよ。」

「好きに呼んで良いって言ってくれたじゃないですか。」

「お姉さま。ダメですよ、妹には優しく接してあげないと。」

「そうです。どうせ、ルイズにも同じ様な態度を取ってるのですよ。う？ルイズはまだ2歳になったばかりなんですから、ルイズがちっちゃくて戸惑ってる事なんか察してくれませんか？」

「誰も戸惑ってなんか居ません！それに、貴女もまだ2歳でしょうが。」

「私は数ヶ月ルイズより早く産まれてますから。」

「大した差じゃないでしょうが、そんなの。」

「お姉さん。私は今日言いました。クールビューティーを目指すべきだと。」

「あら？リリアはそんなこと言ったの？私はエレオノール姉さまはもっとなっこり笑った方が可愛いと思うのだけれど。」

「私もそう言ったんですが、目つきが悪いのが気になるそうです。」

本日二度目のやり取りにエレオノールさんの頬がピクピクしてるのです。

「お姉さま、そんなことないわ。ほら、にっこり。」

カトレアさんがエレオノールさんの頬をムニユっとしめます。

「・・・カトレア・・・リリア・・・。私はそもそも目つきを気にしてるなんて言ってますん・・・。」

「ニッコリして下さい。」

「ですから・・・。」

ジツと見つめる私達に観念したのか、エレオノールさんは諦めたように引き攣った笑みを浮かべてるのです。

「お姉さん。そんなんじゃダメです。やっぱりここはクールビューティーを。」

こうして夜は更けていきました。

真ん中にエレオノールさん、左右から私とカトレアさんが抱き付いて寝たのです。

結局その日はエレオノールさんにとって忘れられない誕生日になりました。

次の日の朝起きると、トロンとした目のエレオノールさんが可愛かったのは私とカトレアさんだけが知ってる秘密なのです。

「あら。」

「やっぱり、にっこり笑顔なエレオノールさんを目指すべきです。」

屋敷に帰って気付いたのですが、結局ルイズに会ってません。

### 13話 く視察く

エレオノールさん、カトレアさんとの楽しい会話から一夜明け、ルイズに会う前にデュ・テリエ領に帰って来ました。

ええ。

あの怖い竜に乗って……です。竜怖いのです……。

言葉通じません。

私のバイリンガルはポケモン限定なのです。

以前竜に近寄って話しかけたら鳴かれました。

鳴く、と言っても相手竜ですからね。

可愛らしい鳴き声じゃありませんよ。

それはもう恐ろしかったです。

ゲームの世界の話だとしてもこんな相手に人間が、刀やハンマーで立ち向かうとか頭おかしいのです。

そんなこんなで、本日はお母様とお出かけなのです。

前から予定してたお出かけです。

お出かけなのですが……。

「お泊りはどうだった？」と聞かれたので「お父様が酔いつぶれたせいで帰れなかったけど楽しかったです」と答えたらお母様がお父

様を連れて行ってしまったので出発が遅れているのです。

ただでさえ、ヴァリエール邸から帰って来るのが今日の朝になってしまつて予定より遅れているのですが……。

まあ、お出かけと言っても名目上お母様は視察、私は領地観察です。

既に何度か街に出たことはあるのですが、やはり私からしてみれば珍しい街並なので楽しいのです。

その経験から言わせて貰えば、デュ・テリエ領は安全です。

以前コレットさんが言っていた通り領外に出なければ悪い盗賊とかは見たことはありません。

皆良い人なのです。

あと、この世界は相当な田舎かと思つてましたが意外なことに小綺麗な店がけっこう多いのです。レストランとかもあります。

今向かつてるのは最近出来たそんなお店なのです。

セバスチャンによると、デュ・テリエ領の主な産業は農業、漁業の第一次産業ですが、かなりの生産高、漁獲高を誇るらしく他領に売つたりして結構儲かつてるらしいのです。

それに最近になって貴族用の豪華な服のみだけでなく、領民を対象とするちよつと良い服を作る服職人が出てきたりしているようで、

第二次産業も伸びてきてます。

これは、10年前くらいに極々小さい物ですが、専門学校を作った結果が出てきたものらしく執事さんとメイドさん達は大喜びしてました。

家の執事さんとメイドさん達は、屋敷の事をメインにやる人、文官としても働く人、文官としてメインに働く人に分かれてるらしく、大喜びしていたのは文官としてメインに働く人です。他の人も喜んでましたが。

この専門学校を作って職人を育てるという案は『デュ・テリエ領の将来像』という政策目標集の内の一つで、それを人口や所得等の観点から、実現可能と文官達が判断した物を実行するようにしているのです。

歴代の彼らは、この世界の文明への過干渉を自重しているのです。

自重……しているのですが、この世界の文明レベルが可哀想になっただけで文字通り将来像だけは提示し、成長はハルケギニアに任せたいらしいのです。

因みに時間軸がズレている様で、この世界にとって2000年前でも、上下水道がある時代ですから8代目は前の世界では大昔と言う程では無いのです。

セバスチャン曰く、所得に関してはデュ・テリエ領内だけなら30

0年前くらいには達成していたらしいのですが領外の平民の所得が当てにならないので、デュ・テリエ領のみで目標人口まで達しなれば需要が足りなかったのです。

服を作っても買える人が居なきゃ売れませんからね。

実際の所彼らが、干渉して文明レベルを無理矢理引き上げなかった主な理由は『人口や所得等』の‘等’の部分で、平民が豊かになるのを嫌う貴族達にうるさく言われるのと、文明引き上げすぎて異端認定されるかもしれないのが面倒なだけ　　リリアがそれを知るのはこれまた数年後となる　　だったりするのだが……。

おかげで、前に見た正に田舎！とった感じの服じゃない人もちらほら居るのです。

日頃は日用品とかを作ってるらしいのですが、大工さんも居ます。

「リリアここよ。ここ。最近出来た甘い物作ってるお店。」  
「ここですか。」

視察ですよ！ホントデスヨ！

最近出来たお店がどんなものをきちんと把握するのはデュ・テリエ家の人間として当然の事なのです。  
ホントデスヨ！！

中に入るとテーブルには空きが3箇所くらいしか無く、繁盛してるみたいなのです。

「奥様にリリアーやお嬢様！よくぞいらっしやいました。」

「さっそく、これとこれ頂こうかしら。」

「はい、お待ちください。」

視察と言っても、当然お客さんとして入るのです。

お店の雰囲気は実感しなきゃダメなのです。

ケーキが運ばれて来たので、それでは早速……。

美味しいのです。

流石に前の世界程ではありませんが、それなりに美味しいのです。

これは、偶然美味しく作れたものではないのです。計算され尽くした味で、これを作った人間に全く同じものを作れと言ったら何度でも作れてしまう。

そんな一流レベルの職人の味なのです。

美味しいのですが……。

これは、屋敷で食べるのと同じ味なのです。

どゆことですか???

私が？を浮かべていると

「お口に合いませんでしたか？屋敷で作ってるものと同じぐらい気合入れて作ってるのですが……。」

「そんなことありません。美味しいですよ……ってコレットさん？」

どうしてここに？」

「あら？お嬢様はご存知無かったのですか？ここは旦那様と奥様に勧められて私が作ったデザートを出してるお店なんですよ？旦那様が出資してくれるからこそ、領民が気軽には言いませんが、月に1度くらいは食べられる値段で提供出来ます。それでも他領の平民では高すぎて手が出ませんが。」

「いつものデザートってコレットさんが作ったのですか？コレットさんってメイドさんじゃなかったのですか？」

「デザートだけは、私一流なんです。」

「じゃあ、メイドさん辞めちゃったのですか……。」

「いえ、さすがにここで材料を保管したり作ったりする設備はないので、お屋敷で作らせてもらってます。それに私はお屋敷のメイドを辞める気はありませんので。ここは言うなれば『出張販売所』でしょうか？数はあまり出せませんが。」

「じゃあ、何故ここに？」

「お店が出来たばかりですし、今日はお嬢様が来られるのでお待ちしております。」

私がコレットさんと喋ってる間にお母様が追加注文してるのは秘密なのです。

結局、このお店を堪能するだけ堪能してこのお店の『視察』は終了したのです。

お腹一杯で学校には行けませんでした。

ごめんなさい。

街を歩くとよく分かりますが、種類は少ないですがけっこうな数の

ポケモンが居るのです。

ガーディ、デルビル、コリンク、ラクライ、サンド、イーブイ。

私を見る度に皆が挨拶　ポケモン、領民共に　をしてるので、最初は疲れましたがもう慣れたのです。

気になるのは、イーブイとガーディだけがまったく進化していないということですよ。

お母様のイーブイもですが、もう結構な年月一緒に居るのにもかかわらず進化していないのです。

ガーディに関しては石で進化という概念が無いのですが、イーブイがブラッキー、エーフィー、リーフィア、グレイシアにも進化していません。

雪が余り降らないのですからグレイシアは良いとして、森があるのにリーフィアにも進化しない。

そして、致命的なのは特殊な条件ではなく『なつき度』だけで進化する筈のブラッキーとエーフィーにすらなっていないということ。

……やはりモンスターボールによる洗脳効果が無ければ十分な信頼関係が築けないのですかね……。

まあBボタンキャンセルの心配をしなくてもゆっくり水の石を探せると思えば良いのです。

14話 無断外出

.....。

朝。

.....？

頭がボーっとしてるせいでよく分からない。

.....あ。

ネックレスに意識を集中させて呪文を唱えます。

「レビテーション」

フワッと身体が浮きました。

どうやら魔法が使える程度にはなったみたいなのです。

ということは、ついに卵召喚が可能に！！

まあ、それは置いといて.....。

ダッシュです！！

「お母様！お父様！」

「おはようリア。」

「どうしたの？そんなに急いで。なにかあったの？」

「はい！ありました！！！」

フフフ、苦節1年半。

私の魔力はついに解放されたのですよ。

「レビテーション」

『ちよつと待って、リリア何でわたし!?!』

コーティが足場を失ってバタバタしていますが、今は我慢して下さい。

「おお!」

「リリア凄いわ。その年でもう魔法が使えるなんて。」

「さすがでございます、お嬢様。」

『さつきは自分にかけてのに……。』

フフフ・・・さあ、お母様私を抱き締めて下さい。

お母様の前に言って腕を広げます。

ギューってされました。

顔がにへらへらってなってるでしょう・・・満足です。

あれれ?

お父様そんな眉間に皺寄せてどうしました?

「リリア・・・杖はどうした?」

「あら?そういえばリリア、杖はどうしたの?」

「このネックレスが杖代わりになるので、これで杖要らずなのです。」

「それにはそんな効果まであるのか。便利なものだな。」

「ネックレスでも杖の契約出来るのね。私もやるつかしら?杖って常に持ち歩くの面倒だから。」

「お揃いですね、お母様。」

さて、朝はテンションあがってましたが、落ち着いたので考えましょう。

私の系統は『火』と何なのか？

誰の卵を呼び出すか？

自分の系統が何なのかは、その内わかるでしょうから、現時点での問題は誰を呼び出すか？ですね。

しかし、呼び出すにしても問題が一つ。

それは、それなりの広さがあるとはいえ100種類以上の大型生物が1領地に生息出来るはずが無い。ということです。

デュ・テリエ領に20、30種も居れば多いと思って良いでしょう。

デュ・テリエ領にそれだけしか居ないということは、この世界にそれだけの種類しか生息していないということを意味します。

当たり前前みたいに言ってますが、気付いたのは最近だったりします。デュ・テリエ領にしかポケモンが生息していないという知識と、ポケモンは色んな所に生息しているという私にとっての常識のギャップが今までそれに気付かなかった原因だったりします。

水道が無かったりテレビが無かったりはもう当たり前に思ってますが、そっちの方は知識に感覚が追いついてません。

下手してこの世界に存在しない種類なんか呼び出して、連れ歩いてた日には私が『幻獣』だと勘繰られるかもしれません。

カトレアさんにはヘルガー見られただけでバレちゃったので不安の種を自分で増やしてはダメなのです

新種の幻獣とってくれば、バレないでしょうが、新種なんか連れてたらそれはそれで注目を浴びるのは確定です。

お父様曰くこの世界には『幻獣コレクター』みたいな奴らが少なからず居て、そいつらが領に来たら実力行使で排除しているそうで、そいつらに狙われるのも嫌なので新種と思われるのも勘弁して欲しいです。

『幻獣コレクター』と聞いて悪趣味に思ったのですが前の世界では珍しいポケモンが居ると聞けばトレーナーが何処からとも無く現れていたの、前の世界よりもマシなことに気付きました。

モンスターボール転送システムの開発者なんか自称『ポケモンマニア』です。

ポケモンを痛めつけたら、モンスターボールをブン投げて問答無用で捕獲する。

誰も不思議に思わない…………。

はっきり言って、お父様の言う幻獣コレクター以上な奴らばかりです。

・・・常識って怖いですね。

私はバトルで捕まえるなんてしてませんよ？

私の場合は、何故かあの子達が寄って来て仲良くなったら捕まえてましたから。

もしくは卵から孵化なのです。

というわけで、良い機会なので、調べましょう。

お父様に聞けば分かりますよね、きっと。

もっと早く気付いといけば今更聞かなくても良かったんですけど。

「お父様、デュ・テリエに生息する幻獣達の種類を教えてください。把握してるだけ全て。」

「それは構わんが、どうしたんだ？いきなり。」

「コーティ以外にも幻獣を増やそうと思ひまして。歴代の『幻獣』は何体も従えていたのでしょうか？」

「まさかとは思うが、自分で使役するのを探しに行くつもりか？」

「そんなことしませんから大丈夫です。卵があれば育てようと思つてますけど。」

「それなら良いが。」

お父様が本棚を漁って一冊の本を私に渡しました。

「これは？」

「絵付きで幻獣達が載っている図鑑だ。私も小さい頃に見せて貰っ

「たんだぞ。」

「パラパラとページを捲ってみました。やはり余り多くありませんね。」

「これで、全部ですか？」

「ああ。それで全部だな。」

「意外に空を飛べそうな幻獣が少ないんですね。」

デュ・テリエは幻獣やら、豊かな土地やらを狙われたりで国内外から狙われたことがあるらしく航空戦力は充実してると思ってたんですがこれは意外ですね。

鳥ポケは侮れません。

侮れないのですが、あの怖い竜を相手にするには厳しいと思うのですが……。

それでも、攻撃力不足な気がします。

こっちの竜の本気が如何程かも分かりませんし。

「お父様、これでどうやってご先祖様は竜騎兵を追っ払ったんですか？」

「これと言つが、この鳥達の力は脅威なのだぞ？メイジが単体で勝つのはほぼ不可能なんだから。」

「それでも、竜相手にするならちよつと……。」

「まあ、そうなのだがな。」

お父様がちよつと考え事してる顔になってるのです。んーって唸ってますし。

「これはリリアがもう少し大きくなるまで言うつもりは無かったのだが、デュ・テリエ領にはそこらの竜が束になっても敵わない程強力だ、天候すら操る竜が居るのだ。絶滅したと言われる韻竜だとかいう話もあるが、彼らは喋らないから違うはずだ。」

「韻竜？」

「韻竜は伝説の古代竜だ、知能が高く、言語感覚に優れ、先住魔法を操る。先住魔法というのは、メイジの使う魔法とは異なる魔法で、とんでもなく強力な魔法だ。人間には扱えない。」

天候を操る・・・ですか。

「それで、その竜というのは？」

「カイリユーだ。」

天候を操るって段階でなんとなく予想はしていましたが伝説に片足突っ込んでる存在が出てくるとは・・・。

伝説の古代竜と言いますが、その韻竜もホントに絶滅してるのか怪しいものです。

「カイリユーはデュ・テリエの守護竜で、我が家の家紋のモデルでもある。カイリユーとその眷属の姿は歴史書にのみ書いてあり、領民向けの図鑑には描かれていない。10歳になったら会わせてあげるから、今は待つてなさい。」

私がお父様と会い出すのを予想してるのでしょうか。

先に言われてしまいました。

お父様が段々手強くなってる気がするのです。

「約束ですよ？」

「勿論だ。」

カイリユーは10歳まで待つとしましょう。

どちらかと言うと、私はミニリユウ、ハクリユーの方を見たかったりします。

だって可愛いじゃないですか。

「もう一つ質問です。精霊って何処に居るんですか？」

「水の精霊ならラグドリアン湖に居るが、精霊がどうかしたのか？」

「お父様……。お願いがあります。」

「……。言ってみなさい。」

「精霊に会わせろ。駄目だ」何故ですか!？」

ホントに精霊いるみたいですね。

場所までわかるとは。

「精霊は我々と異なる存在なのだ。彼の存在はハルケギニアの先住民であり、私達とは異なる理で動いている。こちらが何もしなければ危険ということはないだろうが、接触すれば危険ということに変わりはない。」

「……………」

「それに、私では彼の存在に接触することがそもそも出来ないのだ。」

「

申し訳なさ、そう、に言うお父様。

「じゃあ、誰なら出来るんですか？」

「モンモランシ伯爵なら可能だろうが、彼がただ会いたいからという理由だけで危険を冒してくれるとは思えない。」

残念、そう、に言うお父様。

「……分りました。」

お父様は本当に会わせたくないみたいですね。

残念そうに言ってるのですが、とても熱心に会えない理由を教えてください。

全然残念に思っていないのが丸分かりです。

場所は分かりましたから自分で行けば良いのですが、接触出来ないというのは痛いですね。行っても会えなければ意味が無いのです。

そのモンモランシ伯爵は当てになりませんから、どうにかして接触手段を調べなければいけません。

面倒ですね……。

あの初代共は自分の日常を書く暇があるならこうゆうことをきっちり書いとけ！って思うのです。

追々調べるとして、調べても行かなきゃいけませんから召喚するのは乗って移動出来る子にしましょう。

お父様は案内してくれないでしょうから。

てなわけで、ポニータにしましょう。

前もあの子に乗って旅してましたしね。

ごめんなさいお父様、お母様。  
リリアは悪い子です。

初めての脱走です。

でも、言い伝えられてないってことは卵召喚は知られては不味い理由がある筈なのです。

屋敷のポニータが卵を産んだというのは通用しませんし、街の皆さんが卵を譲ってくれたなんて言い訳も通用しないでしょう。

だったら山で拾って来たって言うしか無いじゃないですか！

山にもポニータ居ますよね、きっと。

領内だけなら一人で外に出ても大丈夫な気がします。

「さあ！コーティ外に行きますよ！！無力な私を守ってください。」

『任せて。』

「では行きましょう。」

フワツと浮いて屋敷の壁を越えます。

これは、あれですね・・・自分の足で未開の地へ初めて踏み出した時の気分ですね。

旅慣れた私でも異世界で、初めての一人での外出となるとテンション上がります。

なるべく人目に付かないようにしなければなりませんから、街の外を迂回して行かなきゃなりません。

まあ、山まで大した距離があるわけでもありませんから3時間くらいあれば行けますかね。

・・・30分後。

何故か増えてる・・・さっきまでコーティと二人だったのに。

街の外を迂回して、歩き始めて10分でまず木の実を食べてたサンド君に遭遇。

『お久しぶりです、ご主人様』

山に行くと言っていると、暇なので自分も行くと言い出しました。

そのすぐ後、ルクシオ、ラクライに遭遇。

襲われると危ないので、護衛で付いて来てくれるとのことでした。

これにはコーティが『私だけじゃ不満なのかー!!』と反発。

抱き締めてモフモフしたらおとなしくなりました。

またすぐ後、スバメの群れと遭遇。

その内一羽が空から哨戒行動をしますとか言って上空から偵察中。

前の世界でもこんなにポケモンにエンカウントしなかったのにどうなってるのでしょうか・・・？

20分後、イーブイに遭遇。

・・・この子は絶対前の世界に居たら悪い奴に攫われると思う。

野生なのに自分が珍種だという意識が欠けている。

援護は任せて！と言っていたので<手助け>が使えるのだろう。

そして先程デルビルが加わり今に至るといっわけだ。

私は今からジムにでも乗り込むつもりなのだろうか？

山に行くだけの予定だったのですが・・・。

そして、しばらくしてあることに気付いた。

1時間も歩けば嫌でも気付くと言うものだ・・・。

この身体は体力が無い、ということに。

正直、甘く見ていた。

どうせなら山まで行きたいと思ったのが間違いでした……。

人の居ない所で呼べば良かった。

それで、山で拾ったと言えば良かったのです・

死ぬ前の体力で物事を図ってはダメだったのだ……。

私だって分かっていていたのだ。きつと体力が無いだろうということは。

前も初めて旅立った時には、ニビシティに行くまでかなりかかった。すぐに疲れるから、引き籠もってたので（15歳時点での）一般的な体力水準を大きく下回る。全然行程が消化出来なかったのだ。

それでも、3時間程度。前の世界では何ヶ月も徒歩で旅を出来る程度の体力なら軽くある人間ばかりである。なら2歳児でも大丈夫だと思っただのだ。

どうやら、前の世界の人間はこちらの世界よりも身体が丈夫みたいです。

『ご主人様大丈夫ですか？』

『リリア活きてる？』

「……無理です。」

『ポニータ呼ぶ?』

「……そんなこと出来るのですか?」

『遠吠え使えば簡単。』

「それはもう少し早く言って欲しかったのです」

コーティとデルビルが遠吠えでポニータを呼んでくれました……。

ポニータの卵を呼び出すためにポニータを呼ぶ。

何か間違ってる気がします。

5分位するとポニータが来てくれたので、今までとは段違いな速度で山まで行きました。

問題と言えば、この身体が乗馬に慣れてないのでお尻が痛い事ぐらいです。

乙女の柔肌には辛いのです。

山まで来れたのは良いのですが、ちょっと登りすぎだと思つのです。いえ……私が疲れてるのを見越して、少し奥まで上って湖まで案内してくれたのは分かっているのですが、お尻が痛いせいで……お尻のせいで今は気を遣う余裕がありません。

せつかくですから、少し休みましょう。

森林浴つてやつですかね?

こんな所まで来なくても出来ますが、ここは格別です。

それにしても、この湖綺麗ですね。

覗き込んだら私の可愛い顔が映るくらいの綺麗さです。

冷たくて美味しいですし。

ペットボトルに詰めて売ったら確実にヒットします。

何か落としたら『湖の精』とか出てきませんかね？

『お尻は大丈夫？』

「大分マシになりました。」

『そろそろやる？』

これで出来なかつたら笑えません。

収穫が森林浴だけは許されないのです！！

主に私のお尻に申し訳が立ちません！！

「それでは、いざっ！！」

.....

傍から見れば、お祈りしてるみたいに見えるでしょうが違いますよ？  
ネックレスに魔力を籠めてるのです。

ポニータ、ポニータ、ポニータ……。  
「うりゃっ！ポニータ召喚！！」

……。

目の前が光ってます。

……。

目の前が光ってます。

……。

……どうしろと？

## 2分経過

「これをどうしろと？」

『……手を突っ込んでみたら？』

手を突っ込めと？

この光の中に……。

「コーティ……。」

『私は嫌です。』

……可愛くない。

「コーティそんなんじゃない可愛くありません。」

『可愛くなくても良いです。こんな得体の知れない光に入りたくないです。』

周りに居る皆に視線をやると、全員の目を逸らしやがりました。

……可愛くありません。

「これ、どうやって消すんでしょうか？」

『辞める気！？せっかくここまで来たのに。』

「いや……だって……。」

『お尻の怒りはどうするの？』

……。

「こつゆうのって普通、向こうから出てきませんか？」

『私はそんなこと知りません！』

今日のコーティは冷たいのです。

いつもはもっと暖かいです。

モフモフってことじゃないですよ？

きっと今もモフモフでしょうから。

『相手は卵ですので動けませんわ。仕方ないことなのです。』

「『ああ、成る程。』」

『さあ、リリアさん。光の中に手を入れて迎えに行ってください下さい。』

得体の知れない光じゃないのなら、私に怖いものありません。

「行きますよ？」

疑問系なのは気にしないで欲しいのです。  
怖いわけではありませんよ？

光の中に恐る恐る手を突っ込むと、何かに当たりました。

ビクッ！！としたのは、仕方の無い事なのです。

そう、仕方ありません。

目で見えないものは怖いのです。

「コーティ、笑うなら光に投げ込みますよ。」

二度目のチャレンジで、今度はきちんと光から卵を取り出しました。

さて、目的も達成しましたし帰りましょう。

後ろを振り返った私は卵を落としそうになりました。

仕方ありません。

だって、湖の上に浮いていたのです。

青くて長いのが……。

これは、あれですね。

『湖の精』ってやつですか？  
イメージとは違いましたが……。

『そんなに驚かなくてもよろしいのではないですか？…おつきからず  
っと居ましたわ。』

15話 説教

「ハクリューさんは何故ここに？」

『私達はこちらに呼ばれてから代々ここに住んでいますから。』

「呼ばれたってというのはエルネストとかって人にですか？」

『そう聞いておりますわ。』

「……………」

『今日は良い機会ですので挨拶に参りました。』

「それは、どうもご丁寧に。」

『いえいえ。』

「……………」

『この子を貴女と共に連れて行ってくださいますか？』

ハクリューさんの真下。

湖から顔を出したつぶらな瞳。

うん。まじうことなくミニリユウですね。

控えめに言ってますごく可愛いのです。

ハクリューさんは可愛いというよりも、綺麗なのです。

「ミニリユウですか。良いのですか？」

『ええ。この子は貴女と共にあるべくして生まれ、貴女が産まれたのと同時にこの世に生を受けました。』

「えっと、それじゃあ一緒に行きますか？」

私がそう聞くと、ミニリユウがこちらに来て

『よろしく願いますわ。』

と、挨拶をした。

私よりお嬢様してるなあ、と思いました。

S i d e    デュ・テリエ侯爵

.....。

今、何と言った？

リリアが、居なくなつた？

「馬鹿者！！何故気付かなかつた！！」

「本を読むから、邪魔をしないで欲しいと言われておりましたので、気付くのが遅れました。先程屋敷内を搜索しましたが、見つかつておりません。おそらく『フライ』で屋敷の壁を超えて行ったのかと.....」

リリアの行動力を甘く見ていたか.....。

「今搜索に向かわせる人員を選んでる所です。」  
「急がせる！」

ドアがノックされた。

「何だ！」

「あの、何と言いますか……。」

言いよんでいるメイドの脇からはしゃいでるリリアが出てきた。

「お父様、これ山で拾ってきました。」

……。

人の心配を他所に娘は暢気に外出の成果を報告して来た。

私は親として、初めての説教を経験した。

### Side out

帰って来て、屋敷の玄関に着いた瞬間メイドさんに捕まり、お父様の所まで連れて行かれました。

怒られました。

説教をくらいました。

ハクリューさんからミニリュウ預けられて、テンション上がったたせいで無断外出することを忘れてました。

若さ故の過ちというやつですかね。

あわよくば、バレずに出てバレずに帰って来ればと思っ  
ていますが、やはりそう上手くはいきません。

怒られないわけがない、とは思ってたのです。

これで、今後無断外出は不可能になるでしょう。  
囚われの姫君ってやつですね。

.....

しばらくおとなしくしておきます。

ごめんなさい。

出かける前に思っていたよりお父様の説教は怖かったです。

素で涙目になりました。

ごめんなさい。

そして、今はお母様に慰めて貰ってます。

・・・慰めて貰ってた・・・と言う方が正しいでしょう。  
初めはお母様も私が涙目な事もあって優しくかったのです。

お母様の抱擁タイムが終わり、私が普段通りに戻った。

そこからが辛いのです。

何故なら・・・延々とほっぺたを抓られています。

地味に効きます。

初めは御仕置きで抓られてたのです。

私は無断外出の負い目もあるので抵抗できません。

お母様もそれなりに怒っているみたいです。

でも、15分前くらいからは違います。

明らかに楽しんでるのです。

抓るだけじゃなく突っつかれたりしてますから。

きつと頬だけ赤くなってることでしょう。

・・・いつまで続くのですか？お母様・・・。

私だって、お母様が遊びだしてからは抵抗したのです。当然膝の上からは退きたく無いので、頭だけですが……。

プクーンと膨れてみたら、突っつかれました。イヤイヤを試してみたのですが、頭を撫でられ、私の頭が止まったらまた抓られました。

お母様の膝の上から退きたくない私にはどうしようもありません。

膝の上に乗せられ背中から抱き締められてるのに、身体はフワフワしてるのに頬だけが痛いのです。

もう観念してます。

この身体でいる限りお母様には勝てないのです。

「それで、リリアは何を拾って来たのかしら？」

「ポニータの卵なのですよ、お母様。」

「あら、それは良いものを。」

「はい。ゆくゆくは私の愛馬になります。」

お父様は自分がどれだけ心配したかを延々と語ってくれて、それはそれで娘としては嬉しいのですが、結局は説教するだけで、卵の話 を全く聞いてくれなかったのです。

「それで、どこで拾って来たのかしら？」

「山の中ですよ？さつきも言いましたが。」

「じゃあ、どうやって拾って来たのかしら？」

「どうやって？と聞かれなくても、落ちていたのを見付けただけなのですが……。」

「お母さんくらいには正直に話して欲しいのだけれど？」

「……山に落ちてたのです。」

「リリア、今は産卵の時期じゃないのよ？」

ギューって抱き締められました。

ダメです。

我慢です。

これはお母様の罠です。

私が白旗を挙げるのを待っているのです。

「……………拾って来ました。」

ひょいっと抱き上げられて、膝の上から降ろされました。  
お母様に見詰められています。

……………。

つぶ、煮るなり焼くなり好きにしてください……  
どうせ、勝てないのですから。

そういえば、私は前の世界でも母には勝てませんでしたね。

「ネックレスの力で、召喚しました……。」

「これからは一人で勝手に外に行ってはダメよ？」

「はい……………」

こうして私はお母様の膝の上に舞い戻りましたとさ。

私の頬は赤くなってました。

「お父さんには私から言っておきますから。」

「……………」

さて、ミニリュウの名前を考えなきゃいけませんね。  
何にしましょうか？

青・・・青い竜、青…………。

青のイメージ。

川、湖、海…………。

セリアにしましょう。

理由なんかありません。

ホントに思いつきです。

イメージって大事ですよね。

名前が決まったのでさっそく教えに行きましょう。

「ミニリユウ、出ておいで。」

呼びかけたら直ぐに出てきてくれました。

「貴女の名前を決めました。セリアっていうのはどうですか？貴女のイメージから思いついたのですが。」

『ありがとうございます、リリアさん。』

「じゃあ、セリアこれからよろしくなのです。」

『こちらこそ願いますわ。』

「こっちはコーティ。見ての通りガーディです。」

『よろしく、セリア。』

『はい、コーティさん。』

セリアの頭を撫でようと手を伸ばしたのですが、空振りしました。残ったのは波紋。

お父様が来ちゃいました。

お父様の馬鹿……………。

「そろそろ冷えるから屋敷に戻ろう。」

「何も聞かないのですか？」

「ネックレスの事か？」

私は黙って俯きました。

「今更娘に特殊能力の一つや二つ増えたところで驚かんよ。」

「お父様。その、なんでも受け止めてやるぞという感じの、雰囲気

「は、とても素敵だと思います。セリフは陳腐ですが、ちょっとときめきました。」

「今の内に全部言ってくれたら褒めてあげるぞ?」

「それはちょっと減点なのです。セリア!」

「セリア?」

青い竜が池から顔を出しました。

「すごく可愛いと思いませんか?ね、セリア。」

リュウつと鳴きながら首を傾げるセリアはやっぱり可愛いのです。

「何故ミニリュウがここに居る!?!」

お父様・・・声がでか過ぎなのです。

耳がキーンとします。

セリアもビックリして池に潜ってしまったのです。

さっきのときめきはもう吹き飛びましたよ。

台無しなのです・・・。

「リリア?」

「ハクリューさんから貰いました。」

「湖まで行ったのか?」

「皆に協力してもらいました。」

「あんな所まで行くのにも驚きだが、どうやって呼び掛けたのだ?それなりに手順が必要な筈なんだが・・・。」

「・・・コーティと喧嘩してたら何時の間にか出てきました?」

うん。間違ってますせん。  
喧嘩してたら、何時の間にか背後に居たから間違いないのです。

「……そうか。」

気のせいでしょうか？

呆れられている気がします。

「それで、そのミニリユウは無理矢理連れて来たわけではないのだから？」

「そんなことしません！」

頬を膨らませて不満をアピールするのです。

突っつかれました。

……頬を膨らませた子供の頬は、突っついて空気を出させるのがこの世界のルールなのですか？

「それなら良い。大事にするのだぞ？」

「当然です。」

頬を抓られたのが痛いと思わずに今日はお母様に抱きついて寝ました。

朝起きるとお父様に抱きついてましたが。

## 16話 く竜の舞く

私達は只今憤慨中です。

事の発端は5日前の朝の事です。

セリアが来てから私の日課に、朝起きたら池に行つてセリアとお喋りが追加されました。

その日の朝私はいつもより早く目が覚め、する事も無いのでセリアに会いに行つたのです。

池に行くと、お父様が変な動きをしていたのです。

変と言ってもその動きは規則的でしたのでおそらく一定の決まりがある踊りなのでしょう。

私に出来るのは、見なかったことにする事だけでした。

次の日から、私は何故か早く目が覚めてしまうのです。

.....

前日に何も見ていない私は、前日と同じくする事も無いのでセリアに会いに行きました。

前日は気が付かなかったのですが、踊りだけでなく何か唱えていました。

……私に出来るのは、見なかったことにする事だけでした。

3日目からは‘何故か’寝ているコーティを起こして一緒に行くことにしました。

コーティの『こんな朝早くに起こさないで』と言う抗議を受けて、仕方なく一人で行くことにしました。

私はまるで何かの儀式の様だと感じましたが、この日も私に出来るのは何も見なかったことにする事だけでした。

4日目の朝、その日もコーティを起こすと『起こさないで』と抗議を受けました。

しかし、コーティは私の顔を見た瞬間飛び起きました。

『どうしたの、リリア！？何かあった？私に何でも話して！』と。

いきなりコーティがそんなことを言うので私はビックリしてしまいました。

気付かなかったのですが、私は涙目になっていたらしいです。

この日はコーティも一緒に来てくれました。

私はコーティを抱き締めてビクビクしながら池に行きました。

その日もお父様は同じように変な踊りをしながら何か唱えていました。

コーティは私に、お母様に相談するという名案を授けてくれました。その時の私はそんなことも思いつかないくらいどうかしていたのでしょう。

しかし、私はお父様の名誉の為に、お母様にお父様の奇行を相談する事が出来ませんでした。

誰だって父親が変人の謗りを受けるのは嫌なのです。

ましてや、私は「お父様大好き！お母様はもっと大好き！」な子なのです。

お父様とお母様の仲が悪くなる事など望んでいません。

そして今日の朝、私は 深夜と言うべき時間帯であるが 酷い夢で目が覚めました。

その夢は、お父様が悪い童に魂を売り渡してしまつたというものでした。

起きた瞬間は、変な夢と思っただけでしたが、時間が経つとこの世界はファンタジーだという気持ち徐徐に強くなっていきました。つまり……何が解らない……。

この時になって私はお母様に相談しなくてはならないと決心しました。

時間が経ち、今日もお父様が変な踊りをしているのを確認した私は、髪を整えているお母様に抱き付きお父様の奇行を涙ながらに訴えました。

私はお母様にコアラさん抱っこをされてお父様の所に向かいました。この時ばかりは、お母様に抱き締められても心が休まりませんでした。

## Side エステル

今日の朝いつもの様に髪を整えていると目に入れても痛くない可愛い一人娘が突然私に抱き付いてきました。

1歳を過ぎた頃から突然甘えるようになり、よく抱き締めて欲しいとアピールするようになり、母としては嬉しい限りです。

リリアと私が抱き合う時は大抵、リリアが笑顔で抱きついてくるか、リリアが手を広げて私が抱き締めるかのどちらかです。

しかし、この日は少し様子が違いました。

私に抱き付きながら泣いているのです。

少し残念なのですが、私はこの子が涙目になってるのを数度しか見た事ありません。

その数少ない内の1度が先日無断で屋敷から出て夫に怒られた時で

す……。

話を聞いてみると、朝セリアちゃんと話をしようと言池に行くと夫が変な踊りをしながら、変な呪文を唱えていて、最近それが怖くて早く目が覚めてしまうというのです。

本当は昨日私に相談しようとしたのだけれど、夫と私の仲が悪くなるのが嫌で相談出来なかったのだが、今日酷い悪夢を見て相談することにしたようです。

……。

リリアに最近元気が無い理由がようやく解りました。

私とお茶をしても上の空でしたし、魔法の練習もからっきしでした。

実を言うと、リリアが私とお茶をしても楽しく無いのかと思い私も落ち込んでいたのです。

しかし、娘にそんな姿を見せるわけにもいかず……。

何をやっているのですか、あの人は。

S i d e o u t

そして、私達は奇行の主と対峙したのです。

「……………」

侯爵は不思議な踊りをしながら、呪文を唱えている。

リリアはエステルにヒシつとしがみ付いた。  
エステルはしっかりとリリアを抱き締めた。

「……………何も起こらない。」

侯爵の行為は意味を成さなかったようだ。

エステルとリリアの密着度が上昇した。

……………。

「貴方は一体何をしているのかしら？」

お母様が冷たい声で言い放ちました。

さすがのお母様も許容範囲外だった様です。

「ん？どうしたのだ二人とも。」

「それは私達のセリフです。貴方は何をしていますのですか？」

「何って、デュ・テリ工家に伝わる「竜の舞」だが？」

「なんですか？それは。」

「守護竜とその眷属に捧げる祈りの様なものだ。」

「それをセリアちゃんが来てから毎日？」

「まあ、そうだな。」

「……………。」

「どうかしたのか？」

「……………お父様なんて嫌いです。」

「中に戻りましょうね。」

「えっ！？嫌いって……………何故だ？」

全く関係の無い話ではあるが、池の中で陸に居る金髪の男性を警戒しているミニリユウの姿があった。

これまた全く関係の無い話ではあるのだが、妻と娘が去ろうとした後も、気を取り直してデュ・テリエ家に伝わる由緒正しい舞を捧げようとする現当主に水球をぶつけようとする娘の姿があった。

これは少しだけ後述したものに関係があるのだが、この時デュ・テリエ家の一人娘は母と同じ『水』の系統に目覚めた。

「それで、お父様は何であんな『変』な事をしていたのですか？」

「あんな変な事というが、「竜の舞」はデュ・テリエに危機が迫った時にカイリユウに捧げる舞で儀式の一つでもあるのだぞ？」

「あんな『変』な儀式誰が考えたのですか？」

「初代様だと言われている。」

「では貴方は何故、そんな『変』な舞をしていたのですか？」

「デュ・テリエの安寧を祈る舞でもあるからな、あの舞は。」

「……つまり、お父様はセリアが池に来たのでその『変』な舞をやっていたということですか？」

「そうだ……。」

お父様も『変』だとは思ってるみたいです。

でも、関係ありません。

「リリア、お父さんに何か買って貰いましょうね。」

「はい。」

「何故そうなる？」

何も知らないお父様は黙っていて欲しいのです。  
加害者は賠償しとけば良いのです。

「お母様、言い辛いのですが……。」

「なあに？リリア」

「私、妹が欲しいのです。」

上を向いてお母様にお願いします。

あ、お父様が咳き込みました。

「わかったわ。」

お母様にギョツとされました。  
癒されるのです。

「それじゃあ、私は息子が欲しいわ。」

お父様をジッと見詰めます。

………。

「分かった。私もそろそろ二人目と思っていたからな。」

「お父様、是非先に妹をお願いします。」

「頑張りましょうね？貴方。」

私としては、私、妹、弟、妹、弟がベストなのです。

「そういえば、私『水』メイジみたいですわ。」

「私と同じね。水魔法なら私が教えてあげられるから頑張りましょうね、リリア。」

「はい、お母様。」

「『火』であれば、私が教えられたのだが……。」

「あ。多分『火』も使えますよ？」

名残惜しいですがお母様の膝から降ります。

ネックレスに魔力を集中させて……。

ポワッ。

小さな火球が出来たのです。

「ほら、やっぱり出来ました。」

「あらあら、やっぱりリリアは立派なメイジになるわ。」

「……もう驚かんぞ私は。」

「と、いうわけで……お父様もお願いしますね？」

「わかったよ。」

『火』は偶然ですが、お母様とお父様の両方から貰ったみたいでとても嬉しいのです。

今回の話とは全く関係の無い話ではあるが、とあるミニリユウから、自分は侯爵の奇行を警戒していたという事を聞いた一人娘が侯爵にそれを報告した所、侯爵が分厚い歴史書に何かを書き殴っていた。

まるで関係の無い話ではあるのだが、これ以降「竜の舞」が緊急時以外に舞われることはなくなった。

緊急時にも必要なのは怪しいものだが。

。「幻獣」以外の歴代当主は全て初代に騙されていたろう……。

気付いていただろうに継承させる歴代「幻獣」も良い性格をしている。

私は違いますからね？

## 17話 く便利君く

魔法の練習を始めて早2週間です。

昨日までの成果は『レビテーション』『ライト』『発火』『コンデ  
ンセーション』の4つです。

お母様は魔法の練習をする時は大抵私の傍に居てくれるのですが、  
毎回大変です。

何故なら、1つ出来るようになる度に私は天国に連れて行かれちゃ  
うのです。

そうになると私は、1時間は動きませんからね？

ついでに言うと、1度中断するとその日は再開されません。  
集中力が取り戻せる筈がありません。

和んでますから。

お父様も私の習得スピードに驚き、毎回褒めてくれます。

・・・褒めてくれるのですが・・・。

今のお父様は見られません。

娘の才能に嫉妬してどうするのですか？

褒めながら、本気で悔しがるってどうなのですか？

もう4回言われました。

「何故もつと覚えが悪くない！これじゃ、私がリリアに魔法を教えられない！」と。。。。。

今回はお母様にまでぶつぶつ愚痴を言っていましたので本格的です。

態とじゃなく、タイミングが悪かっただけなのですよ？

お父様が教えてくれる日はたまたま、覚えたての魔法で遊びたい気分な日だっただけなのです。

お父様に教わるのが嫌ってわけじゃないのです。

ほら、新しい事を学ぶのってそれなりに気合がいるものですよね？  
気分って大事ですよ？

まあ、確かにもつと覚えが悪ければお父様も私が四苦八苦してる時に優しくアドバイスして「お父様ありがとう」って予定も実現出来たのですが。。。。。

そんなこんなで、今日は新魔法の日なのです。

。。。。。

驚愕です。

驚きです。  
ビックリです。  
仰天です。

素晴らしい事を発見をしました。  
なんですかこの便利君は。

素晴らしいですよこれは……。

『ディテクトマジック』

本来は魔力を感知する魔法らしいのですが、ふと疑問に思ったので  
す。

コーティにやったらどうなるか？

結果。

ポケモン解析魔法。

前の世界でこれが出来たら瞬く間にポケモンに関わる人たちに広ま  
るでしょう。

育成するのならポケモン図鑑より遙かに便利です。  
ポケモン図鑑って解説するだけですから……。

『ディテクトマジック』はこの子の成長具合が解るのです。

まあ正確には無いので大体ですが。

今の所こんな感じなのです。

コーティ（ガーディ）

成長度／まだまだ子供

なつき度／デレデレ

強さ／とっても可愛い

技／ちっちゃい火が出せる

タイプ／炎が得意

うん。

その内、精度も上がって詳しくなる筈です……きっと。  
でも、図鑑じゃ成長具合、強さ、なつき具合はわかりませんか？

しかし、不思議な魔法ですね。

使ったらゲームで言うステータス画面みたいなのが頭に浮かぶとは  
。。。

「お母様、ディテクトマジックって上手に使えるようになればもっ  
と詳しく解る様になりますか？」

「私はそうだったからリアならとても詳しく解る様になるわ。」

「それじゃあ、練習あるのみです。」

「あら？今日はまだ練習するの？」

あれれ？

お母様何ですか？そのポーズは。

ご褒美ですか？

腕を広げてるって事は抱きつけてことですよね？

今日とかまだ10分もやってませんよ？

ご褒美貰っちゃいますよ？

頭の中では色々考えてますが、身体は既にダイブしてるのです。

ギューってされます。

ギューってします。

もう今日は何もしたくないです。

気合？集中力？なんですかそれって感じなのです。

大事なのは和みとフワフワです。

結局今日は一発で『ディテクトマジック』成功させて、お母様に抱き付いて、お茶して、お昼を食べて、コーティを抱いたままお母様と和んで、セリアも呼んでお茶をして、終了です。

勉強とか、どーでも良くなってしまう。

毎日これが続けば良いのに……。

「お嬢様。勉強のお時間です。」

.....

「お嬢様？」

.....セバスチャンの悪魔.....

余韻に浸らせてくれても良いじゃないですか。

「今日はデュ・テリエの経済について教えて差し上げます。」

「.....お願いします。」

「以前にも申しましたが、デュ・テリエ領は広大な領地を保有しています。これは侯爵という爵位を賜った事に加え、当時一向に進まない土地開発を推進しようとした当時の王政府の命で開発した土地を自領と出来たためです。領民は現在15万人。他領からも平民が入って来ますから現在も増えております。」

「15万人って多いのですか？」

「ハルケギニアで人口が最も多いのはガリア王都リュティスで人口30万人ですから、かなり多いですね。トリスティン国内だけでなくハルケギニア全体から見ても有数の領地です。しかし、デュ・テリエの驚くべき所はその所得の高さです。」

「そいえば、他領の平民の所得が当てにならないから困るって聞いたような。」

「その通りです。他領で平民の総収入は大体210エキューです。デュ・テリエでは一人当たり280エキュー。そこから税金が引かれるのですが、デュ・テリエの方々は何故かお金に執着しないと云いますか税が軽いのです。他領は税率40%、自分で使える金額は125エキュー前後が普通ですが、デュ・テリエ領は税率25%、自分で使える金額は210エキュー前後です。」

.....

お金に執着しない？

..... 私は守銭奴ですよ？

それにしても、税引後の所得が他領の税引前と同じってどんだけですかこの領は。

「更に、デユ・テリエは農作物が多く、海にも面しておりますから魚も取れます。そのおかげで物が安いのです。」

.....

人口が多くて、所得が高くて、税も軽いのに物価が安いつて..... 領内で物が安いのに領民は高所得って、どんだけ外で稼いでるんでしょうか.....

「そのお金は一体どこに行ってるのですか？」

「安いと言っても食料品等だけですし、他領の平民では手が出ない物なども領内で作っておりますし、デユ・テリエには学校もありますから。」

「学校？他の領には無いのですか？」

「寺院などで教えたりはしておりますが、他領に平民向けの学校と言つものは存在しません。そのため、領民の識字率は80%を優に超えています。他領で文字が扱えるのは極々少数です。」

..... マジですか？

この世界って格差が.....

「他には芝居等も人気があります。」

「私達は恵まれているんですね.....」

「さて、何故デユ・テリエ領がそれ程豊かなのか、わかりますか？

「例の政策集ですか？」

「それもあります。領民が商人並の教育を自由に受ける事ができるというのは革新的です。これが2000年以上前に提案されたものというのですから驚異的です。」

「後は幻獣達ですか？」

「そうです。現状では幻獣の存在が政策集を実現させる前提であり、最も重要な要素でもあります。お嬢様も幻獣図鑑を御覧になりませんか？」

「この前お父様に見せて貰いました。」

「デュ・テリエの農作物収穫量は『デイグダ』のおかげで他領と一線を画します。彼らが畑を耕し、耕した後も農作業を手伝ってくれる事で農地面積も作業効率も。また、井戸を掘るのにも困りません。」

大量生産でイニシアチブを取ってるってことですかね。

しかも話の口振りからすると、価格競争って何？って感じがします。大量生産するだけで勝てる市場ってことなのでしょう。

「しかも、デュ・テリエは日照りになりかければ雨が降り、雨ばかりなら日が差すと、天に味方されている様な土地なのです。」

「雨乞い」に「日本晴れ」ですかね。

ポケモン達頑張ってますね……。

他の領に申し訳なくりますが……。

「漁村では『ブイゼル』のおかげで漁師達が広範囲で漁をする事が出来ます。それに、旦那様方が私達に命じて定期的に漁船に『固定化』をかせさせたりしていますから、安全に漁が出来るのです。」

ブイゼルはこの世界でもライフセーバーやってるんですね。  
昔の漁師にとってブイゼルは命を預ける相棒だったらしいですし。

「領民向けであり、ちょっと高級志向の服なども作っています。これも好調な売れ行きです。ゲルマニアの小金持ち等からも自分達が着る用に注文があります。現在の服には「高い」「安い」の2択しかありませんから貴族程では無いけれど、ある程度所得のある者には丁度良いでしょう。」

「そうゆうことやってるのってデュ・テリエだけなのですか？」

「他では聞いた事がありませんね。だからこそ領民のデュ・テリエ家に対する信頼が厚いのです。それに・・・と、今日はここで終わりのようですね。」

ノックされました。  
きつと晩御飯です。

「お食事の用意が出来ましたので、そろそろいらして下さい。」

「この続きはまた今度ということ。」

「セバスチャン何時も思っていた事を今日こそは言ってみます！  
！」

「奥様から引き離されたからと言って怒ってはいけませんよ？これもデュ・テリエ家の人間としての務めです。」

・・・バレテル。

「最近の勉強は2歳児にする話じゃないのです！！！」

「仕方ないのです。お嬢様が優秀すぎるからこのくらいしか教える事が無くなったのですから。」

「・・・私が悪いみたいに言わないでください。」

「そんなことより行かなくて良いのですか？奥様が待っていますよ。」

「誤魔化さないで下さい。」

「明日は私が『錬金』を教えますから楽しみになさっていて下さいね。」

「……もういいです。。。」

18話 蒼炎

卵が最初の5倍くらいの大きさになりました。

もう卵にはヒビが入っています。

でも・・・眠い・・・。

早く・・・。

このままじゃ寝る・・・。

20分後

頭が右に左にフラフラと・・・。

あゝ眠いです。

寝て良いです？

フラフラと・・・。

40分後

．．．．．綺麗．．。

脚が．．．脚がプルプルと．．．。  
産まれたたての子馬の様です。

実際産まれたたての子馬なのです。

ポニータが産まれたのですよ。  
けれど炎の色が．．．蒼．．。

初めて見ました蒼いポニータ。  
きっと完全燃焼してるんでしょうね

こんにちはポニータそしてお休みなさい。  
一言も交わすことなく寝てしまう私を許してください。

．．．．．。

おはようございます。

今日は目の前が火事です。  
燃えています。

お休みなさい。

．．．．．ダメだ、寝ぼけてます。

「ひゃっ！」

顔舐められましたよ！  
ペロンって。

「わっ！」

また舐められました。  
今度はペロンです。

ペロンとペロンの違いなぞ知りません。

強く舐められた方がペロンですよ、きっと。

・・・そいえば、産まれたんでしたね。

「おはよう。」

『まだそんな時間ではないがな。』

・・・は？

「まだ真っ暗じゃないですか！何で起こしたんですか。」

『私が立ち上がるうと懸命になっているのに寝てしまつ親に説教されたくないのだが・・・』

「・・・えっと、それは・・・ごめんなさい。でも、私だって頑張って起きてたんですよ？いつもより5時間くらい。」

そうです。

私だって最善を尽くしました。

ブルブル震えてた時は……気にしないで下さい。  
馬類なら誰もが通る道です。

『まあ良いのだがな。それよりもだ、私に名をくれぬか?』

「あっ、そうですね。実は私ずっと暖めていた、とっておきがあるのです。」

『ほう、それはありがたい。して、その名は?』

「あつたのですが、貴方が蒼いから別の名前にします。」

『私はそのとっておきの名前で構わないのだが』

「駄目です! 勿体無いじゃないですか! そんなに綺麗なんですから、蒼い炎だったなんて予想外です。」

『……そうか。なるべく早く頼む。』

「任せるのです!」

フツフツフツフ喜ばしい予定外です。

「錬金」系統の魔法が上手くいってないので最近は気分がダウンー  
でしたが、これは嬉しい事態です。

「しかし、今はやる事があります。」

『ほう。やる事とな?』

「はい、私にとって今最も重要な事です。」

『それは何だ?』

「決まってるじゃないですか! お休みなさい。」

もう3秒も起きてられません。

おやすみなさい。

『……良い夢を。』

「キヤーーーーー！旦那様！！奥様！！」

「何事ですか！！」

ガバツと飛び起きざるを得ない悲鳴が！！

「お嬢様！こちらへ、早く！」

・・・はい？

何故？

「お嬢様、失礼します！！」

あうっ。

抱き上げられましたよ。

あーれー！。

あれよあれよという間に拉致されたのですが、これはあれですか？  
人攫いですか？

「状況説明をお願いします。」

「危ない所でした。見た事もない獣がお嬢様の傍にありました。」

見た事もない獣？

そんなの居ましたっけ？

「お怪我はありませんか？」

「怪我も何も、寝ただけですから……。」  
「お嬢様、奴が追ってきました！逃げますよ！」  
「えっ！？またですか？」

あーれーれーれー。  
人攫い再び。

っあ。

ポニータ君が後ろを付いて来てます。

そこにいると危ないらしいのです。

早くこつちへ……

「つて、どこが見た事もない獣ですか！」  
「お嬢様はあれについてご存知なのですか!？」  
「え？クラリスさんも毎日見てるじゃないですか。」  
「私が、ですか？」

ふー、ようやく止まってくれました。

「ほら、あれポニータですよ？」  
「え？ですが、あれは蒼いですよ？」  
「極稀に色違いの幻獣が産まれることがあるのです。ほら、よく見てください。」  
「……あ、ホントだ。炎の色は違いますがポニータですね。」  
「でしょ？」  
「それに、落ち着いてよく見ると……綺麗……。」  
「ですよね！やっぱりそう思いますよね!……」

私も見た時は思わず見惚れましたからね。

「本日二度目のおはよう。」

『おはよう。いきなり悲鳴を挙げられるとは思わなかった。』

「ビツクリしただけですよ。それに、今は見惚れてるから許して上げて下さいね。」

『それより、腹が空いたのだが。さすがに産まれて何も口にしてないのは辛い。』

「そうですね。付いてきて下さい。あと、こちらクラリスさんです。」

「……。」

「クラリスさん？」

「……あ、はいっ！よろしくお願いします。」

『リリアー！置いてかないでよ……。』

「……あ。」

完っ壁に忘れてました……。

「この子はガーディのコーティです。」

『おわっ！蒼い……！』

「この子は今日の未明に産まれたポニータ君です。」

『ポケモンにまで驚かれると多少傷つくな。』

「まあまあ寛容に、です。」

仕方ないのです。

色違いの産まれる確立って1/8000くらいでしたっけ？  
実際はもっと低いはずですよ。

ポニータの色違いを実際に見るのは初めてですから。

博物館に写真が残っていたやつしか見た事ありません。

「それじゃ、行きm」キヤーーーーー」・・・またですか。」  
『・・・なるべく叫ばれないようにしておいてくれ。』

・・・必ずやります。

「あつ、私はリリアーヌです。リリアって呼んでください。」  
『わかった。よろしく頼む。』

それから更に3回叫ばれました。

ポニータ君涙目です。

ああ、泣かないで下さい。

「おはようリリアって・・・なんだこいつは！」

「私のポニータ君です。ビックリしないで上げて下さい。朝から叫ばれて傷付いてますから。」

「ああ、解った・・・それにしても・・・美しいな。」

「あらあら、朝起きてみれば綺麗な子が目の前に。」

「お母様、おはようございます。」

『驚かれなかったのは、リリア以外では初めてだな。』

「この子はポニー・・・タ？」

「正解です。ホント綺麗ですよ、この子。」

グギュルル・・・。

・・・。

視線が集まります。

『・・・食事を頼む。』

「飼葉？ミルク？」

『産まれたて向けを。』

「じゃ、ミルクですね。」

『なるべく早くお願いしたい。』

「ええっと、通訳は要らないと思いますが、お腹空いてるみたいなのでミルクをお願いします。」

「すぐに準備します。」

ジーーーーー。

ジーーーーー。

今の無音に音を着けるとしたら正にこれですね。

クラリスさんが出て行った後も・・・視線が集まっています。

生暖かい空気に耐えられなくなったのかポニータ君は自発的に外に出て行きました。

馬ですからね。

外に居た方が成長にも良いでしょう。

「色違いなんて初めて見たな。」

「そうなんですか？」

「ああ。少なくとも私は聞いた事が無い。」

個体数が違いますからこっちでは初めてってのも頷けます。

「リリア、着替えてきなさい」

「?・・・あ。着替えてきます。」

クラリスさんに拉致されたのでまだパジャマなのです。

「ご馳走様でした。ポニータ君の様子を見てきます。」  
「行ってらっしゃい。」

.....

視線を感じます。

「注目されてますね。」  
「何とかしてくれないか？」

「一応蒼いポニータは私のポニータですって説明はしましたが……  
……。ん〜、注目されるのは皆が慣れるまで待つて下さい。」  
「仕方がないのだろうな……。」  
「ちょっと付いていてくれますか？」

『「」は？』

「私のミニリュウが住んでるのです。セリアー。」

ひょこつと顔を出すミニリュウ。  
今日も可愛いのです。

最近は奇行をする金髪も出現しませんし、安全ですね。

それに、セリアがここに来てから池が綺麗になった気がします。  
元々それなりに綺麗だったのですが、今は前よりも綺麗になっています。  
ます。

ミニリュウには靈気でもあるんですかね？

竜の加護がある霊水だと言って言ったら売れませんか？

「……駄目です。」

それじゃ宗教っぽくなっちゃいます。

でも……金持ち限定なら……ほら、前の世界だって高価なミネラルウォーターってありましたし。

「……っは！」

駄目です。私は何を。

今は紹介です。

「この子はセリアです。こっちはポニータ君。」

『お願いしますわ。』

『ようやく3度目だな、こちらこそよろしく頼む。』

「名前は今考え中です。名前を考えたらハクリューさんの所に紹介に行きますからその時はセリアも一緒に行きましょうね。」

『ええ、是非。ところで、3度目というのは？』

「……気にしないであげて下さい。」

『……？』

悲しいすれ違いがあったのです。

19話　く　魔作　く

私に魔法を教えてくださいる人は皆がこう言います。

「何故か『錬金』だけは上手くなりませんね。」

コモンマジックを使えば皆に褒められ。

火を扱えばお父様に褒められ。

水を扱えばお母様に褒められ。

秘薬作りを手伝えばお母様に褒められ。

風を扱えばお爺様に褒められ。

ですが、錬金をすればセバスチャンとお婆様に残念がられました。

『固定化』はなんとかになりました。

理屈は納得いきませんが、現状維持って思いをたくさん込めたら出来ました。

『土』メイジであるセバスチャンなどは非常に、非常に、本っっっ当に嬉しそうに残念がります。

『土』メイジでもお婆様はちゃんと残念がってくれるのです。

しかし、私からすればあんたらはなんでそんなことが出来るんですか！と叫びたいのです。

セバスチャンは以前私の目の前で『真鍮』を錬金してくれました。

庭にあった只の石を。

さてここで私の引き篋もり時代の知識から真鍮の成分を引っ張って来ましょう。

私の覚え違いで無い限り主成分は『Cu』と『Zn』です。

庭にある石の成分なんて知りませんが、間違っても銅と亜鉛ではないでしょう。

百歩譲って銅と亜鉛が極僅かではあるが含まれている物質を大量に集めて、銅と亜鉛を抽出して、セバスチャンが錬金した大きさの真鍮に組成を組み換えているのならまだ良いのです。

スクウェアレベルらしいですが『C』をたくさん集めてダイヤモンドにするのも、まだ良いでしょう。

そう、まだ。

ですが、そこら辺にある石から同じ大きさの真鍮を錬成するってのはどーゆー見ですか？

元素は？組成は？

世界の仕組みは何処に行ったたというのでしょうか？  
寧ろ……逝った？

私はあの真鍮の成分が『Cu』『Zn』だとは認めません。

けれど、現実……さようなら化学式。

こんにちはファンタジー……。

いくら魔法でもさすがにそれは無いのでは？

しかし、世界はそんなに甘くはありませんでした。

私は昨日、ある事を教わったのです。

それは『宝石の市場価格』です。

貴族の嗜みというやつですかね？

そゆ物の値段もきちんと知っておくべきだと言われたのです。

ええ舐めてました。

貴族舐めてました。

というか、宝石甘く見てました。

仕方ありません。

メイジが自分で宝石を作れるなら6000年の歴史があるのですから相当数の宝石が出回っているはずです。

それにも関わらずめちやくちや高値なのです。

『白の書』によると、こちらの貨幣価値は1エキューが2 3万円らしいですから、前の世界よりも遥かに値段が高いのです。

確かに、採掘技術などは天と地程の差があるでしょうが、スクウェアアクラスのメイジが自分で精神力が持つ限り無尽蔵に作れるならば技術力の差など、無意味です。

寧ろこちらの世界のほうが安くなるのが経済の常識です。

メイジが自由に作れるならば、供給量を管理するしか値を保つ方法がありません。

希少価値なんてスクウェアメイジが増える度に低下の一途です。

供給出来るのがスクウェアメイジだけで、如何にスクウェアメイジが少なくても6000年もあれば関係ありません。

では、何故こんなに高いのでしょうか？

セバスチャン曰く錬金した物は所詮『まがい物』で商人達も扱わないということです。

つまり、宝石としての価値があるのは天然石のみ。

その言葉を聞いた私は天啓を受けたような気分でした。

さようならファンタジー及びエセ化学式。  
こんにちは正しい化学式。

やはり世界はあるべき姿に保たれていたのです。  
錬金なんてそれをちょこつと弄ってズルしてるだけなのです。

真似してるだけなんですね！  
贋作なんですね！！

世界は甘くない！！

でも、私にとっては甘かったのです。

私は小細工や、ちょっとしたズルとかなら大好きです。

『只の石』 『Cu』 『Sn』 は理性が邪魔してどんなに頑張っても無理でしたが『只の石』 『エセCu』 『エセSn』 ならば出来るのです。

セバスチャンの驚く顔が目には浮かびます。

「イス・アース・デル、錬金！」

完璧です。

手応えありなのです。

フッフッフどうですか？

どうですか？セバスチャン。

「では……………」

セバスチャンが私の錬金したエセ青銅に触れます。

なんでも、土メイジは物の組成等が触るだけで解るらしいのです。

私が水や熱に敏感になったみたいなものですかね？

「……………おめでとございます。」

なんですか？

その苦虫を噛み潰した様な顔は。

悔しそつで気分が良いですが。

「残念そつに言わないで下さい!！」

ちよつと怒りました。

生徒が問題をクリアしたんですからもつと喜んで欲しいものです。

「そんなことはありません。心の底から嬉しく思っております。」

棒読み。

・・・そつちがその気なら。

「これからも頑張りますから、よろしくお願いします。」  
棒読み。

「もちろんですとも。このセバスチャン。お嬢様の為に私の全てを  
教えて差し上げます。」  
棒読み。

「あつ！忘れてました。ゴーレムの作り方教えてください！」

セバスチャンが前にゴーレム作ってましたが、それがとても魔法っ  
ぽかったのです。

「ゴーレムですか？まだ駄目です。」

「・・・何故？」

「お嬢様は『固定化』と『錬金』は出来る様になりましたが、それ  
だけではゴーレムは作れません。」

「・・・ゴーレムの元ですか？」

「その通りです。お嬢様にはまだ『土』そのものを操る魔法を教え  
ていませんから地面を青銅に変化させる事は出来ても、それだけで  
す。ゴーレムの形に持っていく事はおそらく出来ません。ゴーレム  
生成はドットメイジでも使える非常に有用な魔法ですが、いくつか  
の要素を充たして初めて使えるようになるのです。」

「じゃあ、その魔法を教えてください。」

「・・・教えてさしあげたいのですが、これは旦那様に相談する  
必要があります。」

「？」

「土を動かす感覚を得るには『アース・ハンド』という魔法を習得するのが最も近道なのですが・・・戦闘用の魔法なのです。『アース・ハンド』のみでは人を転ばせたりが出来るだけで所詮はイタズラの域を出ませんが・・・」

「そんなこと言ったら『発火』も『コンデンセイション』も『レビテーション』も使いようによつては危険ですよ？」

「それは・・・そうなのですが。」

「・・・仕方ないですね。今度お父様に聞いてみます。」

ふう。

紅茶が美味しい。

ようやく一通り使えるようになりましたね。

『風』はともかく、『土』は勉強してなかったら一生出来なかった気がします。

いえ、逆に勉強していたせいで、今まで出来なかったと言つべきでしょうか？

どっちでも良いですね。

『風』と一緒に将来的に『水』『火』程に成長する気はしませんから。

1人1系統しか上達出来ないとは、本当に不便ですね。

セバスチャンと同じレベルのゴーレムは出来ないでしょうね。

はあ、残念です。

やはり、ゴーレム作るよりも『地面』タイプのポケモン連れて来るのが手っ取り早いですかね。

でも・・・ゴーレム欲しいなあ・・・。

Side セバスチャン

「旦那様、失礼します。」

「どうした？セバスチャン。今はリアの時間ではなかったか？」

「その件ですが、見て頂きたい物があります。」

「これは？」

「お嬢様の作った青銅です。」

「おお！ついに『錬金』が出来るようになったか。『火』『水』程ではないがやはり優秀か。」

「優秀すぎです。・・・旦那様は『火』メイジですからお解りにならないでしょうがこの青銅は、私が錬金した物と同じレベルの青銅です。『土』のトライアングルである私が錬金した物と・・・お嬢様は『火』と『水』のドットです。」

「同じ？お前が作ったもの？」

「失礼ながら、旦那様の様に『錬金』がド下手くそな『火』のスク

ウェアと『錬金』の名手である『土』のラインの作った青銅が同じレベルなのであれば、構いません。しかし……。」

「……何が言いたい？」

「お嬢様は本当に『水』と『火』の『ドット』ですか？」

旦那様には申し訳ないのですが、今の私にはお嬢様が『火』『水』であることも『ドット』であることも信じることは出来ない。

「以前にも申し上げましたが、そもそも対極属性である『火』と『水』の系統のメイジなど聞いたことがありません。それならばまだ、潜在的には『土』属性だが今は『火』と『水』が得意なだけという方が納得がいきます。『風』系統はあの年にしては有り得ない位優秀では御座いますが『火』『水』そして今日の『錬金』程ではありません。そして、本当に『ドット』ですか？」

自系統以外の系統を単独で使えばそれは低レベルの魔法となりますが、もしお嬢様が現時点で既に『トライアングル』最低でも『ライン』なのであれば、あれ程のレベルなものも納得がいきます。

3歳に満たずに『トライアングル』というのでも私の想像の外ではありませんが……。

「……セバスチャン。」

「はい。」

「あの子はデュ・テリ工家にとって『特別』だ。我々には量りきれない。」

「『特別』……ですか？」

デュ・テリ工家にとって『特別』となると……。

「『幻獣』……。」

旦那様は領されました。

「これは、他言無用だ。良いな！」

「承知いたしました。執事の分を超えておりました、申し訳ありません。」

「良い。メイジとしてのあの娘は私にもどうなるか分からん。」

実際は世界の仕組みに従って組成をイメージしたからしつかりとした青銅を錬金出来ただけで、リリアからしてみればそんな事も知らないのに錬金出来る『土メイジ』が異常なのであるが、この二人がそれを知る日は来ないのだろう。きつと来ない。多分来ない。

この時、ここに魔法に関して『リリア過大評価の会』が誕生したのである。

S i d e o u t

## 20話 く友達く

ブリミル様ありがとうございます。

ブリミル教なんかどうでも良いですが、お父様達によればハルケギニアは全てブリミル教らしいので、一応言っとしてあげます。

今私の目の前にはカモが居るのです。

カモと言っても鳥じゃないですよ？

カモ、その名は『モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシー』。

私もこの世界に染まってきましたね。

だって、1度聞いただけでこんな長い名前を覚えられるのですから。

本当に会いたかったです。

モンモランシー。

私はここ最近催し物があれば飛んで行きモンモランシー伯爵を探していたのです。

幸先良く、モンモランシー伯爵は見付かったのです。

しかし、モンモランシー伯爵を見付けたとしてもお父様の口振りから私に協力してくれるとは思えません。

ですが、その娘ならば？

如何に貴族の子女といつても、たかが3歳の小娘です。私にとって、そんな純真無垢な小娘を誑かすなど赤子の手を捻るも同じなのです。

そして、終に見つけたのです。

モンモランシ伯爵家が息女。

モンモランシーを……………。

見付けたと言っても、実際の所ちよつと違います。

見付けたわけではありません。

どんなに探しても見付からなかったカモが我が家にやって来たのです。

飛んで火にいる夏の虫とは正にこの事。

やつと見付けたのですが、ちよつとガツクリ来ていたりもします。何故なら、私はパーティーあんまり好きじゃないのです……………。

好きじゃなくても、妹が産まれるとやたらめつたらお父様を連れ出すわけにもいきませんから今の内に見付けないとダメなのです。

だって退屈なのです。

私がパーティーでする事と言えば

? モンモランシーを探す

? モンモランシーが居なくても、モンモランシ伯爵が居れば 顔  
見知りになっておけば、いつかパーティーに娘を連れて来てくれる  
筈です 　ご機嫌取りに。

? 居なければ、エレオノールさん 　主役を食いかねないヴァリエ  
ール家は何でもかんでも出席しているわけではないので、なかなか  
会えません 　を探す。

の3つしかないのです。

退屈していた時に、たまにですが7・8歳くらいの小さな子に声を  
かけられたりもしましたが興味無いので名前も覚えていません。

その退屈な時間の大半が無駄だったのです。

結局、モンモランシ伯爵がモンモランシーを連れて来てくれること  
はありませんでしたから……。

本当はモンモランシ伯爵に会わなくても、時間が経てば私の目的は  
達成されていたのです……。  
まさか、屋敷に直接来るなんて……。

いえ、何度か会って好感度を上げたから連れて来てくれたんですね？

そうですね？

そうに違いありません。

「モンモランシー・マルガ「痛つ・・・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシです。」

・・・・・・・・。。

・・・・・・・・何ですか？

何なんですか？

この小動物は！？

自分の名前言うのに舌噛みましたよ？

今、涙目！

「・・・・・・・・。。。」

無言の私に怯えた風に伯爵の後ろに隠れました。

・・・・・・・・。。。

気付けば私はモンモランシーを抱き締めていました。

・・・・・・・・私は悪くありません。

「こんにちは、モンモランシー。私はリリアーヌ・デュ・テリエです。」

今は私の部屋でモンモランシーと二人つきりなのです。

「リリアーヌちゃんは「リリアって呼んでね。」「リリアちゃんは、なんで私を抱き締めるの？」

声は私の腕の中からですが、何の問題もありません。

肉体年齢3歳にして母性に目覚めてしまった気がします。

「モンモランシーが悪い子だからです。」

「私悪い子じゃないもん。」

「いいえ、貴女は悪い子です。」

「……………」

ヤバイ、涙目です。

「確かモンモランシーは私より後に産まれたんですね？」

「……………」

「じゃあ、お姉ちゃんって呼んでね？」

勿論ヤバイのは私の可愛いもの好きな性さがです。

「リリアちゃんはお姉ちゃんじゃないよ？」

「大丈夫です。私もヴァリエール家の長女さんをお姉さんって呼んでますから。何も変なことはありません。」

「……………」

「さあ。」

「変だ「変じゃないのです。」「……………」

「さあ、はやく。」

「お姉ちゃん……………」

「……………」

「お姉ちゃん、苦しい。」

「は！私は何を……………」

「モンモランシー、貴女って子は……………」

「モンモランシーやっぱりお姉ちゃんは禁止です。」

「……………どうして？」

「……………危険だからです。」

でも妹が産まれると私はお姉ちゃんなわけです。

こんなんで大丈夫なのでしょうか……………」

「じゃありリアちゃん？」

「リリアで。」

「じゃありリア。」

「おおっ？」

リリアって呼び捨てにするとなんかモンモランシーが明るくなりま  
したよ？

さっきまでの小動物つぷりは、何処へ？

猫かぶってたのでしょうか？

「モンモランシーはやっぱり悪い子ですね。」

「え……………どうして？」

「あれれ？」

「ビクッてしましたよ？」

「小動物に戻っちゃいましたよ？」

「モンモランシー、お友達になりましたよ。」

「良いの？」

「ええ。是非。」

「うん！」

さて本題に入りましょうか。

「ところで、モンモランシーはラグドリアン湖って知ってますか？」

「うん。水の精霊さんが居る所。」

「じゃあ、その水の精霊の会い方は知ってますか？」

「知らない！！」

モンモランシーが異常に首をブンブン振ります。

.....。

「本当に知らないんですか？」

「知らないもん！！」

「モンモランシー、貴族たる者嘘はいけませんよ？貴女もお父様に言われているでしょう？貴族たる者誇り高くあれと。嘘を付くことに誇りが持てますか？」

「でも.....お父様が秘密だよって.....。」

嘘を言うのと、秘密だと言うのは違いますよ？

嘘をつかなくても、秘密と初めから言えばよかったのに。

方法を秘密にする事と知らないと言い張る事の違いもわからない年ですからその辺がごちゃごちゃになってるんでしょうかね。

「モンモランシー、私達はお友達です。お友達であれば、秘密の1

つや2つ話すものですよ？そして、その秘密は絶対に他の人に話したりしてはいけないのです。」

実際の所、嘘を言うよりも盟約の交渉役としてペラペラその方法を口外する方がダメなんです。ちっちゃいモンモランシーにそんなこと解るわけありません。

貴族の誇りとかそんなもん私も知りません。

デュ・テリ工家にあるのはそんな解りもしない誇りなどではなく、統治者としての義務と責任なのです。

まあ、それがデュ・テリ工家の貴族としての誇りだとも言えますが。

「お友達だから……。」

「そうです。お友達なのです。」

「……秘密にしてくれる？」

「絶対に話したりしません。」

「リリアにも秘密があるの？」

「ええ、勿論です。」

「……私に話してくれる？」

おどおどしながら私に聞いてきます。

フッフッフ、後一押し。

「当たり前です。お友達でしょう？」

パアッとモンモランシーの顔が華やきました。

「じゃあ、話すね。」

陥落。

お友達ですもんね。

「あのね、教えてくれたの。モンモランシ家に流れる血が水の精霊さんとお話するのに必要だって。」

血が必要なのは予想通りです。

水の精霊ですからね。

それに、盟約つてくらいですから血を交わしているのは簡単に予想がつきます。

しかし、わからないのはここからです。

どうやって、接触するのか……。

「それで、どうするのですか？」

「それだけ。」

「それだけ？」

モンモランシ家と言ってもやはり3歳児に詳しく教えるわけがありません。

しかし、私が自分で探れない以上モンモランシーに頼るしかないのです。

お父様は侯爵ですから知っているかもしれないかもしれませんが、私がお父様にそんな事聞いたらどうなるかは火を見るより明らかです。

……確実に警戒されます。

正直、今のモンモランシーは全くあてにできていませんでしたから、

血が必要というのが確定しただけでも万々歳です。

初めから、モンモランシー経由で調べるつもりでしたし。

後は唆すだけです。

「うん。後は使い魔が精霊さんを連れて来てくれるんだって。」  
「使い魔が？」

連れて来てくれるとはどういう意味でしょうか？

・・・まさか、文字通りですか？  
だったら、接触するのは凄く簡単です。

「ありがとうございます。」  
「次はリリアの秘密を教えてください！」

ああ、そんなに無邪気に・・・。  
純真な子供を誑かすのは心が痛みます・・・。  
利用してごめんなさい。

「実は私、屋敷に居た幻獣達とお喋りが出来るのです。」  
「ホントに!？」  
「ええ。本当ですよ。これは、私達だけの秘密ですからね？」  
「うん!秘密。」

初めて肉体年齢が同じ知り合いが出来ました。

## 21話 く抱擁く

ダイブー！

「エレ姉さん！会いたかったのです。」

ムギユーってします。

お母様とは違つて弾力はありませんが、柔らかいのです。

不満があるとすれば、エレオノールさんは抱き返してくれません。ですが、もう抵抗はありません。

最初の頃は抵抗されて悲しかったのです。

本日はヴァリエール邸に遊びに来たのです。

「はいはい、いらつしやい。」

「相変わらずそっけないですね。そんなんじや何時まで経つてもルイズとやらの懐かれませんか？」

「懐くつて、貴女ねえ……。あの子はペットじゃないのよ？」

「細かい事はお気になさらず。それで、例のルイズに会わせて下さい。」

「あの子は居ないわよ。アンリエッタ姫の所に行つてるわ。」

「え！？姉さんが話すから楽しみにしていたんですが……。」

「ごめんなさいね。急な話だったから。」

「……………今日は雨でも降るのですか？」

「何を言つてるのかしら？」

「だって、姉さんが謝るなんて、あつっ！」

デコピンされました。

「何を言ってるのかしら？」

「いえ、良い傾向なのです。私とカトレアさんの教育の賜物ですか？さあ！さあ、スマイルを！！」

「貴女に教育された覚えはないのだけれど。」

「ツンケンしちゃダメですよ？」

「ツンケンなんてしてません。」

ふう。

ツンデレはこれだからいけません。

自分の魅力を最も引き出せる瞬間がデレだと言つ事を解ってないのです。

「良いですか？以前泊まった時にカトレアと一緒に言いましたが、姉さんにはっこり笑ってるのが一番魅力的なのですよ？」

「前にもいいます」「リリア、いらっしやい。」「……。」

「カトレアさんお久しぶりです。」

「あら、以前見たときより随分大きくなったんじゃない？」

「あまり大きくなったとは思いませんけど、ありがとうございます。」

「

「それで、姉さんは相変わらずですか？」

「そうなのよ。昨日だってルイズを泣かしちゃって。」

視線が集まります。

「……何よ？」

「姉さんはルイズを泣かしたいんですか？」

「そんなわけないじゃない。」

「じゃあ何でルイズが泣き出しちゃうんですか？」

「そんな事知るわけないじゃない。あの子が勝手に泣いてるだけよ。」

「

「一体どんな態度でルイズに接してるんです？」

「普通よ。」

「カトレアさん？」

「私には優しくしようと頑張ってるんだけど、上手くないか空回りして逆にキツく当たってる様に見えるわ。」

「……はあ。」

「だって……仕方ない……なくありません。」

全然改善されてないじゃないですか。

「ひとまず屋敷に入るわよ。」

「そうですね。」

「そう言えば、今日はあの子は連れて来てないの？」

「ちゃんと外に居ますよ。そろそろ入ってくると思います。」

「そ。」

「姉さんは優しいですね。」

「お姉さま、ありがとうございます。ルイズにもいつか解って貰えますわ。」

「カトレアのためとかじゃありません。」

私とカトレアさんは苦笑します。

私はエレオノールさんの部屋に通されました。

カトレアさんは自室に寄ってから来るそうです。

「そう言えば、姉さんは来年魔法学院に入るのですよね？『土』系統でしたっけ？」

「そうよ、『土』のライン。貴女もその内行くことになるんだから先に見てきてあげるわ。」

「私も早く行ってみたいのですが、年齢が・・・。」

「3歳じゃあね。どうして早く行きたいわけ？」

「どんな使い魔を召喚するのか知りたいのです。」

「良いじゃない。貴女には使い魔みたいなのがもう居るんだから。」

「それでも、です。」

「15歳になるのを楽しみにしときなさい。それに、貴女まだ魔法使えないでしょう。」

「そんなこと無いですよ。『錬金』使えるようになったんですからね。」

「はあ？」

何言ってるの？みたいな目で見られました。

「そんな目で見ないで下さい。本当ですよ。」

「貴女まだ3歳じゃない。出来るわけ無いでしょうが。」

「む、信じてませんね。」

「当たり前でしょう。」

「本当だったら、私のお願ひ聞いてもらいますからね。」

「良いわよ。」

何にしましょうか、お願い。

「カトレアが来たら見せて貰うわ。」

「後悔しますよ？」

「しないわ。」

後で考えましょう。

「あの子、入ってきたわね。」

窓の外を見ていたエレオノールさんが言いました。

私も外を見ると、コーティが私を探しています。

匂いで辿ろうとしてますが、カトレアさんが来るまで待つてください。

「ねえ、なんか増えてない？」

「増えましたよ。」

「デュ・テリエってそんなに幻獣余ってるの？」

「余ってるってことはありませんね。私の場合はちょっと特殊ですから。」

「特殊・・・ねえ、まあ良いわ。あの馬、綺麗ね。」

誰もが見惚れる蒼ポニータ君。

後で紹介しなさいけませんね。

コーティ達に忍び寄るピンク色の髪。

.....。

「.....あれってカトレアさんじゃないですか？」

「.....そうね。」

「カトレアさんを待ってたんですよね？」

「.....仕方無いわね。行きましょう。」

仕方ないと言っていますが、その顔は手の掛かる妹をを持った優し

い姉のものです。

「本当に姉さんは家族大好きなんですね。」

「何よ、唐突に。」

「なんでもありません。」

驚きです。

カトレアさんが年相応です。

はしゃいでます。

あんなにはしゃいで身体は大丈夫なのでしょうか？

『リリア、置いていくなんて酷い。』

コーティがいじけるのは何時もの事なので何時もの様にモフモフして対応します。

「この子は初めましてですね。ポニータの『イルシオン』です。綺麗ですから、意味は『幻想』です。イル、この二人はカトレアさんとエレオノールさんです。」

『よろしく頼む。』

「コーティの時は思わなかったけど、皆が欲しがるわけね。これだけ綺麗なら、観賞用としても欲しがる人間が居るでしょ。」

「普通は赤い炎なんですけどね。この子は特別で蒼い炎なんですよ。」

「炎って……。触っても大丈夫なわけ？」

「触るだけなら大丈夫ですよ。」

エレオノールさんが恐る恐る手を伸ばします。

「私以外が乗ったら焼かれますが。」

手を引つ込めました。

「姉さんって意外と怖がりですか？」

「怖くないわよ!!！」

ムキになるとバレバレなのです。

新しい発見ですね。

可愛すぎます。

カトレアさんは物怖じせず普通に抱き締めたりしています。さすが動物好き。

「貴女、竜で来たんでしよう?」

「ええ。大変だったんですからね、イルが落ちないように縛り付けるの。」

『私は自分で走って行くと言ったのだがな。』

「時間が掛かり過ぎますから。」

場所もわからないでしょうし。

竜を下から追いかければ良いのですが、ギャロップならともかくポニータの脚力では難しいのです。

「お茶を飲んだら『錬金』やってもらおうよ。」

「やりましょう。」

お願いは月1でデュ・テリエ訪問とかどうでしょうか？

「何の話かしら？」  
「リリアが『錬金』が出来るという話よ。」  
「姉さんが出来るわけが無いと言うので、出来たら私のお願いを1つ聞いて貰うのです。」  
「あら良かったわね、リリア。」  
「はい。」  
「なに？カトレアは出来ると思うわけ？」  
「出来ると思いますわ。」  
「撤回するなら今の内ですよ？特別にお願い2つで許してあげます。」  
「増えてるじゃないのよ。」

この紅茶美味しいですね。

「カトレアさんの何系統なのですか？」  
「私はきつと『土』ね。魔法の練習なんて殆どしないのだけれど。」  
「一応貴女にも聞いてあげるけど、リリアは何系統なのかしら？」  
「私ですか？私は・・・」

ここは何と言うべきでしょうか？

『火』？『水』？

お父様に言われて魔法の事隠してたのになんでバラしてるんですか  
私は！

ああ、魔法学院の話題を出すから・・・。

『錬金』出来るなんて言うんじゃないありませんでした。  
『火』か『水』にしとけば良かったのです。

この年で『錬金』が出来るのに、系統は『土』じゃないというのはいくらなんでも怪し過ぎます。

「『土』でしょ。『錬金』が出来るのなら、だけど。」

エレオノールさんが笑ってます。

私が『錬金』が出来ないのに出来ると言ってしまったって困っている。と思ってる感じの顔です。

全然違うのですが。

……もう『土』で良いです。

「そうです。『土』ですよ。」

クスクス笑ってますが、この笑みは小悪魔の笑みなのです。今笑ってるエレオノールさんも綺麗なのですが、私が求めているやつとはちよつと違うのです。

「貴女のお願い、2つにしておげましようか？」

「良いでしょう。」

なんかお願いが増えました。  
ラッキーです。

「じゃあ、やりますよ。」

「ええ、どうぞ。」

「頑張つてね、リリア。」

「この石を青銅に変えます。」

タネも仕掛けも無い、今そこに落ちていた石なのです。

「イル・アース・デル、錬金！」

はい、成功。

エレオノールさんお口が開いていますよ。

「……………騙したわね。」

言葉を絞り出すといった感じでした。

「そんなことしてません。私は初めから出来るって言いました。」

「そうですね、お姉さま。私も出来ると言いましたわ。」

「……………わかりました！で、お願いは？」

「1つ目は月1でデュ・テリ工家訪問でお願いします。もう1つは何にしましょう？増えちゃいましたからね。まだ考えてません。」

その後はまったりと時間を過ごしました。

お別れの時間なのです。

ああ、サヨナラなのです。

「また来ます。」

私は今カトリアさんに抱き締められています。

ああ、名残惜しいのです。

次はエレオノールさんです。  
ギューーっつてします。

「また来ると良いわ。」  
「勿論です。」

ギューーっつてします。  
抱き返してくれませんか。

.....

「あ。エレ姉さん。お願いの2つ目です。」  
「言つて御覧なさい。」  
「私が抱き付いたら、抱き締め返してください。」  
「はいはい、わかりました。」

抱き締められました。  
うん。  
これこそあるべき姿です。

遠慮がちですが、今はそれで勘弁してあげます。

「それでは、また会いましょう。」

## 22話 無駄

風になぐる〜

あははははは〜

風魔法って素晴らしい！！

今時速100Kmは出てる筈ですが振り落とされません。

前にこれ無しで乗ったらすぐに振り落とされましたからね。

『レビテーション』が無かったら恐ろしい事になってました。

ネットレスで魔法が使えなかったら確実に……。

山道なんて何のその！

ポニータを普通の馬と一緒にしてはいけません。

もう一人はギャロップに乗ってますから言わずもがな。

さて、私が今何処に向かっているかということ『竜の湖』です。  
ハクリューさんが住んでる所です。

昨日の夜、セリアにハクリューさんが呼んでると言われたので外出  
中です。

今回は無断外出じゃないですよ？  
セバスチャンと一緒にです。

お父様が勝手に『幻獣』だって喋っちゃったので、セバスチャンは私の教育係からお目付け役にレベルアップしました。

もうあれですね。  
完璧にマークされてますよ。

妹が産まれてからはマークがよりきつくなりましたよ。  
お父様に言いつけられてるのでしようが、モンモランシーが来た時  
。なんかは特に凄いです

それに家から水の精霊に関する本が無くなりました  
以前水の精霊に会わせてってお父様に頼んだのが間違っていました。

もう接触方法は分かったなのであの本は隠されても良かったのですけどね。

既に1回読んでますし。

モンモランシーは本当にべんり・・・良い娘なのです。  
頑張って接触方法を探ってくれました。

それにしても、あの娘私に懐き過ぎな気がします。  
他に友達居ないのでしょうか？

後は、モンモランシーをラグドリアン湖まで連れて行けば精霊に話が聞けます。

血だけ貰って一人で行っても良いのですが、気付いたときには一緒に行くって約束してました。

・・・モンモランシーが悪いのです。

あの娘、すぐに涙目になるのです。

睡眠薬を仕込んだお茶をセバスチャンに飲ませて即脱走。

2度目はありませんが、無断で外出しなきゃいけない機会なんてそうそうありませんからね

1回だけで充分です。

お母様仕込の睡眠薬ですから効き目はバツチりなのです。  
コーティの水に混ぜたらすぐ寝ちゃいましたから。

「セバスチャン、スピードを落としてください。」

「そろそろですか？」

「はい。」

イルは1度一緒に行ってますから指示しなくても良いので楽です。

「こんな所があつたのですか。」

相変わらず綺麗な湖です。

セバスチャンが驚くのも無理は無いです。

イルとギャロップ君は水を飲んでます。

絶対この水高く売れると思うのですが……。

『リリアさん、いらっしやい。お元気そうで何よりですわ。』

『お久しぶりです。ハクリューさんこそお元気そうで。』

『そちらの方は？』

『セバスチャン。私のお目付け役です。』

『お目付け役ですか？何かなさつたのですか？』

『気にしないで下さい。ちょっとレベルアップしただけですから。』

『レベルアップ……？』

『それで、今日はどうしたんですか？態々呼び出すとは。』

『はい。実は……。』

ハクリューさんがチラリとセバスチャンの方を見ています。

『他の人に聞かれたくない話ですか？』

『出来るのであれば、他の人に聞かれたくない話ですので。』

『分かりました。セバスチャン、二人にして下さい。』

『離れた所に居りますので話が終わりましたらお呼びください。』

セバスチャンはギャロップを連れて離れて行きます。

厄介払いみたいでちょっと気が引けますが、仕方ないので我慢して下さい。

『ラグドリアン湖には行かれましたか？』

「そろそろセバスチャンに睡眠薬仕込んで行くつもりですが？」

『水の精霊が私に接触して来ました。』

「……はい？」

ちよつと、待つて下さい。

水の精霊が……接触？

『昨日の夕方に雨が降りましてでしょう？そしたら、こちらにいらつしゃつて「汝等の主の屋敷に我が身の一部を置かせて貰う」と言われてしまいました。』

「……はい？」

『貴女のような人が現れたら毎回お屋敷の池に端末のようなものを置いてあるらしいですわ。私達はデュ・テリエの守護を仰せつかつてますから、端末を置くときは通告をする約束になっていたようすわね。』

「……」

それが！

精霊への接触方法が書いてない理由はそれですか！？

向こうから勝手に接触してくるって事ですか！！

『どうか耐えました？』

「いえ、今までの全てが無駄になって悲しくなってるだけですから気にしないで下さい。」

コーティ慰めて下さい。

モフモフさせて下さい。

『リリア。ラグドリアン湖まで行かなくてよくなったと思つて。』

『あれだけの労力を払つて収穫はモンモランシーのみとはな。』

・・・・・・・・・・イルが虐める・・・・。

「イルの馬鹿・・・・。」

イルは馬みたい、じゃなくて馬ですからここは鹿って言うべきですか？

・・・意味が分かりませんね。  
ちよつと絶望してるだけです。

パーティーに出たのも無駄。

モンモランシーを唆したのも無駄。

全部無駄。

無駄無駄無駄。

「それで、水の精霊はもう屋敷に居るのですか？」

『そこまではわかりませんが、近いうちに接触があると思いますわ。』

「分かりました。教えてくれてありがとうございます。知らなかったらラグドリアン湖まで行くところでした。」

『私がそちらにお知らせに行ければ良かったのですが目立ってしま  
いますからね。』

ハクリューさんは湖に帰っていきました。

私は未だに立ち直れませんけど。

「……はあ。」

『リリア帰ろう。ね?』

『こうなったらモンモランシー嬢を収穫して良かったと思えるようになるしかあるまい。』

「イル……収穫は酷いです。」

『む。そうだったな。』

「帰りましょう。」

トボトボとセバスチャンが居るであろう方に行きます。

「セバスチャン、話は終わりました。」

「……大丈夫ですか?」

「大丈夫じゃないです。大丈夫じゃないですけど、大丈夫と思うしありません。」

「でしたら、帰りましょう。」

「……はい。」

帰って来ました。

今日はお母様に癒してもらっただけありません。

「あらあら、どうしたの?リリア」

「ちよつと絶望してるだけです。」

お母様は流石です。

何も聞かずに抱き締めてくれます。

ああ、癒されます。

最近はレティシアにも癒されてますが、やっぱりお母様が一番です。このふくよかな胸はエレオノールさんには真似出来ません。

「レティはお昼寝中ですか？」

「ええ。」

.....

この暖かい沈黙が幸せです。

ポカポカして暖かいのです。

「おはよう。リリア。」

気が付くと真上にお母様の顔と綺麗な髪が。

ああ、やっぱりお母様の髪は綺麗ですね。

最近の私の髪は明るくなってきました。

光が当たったお母様の髪と普段の私の髪が同じ感じなのです。

私としては、お母様くらいの色が好きだったのですが。

「.....寝てましたか？」

「ええ。寝顔可愛かったわよ。」

「……お母様くらいの髪の色が良かったです。」

「そう？リリアの髪の方がキラキラしてとっても綺麗だと思っわよ。」

「ホントですか？」

「ええ、本当よ。」

「じゃあ……嬉しいです。」

レティシアはお父様譲りの金髪です。

ん？

「今、私呼ばれましたか？」

「私には聞こえなかったけど？」

『……ア、リリア！』

「外？」

……？

イルが珍しく騒いでます。

「イルに呼ばれたのでちょっと外に行ってきます。」

「いってらっしゃい。」

「どうしました？」

『セリアが呼んでいる。』

「セリアが？」

どうしたんでしょうか？

「セリア。どうしました？」

『おそらく水の精霊だと思うのですが……』

「早いですね。」

『どうしますか？』

「呼んできてくれますか？話があるので。」

『わかりましたわ。』

セリアが池の中に潜っていきました。

水の精霊ってどんなのですかね？

ゲームだと人型だったり妖精みただったりしますけど。

『お待たせしましたわ。』

セリアが池から顔を出すと、水中が輝き出しました。

すると、水が動き出しました。

ウネウネと、まるで意思を持つかのように。

しばらくすると、水面が持ち上がり一箇所に集まっていた。

………私？

水の塊が人型になったのだが、よく見ると私っぽい。

なんと言うか……微妙な気分ですね。

定まった形が無いのでしょうか？

「えーっと、こんにちは？」

「異界の友とその主。貴様と同じ存在に最後に出会ってから月が23、849回交差した。」

23、849回となると・・・23、849÷12＝1、987年と5ヶ月ですか。

というか、この人数えてるんですか？

・・・人じゃないですね。

「月が交差した回数って数えてるんですか？」

「我には時という概念は存在しない。今も未来も過去も我にとっては同じだ。故に貴様らに解るように表現している。」

「はあ・・・。色々と聞きたいことがあるのですが。」

「我も言わねばならぬ訳がある。故に話し、答えよう。」

## 23話 く水の精霊く

「それでは、一番聞きたいことから。この世界に居ない子をこっちに呼んでも大丈夫ですか？」

「問題無い。我等と汝の世界の神々との契約では、汝の祖先が得た地一帯のみであれば好きにして良いというものだ。汝がこの地をどうしようと、この世界全体へ影響を齎さぬ限り我等は干渉せぬ。」

「世界・・・ですか。」

「そうだ。如何に異界の友であろうとも、我等にとって異物であることに変わりはない。だからこそ、この地以外へその域を広げる事は許されない。」

「要するに生態系を壊すなっつて事ですか？」

「その通りだ。この世界にはこの世界の理が存在する。異界のものがこの世界を犯すことはその理に反する。」

もっともな事ですな。

如何にポケモンが世界に近い存在でもそれはあっちの世界の話ですからね。

それに、ポケモンは増やそうと思えば普通の動物並みのスピードで増えますし。

領外に出しちゃったら、結果は見るまでもありませんね。

それでも、生態系を壊す様な事はしなないと思いますが。

しかし・・・世界全体ですか、スケールが大きくなりました。人間同士の争いとかは、どうでも良いってことでしょうかね。

「次です、私と同じ存在がパートナーにしていた子達がこっちに居

ないんですが、どうしてです？」

「汝が付いている「白珠」を使い汝と盟約を結んだ者達は、汝の死と共にあちらの世界に送り返される。こちらに残っているのは、汝の祖先がこちらに残すためにあえて盟約を結ばなかった者の子らだ。」

「盟約というのは？」

「誓えば良い。共にある、と。さすれば、あちらへと帰ることになる。」

ほう。

となると、自由に呼んじやって大丈夫ですね。

「それじゃ、次です。何故態々屋敷の池まで？」

「契約だ。汝等を見守る、と。」

それはそれは。

ご苦労様です。

「じゃ、次です。水石つてというのが欲しいのですが、何処に行ったら手に入るか分かりますか？水の精霊なら知ってるかと思ったのですが。」

「知っている。単なる者共は「水の精霊の涙」とも呼ぶ、我の一部だ。」

「ホントですか！？良かったら私にくれませんか？」

「良からう。これで、汝等への契約は残り2つだ。」

「契約？」

「そうだ。汝の祖先等は私の願いを叶えた。故に我は汝等への願いをあと2つ叶えなくてはならない。」

「……それっていつの契約ですか？」

「汝の前と、その前の存在との契約だ。」

「そんな昔の約束を・・・律儀ですね。」

「我にとってそれが「いつ」であるかに意味は無い。」

ああ、そうでしたね。

今も昔も未来も一緒でしたっけ？

水の精霊から触手みたいなのが伸びてきて、手を出すとプツツリと先が切れました。

・・・多いですね、これ。

弾力があるみたいで、プルンプルンしてます。

筒状になっていて、1リットルくらいあるのに手から零れ落ちません。

あ、少し零れました。

ああ、勿体無い・・・。

「また必要になれば言うが良い。」

「またくれるのですか？」

「汝との契約は我の一部を汝に与えることだ。」

・・・分量指定しなくて良かった。

「ありがとうございます。」

「聞きたいことはそれで終わりか？」

「今のところはこれで終わりです。」

「それでは、他に我が伝えねばならぬことを伝えよう。」

お？

何かあるんですか？

「「白珠」だが、汝と、汝と盟約を結んだ者との空間を繋ぎ、盟約の相手を汝の下に呼び出すことが出来る。」

「ホントですか!？」

素晴らしい!!

素晴らしいですよ、それは!!

モンスターボールが要りません。

移動するときとかゾロゾロ連れて歩くのは流石に……。

それに、連れ歩くのが難しい子も居ますからね。

「もう1つ。汝の死後、魂をこちらに残すか、あちらに帰るか死ぬまでに決めておくがいい。」

……死ぬまで、ですか。  
気が長い……。

「わかりました。話はこれで終わりですか？」

「そうだ。」

「教えてくれてありがとうございます。」

「契約の内であるから、礼を言う必要は無い。」

「それでも、です。」

「そうか。これで最後だ、我と盟約を結んでもらう。」

「良いですけど、どうやるんですか？」

「汝の身体を流れる液体を貰う。」

「……手が塞がってるので血は無理ですが？」

「血液である必要は無い。汝の身体に流れるものであれば。」

再び触手みたいなのが伸びて来たので舌を出すと、舌先が水に包まれました。

「これで終わりだ。また会おう。」

「はい。また会いましょう。」

私の形が崩れ波紋のみが残りました。

水の精霊って良い人じゃないですか。

お父様、嘔吐きましたね。

あの本も嘘ばかりです。

何が心を奪われるですか。

すごく良い人です。

さて、水石でお母様のイーブイが進化するかどうか実験です。

さつき、入り口に居たのでお母様の所まで連れて行きましょう。

「コーティ頑張つてこのドアを開けてください。私の両手は水石で塞がってます。」

『任せて!』

ぴよんぴよん跳んでます。

コーティは必死なのですが、この光景はとても頬笑ましいのです。

さあ、頑張つて!

コーティの頑張りもあつてドアが開きました。

ご苦労様です。

モフモフしてあげたいですが私の掌は非常に危ういバランスなのです。

後回しなのです。

「お母様。お母様のイーブイを成長させても良いですか?」

「あら、この子成長出来るの?」

「多分出来る筈です。」

「それじゃあ、お願いしようかしら。」

「さて、イーブイちゃん。進化しますか?」

『出来るのですか?』

「多分。」

『それじゃあ、お願いします。』

「リリア、それどうしたの?」

「さつき貰いました。」

「誰から貰ったの？」  
「水の精霊ですが？」

……。

珍しいのです。

お母様がちょっと驚いています。

「会えたのかしら？」

「はい。やっと会えました。」

「良かったわね。」

会いたがっていたのはバレバレですね。

まあ、お父様にバレてるくらいですから、お母様にバレてない訳が無いのです。

「それじゃあ、行きますよ。」

どのくらいの量が必要なんでしょうか？

水の石くらいの大きさを良いのでしょうか……。

……全部あげちゃいましょう。

水石を近づけると、イーブイの身体が発光し出しました。

どうやら、当たりみたいですネ。

光りが収まるとそこには、人魚を思わせる青い先程までイーブイだったモノが居ました。

「お母様、シャワーズです。この子は水の眷属なのです。」  
「リリアはこの子が大きくなれるって知ってたの？」  
「はい、白いやつに書いてありましたから。」  
「この子ってひんやりして気持ち良いわ。」  
「お母様、私も抱きたいです。」  
「はい。」

お母様がシャワーズをヒョイツと受け取って抱き締めました。  
手に水石をもったままなので、ちょっと変な体勢ですけど気にし  
ません。  
ギューっとすると気持ち良いです。

ひんやり〜なのです。

『リリア様ちよつと痛いです。』  
「あ、ごめんなさい。」

強く抱き締めすぎましたね。

いったん落ち着いた私は掌にある水石が非常に少なくなっている事  
に気付きました。

目算だと・・・200mmくらいしか残っていません。

・・・減りすぎでしょう。

水の石って凄いパワーを秘めていたんですね。

あの小さな石でイーブイを進化させるんですから。

「お母様は水の精霊に会った事ありますか？」

「私は無いのよ。リリアに先を越されちゃったわね。どうだった？」

「お父様も、本も嘔吐きでした。すごく良い人だったのです。」

「そうなの？私もずっと精霊に会うのは危険だって聞いてたのだけど、リリアがそう言うなら良い人なのね。」

「はい。今度お母様にも紹介します。」

「楽しみにしてるわ。」

お母様の包容力は凄いのです。

微笑みと共に、なんとというか・・・オーラが出てるのです。

そのオーラに包まれると幸せになれます。

いつか私も習得したいお母様スキルの1つです。

『リリア、火石も探してね？』

「コーティが成長したらウインディになりましょう。」

『きつとですよ？』

「ええ。約束です。」

「リリア！...」

「……誰ですか？」

「今寝たばかりなのですが……。」

「……お父様？」

「リアア！」

「……何ですか？」

「いくらお父様でもちよつと不機嫌になるのは仕方がない事だと思います。」

「水の精霊に会ったそうだな？」

「あ、言うの忘れてました。水の精霊って良い人じゃないですか。色々教えてくれましたし、精霊の涙くれましたよ。」

「あれ程危険だと言ったではないか。」

「良い人でしたよ？」

「しかしだな……。」

「お父様は会った事あるんですか？」

「……無いな。」

「人の話に惑わされちゃいけませんよ？実際に会った私が言うんですから、良い人です。」

「良い人……なのかいや、しかし実際に心を奪われたという話も聞くぞ？」

「人違いとかじゃないですか？」

「……どうなんだろうか。」

「私は人違いだと確信してるのです。」

「なんとなくですが、あの精霊は態々そんな事しないと思うのです。」

きっとラグドリアン湖で水浴びしてても全く気にしないでしょう。

「……リリア、1つ聞きたいのだが。」

「何ですか？」

「水の精霊に何処で会ったのだ？」

「あれ？お母様に聞いてないんですか？」

「いや、エステルからは会ったとしか聞いて無いぞ。」

そういえば、お母様に何処で会ったか言ったでしようか？

……言ってますね。

「池で会いました。」

「池？何処のだ？水の精霊がラグドリアン湖以外に住んでいるとは聞いたことが無いのだが。」

「屋敷の池です。」

「……どこに驚けば良い？」

「屋敷の……って所ですか？」

「……そうなのだろうな。」

何を言ってるのですか、お父様は。

それ以外の何処に驚くのでしょうか。

「『幻獣』が現れると毎回屋敷の池に住むらしいですよ。」

「……何処に驚けば良い？」

「屋敷のって所ですね。」

「……もう良い。」

「どうやって『幻獣』が現れたって察知するんでしょうか。」

「私達には分からない秘術があるのではないか？」

「今度聞いてみます。」

「そうしなさい。」

「それじゃあお父様、お休みなさい。」

「お休み、リリア。」

私は眠りに就きました。

S i d e    デュ・テリ工侯爵

……水の精霊は実は良い人なのか？

いや、モンモランシ伯爵が嘘を言うとも思えぬし。

それ以前に私も水の精霊に心を奪われた者を実際に見た事があるではないか。

……まさか、本当に人違いか？

だが、リリアが貰ったという精霊の涙は本物だとエステルも言っていた。

水の精霊というのは複数居るのか？

……分からぬ。

当然水の精霊は良い人などでは無い。

勿論、危害を加えない者に対していきなり攻撃を加えるなどということは無いです。

しかし、

もし、愛する娘の「水の精霊は良い人」発言が無ければ……。

もし、侯爵がもう少し冷静であったのならば……。

もし、精霊の涙を愛娘が貰っていなければ……。

彼が水の精霊は良い人なのでは？という、有り得ない考えに至ることなど無かったのだが、

現状まるで意味の無い仮定である。

#### Side out

後日、リリアは水の精霊の涙の相場を知って愕然とするのだが今は関係ない話である。

## 24話 く願望く

デュ・テリエ領はトリスティン・・・否、ハルケギニアの中でも有数の地である。

その地だけでなく、デュ・テリエという家名そのものが6000年の歴史を誇る強大な力を持つ貴族である。

その当人達はそれを笠に着ることも無く、当人達にとってはのんびりと穏やかに過ごしている。

しかし外から彼らを見た時、当人達とは正反対にその者達は心中穏やかではいられないだろう。

デュ・テリエ領はトリスティン貴族にとって色々な意味で厄介な場所である。

『富』『名声』『権力』『軍事力』ありとあらゆる意味でトリスティンの一般的な貴族がその地を欲している。

全てにおいて、自分のそれよりも遙かに上をいくのだから……

。。

その中で、彼らが最も欲しがるのは何であろうか？

『富』か？

当然それも欲しい。

下級、上級を問わず彼らの中で要らないと言つ者は皆無であろう。

『名声』か？

当然それも欲している。

彼らにとって、名声とは自らの力を誇示するためにはどんなにあつても足りないものである。

『権力』か？

当然それもだ。

彼らにとって権力とはこの世界で上位者として存在する為に決して失つてはならない物である。

『軍事力』か？

当然それもだ。

貴族にとって軍事力とは、自己のメイジとしてクラスでもあり自らの才能を喧伝するためのものである。また自らの強大さを示し、他を蹂躪する為に必要なものである。

では、どれが一番欲しいのか？

正解は、その「どれでも無い」だ。

そのどれかが、必要ないと言う訳では勿論無い。

彼ら 特にある程度以上の規模を持ち、無駄に高いプライドを持つ者  
にどれか1つを選べというのは間違いなのである。

即ち、正解は「全て欲しい」……である。

しかし、全てにおいて自分達を上回る彼らを追い落とし、それに成り代わる事は困難を極める。  
不可能と言っても良いだろう。

では、どうするのか？

簡単な事だ。

自分がそうなれば良い。

。 どうすれば彼らの様になれるかは、わかっているのだから……。

朝日が昇りしばらくすると私達は侵入者に気付いた。

空から警戒をしていたスバメ達からの報告だ。

侵入者は30人。その内杖を持ったメイジが6人。

報告では自分達が確認するまでもなく、ただ訪れただけでは無いと  
の事だ。

何より、領を跨ぐ時に警戒し過ぎていることから我々の襲撃を予期  
しなければならぬ様な事をしに来たということである。

相手の目的は何なのか定かではないが、領と領民を守るのが我々の  
使命だ。

しかも、現在は2000年振りに主人が現れたのだ。  
無様な姿は見せられない。

目標を視認。

その纏う魔力からメイジを7人に修正。

一人は剣術を使うメイジであると予測される。

クラスは、おそらくライン4、ドット3。

「それにしても、ボロイ仕事っすね。」

「全くだ。小型の幻獣一匹毎に300エキューとは。」

「初め聞いた時は、竜種でも捕まえて欲しいのかと思って断るつもりだったが、ただの犬共だとはな。」

会話から目標は領ではなく我々の捕獲だと断定。

いつも通り侵入者に対し奇襲を掛ける。

レントラーとライボルトが一瞬のタメの後

<<放電!!>>

強力な電撃が激しい光を迸らせながら襲い掛かる。

メイジが魔法で迎撃しようとするが、詠唱が完成するよりもこちらの攻撃の方が圧倒的に速い。

不意を突かれたにも関わらず、反応することが出来た。

実戦慣れしている。

「クソが！散れ！！」

言葉はきたないが、指示からの行動が早い。すぐさま散って行くこととする。

それもただ闇雲に散っているだけではなく、こちらへの反撃を考えた動き方だ。

避けようとするも、効果範囲から逃げ遅れた3人と迎撃しようとしたラインメイジ1人が地に倒れ伏した。

しかし、元から効果範囲外に居たラインメイジが呪文を完成させていた。

「ファイヤーボール！！」

小型の火球を作り出して私に向かって放ってきた。私が避けないのを見て口元に笑みを浮かべている。

炎が襲い掛かが、私にはそんなもの無意味だ。

「馬鹿野郎！殺しちまったら意味無いじゃねえか！！」

「大丈夫ですよ、頭。こっただけ居りゃ、報酬には困りません。」

「それでもだ！！」

寧ろ、私からすればありがたい。

炎の中から、何事も無く出てきた私を見て驚愕している。

「馬鹿な!!」

『「貰い火」。貴様らには聞こえぬだろうから、逆効果だと身体に教えてやる。』

ファイヤーボールを放ったラインメイジに向かって、それ以上の炎を浴びせる。

「なんだこいつら!ただの幻獣じゃねえぞ!」

メイジの近くに居た者も巻き添えを喰らい、6人が炎に焼かれた。

離れた所で剣術を使うメイジと戦っているライボルトが<雷の牙>で剣士の腕に噛み付いた。これで、メイジは残り4人。

小型のゴーレムが8体。

そこそこの手練のようだ。

生成から行動開始までが早い。

ゴーレム自体の動きは俊敏とまではいかないものの、決して遅くは無い。

我らにとって危険なのは『土』と『風』だ。

その2系統は働かせてはならない。

<電光石火！>

スバメが上空から、ゴーレムを作り出したメイジを昏倒させた。  
残り3人。

剣士の腕に噛み付いていたライボルトが、奴の腕から離れた瞬間を  
狙い斬りかかっていた敵に向かって<火炎車>で突っ込む。

相手は当然、ぶっ飛んでグツタリした。

「エアハンマー！」

空気の塊がレントラーに直撃するが、その程度では私達にダメージ  
を与える事は出来ない。

使うならばせめてエア・カッターにすべきだ。

逆に、<スパーク！>電撃の籠った打撃で相手をぶちのめした。

これでメイジは残り2人。

ラクライと対峙しているメイジは、その小ささから油断しているの  
だろう。暢気に呪文を詠唱している。

しかし、それは大きな間違いだ。

<体当たり！>

大して身体を鍛えても居ない貧弱なドットメイジなど、体当たりで

充分倒せる、

これでメイジは頭と呼ばれていた奴一人だけだ。

メイジさえ居なければ、奴らを片付ける事など朝飯前だ。

「あのくそ貴族、ふざけやがって！！何がただの幻獣を捕獲して欲しいだ！！ブレスに電撃・・・先住魔法を使ってくるなんて聞いてねえぞ！」

喋ってる暇があったら呪文の一つでも唱えてた方が懸命なのだがな。

『さらばだ、侵入者よ。＜火炎放射＞』

「グウア・・・・・・・・・・。」

炎に包まれたが、手加減しているので生きているだろう。

『残りはいただけの人間だけだ。接近して攻撃するまでもない。怪我をしてもツマランからな。』

程なくして、意識のある侵入者は領外に逃走。

結局今回の侵入者は、何処ぞの貴族か商人に雇われていただけの傭兵か盗賊のようだった。

彼らはここの領民と違い、我々の事を平民にでも扱える都合の良い幻獣とも思っている節がある。

無礼な事にな。

我々はラインメイジ程度なら単体で悠々撃破出来るだけの力があるのだから欲しがるとも無理は無いが……。

侵入者達のリーダーと思われる男以外は領外にポイッチョして私達はいつもの様に昼寝したり、街に戻ったりした。

私はというと……

「ああ、モフモフ」

主人に抱きしめられて幸せでした。

『私のリリアを取るな——！！！！』

主人直属の小娘が何か言っていたが私の知った事ではない。

「旦那様。ガーディが侵入者を捕獲して来ましたが、如何なさいますか？」

「目が覚めたら誰に雇われたかを聞き出せ。どうせ狙いは幻獣達だろうからな。」

「わかりました。」

「愚か者共め、彼らを強引に捕まえれば、言う事を聞かせられるとも思っているだろうが。」

「この地を狙うものは多いですからな。今回のように直接やって来

るのは大方、幻獣達を使えば自分達がデュ・テリエの様になれると信じて疑わない輩でしょうが。」

「前はゲルマニアの商人だったか？」

「はい。領に出入りする商人達には彼らと取引をしないように言っておきましたが、能力があれば別ルートで商いを続けられるでしょう。」

「今回の黒幕は何処の誰であろうな？」

「旦那様。今回は少々厄介な事になりました。」

「言わんで良い。」

「・・・それでは、独り言を。」

「待て！」

「なんとということでしょう、隣のドレー子爵が黒幕だったとは。」「棒読み」

「・・・何故だ？ドレー子爵は家の隣だから他と比べて恩恵を受けている筈だぞ。」

「相変わらずと言いますか、デュ・テリエの皆様は自分達がどの様に見られているかを自覚なされていませんね。良いですか？隣だからこそ、です。あちらは子爵ということもあり、侯爵家であるデュ・テリエ家とは違つと彼も分かつていたでしょう。しかし、隣であるからこそ自分の領地とデュ・テリエ領を比較してしまうのです。それに、隣であるからこそ幻獣達の活躍をよく理解しております。実際、旦那様があそこを統治なさればすぐに豊かになるでしょう。幻

獣達が居ればデュ・テリエの様ななれると考へても不思議ではあり  
ません。」

「……………」

「加えて、ドレー子爵は度重なる贅沢で財政状況が思わしく無いと  
聞いております。もし、幻獣達を捕らえて売り払えば直ぐに財政も  
楽になりましょう。」

「……………王宮へ報告せねばならん、可哀想だが。」

「何が可哀想ですか。私は彼が幻獣を手に入れたとしても、ドレー  
領がデュ・テリエの様になれるとは露程も思いません。売り払うな  
どもつての他です。彼らは物ではないのですから。仮に、彼がデュ・  
テリエの人間として産まれていたとしても旦那様の様には育たなか  
ったでしょう。」

「そうだな……………」

「未だに、幻獣さえ居れば全てが上手くいくと考へている馬鹿物は  
多く居る事をお忘れなく。今はお嬢様が居られますから、余計に注  
意せねばなりません。」

「分かっている。」

「財政難と重なって賠償金が払えなかつた場合、別の者が隣に来る  
事も考えられますから気をつけて下さい。」

## 25話　く拡大く

初めての領外探索なのです。

初めてと言っても竜に乗ってなら何度かあります。

しかし、今回は初めての陸路での領外へ・・・です。

護衛を連れてゾロゾロと移動中なのです。

事の発端は、お隣さんが領地を差し押さえられてしまったことです。

半年前、何故か突然お隣のドレー子爵が王政府から領地の没収処分を受けたのです。

領地没収とは穏やかではありません。

王宮が直接1貴族の財産を一方的に差し押さえるということは、領地を治める貴族からしてみれば絶対に認める事が出来ない事の一つなのです。

もし、これを認めてしまつと明日は我が身・・・反発は必至です。

しかし、今回はそれが無いらしいのです。

つまり、領地を没収されるということは外から見て仕方無いと思える理由があるということです。

私の勉強した、どーでも良いハルケギニア史によると、ハルケギニアの貴族が誰でも納得する理由は王室に弓引く事でしょう。

しかし、王室に弓引いたとなれば、処刑です。

領地没収で済むわけがありません。

私は勝手に、ドレー子爵は王宮で働く高官、若しくは何処かの大貴族と大喧嘩をしたのだと予想してるのですが定かではありません。

大貴族というと一番最初に思いつくのはヴァリエール家ですが、お父様と公爵さんは仲が良いのでお隣さんと喧嘩をしたとなれば、お父様が仲裁をする筈です。

・・・誰と喧嘩をしたのでしょうか？

私もいつか魑魅魍魎が蔓延る社交界デビューの日　モンモランシ伯爵探しは別です　が来ますから、ドレー子爵の喧嘩相手とは関わりたくありません。

関わらないためにもお父様には今回の喧嘩相手を教えて貰わねばなりません。

通常なら王宮に領地を没収された場合、王宮が管理をするか新たに領主を任命するかのどちらかです。

どちらの場合でも王宮から一時的に領地を預かる代理の領主が来きますが、詳細が決まればすぐに王宮に帰っていきます。

しかし、今回の臨時領主……王宮に帰りません。

正確には、帰れない……らしいのです。

S i d e    デュ・テリエ侯爵

ドレー子爵は嬉しくない事に、予想通り賠償金を払う事ができなかった。

彼のこれからを思うと哀れだとは思いますが、自分の生活水準を落とすて頑張つて貰いたい。生活水準を落とすのは、贅沢してきた者は辛いと聞くが……。

辛いだろつが彼は決して手を出してはならない幻獣に手を出したのだから、きつちりその処分を受けて貰いたい。

ドレー子爵が領地没収されたまでは良いのだ。

しかし、その後が困った事になった。

……新しい領主が決まらないのだ。

通常、空き領が出来ると領地を持たない貴族が我先にとその地を欲する。

王宮はその者、若しくは功績のある者を選んで新領主に任じれば良いだけなのだ。

ドレー子爵領は人口8000人の小さな領ではあるが、子爵領であることを考えると決して小さくはない。

そのため、新領主任命に時間が掛かるとは思えなかった……最初は、だが。

最初は通常通りの展開になった。

功績のある者、領地を欲する者からの選抜作業に入っていると隣の領主である私は進捗状況を聞いていた。

しかし、いざ誰を任命するか段階で問題が発生した。

その原因は、デュ・テリエ領だったりする……。

S i d e o u t

ドレー子爵が領地没収を受けた経緯から、同じ事を繰り返さないために王宮は新領主の条件の1つにデュ・テリエ家へ喧嘩を仕掛けない者であることを挙げた。

だが、どうやってそれを判別するのか？

大貴族の隣の領地を欲する者は大抵若い貴族だ。

隣の領に、こっそり侵入して幻獣を捕獲しに行かないと言えるだろうか？

功績のある者たちは大抵それなりの年齢であり、それなりに無駄に高いプライドを持っている。

隣がとても豊かなのに、自分は貧しい土地を統治する。

そんな土地を欲しがらるだろうか？

国境付近であるドレー領を直轄領にするには兵を置かねばならない

ため、財政的に遠慮したい。

宮中の者は案を出しては却下し、統治を要請すれば辞退され、結果として……面倒になった。

自分が推す者が欲に駆られれば自分の失点に……。  
かと言って、上手く統治したとしても自分のプラスになるわけではないのだ。

誰でも良いからさっさと決めてくれという気持ちになっても仕方ないだろう。

「お父様、結局お隣さんは誰になるんですか？」

「誰にもならない事になった。」

「どゆことですか？」

「ドレー領は、デュ・テリエ領に吸収されるそうだ……。30000エキユーでな。」

「金取るんですか？でも、良かったじゃないですか。領地が増えて。」

「領地と一緒に問題も増えるのだがな。」

「どうしてですか？」

「ドレー領とうちでは所得が違うからな。その差を埋めねばならぬ。しかし、農作物は既に充分供給されているから、何か他の事をやら

せなければならぬのだが、今はそれが見付かっておらん。何より普通に領地が増えるだけでは、幻獣達がデュ・テリエより外に出ようとならないから、警備を無駄に増やさねばならん。リリアが居なければ、いつもの様に辞退しているところだ。」

「・・・『幻獣』が居れば、大丈夫ってことですか。自分の事ながら本当に何でもありませんね。」

「ま、そういう事だな。」

.....

これは、また.....

「うちって本当に豊かなんですね.....」

「大変だぞ。この差を埋めるのは。」

「旦那様、私共は村長と話をしますから少しお待ちください。」

「わかった、行ってこい。」

ポールさん達が村長さんの家へ向かいました。

「どうします？この村。」

「リリアはどうすれば良いと思う？」

「農業はもう充分なら、放牧くらいしかする事が無いと思いますが。」

「それしか無いのだろうが放牧をするにしても、所得の差は埋まらないだろうな.....どうしたものか。」

「ワインでも造ってみますか？私は飲めませんが。」

「それもなあ……。」

結局お父様も何をするか決めかねているようでした。

別の場所で、村長さん達は税率やらなんやらを聞いて大喜びしていたのだが、悩みの解決には何の足しにもならないことである。

「旦那様。幻獣がドレー領に出たがらないのですが、何かご存知ですか？」

「リリアが居るから大丈夫な筈なのだが……。」

「私が行って来ましょうか？」

「頼む。セバスチャン、リリアに付いていってくれ。」

「承知しました。」

「イルは何故かわかりますか？」

『我等が領外に出たがらないわけか？』

「そです。お父様が言うにはもうここはデュ・テリエらしいのですが。」

『簡単だ。リリアが許可しておらぬからだろう。』

「それだけ？」

『それしか理由があるまい？』

「じゃあ、私がこの領まで出て良いよって言ったら良いだけ？」

『おそろくな。』

その後、無事ポケモン達の住処が広がりました。

## 26話 く着痩せく

「初めまして、リリアー又様。私はノエルと申します。」

「初めまして、ノエルさん。ノエルさんって何歳ですか？」

「私は今年で14になりました。」

・・・14ですか。

このスタイルで・・・。

エレオノールさんと会わしてはダメですね。

エレオノールさんは自分の胸に未だふくらむ兆しが無いことを気にしてるのです。

私は、気にしません。

エレオノールさんには、エレオノールさんの抱き心地というものがあるのです！！

ただ・・・それを気にしている時のエレオノールさんの不安気な顔はとても可愛いとだけ言っておきます。

ノエルさんは綺麗な金髪で、見事なストレートです。

つり目で、意思の強さを表していると思える綺麗な碧眼です。

そして、10人中10人が美少女と答える、正に美少女！という感じですよ。

貴族さんですか？と言いたくなるくらい肌が綺麗です。  
これで商人の娘と言うのですから、やはり商人は色んな所にお金を  
掛けてますね。

因みに、ノエルさんのお父さんはうちの服をゲルマニアに輸出する  
時にお世話になった商人です。

「ノエルさんは、商人になるのですか？」

「いえ、父は私に継がせる気は無いようですから。それに、私も自  
分の身を守るためにも商人になる気はありません。」

「身を守る、ですか？」

「はい。父はトリステインで商いをしていますからね、父に迷惑を  
かけるわけにもいきません。トリステインは危ない国ですから。」

「やはり、トリステインは危ないんですか？」

「ええ。私にとっては非常に危険です。」

「……私はどうでしょう？」

「将来的にはリリアーヌ様にも危険が及ぶかもしれませんが、今は  
まだ大丈夫だと思いますよ。」

「デュ・テリエは安全ですか？」

「父は安全だと言っておりますし、私もそう思いますわ。」

「……やっぱり領外は危険。」

「どうかなさいましたか？」

「いえ、ちよつと考え事を……。」

「ベルンハルト、今日はどうしたのだ？」

「お時間を頂きありがとうございます侯爵様。」

「良い。それで、何用だ？」

「私共ベルツ商会は、主にデュ・テリ工家と取引をさせて頂いておりますが、他のトリステイン貴族とも取引をさせて頂いております。」

「ゲルマニアに輸出する時は骨を折ってもらったからな、感謝している。」

「デュ・テリ工家と主に取引をしていると言っても、他のトリステイン貴族との取引を切るわけにもいきません。」

「それで？」

「今回、伺わせて頂いたのは娘のノエルのことなのです。ノエルは親の鼻肩目を抜きにしても非常に美しく育ちました。」

「……っち、そういうことか、クソ共が。迷惑をかけるな。」

「いえ、デュ・テリ工家の皆様には本当によくして頂いておりますので、侯爵様が謝られる必要は御座いません。」

「それで、ノエルには他に良い相手はおらんのか？」

「残念ながら、娘は結婚する気は皆無なようでした……。」

「このままではいつか、取引を盾に取られて何処ぞの馬鹿貴族に娘を差し出さなければならなくなる……か。」

「はい。私一人でしたら、取引を全て断り、娘を連れてゲルマニアにでも行くのですが……。」

「それで？」

「娘をこちらで雇って頂けないでしょうか？」

通常、平民の所得と言うのは低い。

勿論、デュ・テリ工領の様に農業をしているのに決して低くは無いお金を稼ぐという例外もある。

それ以外にも例外は存在する。

ゲルマニアの様に商人が大金を稼ぐというのはよく聞く話である。

しかし、トリステイン国内で、となると……ほぼ皆無だ。

では、どうすればトリステインの一般的な平民は平均以上にお金を稼げるのだろうか？

その内の1つの例であり、最もポピュラーなのは貴族の屋敷への奉公である……。

この屋敷への奉公、圧倒的に若く綺麗な女性が多いのだが、その理由は推して知るべし……である。

そのため、多くのお金を稼げる代わりに人気は皆無だ。お金でなんとか納得している、というのが実情である。

実際は、無理矢理連れて行かれたりで納得も出来ないというのが圧倒的なのだが……。

しかし、その中であって募集をする度に倍率が10,000倍を越す例外中の例外がある。

それが、デュ・テリエ領、デュ・テリエ家への奉公である……。

何故なら、この職場他の屋敷では当然の如く存在する、夜の相手が無いと言つので有名である。

更に、給料は手取りで年700エキュー。

更に、こっちが望んで上手くいけば玉の輿。

雇用条件は領民であること。

読み書きが出来る者、の2点。

倍率は当然である。

「家の雇用条件は解っているな？」

「勿論でございます。」

「優遇は出来ん。試験は受けて貰う。」

「わかっております。」

S i d e o u t

「ノエルさんお風呂に入りましょう！」

「遠慮させて頂きますわ。着替えを持ってきておりませんし、家へ帰らねばなりません。」

「大丈夫です。服ならありますから。それに、ベルンハルトさんにはノエルさんのお泊り許可を貰いましたから。」

「は？」

「さあ、行きましょう。早く行きましょう。」

ノエルさんの手を引いてお風呂に行きます。

服はメイドさんをお願いしましたから、大丈夫なのです。

「リリア様、ちょっと待つてください！」

「待ちませんから。さあ行きましょう。」

.....

「あの、そんなに見ないでくれませんか？」

「.....ノエルさんって着痩せするんですね。服の上から見ても簡単に解るほど出るとこ出てるのに。」

あんなだけ、出るとこ出てるのに着痩せするなんてエレオノールさんに見せたら死刑ですよ、きつと。

お母様クラスのスタイルです。

「恥ずかしいので.....」

「大丈夫です。私幼女ですから、気にしないで下さい。」

「リリア様が4歳というのが私には信じられないのですが。」

「このロリロリボディがその証拠です。」

最初は恥ずかしかったのですが、もう慣れました。

お風呂ではリユシーさんやコレットさんに弄ばれるのが私の常ののです。

「私が言ってるのは精神年齢の話です。」

あ、それならノエルさんより上ですよ。

「さあ、下もパツパと脱いでください。さあ、早く！」

「……はあ、わかりました。」

諦めて脱いでくれたのですが、私は見てはいけない物を見てしまいました。

「………何ですか？それは。」

「いえ、今日は泊まる予定では無かったので下着まで気にしていませんでしたから。」

「気にする、気にしないというレベルの問題ではありません！！なんで14歳の美少女がそんなカボチャパンツみたいな下着なんですか！！」

「……止まる予定だ」だから！！そういうことはありません！

！！「……高いですから。」

「高い？家のメイドさんは皆可愛い下着ですが。」

「この屋敷の使用人は高給ですし、おそらくデュ・テリ工領で作っている下着は安く売って貰えるのでしよう。」

「……金ですか？金ですね！全ては材料の供給量が少ないのがいけないんですね？」

「……ええ、そうですが。」

「解りました。」

「・・・何がでしょうか？」

「ノエルさん！」

「はい。」

「メイドになって下さい。」

「・・・は？」

「メイドになって下さい。ノエルさんがとても賢いのはお見通しなので、お父様に雇ってもらいます。良いですね？」

「いえ「良・い・で・す・ね?」「・・・はい。」

「では、お風呂に入りますよう。」

今日のお風呂はノエルさんと身体の隅々まで洗いっこしました。

ノエルさんはすべすべで柔らかくて気持ちよかったです。

## 27話 羊毛

お風呂から上がった直ぐに私はお父様の元へ向かいました。

「お父様！羊を飼います。良いですね？」

「……どうしたのだ？」

「下着を作りますから、羊を放し飼いにします良いですね？だから、旧ドレー領の領民にはこっちに移って貰って下さい。羊は私が用意しますから人を集めて下さい。放牧の経験がある人を。」

「待て、リリア。」

「お母様。14歳の超絶美少女が可愛い下着を穿いてないのはどう思いますか？ダメですよね？可愛い下着を穿きたいですよね？」

「そうね。皆可愛い下着を穿きたいと思うわ。」

「可愛い下着を穿きたいですよね？ノエル！」

「……そうですね。」

「決まりです。」

「羊って何頭要りますか？」

「可能だけ必要よ。ドレー領は全部使うので良いんじゃないかしら？」

「それでは、2年後くらいに売りに出すのを目標にやります、領外に売るときはベルンハルトさんのルートを活用しましょう。その代わり馬車馬の如く働いて貰います。」

「父なら馬車馬の如く働けますからご安心を。」

「それでは、お父様はさっさとベルンハルトさんと呼んできて下さい。」

「私はセバスチャンを呼んで来ます。あ、それとお父様！ノエルさんを雇ってください。」

「……わかった……。」

「ベルンハルト。」

「侯爵様、どうなさいました？」

「ノエルだが、家で雇うことになった。」

「ありがとうございます！しかし、よろしいのですか？まだ試験をなさって無いのでしょうか？」

「ああ。何故か、風呂から上がって来たらリアが気に入ってしまったようだ……。」

「リアー又様が、で御座いますか？」

「ああ。それと、下着を作るそうだ。」

「下着？下着でなく？」

「どうも、その様だな。」

「2年後の売り出しを目標にするからお前の商会で扱って欲しいそうだ。」

「検討してみます。作るのであればシルクを仕入れなければなりませんね。」

「それが……な、リアが用意するらしいのだ。」

「シルクをですか？」

「それが、よく分からないのだ。とりあえず来てくれ。」

「それでは、お話を聞かせてもらえますか？」

下着を作るのなら、その良否は生地で決まるのですが、それを使わないとなれば一体何を使うのかを教えて頂かなければなりません。

「素材は言えませんが、良質な物を用意します。計画では2年後に領内で販売、領外へはその後となります。その時に馬車馬の如く働いてください。」

「……それだけですか？」

それは最早計画とは言えません。

本当にただの思いつきなのではないでしょうか……。

「シルクを使わないのですか？」

「シルクは素材が高すぎてダメです。私が今考えている素材なら、それを独占出来ますから自由に値段を決められます。」

「下着を作られるのでしたら高額になるのは仕方ないことだと思いますが。」

「……ノエルの下着がカボチャパンツだったんですよ！14歳の美少女の下着がカボチャパンツ！！下着が高いつてなめてんですか！！」

「カボチャパンツとは何でしょうか？」

「さっき穿いてたあれってなんでしたっけ……？ノエル？」

「ドロワーズですか？」

「そう、それです。外から材料仕入れたんじゃダメです。せめて、デュ・テリエ領の領民が買える値段にしなければいけません。」

「下穿きのドロワーズでなく下着を領民向けに売りますか？」

「そうです。さっきからそう言ってます。」

そんなことが可能なのでしょうか？

……。

「とにかく、素材を提示して頂かなければなんとも言えません。」  
「分かりました。半年後に提示します。」

Side out

お父様とベルンハルトさんが退場したので言う事を言いましょう。

「お母様、サイレントをお願いします。」

「わかったわ。」

「まず、ノエルには言うておくべき事があります。」

「なんででしょう?」

「私はデュ・テリエの『幻獣』ですから誰にも言わないで下さい。」

「リリア様は人間ではないのですか?」

「………違います。」

カクカクシカジカ………。

「成る程。それで、それに何か意味があるのですか?」

「その力で新種の羊を連れてきますから、その毛を使います。その毛は間違いなく超良質の素材です。」

「はあ、それで何処から連れてくるのですか?」

「今から見る事は秘密です。」

魔力を込めて……。

メリープ、メリープ、メリープ。

「メリープたくさん召喚!!」

目の前がたくさん光ってます。

「なんですか、これは!」

「光ってるだけですから気にしないで下さい。」

「あら、イルシオンはこうやって連れて来たのね。」

「お母様、正解です。」

とりあえず、片っ端から卵を出しましょう。

「多すぎましたか？」

「広い部屋でよかった。」

卵が200個くらいになりました。

でも、200個じゃ足りません。

あと何回か召喚しなければいけません。

「これから産まれてくる羊が良質な羊毛を持つメリープです。この子達が育つてからが大変ですよ。」

「流石に多いわ。卵の管理からやってもらいましょう。」

「お父様に言っておいてくれますか？」

「任せて。」

あ、お母様が外に行っちゃいます。

その前に抱きつきましょう。

ムギユーーってします。

ああ柔らかいのです。

抱き心地が………。

やっぱりお母様が一番なのです。

あああ名残惜しいですがサヨウナラ……お母様。

「……貴女って何歳なの？」

「見た通り4歳児です。」

「エステル様に抱きついてる時とのギャップが……。」

「何歳になっても私はお母様の娘ですから気にしないで下さい。」

ノエルさんが困ってます。

……何故？

「それでは、もうやる事も無いので寝ましょう。私の部屋はこっちですから、付いて来てください。」

「え？一緒に寝るのですか？」

「ダメですか？」

「……ダメでは、ないけど……。」

泣きましょう。

涙目になりましょう。

「……。」

「……ワザとやっつてるでしょ？」

「……。」

「……分かりました。一緒に寝ます。」  
「では、行きましょう。」

朝起きると、ノエルさんの顔がドアップでした。  
何故か、抱き締められています。

いえ、気持ち良いので全然構わないのですが……。

起きてしばらくすると、最初は気付かなかったのですが。

『水』に遅れる事1月……多分『火』がラインになってます。

美少女がカボチャパンツを穿いてるのに激しい怒りを覚えたのが原因でしょうか？

でも、それでラインになったと言うのはちょっと悲しいモノがあります。

お母様に慰めてもらいましょう。

とりあえず、ノエルさんが起きるまではノエルさんに抱き付いてお

きまじゅう。

「……………おはようございます?」

「ノエルさんって寝顔も可愛いですね。」

バツと飛び起きて後ずさりされました。

なんかへこみます。

コーティが仰向けになって寝てます。

この子は最近この寝方なんですが、滅茶苦茶可愛いです。

「コーティ、朝ですよ。」

『……………おはよう、リリア。』

「昨日は紹介しませんでした、この人はノエルさんです。新しいメイドさんです。」

『メイドがなんでここで寝てるの?』

「良いじゃないですか、可愛い人ですから。」

「リリア様はこの子と話せるのですか?」

「あ、復活しましたね。」

興味を惹かれたのかこっちに寄って来ました。

「『幻獣』は喋れるらしいですよ。便利ですな。」

「……………」

「何ですか？その、胡散臭そうって目は。」

『・・・焼く？』

「ダメです。誰でも焼こうとしちゃダメですよ。」

『はぁ〜い。』

「・・・私は今焼かれそうになっていたのですか？」

「大丈夫ですよ。この子はそんなことしませんから。」

『そうです。しません。』

「・・・」

ドアがノックされました。

「お嬢様、お目覚めですか？」

「起きてますよ。」

「では、お着替えしましょうね。」

「いえ、自分で出来ますから。」

「いえいえ、メイドの仕事ですから。高貴な方はメイドに任せられるものですよ。」

「絶対嘘です！いつも目が笑ってるの知ってるんですからね！！」

「え？リリア様は一人で着替えるのですか？」

「・・・え？」

「ほら、ノエル様もそう仰ってるじゃないですか。」

「私は勝手に着替えますので、どうぞお着替えになってください。」

「ノエル様は私が着替えさせますから、ご安心ください。」

クラリスさんがひょっこりと顔を出しました。

「私は貴族ではありませんから大丈夫です。」

「お客様です。」

「いえ、自分で「お客様ですから。」・・・」

「頑張ってくださいね、ノエルさん。」

私を売るからこうなるのです。

一人で生贄になるのはゴメンなのです。

私はもう諦めてるので、クラリスさんがノエルさんを弄んでいる音をBGMに大人しく着替えさせられました。

28話 く禁句く

「おめでとう。」

「ありがとうございます。エレ姉さん。」

ぶっきらぼうに言ってますが、顔がにやけてますよエレオノールさん。

私の誕生日に私以上に喜んでくれる人が居るといっものは嬉しいものなのです。

我が家の人たちが喜んでくれたのは言わずもがなです。

「っわ！」

「おめでとうりリア。」

「モンモランシーですか、驚かせないで下さい。」

最近のモンモランシーは私によく抱き付いてくるのです。正面から抱き付いてくる時は良いのですが、後ろから抱き付いてくるのは少し自重して欲しいのです。

身体の大きさが同じ位ですから倒れそうになるのです。

レティシアが私に抱き付いてくるのとは違うのです。

レティはどっからでもバッチコイです。

何処から来ても3秒後には抱き締め返す自信があります。

「私が6歳になったらりリアも来てくれる？」

「勿論です。お友達ですからね。」

誕生日パーティーにお呼びが掛かればですが。

本日は、私の6歳の誕生日パーティーなのです。

エレオノールさんは17歳で魔法学院の3年生、モンモランシーはまだ5歳です。

パーティーと言っても、まだ6歳児ですからエレオノールさんの時とは違って身内だけでやってるささやかなものです。

ささやかと言っても、ハルケギニアの標準からすれば……ですが。

私もようやく6歳です。

この2年色々ありました。

メリープの毛を刈り取って下着を作ったり、ポケモンが増えたり、弟のジョエルが産まれたり……。

あとは……一つ悩み事が……。

S i d e ノエル

「あ、ノエルさん。」

「エレオノール様、モンモランシー様ようこそいらっしゃいました。」

「ノエル……。」

「ノエルさん……。」

「どうなされました？その様な顔をされて。せつかくのお綺麗な顔が台無しで御座います。」

「平民のクセに……。」

エレオノールさんは私の胸を見て、モンモランシーはリリアが私の傍に来た事で、苦々しい顔をされてます。

まあ、エレオノールさんは私の胸がこれ程でなくとも、リリアとずっと一緒に居れる私に嫉妬なされると思いますが、本当に可愛らしい方です。

平民のクセにと言うのは勝手ですが、今はそれに何の意味もありません。

「二人ともそんな言い方はダメです。ごめんなさい、ノエルさん。」

「いえ、リリア様が謝る事ではありませんから。」

リリアが悲し気な顔をしています。それ以上に悲し気な顔をしている二人を見ると笑ってしまいそうです。

面白くなりそうなので、リリアを抱き締めて火に油を注ぎましょう。

抱き締めるとよくわかりますが、リリアはこの2年で大きくなりました。

それに、非常に可愛くなりました。

以前、将来的にはリリアにも変なトリステイン貴族が婚約者として宛がわれ、危険になると思っていたのですが、今のリリアなら既に充分危険です。

この娘は私達がしっかり守らなければいけません。

「アラ、コンナトコロダキシメルナンテハシタナイノデハナクテ？」

「ソウデスヨ、ノエルサン。サツサトリリアカラハナレテクダサイ。」

「申し訳ありません、リリア様。ご友人の前でこのようなことをしてしまい……。」

「いえ、気にしないで下さい。気持ちよかったですし。」

そう言って、リリアはにつこりと笑いました。

この娘の将来が本当に不安です。

変なムシは全て私達で排除しなければなりません。

紳士に見える変態が一番危険ですから……。

最後にお二人に微笑みかけて私はこの場を去ることにしましょう。

「それでは、楽しんで行って下さいませ。」

本当にお二人はリリアが大好きですね。

目下最大の悩みは、この二人のことです。

この二人、ノエルさんと猛烈に仲が悪いのです。

エレオノールさんとノエルさんの仲が悪い理由はきつと胸が……いえ、私にはもうどうしようも無い事は気にしてはいけません。

しかし、モンモランシーがノエルさんと仲が悪い理由が分かりません。

最初に会ったときは、全然そんな事無かったのですが……。

「どうですか？この下着。」

「すごく着心地が良いわ。普段穿いてるのと同じくらい。どうしたの？これ」

「完全デュ・テリエ製なのです。そろそろ領内向けに売り出します。」

「これが平民用？デュ・テリエはどうなってるの？」

「他所から仕入れてませんからね。私達が好きに値段を決められるんです。」

原材料費なんてメリープの食費だけですからね。

後は、織物にする人件費ですが領民に内職でやって貰ってますから  
そんなにかかりません。

良い小遣い稼ぎになるって好評です。

領外に出す数を絞って、貴族用に利益を上乗せしまくって売ればウ  
ハウ八なのです。

「これって私にも売って貰えるの?」

「お姉さんにならあげますよ。」

「良いの?」

「良いですよ。」

「モンモランシーはどうです?」

「寒い時は絶対こっちだと思う。」

「じゃあ、モンモランシーにもあげますね。」

モニター料代わりなのです。

ヴァリエール公爵家クラスが普段穿いてるのと同じ。

モンモランシー伯爵家クラスなら冬は絶対メリーパパンツ……と。

後は料金設定ですね。

領民用には少し着心地が落ちますが固定化を掛けて長持ちさせて、  
貴族用には固定化を掛けずに買い替えサイクルを上げて……。

ごめんなさいご先祖様、当代の『幻獣』はお金大好きなのです。

「そういえば、エレ姉さんはトライアングルになったんですね？」  
「そうよ。だから、今日は一緒に寝ましようね。」

話が繋がってないような気がします。

「私も一緒に寝る！」

「モンモランシーは家に帰るのでしょうか？リリアは私と寝るから大丈夫よ。」

大丈夫って何がでしょうか……。

「やだ〜私も寝るの！」

ああ、モンモランシー泣いちゃいました。

「モンモランシー帰るぞ。」

「モンモランシ伯、お気を付けて。」

「ああ。それでは。」

「リリア〜〜〜。」

伯爵も、もう慣れっこですね。

レビテーションでモンモランシーを連れて行きました。

毎回別れる度に泣いてると対処にも慣れます。

昔とは対応が大違いです。

「それじゃありリア、部屋に行きましようか。」  
「そうですね。寝ましよう。」

エレオノールさんは私と居る時はたまに笑ってくれるようになりま  
した。

私が男だったら放って置かないと思うのですが、恋人は居ないの  
でしょうか？

「……エレ姉さんは、誰かとお付き合いしてないのですか？」  
「……エレ姉さんは、誰かとお付き合いしてないのですか？」  
空気が凍りました。

「リリアーヌ、それは聞いてはダメよ？」  
ビクッてなりました。  
何ですか、今の寒気は！？

エレオノールさん、顔は笑っているのですが……。  
目が笑ってません。

それに……エレオノールさん、今リリアーヌって言いました？  
初めてリリアーヌって呼び捨てにされましたよ。

「ハイ。聞きません。」  
「良い娘ね。それじゃあ、寝ましようね？」  
「ハイ。寝ます。」

何時もの様にエレオノールさんに抱き締められて寝ているのですが、何故かいつもよりも抱き締める力が強いような気がします……。

次の日の朝、起きるとエレオノールさんに見詰められていました。

昨日のアレは嘘の様な可愛い笑顔で挨拶をされました。

昨日のアレは忘れることにします。

29話 く極大消滅呪文く（前書き）

メドロアは「ダイの大冒険」より、何でもかんでも消滅させると  
いうチート魔法。どう考えても最強魔法。詳しくは、調べるか漫画  
を読んで下さい。

## 29話 極大消滅呪文

私の最近の日課に戦闘訓練が加わりました。

実際の所、前の世界でやってたことに私が参加しているだけなのですが、前より楽しいのです。

自分が参加出来ると楽しさ倍増なのです。

魔法万歳！！！！

お父様は良い顔しませんか……。

今は、私・コーティVSガイア・ティアです。

「ウル・カーノ、発火！」

コーティに炎をぶつけて「貰い火」を発動させます。

バトルする時、専ら私は援護要員です。

攻撃力、防御力、素早さ……あらゆる点に置いて6歳の私はお話になりません。

それに、ラインの攻撃能力では話になりません。

早くトライアングルになりたいです。

この中でコーティが一番強いのと「貰い火」で強化出来るから、か

ろっじてこのメンバーで2VS2が成立しているのです。

どのメンバーでタッグバトルをしても私は常に強い方と組んでいます。

それでも、完璧に負け越しですからね。

サイホーンは鈍足って言ったの誰ですか？

鈍足？

人間からしてみれば十分に早いです。

後ろから指示だけしていた時には気付けなかった事です。

ただ突っ込んできてるだけなのですが、まともにくらったら一発でKOなのはくらわずとも分かります。

私にもレベティションでどうにか出来ると考えていた時がありました……。

前に1度やったら見事に無意味でしたからね。

対象を捕捉までは出来たのですが、サイホーンって重いのです。

全然浮きません……。

100Kgくらいありますもんね。

今の私の力じゃまだ無理なのです。

アース・ハンドは言わずもがな……一瞬たりとも……。

「イル・フル・デラ・ソル・ウインデ、『フライ』！」

空中に避けるしかありません。

6歳の身体能力では横っ飛びで避けるなんて出来ません。

それに、狩猟ゲームみたいに横っ飛びしてる間は無敵状態ではありません。

横っ飛びしていても当たれば痛いのです。

そのおかげ？で、フライの詠唱だけならこの家の誰よりも早いのではないのでしょうか？

しかし、フライを使っても安全ではありません。

2VS2ですからね。

油断していると攻撃が飛んで・・・「氷柱針」・・・あ、言ってるそばから・・・「火の粉」。

ティアの「氷柱針」とコーティの「火の粉」がぶつかり水蒸気が一面に広がります。

『リリアは油断しちゃダメ！』

「分かってますよ、コーティ。」

油断してましたけど・・・。

けれど、一面に水蒸気が広がったのは私にとって非常にありがたいです。

水蒸気と言っても7割くらいは水ですからね、攻撃にも転用できません。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラース、『ジャベリン』！」

水蒸気が晴れてくると……げっ！！

ガイアを狙ったのですがティアにガードされています。

さすがはシエルダー……硬い。

「バブル光線」

バブル光線を遺伝で覚えていた時は喜びましたが、自分に攻撃が向かってくると全然嬉しくありません。

それに、無詠唱で攻撃が飛んできますからね。

メイジは圧倒的に不利なのです。

ポケモンは対メイジ戦闘で無詠唱という圧倒的なアドバンテージを誇ります。

こっちは唱えてる間にサヨウナラです。

『ウォーター・シールド』

バブル光線が水の壁にぶつかって破裂しました。

バブル光線はそこまで早く飛んできませんからまだ良いですが、ティアがオーロラビームを覚えたら私にはもうお手上げなのです。

ガイアもロックブラストやストーンエッジが出来るようになったらもう……。

そういえば……ガイアは何処へ？

『リリア、上!!』

上？

「ドラゴンダイブ」

ガイアが重々しい音と共に土埃を立てて私の目の前に着陸しました。

『ご主人は退場だな。』

「……今日も私が最初にアウトですか。」

その後、コーティも健闘したのですが負けちゃいました。

「大丈夫？コーティ。」

『もう大丈夫。』

バトルの後に治癒をするのは私の役目です。

おかげで、治癒の腕はメキメキと上がっています。

高価な「精霊の涙」は無尽蔵ですし……。

負けが続くたびに治癒が上手くなっていきます。

……いえ、勝つても治癒をしますから関係ありませんね。

「なんでガイアはサイホンなのにドラゴンダイブが使えるんですか！？卑怯です。なんでその大きさを高く跳び上がるんですか、理不尽です。」

『私にはなんとも言えんが、遺伝ではないか？』

「最初は喜びましたが、自分がそれをくらうと悲しくなります。」

『そう言われてもな。』

「どう思いますか？コーティは。」

『「炎の渦」が使えるから人のこと言えないけど。ガイアが私より高く跳び上がるのは納得いかない。』

「ですよ。ガイアの身体はどうなってますか？ティアは相変わらず硬いですし。」

『それが私の特徴ですからね。リリアのジャベリン程度ならいくらでも防げますよ。』

「やっぱり、ラインじゃダメですね。最低でもトライアングルにならなきゃ何時まで経っても負け越しです。」

『リリアも強くなってますからね。きっとすぐにトライアングルになれますわ。』

「セリア、慰めてくれてありがとう。」

脱皮を何度かして大きくなったセリアを抱き締めます。  
ツルツルですね。

「今日はどうだったのかしら？」

「負けちゃいました。」

「あらあら。こっちにいらっしやい。」

それでは、お母様の膝の上へ。

「あんまり頑張ってはダメよ？」

「・・・はい。」

ギューーっつとされます。

ああ、和みます。

「お父さんだけじゃなくて私も心配してるのよ？」

「・・・はい。」

「ノエルなんか、お父さんと一緒に対策会議してるんだから。」

「・・・はい。」

「それじゃ、ダンスの練習をしましょうね。」

「・・・はい。」

・・・ダンス？

「お母様ちよつと待って下さい。」

「ダメよ、リリア。今日は私とダンスの練習をしましょうね。」

騙されました・・・。

和んでたせいで、思考がストップしてました。

「それじゃ練習しましょうね。」

「・・・はい。」

ああ、ダンス・・・・・・・・。  
サヨナラ、ダンス・・・・・・・・。

ダンスの練習は皆とタッグバトルの数倍疲れます。  
グテーっとなってるのはちょっとよろしくありませんが、仕方ありません。  
疲れるものは疲れるのです。

「今日のダンス上手でしたね。」

「嬉しそうに言わないでください・・・。」

「いえいえ、リリアがダンスの練習をしているのを見るのは私達の  
楽しみの一つですから。」

「ノエルさんも踊れば良いじゃないですか。踊れるんでしょ？」

「ええ、踊れますよ。もう少し上達したら一緒に踊りましょうね。」  
「・・・・・・・・うー！」

この日はもう疲れたので寝ます。

「ベッドに入りましょう。」

灯りを消すと、月明かりだけが頼りなのですがこの静かで透き通っ

た感じは好きです。

ベッドに寝転がると、隣から話しかけられました。

「ダンスが嫌いでもきちんと練習しなきゃダメよ？絶対必要になるんだから。」

「それは、分かってるんですけど……。」

「頑張つてね。」

「はい。」

隣？

当然ノエルさんですけど、何か？

毎日抱き締められて寝てますが何か問題でも？

ベッドの隣にはコーティが寝てますよ。

「セリア、やっぱり私は攻撃力が足りないと思うのです。」

『確かにラインスペルでは私達と戦うには厳しいですわね。』

「でもトライアングルになろうと思って今すぐ成れるわけではありませんから別の方法を考えなきゃいけません。」

『何か考えがあるのでですか？』

「出来るかどうかは分かりませんが、一応案はあります。」

『それは？』

「ずばり『メドローア』です。」

『その「メドローア」と言うのは何なのでしょう？』

「相反する（+）（-）（・）（ $\cdot$ ）（ $\cdot$ ）のエネルギーを混ぜ合わせるんですけど、出来たら凄いですよ。」

……あれから半年が経ちました。

セバスチャンやお父様には非常に大きな悩みがあります。

私の事じゃありませんよ？

いえ、発端は私なのですが……。

貴族向けの下着の売れ行きがウハウハなのです。  
もう困るくらいに。

実際困ってますし……。

私に注文状況を漏らすあたり本当に辟易してるみたいなのです。

ちょっと同情してしまいましたが、私の責任じゃありません。

……その筈です。

丸投げしたい。

ベルンハルトに丸投げしたい。

もう面倒なのだ。

私達は領内だけ対応したい……。

「それで……また注文が来たのか？」

「はい。もう笑えませぬね。」

「父上はどうしたのだ？」

「コルネリウス様は先日、アルビオンへ旅行に出かけられました。」

「何だと？父上はクルデンホルフに交渉に行ったはずだぞ。」

「『隠居したのに前より忙しくなるのは御免だ。』と、護衛に言い残して行かれたそうです。今朝、代わりに誰か来て欲しいと護衛が泣き付いてきましたよ。」

「あのクソ親父……。」

「注文が増えた代わりと言ってはあれですが、領外向けの下着が更に値上がりしております。」

「……いくらだ？」

「注文を減らす為に値上げを始め、最初は100エキューでしたが今では倍ですな。下着一枚売る毎に180エキュー以上の利益が出ております。また値上げしなければなりません。」

「……今の注文状況は一過性だと思いたいのだがな。」

「そうですね。」

「それと、男用の下着は無期延期だ。」

デュ・テリ工家の執務室には溜息だけが残った。

## Side out

そんなこんなで、半年掛けてメドロアを打つ条件が整いました。

半年かけてようやく(+)と(-)のエネルギーを同等に出来ました。

私才能無いんですかね…………。

漫画の中じゃ彼は一発で出来るようになってました。ちよつと(+)のエネルギーが強いようでしたけど。

しかし、失敗したら洒落になりませんから、慎重すぎて慎重過ぎることはありません。

この呪文は私みたいに二つの魔法発動媒体を持っていなければ出来ません。

それに、『火』と『水』が全く同じレベルで使えなければいけません。

んからね。

この世界では通常であれば、不可能な呪文なのです。

不可能と言っても、究極的にはただのマジックアローなんですけどね。

暴発するといけないので、山の中でやりましょう。

結果として……前方の森が一部消えちゃいました。

それに、魔力がほぼ空になりました。

しかし……ラインの魔力でこの威力。

封印決定です。

トライアングルになってこれやったらどうなるのでしょうか……

流石は大魔道士のオリジナル呪文。

極大消滅呪文と銘打ってるだけあります。

30話 く金貨く

地下室が満杯だ。

もう入らない。

もう無理だ。

「旦那様、これをどうなされるおつもりで？」

「どうもこうも、正直……邪魔だな。」

デュ・テリエ侯爵は疲れ切った様な、力のない声で答えた。

普段侯爵としての威厳を放っている人と同じとは、とてもではないが思えない。

「エステルはどうすれば良いと思う？」

「正直この処理には困りますね。溜めすぎてもよくありませんし……かと言って、どうやってこれを処理すれば良いのか……。」

侯爵夫人は半ば呆れているような声を漏らした。

「誰か居ないのですか？これを処理できる人は……。」

「心当たりはごまんとあるが、無駄になるだけだろうから遠慮したい。」

「私も心当たりは掃いて捨てる程ありますが、あまり有効的ではありませんし。セバスチャンには無いのかしら？」

「私も同じです。まさか、こんなことで悩む日が来ようとは……いえ、ひょっとしたらこの様な日が来るかもしれないと思って

いましたが……。まさか、これほど早く……。デュ・テリエ家にも出来ない事があったのですな。」

セバスチャンは関心している様な絶望している様な、表現しづらい表情をしている。

しかし、この3者に共通している事が1つだけある。

それは、ほとんど困っている、ということだ……。

彼等としては、それはもう……。真剣に。

本当にこの処理に困っている。

見る者が見れば、文字通り飛び回って喜ぶであろうが、彼らは本当に……。本当に、真剣に困っているのだ。

しかし、3人とは裏腹に目を輝かせている者が居た……。約2名。

「……。素敵。」

1人は7歳児とは思えない艶やかな表情をしている。

もう1人は、誰をも虜にしてしまうであろう色香を放っている。

「リリア、これは素晴らしいわね。」

「そうですねノエルさん。これは、今まで見たどんな絵画よりも素

晴らしいです。」

「御三方はこれを処理するつもりらしいですけど、どう思います？」

「とんでもない事です。これはこのまま観賞用として永久保存すべきです。寧ろもっと積み上げるべきではないですか？」

「その通りだわ。最終的には泳げそうね。」

「良いですね。泳ぐのならきちんと洗わなければいけませんね。以前司書の方が言っていたのですが、この世界で一番汚い物は『お金』と『本』らしいですからね。」

「酷い言い草ね、それは。事実をきちんと見ていないわ。」

「いえいえ、抽象論ではなく、物理的な話です。色んな人が触つてますから、手垢が付いてるって意味です。」

「確かにその通りだわ。きちんと洗いましょう。」

「それにしても、お父様も水臭いですね。こんなに素晴らしい場所が屋敷の中にあるのに私に隠してたんですから。」

「本当にこの屋敷に来て良かった……。」

困った顔で見ている3人。

恍惚とした顔で見ている2人。

その表情は対照的だが、見ているものは全く同一の物である。

視線の先には……大量の金貨があつた……。

今現在、既に150人は泳げそうな量の金貨が……。

事の発端は言わずもがな……。

ある事件を切欠とし、全ての準備が2年で整えられたある計画。当初は計画とすら言えないものであったが、その計画はあらゆる障害をスルーして軌道に乗った。

これがもし軍事活動であれば、これ以上の無い電撃作戦であったろう。

それが今回の発端であり、止めでもあった。

元からこの屋敷には大量の金貨があったのだ。何故なら、収入に見合っただけの金を浪費するということが非常に下手な当主が数百代続いたためである。

彼らは後世のために様々な事に金を使ったのだ、非常に効果的かつ効率的に……。

効果的かつ効果的に使われ、浪費される事の無かった金貨は溜まる一方であった。

『貯まる』でなく『溜まる』。

目的無き貯蓄は経済の健全な発展を阻害するが、この地は他とは比べ物にならない発展を遂げた。

街道や港の整備。

領民が店を出したいと言えば、支援をした。

教育施設を充実させ、経済だけでなく領民の知識レベルも上昇させた。

頑張って使った金貨が、更に金貨を呼び込むことになったのはある意味当然であろう。

そして今回の、止め……だ。

元々どうにか消費する事で一気にバランスが崩れる事を防いでいたのだ。

それは近年の人口増による税收増加で更に危うい状況となっていた。

今回のそれはその危ういバランスを崩壊させるには充分すぎた。

この家の大半の者にとって、彼の下着は利益率90%を超えるお荷物商品となってしまうのだ。

1カ月後……。

「また増えましたね。」

「ええ、また増えたわね。」  
「もう外に溢れてますね。賊が来たら世の理不尽さに嫌気が差して自殺してしまうのではないでしようか？」  
「そうかもしれないわね。良い光景だわ。」  
「ええ、本当に……。」

Side デュ・テリ工侯爵

「金を使おうと思う。」  
「それは非常に良い事でございますが、どうやって？それに、一気に放出してしまうと金の相場が崩れかねませんが。」  
「……ゲルマニアで領地でも買うか。」  
「言ってみただけですね。考えるのが面倒なのは分かりますが、どうにかしなければなりませんよ。」  
「リリアとノエルに預けてみるのはどうだ？」  
「あの二人に大金を預ければ何時の日か数倍になって返ってくるでしょう。」  
「領外へ回しても、馬鹿領主共の懐に入るだけだろうな……。」  
「現状を見ると、きっちり消費している分その馬鹿領主共の方がマシな気がします。まあ、その金が平民へ回る事は有り得ないでしょうが。」  
「いつそのこと金を貸すか？」  
「そのツケは最終的に平民へ行きます。」  
「では、どうしると？」

結局良い案が浮かぶ事は無かった……。

……あれから、2月。

遂に金を使う時が来た。

凶作だ。

大凶作なのだ。

今年のトリスティンは雨が多かった。

しかも、ここ最近は雨季でもないのに二日に一度は雨が降るとい  
う異常事態が続いている。

領外は……だが。

デュ・テリエ領は何時もの如く、何の影響も無く豊作だ。

王政府にも備蓄はあるだろうが、今年の収穫が全滅となると足りる筈がない。

ゲルマニアの農作物は既に上昇の気配がある。

トリスティンに売りつけるつもりであろうが、それは問屋がおろさない。

今回のシナリオを書くのは私達だと解らせてやろう。

デュ・テリエには固定化の成せる業で大量の備蓄が存在する。

過去6000年間殆ど凶作になどなった事が無いにも関わらず、備蓄をする習慣があるのには理由がある。

一言で言ってしまうば、戦争だ。

戦争は畑から働き手を一時的若しくは永久に奪うものだ。その時、平民の生活というのは悲惨なものだ。

国民の15%が餓死。

戦争で国民の10%が死亡、といったこともある。

領民をあの様にしたくないと思うのは当然であろう。

自領だけを守るといふ非常な決断を強いられる事など珍しくもなるとも無いのだ。

「セバスチャン、時期を見て領の備蓄を全て放出しろ。今回の収穫は今年用に使う。」

「かしこまりました。それだけで足りますか？」

「足りなければ残りは家の備蓄のせいで期待はずれに終わって、余らした農作物の処分に追われて反落するであろうゲルマニア産を安値で買い叩け。」

こうして金貨は大量に減り、お金大好きな二人はショックを隠せなかった。

しかし、まだまだ130人は泳げるだろう……。

その後、王政府から正式に感謝の意と共に褒美が贈られたのだが、デュ・テリエ侯爵は何も受け取らなかったと言う。

### 31話　くお嫁く

メイドと主人のいけない関係というのは、珍しく無い。傍から見ていてその関係はまったく微笑ましくない

しかし、ここに非常に珍しいことに微笑ましい光景があった。

「これっとさん。」

「はい、わかりました。」

メイドと主人の娘のキスシーンである。

レティシアちゃん3歳。

デュ・テリ工家では最近ある事がブームになっている。

その発端は、ある一人の幼女が両親がイチャついている場面を目撃し爆弾を投下したのだ。即ち……「なにしてるの？」

それに焦った父はとりあえず、好きな人にはキスをするのだと教えたのだ。

その結果、無垢な少女は屋敷の人間に手当たり次第にキスをするという暴挙に出る事となった……。

だが、幼女が頬にキスを強請るといふのは無い事も無いだろう。

しかし……この幼女一味違う。

何故なら……唇にキスを強請るのだ。

「おねーさまもチューして。」  
「はい。」

朝起きるとレティと抱き合ってからキスをするのは、既に日課になっているのです。

因みに私のファーストキスは1歳の頃にお母様とです。

「のえるちゃんも。」  
「はい解りました。」

ノエルさんとレティがキスしてます。

3歳にして経験人数50人以上。  
この子は物心着いた頃にこの話をされると、きっと恥ずかしさに悶えることになるのだろっうなあ、と思いながら私はその光景を見ている。  
ます。

まあ、相手が皆女性ですからダメージは少なくて済むでしょう。

執事さんやお父様との唇でキスするのは禁止しているのです。

理由は目覚めてしまつては危険だからです。

何に？

聞かなくても察してください。

レティシアは可愛いので仕方ありません。

このキス、実は結構大変です。

レティは厨房で食事を作っている女性のコックさんにもキスをしに行くからです。

3歳児の足はお世辞にも遅くないとは言えないので、30分くらいかけてレティは皆の所を回るのです。意外に時間が掛かります。

誰かが付いていないと男性にもキスを強請るので誰かしらレティと一緒に居なければいけません。

以前から私は家にある本を読み漁っているのですが、最近ハルケギニア史です。

そこで必ず出てくる単語があるのですが、どうも私の持っているイメージと随分離れています。その者たちはスクウエアメイジですら敵わず、その者たちに勝つためには10倍以上の兵力が必要と言われています。

その者たちは・・・エルフ、なのです。

「セバスチャン、エルフって強いのですか？」

「強いらしいですな。私はエルフに会った事はありませんが、ハルケギニアで何を敵に回してもエルフだけは敵に回すなど言われております。」

「昔のデュ・テリ工家はエルフと戦った事ありますか？」

「私には分かりませんが、旦那様ならご存知でしょう。」

「じゃあ、お父様に聞いてきます。」

「お父様、エルフと家の幻獣どっちが強いのですか？」

「聖戦に参加した事は一度も無いからなんとも言えん。エルフが攻めてくる事があれば私達も戦わねばならんがな。」

「……ひょっとして、エルフにこっちから勝手に戦争仕掛けるだけ？」

「ま、そうだな。」

「……何のために？」

「聖地がどののと言っているが、そんなものブリミル教を崇拝している奴らが勝手に言っているだけだからな、聖地なぞなくとも何も困らん。」

「……馬鹿ですか？」

「リリア、それは言うてはならんことだ。私達がブリミル教の教えを信じていないのは勝手だが、だからと言って、信じている者を馬鹿にして良いというわけではない。まあ、巻き込まれる側はたまったものではないが。」

「よく今まで、その聖戦とやらに巻き込まれませんでしたね。」

「まあ、全ての貴族が聖戦に参加するわけではないからな。」

「家の領つて強いのでしょうか？」

「強い。トリスティンと戦争をすれば勝てるかもしれんくらいには・  
・・な。」

「私なら意地でも巻き込みますけど。」

「まあ、王政府は我々に借りがたくさんあるからな。」

「借りですか？」

「過去、国外から攻められる度に歴代の当主は王政府に対して褒美は要らぬからデュ・テリエに干渉するな、とやんわり言い続けてきたからな。」

「・・・忠誠心の欠片もありませんね。」

「そんなことはないぞ。家に伝わる言葉にこんなものがある。『爵位は金を払っても買え、王位は金を払っても捨てる。』」

「・・・どこがそんなことないのですか？」

「あんな面倒なものを抱えている王家を尊敬せずにはいられないだろ？その言葉のおかげか知らぬが、デュ・テリエが王家の跡継ぎ争いに巻き込まれたことは一度も無い。」

「・・・王家は貧乏くじ？」

「・・・そんなことはないぞ。やりがいのある仕事だ。」

「じゃあ、お父様は王様になりたいと思いますか？」

「絶対に御免だ。」

「・・・この家、いつか粛清される気がします。」

「そいえば、なんでエルフを倒すのが聖戦なんですか？」

「エルフが聖地に住んでいるからとか、どうのと言っているがそんなものブリミル教を崇拜している奴らが勝手に言っているだけだからな、エルフが聖地に住んでも何も困らん。」

「・・・馬鹿ですね？」

「それは言うてはならんことだ。私達がブリミル教の教えを信じな

いいのは勝手だが、だからと言って、信じている者を馬鹿にして良いというわけではない。」

さっき同じ事を言われた気がします……。

確かにそうですが……面倒なことですね。

本当に。

「だが、それも無関係の人間を巻き込まないのであれば……だ。

」

……。

今何と？

「レテイ、今なんて言いました？」

「おねーさまと、のえるちゃんはちゅーしないの？」

聞き間違いではないようですね。

そろそろきちんと教えなきゃいけませんね。

私のために……。

きちんと説明しましょう。

「・・・あのですね？キスというものは、基本的には好きな人とやるもので。」

私としては、出来るだけ3歳児にもわかるように説明しようと思いました。

だが

「じゃあ、おねーさまは好きじゃないの？」  
無理でした。

「リリアは私のことが嫌いなのですか？」

「きらいなの？」

「いえ、好きですけど。」

「じゃあ、ちゅーしなきゃ。」

「ちゅーしましょう。」

「何でノエルさんまでレティと一緒にになって言ってるんですか？」

「私だつてリリアのこと愛してるんですよ？」

「ちゅー。」

「ノエルさん。薄々感じてましたが、女の子が好きなんですか？」

「女の子はノーカンなだけですよ。リリアこそ女の子が好きなのだと思ってましたか。」

「違います。・・・少しは恥ずかしがったらどうですか？」

「愛してますから。リリアが男の子だったら私はもうお嫁に行けなくなってますね。」

.....

「おねーさま、ちゅー。」

そんなに見つめないで下さい。

「リリア、チュー。」

徐々にノエルの綺麗な顔が近づいてきました。  
やっぱり、ノエルさん綺麗です。

私が男だったら間違いなく、嬉々としてキスしてますね。

・・・あれ？

別にキスしても良くないですか？

「ノーカンですよね？」

「ノーカンです。」

ノーカンなら・・・良いですよね。

・・・音にするならこんな感じであるっか？

ズキyun！ドキyun！！ブチュー！。

「のえるちゃん、だいたん。」

「ノエルさん！！！」

「何ですか？」

ヤバイです。

顔が熱いです。

「ウー——！」

「じゃあ、もう一回。」

「待つ……。」

……お嫁にいけない。

### 32話 く家出く

私はその時森の中でイルに乗って走り回っていた。

何時もの様に、風になるーとテンション上げていると、大きな落下音がした。

落下音だけでは無い。

森が揺れた、と言って良かった。

その音と振動は明らかに異常事態を示していた。

この世界でその様な音が鳴り響くとなると、竜種が着陸したと考えるのが通常である。

となれば、誰も近づこうとは思わないだろう。

だが、

「イル、行ってみましょう。」

リリアーヌ・デュ・テリエは良くも悪くも、普通ではなかった。

『リリア、危ないのではないか？』

「大丈夫です。森には皆が居ますから。」

『……………どうなっても知らぬぞ。』

振り回されるのはいつも愛馬である。

流石はポニータと言っべきであろう。  
そこそこ距離があったにも関わらず、直ぐにその落下地点に辿り着いた。

クレーターと言っべきだろうか？

そこには‘何か’の落下跡がありありと残っていた。

啞然としていて、上から声を掛けられた。

『主がリリアーナか？』

「……カイルユー？」

『その通りだ。』

何と言うか……デカイ？

5・6mくらいありますか？

「カイルユーってこんなにでかかったですか？」

『我は特別なのだ。竜種の中でもな。』

「家の守護竜さんですか？」

『その通りだ。今も昔もそして未来も。』

「昔？」

『我はこの世界へと道が繋がった時から生きている。』

「と、なると……6000年くらい生きてるんですか？」

『そうだ。』

「何故今ここに？」

『普段我は海の底に住んでいるが、たまに様子を見に来ておる。』

「では、会えたのはたまたまですか？」

『どちらにしてもいずれ会う事になっていたがな。』

そういえば10歳になったら会わせてくれるって言ってましたね。

「では、以後よろしくお願いします。」

『ああ。』

「そう言えば、エルフって分かりますか？」

『知っておるぞ。それがどうかしたか？』

「いえ、本にエルフは強いって書いてあったので貴方達とどちらが強いのが気になりました。」

『彼らは強いぞ。だが、万が一彼らが攻めて来たとしても負けはない。彼らが契約をする前に叩き潰せば済む事だ。』

「契約って何です？」

『何だ、その伝承も失われておるのか？』

カイリユーは呆れてそう言った。

6000年を生きる者に知識で勝てる筈が無いのだがリリアは負けた気がした。

「私が知らないだけかもしれませんが。」

『まあ良い。彼らは精霊の力を借りて戦うのだが、土地の精霊と契約せねば強力な力は使えぬ。この地では仮に契約しようとしても出来ぬだろうがな。』

「それにしても驚きましたね。あんなに大きいとは……。6000年生きてるといふのもですが。」

『我々からしても6000年とは驚きだな。しかし、リリアよ。』  
「何ですか？」

イルシオンは良い機会だから、注意を与えようとした

『今回はカイリユーであったから良かったものを、火竜だったらどうするつもりだったのだ？』

だが

「良い機会ですから、竜を克服しましょう。」  
主人は前向きだった。

彼に出来るのは溜め息を吐く事だけだった。

「それより、帰りましょう。お腹すきましたから。」  
『分かった。』

家へ帰ると門の前に立ち尽くした同い年くらいの金髪の少女が居た。その傍には困った感じの護衛さんが。

「・・・モンモランシー？」

「リリア！」

少女はリリアの姿を見ると、パアツと顔を輝かせた。

「どうしてここに？今日来るとは聞いてませんでした。」

「・・・お父様なんて嫌い。」

「また、喧嘩ですか？」

「だって……。水の精霊さんに会わせてくれないんだもの。」

「……ああ、私のせいですか？」

前に水の精霊について探りを入れて貰ったせいで興味を持つちゃったみたいですね。

今なら簡単に会わせて上げられますが、出来れば知られたくありません。

「モンモランシ伯も心配なんですよ。」

水の精霊さんは全然危なくありませんが、良い人なんですよ？

「でも……。」

「まあ、話は後にしましょう。お昼御飯は食べましたか？」

タイミングよく、ゲーと音がした。

モンモランシーは顔を赤くして

「聞こえたっ!?!?」

と、聞いてきた。

モンモランシーは本当に恥ずかしそうにそうしていたため、可哀想だと思えば聞かなかったことにするだろう。

しかし

「可愛らしい音ですね。」

リリアーヌ・デュ・テリエは敢えてより恥ずかしくなる様に答えを返した。

モンモランシーはやっぱり恥ずかしくて姿が格別なのです。  
涙目は別格ですが……。

「リリアの意地悪……。」

「意地悪？何の音だったのか教えてくださいか？」

「知らない！」

「中に入りましょう。モンモランシーもお腹が空いてるみたいですから。」

「……うん。」

屋敷に入ると金髪の美少女が彼女達を出迎えた。

「リリア、おかえりなさい。」

「ただいま、です。モンモランシーが家出して来たのでこの子の分も用意してくれますか？」

「ええ、良いわよ。」

「……ノエルさん。」

彼女は不機嫌だった。

突然の訪問という、失礼な行いをしているのは自分なのだ普通であれば彼女が不機嫌になるのはお門違いである。

念の為言うのであれば、先程リリアに弄られたから不機嫌なのではない。

その原因は目の前の光景にあった。

彼女の愛する親友とその家のメイドが抱き合っていたのだ。  
それはもう、自然に。

おかえりなさい、と言うのとリリアを抱きしめるのが一連の動作として成り立っているかのようであった。

モンモラシーは青筋を立てて

「ハシタナイデスヨ、ハナレタラドウデスカ？」

言った。

本人としては非常に抑えた言い方をしたのだが、片言になっている当たり誰から見ても抑え切れていないのは丸分かりである。

彼女が不機嫌になっているのを察したりリリアはノエルにいらぬ批判が行くのを抑える為に

言った。

「ごめんなさい、モンモラシー日課ですから。」

しかし

「日課！？ノエルさんといつも抱き合ってるんですか！！」  
逆効果であった……。

どうしてこんなにモンモランシーはノエルさんを毛嫌いするのでしようか？

怒りの理由。

知らぬは本人ばかりである。

「一応モンモランシ伯には連絡を入れておく。心配しているだろうからな。」  
「お願いします。」

一応モンモランシーもお嬢様ですからね。  
誘拐されたと勘違いされては大事になってしまいます。

「それで、モンモランシーは水の精霊に会いたと言ったのにお父さんが会わせてくれないから喧嘩したわけですか？」  
「・・・うん。」

「モンモランシ家は代々水の精霊との交渉役を務めてきた一族ですからね。精霊に会うのにそれなりの資格と言うものを求めているんじゃないですか？」

「・・・資格？」

「そう、資格。せめて、魔法が使えるようになってから、とかあるんじゃないですか？」

「まだ杖の契約もしてないもん。」

「じゃあ、帰ってから契約させて欲しいと言ってみたらどうですか？」

「出来るかな・・・？」

「どうでしょうね。こればかりはやってみなくちゃ分かりませんからね。」

「・・・リリアはもうしたの？」

「ええ。もう終わってますよ。」

「じゃあ・・・頑張る。」

モンモランシーが抱きついてきました。

それはいつもの様な抱きつき方ではなく、不安を紛らわす為に人肌を求める小さな子供のようでした。

貴族にとって杖の契約とは大きな意味を持つ。  
メイジとしての第一歩なのだから・・・。

その反面不安も大きいでしょう。

「ドットメイジになったら会わせて、って頼んでみたらどうですか？」

「・・・うん。」

・・・小動物。

可愛い。

可愛すぎます。

何なんですか、この子は！！

一体どんな教育を受ければこんな構ってオーラが出せるのですか！

本当に子のこの将来が心配なのです。

・・・私が守らなくてはなりません。

結局モンモランシ邸から迎えが来てモンモランシーの家では1日で終わりました。

護衛が付いて来ている家出が家出なのか、という疑問はありますが・  
・  
・

S i d e ノエル

やっと帰ったわね。

あの子は好きだけど、やっぱりリリアを取られるのは面白くないわ。

「そういえば、リリア。」

「どうしました？」

「ふと気付いたのだけれど……。」

「はい。」

「この前キスしたじゃない？」

あらあら顔が赤くなってるわ。

この子時折私より大人びた顔をするのに、こういうのを見るとやっぱり子供だと思っわ。

「しましたね。」

「あの後リリアったらお嫁に行けないって泣いてたじゃない？」

「はい。」

「『幻獣』の血を外に出して良いのかしら？」

「そういえば……そうですね。」

「今までの『幻獣』に女の子は居たの？」

「いえ、居ませんでした。」

「どうするの？本当にお嫁に行けないかもよ？」

「……どうしよう。」

この子が外に出るのなら私も付いて行くつもりだけれど、この子が家に残るのが一番嬉しい。

相手の家に変なのが居ないとも限らないから。

「リリアがお嫁にいけなくても私はずっと貴女と居てあげるからね。」

「……うん。」

ああ、本当にこの子は可愛い。

抱き締めたいときに抱き付いてきてくれる。

「もし、お嫁に行けなかったら私が貰ってあげるからね。」

「……うん。」

その時はゲルマニアで領地でも買おうかしら？

ギューっと抱き締めると、更に抱き締めてくる。

……この子がお嫁に行けないとしたら、私達が原因な気がしますけど。

エステルさんも含めて私達の審査が厳しいのは分かりきっていますからね。

S i d e o u t

33話 擬態

「嫌です。メンドクサイ。」

「頼む。枢機卿にも頼まれたのだ。」

「じゃあ、お願いがあります。」

「……言ってみる。」

「火石が欲しいです。」

「また、高価なものを……。」

「用意してくれるなら良いです。それに、王家に関わるとろくな事にならないって言ったのはお父様ですよ？」

「……分かった。用意しよう。」

「それで、何故私が？遊び相手ならルイズだけで充分でしょう？」

「それが……な、もう少し御淑やかにして欲しいとの事だ。」

「……それを私に頼むのは何か間違ってますか？」

「やはりそう思うか？」

「……自分で言うておいてアレですが腹が立つのです。」

分かってますから良いんですけどね……。

「お父様、ちょっと失礼ではないですか？」

「あちらの希望としては必要なのはお淑やかさではなく、同年代で自分より遥かに落ち着いた人間が居るといふのを見せて欲しいのだそう。だからお淑やかさは要らんぞ。」

スルーですか？

スルーですね？

「それで、家は何が貰えるんですか？」

「何が？」

「礼に何か貰えるんじゃないのですか？」

「無い。敢えてトリスティン貴族風に言うのなら姫様のお遊び相手を仕る『名誉』……か？」

「……旅に出て良いですか？自分で火石探しに行きますから。」

「良いなら姫様が家に来るのは来週だ。それまでに、コーティとイルシオン以外を誰かに預けなければならんな。」

スルーですね？

お父様は娘の性格を解っててスルーしてるのですね？

私にタダ働きをしとる言うのですか……。

私としてはプラスですがデュ・テリエ家としてはマイナスなのです。

「あの子達には森に行つて貰いますから大丈夫です。」

「それで、ルイズも来るのですか？」

「いや、ルイズ嬢は来ない。彼女が居たのでは普段のようになってしまうからな。今回はとことん緊張して貰う。」

「解りました。今回は冷たい感じで接せば良いのですね？」

「ああ。」

イメージ的には……最初の頃のエレオノールさんですかね？

練習しておきましょうか。

「お父様、よろしいですか？私にも都合と言うものがあるのです。」

「そうだな。」

「それを曲げるといいうのですから、それなりの対価と言つものを貰わなければならぬのです。解りますか？」

「……はい。」

「そして、姫様には御自分の立場を自覚して貰わなければなりません。」

「……はい。」

「それをご教授して差し上げるのですから対価を貰わなければなりませんね？」

「……はい。」

「姫様に王族らしい落ち着きと言つものを与えた場合、私達が褒章を貰うのは当然ですね？」

「……はい。」

「それにも関わらず、貰えるものが『名誉』などという何の価値も無い物といふのは認めることは出来ませんね？」

「……はい。」

「具体的には、金貨とか宝石とかを要求するのは当然でしょうか？」

「はい。」

「こんな感じでしょうか？」

「……は？」

「ですから、冷たい感じといふのはこの様な感じで良いのですかと聞いているのです。」

「……今のは、わざとか？」

「当たり前です。いくら私でもお父様に説教まがいのことはしませんよ？」

「……。」

「因みにモデルは初期エレオノールさんです。」

かなり違つてるような気もしますが、落ち着いてる7歳児といふのはこんな感じでしょう。

ちよつと背伸びして頑張つてる感じが高評価な気がするのです。

「リリア。」

「はい？」

「普段通りで良い。ただし、金の話はするなよ？」

「何故ですか？王族が財政について疎いというのはダメでしょうか？  
こういうのは小さな頃から言っておかなければいけません。」

うん。

私は間違ったこと言ってます。

王族なんて、ちやほやされて育ってるに決まってるのです。  
そんな人間がいきなり王になったらろくな事にならないのは確かです。

それならば、私がお金の大切さを教えるのは悪くない手です。

「良いから。頼む……。」

……？

お父様は何故そんな沈痛な面持ちをしているのでしょうか？

娘がすっかりしているというのは父として喜ぶ事だと思つのですが……。

「……わかりました。お金の話は無しの方で。」

残念なのです……。

「……何故だ？」

私は一体何処で間違っただのだろうか？

リリアがお金の大切さをきちんと理解している事は知っていたが、何故あもお金に並々ならぬ関心を寄せるようになってしまったのだろうか？

「どうやったたらあんなに良くも悪くも優秀な娘に育つのだろうか……」

「エステル、私は何処でリリアの教育を間違っただのだろうか？」

「突然どうしました？」

「姫様に落ち着きを教えてやって欲しいと言ったら、財政について教えようとしていたのだ……」

「良い事じゃないですか。」

「姫様はまだ9歳だぞ？」

「リリアだつてまだ7歳です。それにあの子が経済について学びだしたのは2歳の頃ですよ？アンリエッタ様だつて勉強なさつたらよろしいと思います。」

「……待て、2歳？」

「ええ、2歳の頃ですわ。」

「そのせいか……」

「教えるのが早すぎたのだな……」

お金と言つもの汚さを知らぬまま知識だけ得てしまったから、リアはあんなにも無邪気にお金について語るのか……。

「あら？貴方は知らなかったのですか？」

「あの頃は教える内容はセバスチャンに一任していたからな。」

悪いのはきちんと教える内容を選別しなかった無能な大人達か……。

すまぬな、リアア。

「最近水の秘薬がいらないからお金が余ってるのだけど、どうすれば良いと思う？」

「それは、予算の方が？エステルの金か？」

「私のポケットマネーの方ね。元々無駄遣いは嫌いだからあまり使つてなかったのだけど、リアアのおかげで余っちゃって仕方ないの。」

「私にそれを聞くか……。」

「原価がほぼゼロだから秘薬を作ったら全部利益になってしまうのかと言つて、ただで配るわけにはいかないし。」

「秘薬作りはエステルの趣味だからな……。地下に放り込んでおくか？」

「また増えちゃうわよ？」

「それなら、港の整備でもしよつか？」

「もう予算を組んであるんでしょ？」

「……追加予算は要らんよな。」

Side out

お父様はああ言っていました。やはりここはエレオノールさんバージョンで対応すべきだと思っております。

だって、お友達になるわけじゃないですからね。

これはあくまで『お仕事』なのです。

「初めましてリリアー又さん。カトレア殿からお話はよく聞いてるわ。」

「お初に御目に掛かります、アンリエッタ姫殿下。リリアー又・デユ・テリエで御座います。私などの名が姫殿下のお耳に入っているとは、驚きで御座いますわ。」

「その様な話し方をしないで欲しいわ。もっと楽に話してくれて良いのよ?」

「私などが姫殿下と対等に話すなど恐れ多くて出来ませんわ。」

「そんな事無いわ。これからお友達になるんだから。」

「姫殿下の友人が私などに勤まるかは分かりませんが、誠心誠意勤めさせて頂きます。」

「ですから、その様な話し方をしないで欲しいの。」

結局リリアはアンリエッタが帰るまでエレオノールバージョンで対応し、ルイズ以外に友達が出来る。と今回の訪問を楽しみにしていたアンリエッタはその意図を果たす事は出来なかった。

結果的に今回の訪問は何の成果も上がらず、アンリエッタの中にリアに対する苦手意識を作っただけで終わった。

とある姫から、とある侯爵令嬢の話聞いたとある公女は、未だ見ぬ侯爵令嬢に姉に対して持っているのと近い苦手意識を感じるのだが、今回の事とは全く関係の無い話である。

また、とある公女「達」は妹から聞いたとある侯爵令嬢の話に首を捻る事になるのだが、それもまた関係の無い話である。

当の本人は、パートナー達やメイドに対し「良い仕事しました。」と語っていたという。

### 34話 女神

今私達はお出掛け中です。

行き先は、王都トリスタリア。

実は王都に行くのは初めてなのです。

イルに乗って領外に出るのは初めてだったりします。

私は危ないから嫌と言ったのですが、色々ネタバレをされたせいで承諾しました。

何ですか？この世界で一番危険なのは貴族って。

腐ってますね。

ふざけてますね。

デュ・テリエに産まれて良かったと改めて思いました。

魑魅魍魎の社交界？

老廃物の祭典じゃないですか。

そりゃ嫌われますよね。

デュ・テリエは特別ってよく聞かされて育ちましたが、他が底辺をブッチ切ってるだけじゃないですか。

家の領はポケモンが居る事を除けば普通です。

色々あってデユ・テリエからトリスタニアに向かっているわけなのですが、やっとトリスタニアが見えてきたという所で……。

『リリア……私帰って良い？』

「どうしました、コーティ。」

『あっちに行きたくない……。』

「あっちって……あちは目的地なんだけど？」

『……。行きたくない。あちは何かダメ。』

何と言いますか、コーティの目がウルウルしてます。そんな目をしてダメですよ？

私はトリスタニアに行かなきゃいけないのです。

ダメですからね。

『リリア……。』

「……。一人で帰りますか？」

『やだ……。』

「……。』

『……。我慢する……。』

「頑張ってください。」

『帰ったら、一緒にお風呂……。』

「良いですよ。」

『じゃあ、頑張る……。』

どうしたんでしょうか？

コーティが我侂言つなんて滅多に無いのですが・・・。

『：@?%&#\$彡¥\*!!!!』

これは幻の技くじたばたゝですか!!

・・・ダメです。

私の頭もおかしくなっていました。

『嫌だ〜!!か〜え〜る〜!!!!』

これは・・・酷い。

『・・・。』

あ、大人しくなりました。

ピタリと止まって鼻を押さえて固まっちゃいました。

「・・・臭い。」

『・・・鼻が曲がる!!』

『これは、キツイな。』

「コーティ、御免なさい。」

『……お風呂と同じベシッド。』  
「いくらでも……。」

コーティの鼻にはキツイ筈です。

「久しぶりね、リリア。」

「はいエレ姉さん。」

久しぶりのエレオノールさんです。

最近は何月の御宅訪問もとびとびなのです。

理由はエレオノールさんが忙しいのが理由だったりします。

エレ姉さんも21歳になってアカデミーでバリバリ働いて充実して楽しいと言ってるので構わないのですけどね。

ホントですよ？

寂しくないですからね。

「やっぱり会うたびに大きくなるわね。抱き締めるとよく解るわ。」  
「エレ姉さんも見るたびに綺麗になってます。」

抱き合って互いに褒めあう美少女と美女。

うん。

絵になつてゐるはずですよ。

エレオノールさんはホントに見るたびに綺麗になつてゐるんですよ。  
お胸は無いですが。

大丈夫ですよ。

まだ、成長の余地はあるんですよ。

カリーヌさんを見るとダメですが、カトレアさんを目指せば……

目標が妹というのはちょっと……いえ、少しだけ悲しい気がします。

……!!

吸つて〜、吐いて〜……吸つて〜……

……。

「エレ姉さん……。」

「どうしたの？」

「匂いが、キツイ……………」

ニヨキツと手が伸びてきました。

……………。

「ひたいふえすふえれふえーふぁん。（痛いですエレ姉さん。）」  
「仕方ないでしょうが！トリスタニアは臭いんだから！！」

「痛いじゃないですか、エレ姉さん。でも、王都がこんなに臭いつてどうなってるんですか？」

「これが普通なのよ！！」

「けど、建物内でもそんなに強い香水を使わなくても……………」

「悪かったわね。匂いがキツくて。」

「どんな香水使ってるんですか？」

ちよつと気になります。

「ちよつといきなり人の服に手を突っ込んでこないですよ。」

「今更ですよ。泊まりに来たときはいつも隅々まで体感してるんですから。」

「そういう事を言わないで。」

「エレ姉さんだって私の身体で触ってない所なんてほとんど皆無じやないですか。」

「……………／／。」

エレオノールさんって本当に初心ですね。

私が男だったら間違いないルパンダイブなのです。

「エレ姉さんは男の前でその顔をしてはダメですよ？」

「しないわよ！」

「なら良いです。絶対襲われますから気をつけてくださいね。私が男だったら唇奪われてますから。」

「……私のファーストキスを奪ったりリアが言わないで欲しいんだけど。」

「女の子同士はノーカンですから気にしないで下さい。」

「気にするわよ!!！」

「それじゃあ、そのうち責任取りますよ？」

「……リアって本当に女の子が好きなのじゃないの？」

「ノエルさんやメイドさんに毒されただけです。ヴァリエール家のメイドさんは憤み深いですが、家のメイドさん達は悪戯好きですからね。」

「また、あの女……。」

「嫉妬ですか？大丈夫ですよ。今日は一緒にお風呂に入りましょうね。」

「だから、あなたは!!！」

エレオノールさんも今更です。

一緒に寝なかつたり、一人でお風呂に入ったりすると拗ねるのに。

ツンデレって大変なのです。

結局矯正出来ませんでしたからね。

まあ、私やカトレアさんと居る時は基本デレですが。

その分、対ルイズでツンを発散してる気がします。

「それで、今日は何しに来たの？」

「え？何って？」

「トリスタニアに何か用事があるんじゃないの？」

「これが用事ですが？」

「……私に会いに来ただけ？」

「そうですが、迷惑でしたか？」

「そんなことない、寧ろ嬉しいけど。」

「なら良かったです。」

服の中を弄りながら「貴女に会いに来たの。」と言う10歳美少女。それに対し、「会えて嬉しい。」と、抱き締めながら言う21歳美女。

「……この図は不味くないですか？  
いつそのことお姉様って言うべきですか？」

「失礼します。お茶をおもて……。」

空気が……凍った。

お約束ですね。

ノックの音が聞こえなかったのも含めて。

「失礼しました!!」

Q・あれは誰？

A・猛スピードでドアを閉めたメイドさん。

「あっ、ありました。この香水ですね。」

「……………」

「ひよつとして、この香水って手作りですか？」

「……………」

「お母様に作り方を習ってみたらどうです？お母様得意なんですよ？」

「……………」

「エレオノールさん？」

凍り付いてしまった彼女は唐突に再起動し、その悲鳴が屋敷に

嫌……………！！！！！！

鳴り響いた。

「リリアは今『土』のラインだったかしら？」

「へ？」

「『へ？』じゃないでしょ、貴女の魔法の事よ？」

「いえ、話がいきなり飛びすぎてませんか？」

「何の事かしら？」

「え？」

「もう、仕方の無い子ね。良い？さっきから聞いてるけど、貴女の魔法のランクの事なんだから自分できちんと管理しなくちゃダメよ？」

「まあ『土』はラインです。」

「まだ10歳なのに優秀ね。その分なら学院に入学するまでにトラ

イアンゲルになつてるんじゃないかしら？」

「……エレ姉さん、何か変ですよ？」

「変？どこが？」

「……えつと、全部？」

「まあ、酷い事を言うのね。傷付いちゃうわよ？」

エレオノールさんは優雅にクスクス笑っています。

それはもう優雅に、そして優美に。

「……誰ですか、貴女は。」

確かにこのエレオノールさんは嘗ての理想の姿ではあるのです。  
クールビューティ、エレオノール公爵令嬢。

これは、正に『女神』……。

心なしか目つきも柔らかくなっています。

でも、なんと言うか……。

「私の事はもう良いから、貴女の事を聞かせてくれないかしら？随分間が空いてしまったから、色々あったんじゃない？」

「……これはこれで、良いですね。」

「まずですね、アクアが進化しましてシャワーズになりました。」

「シャワーズってエステル様のあの子かしら？」

「そうです、あの子です。」

「あの子冷たくて気持ち良いから夏に抱くと気持ちよそそうね。」

「今度連れてきますよ。」

「あら、ありがとう。」

このエレオノールさんはお姉様と呼ぶべきでしょう。

食事をした時に新生エレオノールを見たある犬は恐怖に慄おのいたらしいが、今は関係の無い話である。

「エレオノールお姉様、お風呂に入りませんか？」  
「そうね、久しぶりに一緒に入りましょうか。」

この反応も何時もと違うのです。

何時もは顔を赤くして「後で行くから先に行つてて。」と言つのですが。

「リリアそんなに見ないで欲しいわ。恥ずかしいから。」

「すみません。肌がとっても綺麗なので。」

「私の裸なんて見慣れてるでしょ？それに、貴女の肌も綺麗よ。」

「いえ、なんと言うかお姉様は神々しさがあります。」

「まあ、そんなに褒めたって何もあげないわよ？」

「本当ですよ？」

「ありがとう、でも私身体には余り自信が無いからそんなに見詰めないでね？」

「はい。すみません。」

この人本当にエレオノールさんですか？

エレオノールさんの事を知ってる人が声だけ聞いたたら間違いなく、

エレオノールさんに声が似てるねー」って言いますよ？

ヴァリエール家の皆さんが目の前で見たら「よく出来たスキヌニルだな。」って言うに決まっています。

おそらくカトレアさんですら「おねえ……さま？」って自信無さ気に疑えるくらいですよ。

ここにある種、完璧と言える美女が存在したのだが神の奇跡はそう長くは続かない。

その短い命はリリアーナ・デュ・テリエが事故で 真実事故である エレオノール・アルベルティーナ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールに抱き付いた拍子に互いの頭がぶつかるまで続いたという。

その後は普段通りに戻ったエレオノールは風呂場でリリアに弄ばれることになるのだが、それはまた別の話である。

余談ではあるが、この日エレオノール様とリリアーナ様が二人で居るときは決して邪魔をしてはいけないという不文律がトリスタニアのヴァリエール邸で作られた。

更に余談であるが、エレオノールはクールビューティーマードの事を何一つ覚えていなかったという。

今回の件とは全く関係の無い話であるが犬は「いつも通りが一番」と語ったという。

### 35話 く保護く

「ところで、あんたらは何してたのさ？」

「あなたとは酷い言い草ですね。マチルダさん一応これでもお嬢様なんですよ？」

「なんでそんなお嬢様が家の領地で狩りをしてるのさ。」

「ちよつと風の力が必要だったんですよ。それでアルビオンに滞在中というわけです。」

「風？風石の事かい？」

「まあ、そんな所です。」

ここは『白の国』アルビオンのサウスゴード地方です。色々あって、保護されました。

実際は食料調達で狩りをしてたら不審者として捕まってしまったわけなのですが……。そこで出てきたのがこのマチルダさんというわけです。

こんな所に女の子が一人で居てはダメだと言われ連行されてるので。

マチルダさんは優しく、護衛の人は警戒してる。

どっちかにして下さい。

連行されてるのか保護されてるのか判断に迷いますから。

私がこんな所まで何しに来たのかと言いますと、電気石つてご存知でしょうか？

電気石つてというのは熱を加えると帯電する性質の石なんです。

それに風の力を加えて更に電気を発するようにして『雷の石』の代用品にしてしまおうというわけです。

風石を何個積み上げてモイブイがサンダースにならないので、別の方策を考えてみたのです。

宝石ではトルマリンとかが有名ですね。

それで、探してみたんですがトルマリンなんてこの世界には存在しないということが解りました。

少なくとも、トルマリンという名では流通してません。

電気を発する石はないか？と聞いてみてもそんなモノは無い。と言われてしまいましたから、錬金で作って見たわけなんです、流石はトルマリンもどき。

ダメでした。

藁にもすがる思いで、風石と組み合わせると意外や意外、そこそこ電気を帯びたわけです。

色々調べてみると、風が強い日の方が電気が強いというのが解ったのでアルビオンまで出掛けてきたというわけです。

無断じゃないですよ？

お父様にはちゃんと、ノエルさんとアルビオンまで行ってきます。つて書置きをして来ましたからね。

お母様にはきちんと言ってきましたし。

「それにしても、アルビオンは流石ですね。何処かしら風が強いです。」

「なんとって空の上だからね。」

「そっちの、ノエルって言ったかしら？あんたは護衛か？戦えるようには見えないけど。」

「いえいえ、護衛はこの子達ですよ。」

「・・・この犬達と鳥が？主人を放って眠りこけてるのが護衛ってのはどうなんだい？まあ、強いんだろうけど。」

「相当強いですよ。」

「主人のあんた達がそう言うならそうなんだろうさ。」

「主人はリリアだけです。私はお友達と言ったところでしょうか？」

「ところでマチルダさんは貴族ですか？」

「そうだね。これでもけっこうなお嬢様なんだよ？第一あんた達だって貴族だろうに。」

「あれ？気付いてたんですか？」

「それだけ良い物を付けてて気付くなと言うほうが無理さ。森で野宿してた所から見てゲルマニアの貴族のお嬢様が力試しに旅に出た

つて所かい？」

「いえいえ、これでもプライドの無駄に高いトリステイン貴族ですよ。」

あれ？

流石にトリステイン貴族つてのは無理がありましたか？

普通は居ませんからね。

こんな貴族。

それがトリステインとなると信じれないのも頷けると言つものです。

「……没落貴族つてわけでも無いんだろう？」

「バリバリのお嬢様です。」

「家名は？今までは何か理由があるもんだと思つて聞かなかつたけど、トリステイン貴族でその態度は流石に気になるね。」

「デュ・テリエですよ。」

「デュ・テリエつて言つたらあの盗賊の墓場の？」

「……何ですか？その『盗賊の墓場』つて。」

「街中にでも何処にでも幻獣が居て盗みに入れば即殺されるって有名だよ。若しくは幻獣の里。」

「……『幻獣の里』でお願いします……。」

「リリアは知らなかつたの？」

「まさか……ノエルさんは知つてたんですか？」

「以前は『幻獣の里』がポピュラーだったけど、近年は『盗賊の墓場』の方が有名よ。」

「……最近移民が少ないのはそれが原因ですか？」

「逆ね、増えすぎたから私達が流したのよ。」

「……。」

マチルダさんに肩を叩かれました。

頑張れ！って目で。

「盗賊は最近めっきり減ったし、住民の移住統制が出来るし万々歳ね。」

「……家の領地って……。」

「まあ、歓迎するよ。」

「目立ちたくなくて野宿してたんですけど……。」

「諦めな。私に見付かったのが運のつきだね。」

「……やっぱりこれは連行されてるんだと思うのですが。」

「そんなことしないよ、これはあくまで危ない森の中で野宿している女の子を二人保護しただけだからね。」

「出来れば早く開放して下さいね？」

「オーク鬼10体と野獣の群れ討伐の報酬分は逃げられないと思いな。」

「諦めましょうリア。見付かったのが運の尽きです。」

「襲ってきたから排除したのと、御飯をとってただけなのに……。」

## Side マチルダ

最近平民達に被害を出してるオーク鬼と野獣の群れを退治するのに良い機会だからと付いて来てみたんだけど、いざ見つけてみるとオ

「ク鬼は既に地面に落ちていた。  
傍には美少女と美女が。」

私達が見た光景が確かなら、この子達があいつらを倒したような  
だけど信じられない。

しかし、二人の傍には見た事のない動物が居たからあいつらが強い  
のだろうと思った。

いざ話を聞いてみると、森に住み着いた野獣も食べてしまったよう  
だった。

私達は何をしに来たんだろうか？

まあ良い、報酬分は歓迎してやるわ。

「実際の所目的は何なんだい？」

「目的も何も、最初に言った通り風の力ですよ？」

「風石くらいデュ・テリエにもあるだろうに。」

「欲しいのは強風ですからね。」

「強風？そんなのどうするんだい？」

「そこは企業秘密ということ。」

「それなら良いさ、一応客だからね。聞かないでおいてやるよ。」

「ノエルさんは何処行っただんですか？」

「あの子は今風呂だよ。」

「……………え！？何で一人で入ってるんですか！」

「さあ？今日は一人で入りたいそうだよ。」

「後でお話しなきゃいけませんね。」

「リリアは私と入るかい？」

「そうですね。後で入りましょう。」

Side out

・・・5日後。

朝、眩しくて目が醒めました。  
カーテンを閉めて寝たのですが、眩しくて目が醒めました。  
それに、バチバチいつてました。

いや、驚きましたよ。

「これで完成ですかね？」

『それを、僕にぶつけるの？』

「いやいや、ちょっと当てるだけです。成功したら何ともないですよ。」

『失敗だったら？』

「・・・さあ！やりましょう。」

『嫌だ~~~~!!!!犯される~~~~!!死ぬ~~~~!!!!』

「コーティ！」

『アイサーー!』

『やめてー!コーティの馬鹿　　!!!!』

「さて、足を縛りまして。」

『止めて、焦げる・・・。毛が焦げる。』

「フル・ソル・ウインデ、『レビテーション』。それじゃ、落としますよ。」

『止めてー!ー!ー!ー!』

「大丈夫です。水の秘薬は準備してありますから。」  
『ぎゃーーーーー』

落下。

結論から言って……無事進化しました。

『リリアなんて嫌い……』

「まあ、そう言わずに。無事進化できたんですから。これでようやくエクレールって名前と一致しましたね。」

『産まれたときから「稲妻」って決められてたってことは、産まれたときから焦がされる運命だったんだ……』

「大丈夫ですって焦げてませんから。」

なつき度が2下がった。

36話 くラグドリアン湖

S i d e アンリエッタ

今日はお母様の誕生会をラグドリアン湖にて開いております。

毎日毎日人に会ってばかりで飽き飽きしていた時に彼女と会いました。

「お久しぶりで御座います、姫殿下。」

「・・・リリアーナ様。」

「ん？」

「いえ・・・リリアーナ殿。」

「そうでございますね。トリスティンの姫であるアンリエッタ様がない侯爵家の娘である私に「様」を付けるなどあってはならぬことでございますからね。」

「いけません。」

「今は人前なのでから。」

「王家の一員として屹然とした態度でいなければ。」

リリア様に会う度に如何に私が無知なのか思い知らされたせいで何時の間にか私は『リリアさんは私よりずっと偉い人なのでは?』と思うようになって自然と呼び方が『リリアー又さん』から『リリアー又様』に代わってしまいました。

毎度それを注意されるのですが、その度にリリア様の方が私より偉い人だと思ふ気持ちが強くなってしまいました。

その結果、今では私が最も頭の上がない人になってしまっています。

ですけど、とても良い人なのは解っているのです。

最初は怖い喋り方だったのですが、2度目からはとても私によくして下さって、色々と教育もして頂いております。

「お元気そうで何よりですわ。」

「姫殿下もお元気そうで何よりで御座います。」

リリア様はにっこりと微笑まれました。

良かった、これでよかったです。

いえ、普段どおりにしていれば良いのですがリリア様の前となるといつもとは違い緊張してしまいますから、心配なだけです。

「では、楽しんで行って下さい。」

「ありがとうございます御座います。」

そう言ってリリア様は去って行かれました。

S i d e o u t

・・・いけませんね。

あの子は間違いなくいつか人前でボ口を出します。

再教育が必要ですね。

仮にも王家が臣民である筈の私を、様、付けて呼ぶ事があれば、面倒な事になるのが解り切ってますから一刻も早い再教育を！

ボ口を出す前に！！

私の平穩のために！！！！

色々と面倒な事は放っておいて水の精霊さんの本体にでも会いに行きますかね。

未だ本体に会った事は無かったりします。

『リリア、誰か居る。』

「・・・誰ですか？」

呼び掛けようとすると、コーティが警戒をしています。

「誰かが園遊会から抜け出ていたのでね、気になって付いて来てしまったんだ。」

「あまり良い趣味とは言えませんが、名乗ったらどうです？焼かれる前に。」

「アルビオン王国、皇太子ウエルズ・テューダー。」

「貴方が名高いプリンス・オブ・ウエルズですか。失礼いたしました。」

メンドくさいのに見付かってしまいました。

さっさとどっか行ってくれませんか？

「いや、レディの後を付けるような無礼をした私が謝るべきだろう。すまなかった。」

謝らなくて良いからさっさとどっか行ってくれませんか？

「君の名前を覚えてくれるかい？」

『馴れ馴れしい。』

「これは、失礼を。リリアーナ・デュ・テリエで御座います。ウエルズ殿下。」

「君があゝ『盗賊の墓場』の……。」

『失礼な皇子。』

黙りなさい皇子。

「失礼ながら申し上げますが、我等が地の幻獣はその様な薄汚い盗賊を討伐する為に居るではありません。」

「そうだったね、いや度々失礼をした。」

「いえ。」

『さつさとどっか行ってくれない？』

さつさとどっか行ってくれませんか？

「テリエ殿は何故ここに？」

「リリアで構いませんよ。皆そう呼びますから。」

「では、リリア殿は何故ここに？」

『リリア……墓穴。』

……名前で呼べとか自分で面倒を増やしてどうするんですか  
！？

私の馬鹿……。

「ラグドリアン湖に来れば水の精霊を一目見る事が叶うかと思いま  
して。」

「そうだね。ぼくも水の精霊を見たことは無いが、さぞ美しいのだ  
ろうね。」

『私達は見た事あるけどね。』

はよどっか行けよ……。

「名残惜しいが、ぼくは失礼するよ。風邪など引かぬよう気を付け  
てくれたまえ。」

「ウエールズ殿下も。」

やっと行きましたね。

『空気の読めない皇子だね。』

「ですね……本当に。」

「こんにちは、水の精霊さん。」

「つい先日会ったばかりだがな。」

「あれ？ひよっとして完全に繋がってるんですか？」

「その通りだ。」

「それでは、ラグドリアン湖では初めまして。」

「そうだな。初めまして。」

S i d e    ウェールズ

散歩をしていると、水の音が聞こえた。

また、リリア殿かな？

「誰？」

声からするとリリア殿では無いようだったが、誰だろうか？

「無礼者。名乗りなさい。」

ぼくは今日湖に出る度に無礼を働いているな。

「怪しいものじゃない。散歩をしているだけだ。君こそこんな夜更けにどうして水浴びなんかしてるんだい？」

「だから名乗りなさいと言っているではありませんか。私はこれでもさる国の王女です。面倒な事になる前に、名乗って立ち去りなさい。」

王女？まさか……。

「王女って、まさかアンリエッタ？」

水浴びをしていたのはアンリエッタだった。

会えるとは思っていたけれど、こんな形で会うとは少し予想外だったな。

「先程もテリエ殿に無礼をはたらいてしまっただね。」

「テリエ？デユ・テリエ侯爵ですか？」

「いや、その娘さんだよ。」

「髪の色はエメラルドですか？」

「そうだね、見事なエメラルドグリーンの髪だったよ。」

「知っているのかい？」

意外だな。

アンリエッタが1貴族の娘を知っているとは。

「はい！リリア様は私の「リリア様？」……リリアさんは私の・  
」

リリア「様」？

彼女は一体何者なんだ？

S i d e    アンリエッタ

いけませんリリア様と行ってしまいました。

これがリリア様に知られてしまうと、怒られてしまいます。

いけません。

なんとか誤魔化さねば……！

でも……リリア様は、私の何なんでしょうか？

友達？先生？

……。

わかりません……。

S i d e o u t

……数日後。

ちよつと、再教育に行きましょう。

アンリエッタの天幕に入るのは顔パスなのです。

……。

「ルイズ………何してるんですか？」

「違うもん。私はルイズじゃないわ。姫殿下よ!!」

「自分の事を『殿下』なんて言う姫が居るわけないでしょう。いつも言っていますますがもう少し考えてモノを言いなさい。」

「……リリア？」

「私以外にリリアが居るのなら教えてください。それで、アンリエッタは何処です？」

「……。」

「だんまりですか？」

「……言えないもん。」

「そうですか。分かりました。」

仕方ありません。

少しお話しなくちゃいけないようですね。

「さてルイズ。私の名前を言ってみなさい。」

「それだけは止めて！！……お願ひします、言えないの。」

「名前を言ってみなさい。きっと楽しいわよ。」

「いや……やめて……。」

「ルイズ、大好きよ。だから、お姉ちゃんに教えてくれないかしら？」

「違うもん。リリアはお姉ちゃんじゃないもん。」

「じゃあ、名前を言って御覧なさい。」

「……リリアーヌ……。」

「リリアーヌ？」

「リリアーヌ・デュ・テリエ……。」

「そうね。私は前から言ってるわよね？私には全部正直に話さないって。」

「……うん。」

「そうね、じゃあ次の質問よ？アンリエッタは何処？」

「……言えないもん。」

ふう。

仕方ありません。

ルイズに押し掛かろうとしたら

「ラグドリアン湖に水浴びに行くから代わりに寝ててって言われました。」

「良い子ね、ルイズ。素直な子は好きよ。」

とある皇子と、とある姫が恋に落ちたのと同じ時にあったもう一つの物語である。

・・・数月後。

「それで、怒って縁を切っちゃったわけですか？」

「その通りだ。我に対し『歩くな、床が濡れる』とは何様だ、単なる者の分際で。」

「そりゃ怒りますよね。水の精霊に向かって濡れるから歩くなつて・・・。それで、モンモランシ伯爵に水をブツケテ家に愚痴を言いに来たわけですか。」

「構わぬだろう。普段我に散々『セバスチャンが苛める』等と聞か

せているのだ。」  
「そりゃ、構いませんけどね。」

二人は仲が良い。

人間と精霊にしては驚く程に。

普通に会話をするくらいに。

S i d e    デュ・テリ工侯爵

先日からトリスティン貴族の間には社交界への出ている者も出ていない者も関係なく、ある話で持ちきりだ。

その話とは、モンモランシ家が干拓事業に失敗し、更に水の精霊を怒らせて交渉役から外されたということだ。

家に水の精霊が居るため、今回の件とはなるべく関わらないようにしていた私の耳にも話が入ってくるのだから本当のことなのだろう。  
というか……水の精霊よ、リリアと喋ってる暇があったらモン

モランシ伯爵への怒りを解いて貰えぬだろうか？

私が口を挟むと余計に変なことになりそうだから言わぬが……。

私に出来るのは友人の好で金の返済を無期延期にしてやることだけだ、すまぬな。

……更に困った事になった。

交渉役交代の儀式をしにラグドリアン湖に向かった一団が水の精霊と対話をした所、『我は既に別の者と盟約を交わしている。別の単なる者と交渉をするつもりは無い。』と言われたというのだ……。

これは、不味いのではないか？

嫌な予感がビシバシと伝わってくる。

別の者と盟約を交わしているから、トリステイン王家との盟約はもうどうでも良いよって言っているのと同じではないか？

そして、私はその盟約の相手に心当たりがある。

不味くないか？

・・・これはリアに黙っておこう。  
関わらぬのが一番だ。

面倒ごとに巻き込まれなければ良いのだが・・・。

Side out

「所で、次の交渉役って誰なんです？」

「そんなモノ知らぬ。認める気も無い。」

「どうしてです？」

「既に別の者（盟約の相手）がいるからだ。」

「別の者（交渉役）が居るんですか？知りませんでした・・・。」

他に交渉役が居るのなら構いませんね。

でも、モンモランシーは交渉役にしてあげて欲しいのです。

あの子頑張っていましたからね。

「モンモランシーって解りますか？」

「何度かこの家に来た事のある者ならば解る。汝にへばり付いていたアレなら。」

「多分そのアレです。あの子がラグドリアン湖に行ったら話だけでも聞いてやって欲しいのですが。」  
「それくらいなら構わぬ。話だけならば。」  
「よろしく願います。」

・・・2月後。

「水の精霊が王家との対話に応じてくれないらしいのよ。『水』のトリステインなのに、水の精霊に見捨てられてしまったのかしら？ リリアは何か知ってる？」  
「私は何も聞いてませんね。交渉役に任せたら良いんじゃないですか？」  
「それがね、何でも交渉役 of 任命の儀式にすら水の精霊が応じてくれないらしいの。」  
「水の精霊さんはもう別の交渉役が居るから大丈夫って言ってましたよ？」  
「そうなの？」  
「そう言っていましたよ？」  
「じゃあ、その内解決するのかしら。」  
「きつとそうです。」  
「それにしても、成長したわね。昔はあんなに軽かったのに。」  
「その言い方じゃあ私が重いみたいじゃないですか。」

「ごめんなさい。そういうわけじゃないのよ。ただ、こっやって抱き締めると色んな所が成長してるなって思ってる。」

そりゃそうです。

もう12歳ですからね。

ただ、お母様は私以上に色気が増してますけど。

「こことか……こことか……ここもね。」

エッチな手つきで触られました。

膝の上に乗ってる私に出来ることは身を任せる事だけなのです。

その後も私の成長具合を確かめられました。

……色々と。

Side デュ・テリエ侯爵

……

エステルに聞いたところ、リリアが言うには既に交渉役は別に居るらしい。

しかし、昨日未だ精霊が交渉に応じてくれないと対策会議に参加させられたばかりだ。

「……………これは最悪の展開か？」

「リリアは人間と精霊が一緒の様に思っている節がある。というか、確実に友達と思っている。」

「水の精霊がその様な扱いを許す。」

「盟約の相手はもしかしなくとも……………」

「リリアーヌ、聞きたい事があるんだが。」

「どうしました？」

「水の精霊と盟約とか交わしてないよな？」

「交わしましたよ？」

「ドッカーーン!!」

「……………気分的にはそんな感じだろうか？」

「限りなく黒に近い黒が実は真つ黒でしたというだけなのだがな。」

「水の精霊に話を頼んできてくれないか？新しい交渉役を選んでやつてくれ……………」

「交渉役はもう居るって言ってましたよ？」

「それにおそらく齟齬がある。」

「はあ……………」

・・・10分後。

「トリステイン王家とかどうでも良いって言われました。」

「・・・最悪だ。」

「どうしました？」

「要するに・・・だな。『古い盟約とかどうでも良いよ、リリアが居るから』って事だ。」

「つまり？」

「面倒ごとが増える。」

「・・・ちよっと頼んできます。」

こうして、トリステイン王家が水の精霊との盟約を喪失する事は回避された。

S i d e o u t

### 37話 くグリフォンく

さてさて、色々と召喚して随分経ちました。

最近は進化ラッシュなのです。

とは言っても、技を使えるようになるまで腕輪を使ってBボタンキヤンセルもどきをやってたりしたので本来より随分と遅く進化して  
ますが。

コーティなんてもう11歳ですし、イルだって10歳です。

年が経つのは早いのです。

強くなるには充分な時間なのです。

何処かの異次元で言えばレベル50以上といった感じですよ。

ティアだってオーロラビームを覚えてトライアングル？それが何？  
って感じです。

「渦潮」使われたら凍らせるのも間に合いません。

ガイアだってロックブラストが使えますからあれを纏ってタックル  
されたらたまったものではありません。

「角ドリル」とか音がアレです。

耳がキンキンします。

命中しなくても十分な音波攻撃ですよ？

「ディテクトマジック」使った感じではそろそろ「石刃」や「地震」とか使えそうです。

普段の特訓で最弱の称号は私の物ですよ？

トライアングルなのに……。

私の全力の『フレイムボール』とコーティの「火の粉」が同じレベルとかなんて理不尽な世なのでしょうか……。

セリアなんてハクリユウに進化する前から電撃、炎、氷、竜、天候変化まで何でもござれです。

カイリユーになったら最早チート……。

山で会った守護竜なんて普通のカイリユーの倍くらいありますから、  
どんだけ？って感じですよ。

お父様の火竜とどっちが強いか聞いたらハクリユーの段階で『負け  
はしません』って……。

自信満々に言ってるるところからしてタイムマンなら勝てるんですかね？

この子達に体積は関係無いんでしょうね……。  
身体がちっちゃくても関係無いです。

この前私のゴーレム軍団とルカリオのアーロンが組み手やってたんですけど5V51で普通に勝ってますし。  
まだまだ余裕らしいです。

戦闘訓練もしてないメリープ達に立ち向かってあっさりと蹂躪された盗賊も居ましたね。

自分の身を自分で守れる羊なんて管理が楽すぎます。

376

……人間と言うのは何とちっぽけな存在なのでしょうが？

いえ、こつちの世界はまだ対抗出来てますね。  
メイジが居る分。

科学技術無しで一応戦えるんですから。

トライアングルって強いはずなんですよ？  
私の場合『水』『火』の2系統がトライアングルですし。

ポケモン達は他にも色々です。

デユ・テリ工領には普通の幻獣も多く住んでいる。

比較対象である他領には余りにも住んでいる数が少ないために判断しかねるが、かなり多いと言って良いだろう。

何故なら、幻獣達が古より色々と排除し続けてきたからだ。

そのおかげで、他領では乱獲され数を減らしているハルケギニアの珍しい幻獣が森の中に普通に住んでいるのである。

森の中で馬に乗って爆走している少女も度々目撃しているらしい。

「姉様見て！この子可愛い」

・・・見詰められています。  
キューって鳴いています。

可愛い。

大きくなると可愛いと言うよりもカツコイイですけど、ちっちゃいと可愛いものですね。

コーティも今となつては大きいですが、産まれたばかりの時はちっちゃかったですもんね。進化した今も勿論モフモフで可愛いですけど。

「それで、この子どうしたんです？」

「森でお昼寝してたら懐かれちゃったの。」

「そうやって大人しく抱かれてるとヌイグルミみたいね。」

「うん。可愛い。」

「産まれたばかりみたいだけど、親は居なかったの？」

「居なかったよ。だから連れて来たの。」

「コーティ、この子の親を探して来てくれませんか？攫われたと思つて暴れてちゃいけないので。」

『任せて！』

コーティがダツシユで森に向かって行きました。

自分が乗ってないと良く分かりますが・・・滅茶苦茶早いですねあの子。

もう見えなくなってます。

「お姉様、この子飼っても良いのかな？」

「その子の親が良いって言えばお父様も許してくれると思いますよ？」

「じゃあ、聞いてみるね！」

「コーティが帰ってくるまではする事無いからその子と遊んでましよう。」

しかし、グリフォンの子供とは……。

よく懐きましたね。

私にも懐いてるところを見るとグリフォンの子供って実は人懐っこいんですかね？

そういえば、大人のグリフォンも私が近づいても逃げませんし襲ってきませんね。

「レティ、その子は男の子？女の子？」

「……男の子？」

「うん。男の子ですね。」

レティシアがちっちゃいグリフォンに『レビテーション』を掛けて

グルグルさせたりして遊んでるとグツタリしてしまいました……。

「レティ……。」

「……ごめんなさい。」

「お水飲む？」

『コンデンセーション』で水を出します。

こういう時には魔法って便利ですよ。

水を汲まずとも出てきます。

力なく起き上がりレティの手に出した水をペロペロと舐めると

「ひゃっ！」

バシヤツ。

「レティ。」

「くすぐったかったんだもん。」

「我慢なさい。もう一回やりますよ。」

今度は水をぶちまけなくて済んでますが、定期的にビクツとなつて  
ます。

我慢してもらうしかありません。

空中で保っていれば良い事は知ってましたがレティが可愛いので眺  
めてます。

お風呂に入った時にもてあ……洗ってあげると上がる頃には

毎回グツタリしてますもん。

因みに、レテイシアは私とノエルさんが教育したのでエレオノールさん曰く齡8歳にして並みの魔法学院生1年生よりも上らしいです。

その他の能力はそこらの貴族よりもかなり優秀です。

せいぜい『風』の上位クラスのドットなんですけどね……。  
私は未だに『土』の上位クラスのラインということになってるの  
ですけど、それでもほとんどの魔法学院よりも上らしいです。

魔法学院ってレベル低いんですね。

「戻ってきましたね。」

『連れて来たよ。』

「わあ〜おっきい。姉様おっきいよ。」

確かにデカイですね。

普段はイルかコーティに乗って見遠くからてますから正確にはわかりませんが、よく見る子より大きいのは確かです。

「さあ！レッツ通訳。」

『通訳するね。』

「誘拐じゃないですから安心して下さい。」

『かくかくしかじか……。』

「姉様この子家に置いてもいい？」

『かくかくしかじか……。』

「それで、なんて言ってます？」

『私もここに住むなら良いよって言ってる。』

「じゃあそれでいきましょう。」

「飼っても良いの？」

「良いそうですよ。」

「グリフォンさんありがとう！」

「かくかくしかじか……。と、言うわけでこの子達家に置いてくださいね？」

「……。レイシアも規格外……。か。」

「どうしました？」

「もう良いさ。私はもう気にしない事にした。」

「この子人懐っこいですから撫でてみてくださいよ。お父様にも懐きますから。」

「そうは言っても、まだリリアとレイシアしか撫でてないのだから？」

そんな警戒しなくても大丈夫ですってば。

レイティだけならまだしも私にも懐いてるんですから。

「大丈夫ですつて。」  
「なら……。」

レティがお父様のほうにミニグリフォンをズイッと出しました。

……噛まれました。

それはもうガブツと。

「……。」

お父様、そんな恨みがましい目で見詰めてください。

「イル・ウォータル・デル『ヒーリング』」

「さあ、レティお父様の邪魔になりますから逃g……外に出ましようね。」

「うん！お父様頑張つてね！」

結局このミニグリフォンは私とレティシアとお母様にしか懐きませんでした。

親グリフォンは私とお母様にしか懐きませんでした。

人懐っこい筈だったんですが……。

38話 く乱心く (前書き)

メドローアは究極的に言えば、ただの『マジック・アロー』

### 38話 く乱心く

昨日の話なのですが、久しぶりに海に向かって『メドローア』を打ってみました。

見たままを言うと、海が割れました。

勿論海が割れたと言っても、海底が見えるなんて事はありませんけどね。

そして『メドローア』にはラインとかトライアングルという概念が無いというのが判明しました。

他のスペルはランクが上がれば運用効率が上がるのですが、メドローアは変わりません。

一応限界まで込めたんですけど、昔打った時と同じくらいしか精神力を込められませんでした。

勘ですけど、込める精神力を増やせば威力が上がる筈です。感覚でなんとなく分かります。

つまり、メドローアの精神力分が今の私が一度に扱える最大の精神力量ということですよ。

扱える量が増えても威力はこれ以上要りませんけどね。

1個人が戦略兵器です。

スクウエアスぺル？

何それ？って威力ですからね。

傍で水の精霊さんも見てたんですけど「すさまじいな。」っていわれました。

相変わらず禁じ手です。

この魔法は使う機会があるのか疑問です。

別の魔法でも開発しようかと考え中なのです。

自分で悦に入ってるしかないメドロアは少し悲しいものがあります。

最近の私は実にお嬢様してます。

お父様にアンリエッタへの教育がバレたせいです。

庭でお茶してる時にお父様が近づいてるのに気付かず、様付けで呼んだのが原因です。

再教育は徒労に終わってしまいました。

お父様に全てをゲロったアンリエッタ……。

教育内容を知ったお父様に、泣いて頼まれたので慎ましく生きてます。

構いませんけどね。

深窓の令嬢というのも悪くありません。

しかし、社交界に行く目立つのが嫌です。

慎ましく生きだしてから社交界に顔を出し始めたんですけど、非常に評判が良い。

自分で言うのもあれですが、結構な人気者です。

金が目当ての奴は目で分かりますからお父様に報告するというのが趣味と化しています。

何故分かるのか？

なんとなくです。

商人と違って、自分で稼いでやるぞって目じゃないですから不快です。

貴族は単純にお金に群がってるだけです。

そして気付いたことが1つ、お母様もお父様も私の婿候補を選別してる様です。

今のところお母様達の『リリア（デュ・テリ工家）を任せられる人リスト』は空っぽ。

私からしても「皆さんお話になりませんことよ、オホホホホ」なので安心です。

セバスチャンによるとお父様達は私に家を継がせるつもりらしいので、選考基準が滅茶苦茶厳しいみたいです。

言ってしまうえば、面接するまでもなく終了ということですね。

仮にお母様の面接を通っても次に待ってるのは私の面接。

私の面接と同時進行でポケモン達の面接があります。

その次は能力テストですから、私と同じ年の13歳やそこらの甘たれ坊主共が合格出来るとは思えません。

頑張ってくれたまえ諸君！

・・・1年経ちました。

「お嬢様どうなされました？」

「・・・魔法学院ってこれを教えてるんですか？」

来年魔法学院に入学するので様子見も兼ねてお父様に頼んで教科書を手に入れてもらったのですが、内容が酷い・・・。

魔法学院に通う子供は基本的に有力貴族の子息・子女でエリートって言ったのは誰ですか！？」

「以前頼まれた去年の教科書ですか？私にも読ませてください。」

最初は普通に読んでいたのですが、ページが進むに連れてセバスチヤンの顔がみるみる険しくなっていくます。

「旦那様の時はもつと高度なものを教えていたのですが・・・。」

「・・・魔法学院って行かなきゃ、ダメ？」

「ダメです。勉強するつもりで行かれるのは止すべきですな。」

「エレオノールさんの話は冗談半分で聞いてましたが、冗談じゃなかったみたいですね。」

「何とおっしゃっていたのですか？」

「トライアングルに近い『土』のラインで魔法学院の大半よりも上らしいですよ。」

「・・・お嬢様は今どんな感じですか？」

「『水』はそろそろスクウェアに届くと思います。『火』は当分先  
ですね。『土』『風』は上位のラインといった所ですね。何かきつ  
かけがあれば『火』はすぐにでもスクウェアになれると思いますけ  
ど。」

「『火』をスクウェアにしたいのなら何かに怒ってみますか？」

「例えば？」

「……魔法学院のレベルの低さなどは？」

「呆れのほうが強いから無理です。」

「……」

「……」

「そういえば、学院ではなんと二つ名は何と名乗るのです？」

「召喚の儀式をやって系統がはっきりするまでは『土』のラインと  
いうことにしておいて、二つ名はその時決めると言うつもりです。」

それまでは、仕方ないですから『火』と『水』は極力セーブします。」

「それが良いですな。くれぐれも両方が得意などとバレぬよう気を  
付けて下さい。」

「分かってます。面倒ごとは御免ですから。」

「久しぶりですね、モンモランシー。綺麗になりましたね。」

「ありがとうリリア。私ラインになったのよ。褒めて。」

「おめでとう、よく頑張りましたね。」

「やっとりリアに追いついたわ。」

「そうですねー。私もウカウカしてられません。」

棒読み。

「でもリリアはすぐにトライアングルになっちゃうのよね？」

そんなに見詰めないで下さい。

・・・罪悪感が。

「私、もっと頑張る。リリアと一緒に良いもん！」

あと二階級頑張ってください。

でも『火』ならまだトライアングルです。

あ！『風』と『土』もまだラインですからそっちならきつと追いつけますからそっちを目指して頑張ってください……。

「頑張りましたよね、モンモランシー。」

貴女ならきつとやれる！

スクウェアになっちゃうかもしれないので『火』に追いつくのは無理でも、『風』と『土』なら魔法学院卒業までには追いつけます！

・・・多分。

Side モンモランシー

干拓事業を失敗してから、来る機会の無かったリリアの家に本当に久しぶりに来ました。

久しぶりに会ったりリリアはすごく綺麗になっていて。

この子は昔から綺麗だったのだけど、思わず見惚れてしまった。

抱きつこうと思ったけど、恥ずかしくて出来ないし……。

よく昔の私は躊躇わず抱きつけたものだと思うわね。

せつかく、リリアと話していたのに私の超えなくてはいけない壁が来ました。

この人だけは超えなくちゃいけないのよ！

超えなくちゃいけないのに……。

「あら、モンモランシー随分大きくなったわね。」

「……。ノエルさん。」

「貴女綺麗になったわね。見違えたわ。」

「貴女がそれを言いますか！！」

何が「綺麗になったわね。」ですか！

最後に会ったときより更に綺麗になってる貴女が言いますか！？

エステルさんもリリアもだけど、この家は美容に関して何かとんでもない秘密があるに違いないわ。

何よ、このスタイル！  
卑怯よ！

他のメイドさんもなのよ！

誰かと結婚でもなんでもして、メイドなんか辞めなさいよ！！

「（私何か悪い事言ったかしら？）」

「（そんなことは無いと思いますが。）」

「二人でコソコソ話さないで！！」

「どうしたの？そんなに怒って。」

「ノエルさんは綺麗になっただけで言ったただけですよ？」

「.....」

悔しい。

この二人が並んでると、私自身『良いもの見たわ』って思ってしまったのだから尚のこと性質が悪い。

結局ノエルさんを認めてしまっているのだから。

S i d e o u t

「モンモランシーがヒステリックになってなかった？」

「やっぱりそう思いますか？」

「ええ。昔は褒めたらお礼を言ってきたわ。」

「どうしちゃったんでしょうか？」

「実家の借金でストレスを溜めてるんじゃない？」

「お父様は待つてあげてるみたいですが、やっぱり厳しいんでしょうか？」

「私達が財政状況を聞くわけにはいかないけど、あの様子じゃ・・・。」

「ストレスはお肌に悪いのに・・・。」

「せめて、石鹸を贈ってあげましょうか？せっかく綺麗な肌なのに勿体無いわ。」

「至急送りましょう。」

・・・ノエルも暢気な家風に染まっている。

石鹸を送られた金髪ロールの少女は「嫌味か、あの女！！！これで、もっと綺麗にならなきゃリアに相手にして貰えないわよって言うたいのか～～！！！！！」と、ご乱心するのだが数日先の話である。

### 39話 くろりコン

Side 時期くろりコン

どうやら、この地の幻獣は伝承通り僕の力が効かないらしい。

領に入った途端に襲われるし、触っても一瞬動きが鈍るだけで、その後は構わず襲ってきて僕の支配下に置けない。

空に逃げれば鳥に襲われるし。

おまけに、なんだい？このスピードは。

アズーロが全力で逃げなければ追いつかれそうになるなんて。

三羽でこれだ、もう少し増えたら詰むね……。

何故か、鳥や幻獣が襲ってこなくなった。

本当なら今の内に全力で逃げたいところだけど、アルビオンの方がそろそろきな臭いからトリスティンを自由に動き回るなら今が最後だ……。

デュ・テリエの幻獣が僕の力で制御出来ないなら、当主に協力して貰うしかない。

損な役回りだね、本当に……。

S i d e o u t

ここは私が作ったログハウスなんですが、今この場には異物が交じっています。

というか、ここに家のメイドさん以外を入れたのは初めてですね。

目の前には転がった金髪。

外にはく蔓の鞭で縛られた風竜。

優男風的美男子ですが、私の趣味じゃありません。

何故か？

ロリコンの臭いがするからです。

「コーティ、この男はロリコンですか？」

『違うね。変態だよ。』

「他の皆はどう思う？」

『『『『変態。』』』』

「それにしても、何時まで寝てる気ですか？……スリープ・

クラウド』強すぎましたかね？竜モイルの＜催眠術＞でぐっすりですし。」

『私のせいかな？』

「スクウェアの『スリープ・クラウド』よりも強いのは確かでしょうね。」

『……そうかもしれないな。』

「妙な力を使う敵が居るって言うから問答無用で眠らせてみましたが、失敗でしたかね。男のほうは拘束で充分でしたか？」

『外の風竜が成竜だからな、只者ではあるまい。油断するよりは良い。』

「そうですね、成竜には驚きました。メイジじゃないみたいですから、自分で馴らしたみたいですが……。」

『波動が乱れた、起きるぞ。』

「その感知力って便利ですね。きつちりモニターしといて下さい。」

「了解。」

ルカリオってどんな感じで人を見てるのか興味ありますが、人間の私には叶わぬ願いですか……。

「……ん、……僕は眠らされたのか……。」

「おはようございますわ。よく眠ってらっしゃいましたわね。」

『いつも思うけど、リリアはキャラ変わりすぎだと思っ……。』

黙らっしゃい……！

他人には猫かぶるのが普通になっちゃたんですから仕方ないんです。

「これは美しいお嬢さん。どうやら僕はあなたに眠らされてしまったようだね。」

「あら、お上手ですわね。眠らせてしまいましたのは申し訳御座い

「ません気付いた時には大きな竜が目の前に居て驚いて思わず……。」

「いや、あなたのような美しい女性に眠られるのなら本望だよ。」

『燃やしたい。』

「それで、何をしにこの地へいらっしゃったのですか？旅人のようには見えませぬが。」

「いえ、旅人です。僕はあなたのような美しい方に出会う為に旅に出たのですから。その旅の目的を達成できて僕の身は歓喜に震えているよ。」

『変態。』

最初に竜について聞いてくるかと思いましたがこの男、相当の狸ですね。

「まあ、私等より美しい方ならたくさんいらっしゃいますわよ？」

「それは、素晴らしいことを教えて頂きましたね。僕の旅はまだまだ続くみたいだ。」

『無節操。』

「お名前をお聞かせ願いますか、ミスタ？」

「これは失礼した。僕とした事が美しいレディに会えた喜びで名乗る事を忘れてしまうなんて。僕はジュリオ・チエザーレ。僕に貴女のお名前を尋ねる名誉をお許しいただけますか？」

『教えちゃダメ。きつと呪われるよ。』

……ジュリオ・チエザーレ。

ギャグですか？

ああ、面倒くさい予感がします。

明らかに国外のスパイか何かですよこのロリコン。

S i d e     ジュリオ

僕とした事が、いきなり眠らされてしまったようだね。  
警戒していたのに全く気付けなかった。

どうやらこの女性は相当の手練らしい。

ルーンのおかげでアズーロが傍に居る事は感じ取れるが、眠らされているようだし……。

目の前には手練のメイジ、そして明らかに並以上の幻獣達。

……。

どんなに楽観的に考えても、この状況はよくないね。

見当はついてるけど、名前でも聞いてみるかな。

「僕に貴女のお名前を尋ねる名誉をお許しただけですか？」  
「お断りしますわ、ミスタ・チェザーレ。何処の誰とも知れぬロリ  
k・・・いえ、へんた・・・いえ、男性に名乗るなんて怖い事は出来

ませんもの。」

変な言葉が聞こえた気がするんだが、気のせいかな？

というか、名前すら教えないとは・・・自分から聞いてきたのに・・・。

僕が何をしに来たかバレていると考えるべきか？

「それは、残念だよ美しいお嬢さん。ところで、僕のアズーロはどこに居るか知らないかな？」

「アズーロ？ああ、あの風竜ですか？申し訳ありません、あの子も眠らせて頂きましたわ。」

「成竜を眠らせるなんて、貴女はよほど優秀なメイジなのですな。」

「お褒めいただきありがとうございますわ。」

自分から何かを喋るつもりは無いか・・・。

質問にしか答えなかつもりだろうね。

厳しいな・・・。

しかし、こちらとしてはデュ・テリエが味方に成り得るかを確かめねばならないから、そうは言ってられない。

「ところで、ミス・テリエ。君の名前はリリアーナかな？」

「あら、ご存知でしたの？」

「ミス・テリエの様な美しい女性なら社交界で評判ですから。」

「貴族でしたの？」

「いいえ、僕はしがない神官に過ぎません。ミス・テリエは僕の様な者にも聞こえてくる程の美しさなのですよ？」

Side out

最悪。

帰れ。

神官とか嫌い。

ブリミル教とかサヨウナラ。

最後まで旅人で通せよ……。

名前を聞かずに捨てるべきでした。

『妙な力』に興味を惹かれた私の馬鹿……。

「私の名前が知られているようですし、1つお聞かせ願いますか？」

「なんなりと。」

「ミスタ・チエザールの持つ『妙な力』について。」

『リリア、きつと変態パワーだよ。』

コーテイ、流石にそれは……無いです。

「……………」

あら？

雰囲気が変わりましたね。

聞かれて欲しく無かったみたいですね。

「ミスタ・チエザーレは先程までの作り笑いよりも今の様な地が出ての方が素敵ですわよ。」

「失礼しました。ミス・テリエ。」

「また、作り笑いですか？」

困ったものですね。

「それで、何が目的です？」

「……………」

「そう、例えば。家の幻獣達を奪いに来た…………とか。」

「……………」

「これ以上の沈黙は肯定と取りますわよ？」

「奪いに来たわけでは無いよ。」

「それに近いことをしようとしたのではないですか？そうでなければ、この子達が襲い掛かるなんて有り得ませんもの。領民を傷付けに来たというのならば、その限りではありませんが。」

「……………まいったね、どうも。」

「それは、肯定と取ってもよろしいですか？」

「ああ。勿論、領民を傷付けに来たわけではないよ？確かに、僕がここに来た目的の1つにはデュ・テリエの幻獣の力を確かめるといふのがあった。」

「……………それで？」

「もう1つは、僕の主は子供達に勉強を教えるのが好きでね。平民でも自由に学べるこの地を見に来たというわけさ。」

「それを信じて欲しいのですか？」

「そう言われても、本当のことだからね。」

「まあ、良いでしょう。それで、最初の問いには答えて頂けませんの？」

「それは勘弁してくれないかな？時期が来れば必ず話すと約束するよ。」

「竜から落ちて行方不明というのはどうですか？そして、主を失った竜はデュ・テリエで暴れたので排除した。」

「……。」  
「どうです？なかなか素敵なお話だとは思いませんか？」

「……。」  
「また、だんまりですか？残念ですけど、家の幻獣達に手を出して何もなしで帰すわけにはいきませんの。」

「本当に勘弁して欲しいなあ。困った事に話すわけにはいかないんだよ。」

「ならば、あなたの主の名前で良いですわ。後日正式に招待させて頂きますわよ？」

「それも言えないんだけどなあ……。」

「もう良いですよ。サヨウナラ。ウル・カー」待つてくれないか？僕の力の一部だけ話すから。「一部？」

「すまないけれど、限界まで譲歩してるんだ……。」

「私が求めているのは『譲歩』でなく『屈服』なのですけど？」

「これ以上は言えない……。」

「仕方ありませんね。作り笑いが消えたので勘弁してあげましょう。」

「僕は幻獣の力を引き出す事が出来る。やろうと思えば、強制的に支配下に置く事も出来る。」

『嘘は言っていない。全部は言っていないのも確かだが。』

「その力の出所は？」

「それは言えない。」

「対価にそれでは全然足りませんが、まあ良いでしょう。時期が来たら貴方の方から説明に来ていただけるのですよね？」

「……わかつてる。」

「では、速やかに帰ってください。その妙な力を一度でも使えば、次はありませんわよ？」

あのロリコン食えない奴ですね

面倒なことにならないければ良いですが……。

Side ジュリオ

とんでもないなあ、彼女は……。  
本当に損な役回りだ。

今回は幻獣達の力が見れただけでも良しとしようか。

リスクに見合っていないけど。

その内彼女も、彼女の両親も説得しなきゃいけないのか。

本当に……本当っつに割に合わないな……。

Side out

39話 くろりコンく (後書き)

\*注意

作者はアンチジュリオじゃありません。

彼は良い奴じゃないか!!

#### 40話 く烈風く（前書き）

コルベール先生の炎の蛇は、炎を何らかの形にして扱う呪文だと思  
います。炎を蛇の形にする呪文というのはあまりにも限定的過ぎま  
す。

## 40話 〈烈風〉

嘗て、『烈風』のカリンと言われた『風』のスクウェアメイジが居た。

彼は、まさしくトリステイン最強であった

しかし、実戦を退いた後の彼の足取りを知るものは数少ない。その名声とは裏腹に……。

知ってましたか？

ヴァリエール家最強って公爵様じゃないんですよ。

これでも一応『水』のスクウェア、『火』のトライアングルですからね。

対人戦闘の実戦経験は少なくても、そのくらいは分かります。

明らかに公爵様よりカリーヌさんの方が強いです。軽く見積もって倍くらい……。

そして今、ヴァリエール公爵より倍くらい強い人が私の目の前に居ます。

何しに来たんでしょうか？

カリィ又さんが一人で家に来るなんて……。

こんなこと初めてですよ？

「早いものです。貴女もルイズも、もうすぐ魔法学院に入学するのですね。」

「まだまだお若いですが、そんなに年寄り臭い事は言わなくても良いでしょう？」

「私などもう年です。リリアさんに比べれば老いばれもいいところでしょう。」

老いばれはあんなに強く無い！と声を大にして言いたいです。

この人の『エアハンマー』は、他の人にとってトライアングル級です。

他の人から見れば、ドットスペルの詠唱速度でトライアングルスペルが飛んでくるのと一緒にです。

初めて私がカリィ又さんのエアハンマーを見たときの感想は『リァルチート！』です。

この人なら某狩猟ゲームで山のように大きい竜をカモに出来るでしょう。

エアハンマー乱射で余裕な筈です。

風を纏う竜も角なんか壊さなくても余裕です。

きつと「その程度の風で、私に届くと思ってるのですか？」って言いながら風を打ち返す筈です。

私はこの人がカリンだと思ってます。

というか、この人がカリンじゃなかったらカリンはどんだけ？って感じですよ。

でも……聞けない。

だって……怖いんだもん……。

ルイズは私がカリィヌさんに似てるとか言っていましたよ、そんな事有り得ません。

この人のほうが100倍怖いんですよ。

同い年の可愛らしい少女を捕まえて母親に似ているとはあの子も失礼ですね。

とりあえず、お尻ペンペンとお勉強を教えてあげるんで勘弁してあげたんですよ。

ルイズって肌が白いですから、お尻を叩くととても愛らしくなります。

ルイズのお尻が赤くなってるのを観察するとあの子すごく恥ずかし

がるんですよ？

普段キヤーキヤーと煩いので、ちょっと大人しくなっただけでとても謙虚に見えてしまうのがルイズの怖いところですね。

「いえいえ、あんなに強力な魔法を連発する人が老いばれだなんて信じれませんよ？」

「今日ここに来た理由ですが、ルイズと貴女の魔法の話です。」

「ルイズのですか？」

「貴女のも、です。」

「私ですか？何かありましたっけ？」

ボロは出してないと思いますが……。

1度だけ私の防衛反応が働いたせいで無意識に『メドロア』を撃ちかけたのは秘密です。

「そうです。貴女、いつまで私にラインと言いつけるつもりです？」

「……何のことでしょう。」

バレテル？

バレテルんですか？

泣けて来ました……。

この人、嘘とか嫌いなんです……。

「私に気づくな、と言うほうが無理な話です。これでも、昔はマンティコア隊の隊長などをしていましたからね。」

「あ、やっぱりカリー又さんが『烈風』だったんですか？」

「それもおかしい事です。ライン程度の貴女からすれば、私は他のスクウエアクラスと同じにしか見えない筈ですのに。」

「……。」

「熟練のメイジや傭兵ならばともかく、戦闘経験の無い15の小娘程度ではスクウエアの強さは測りきれませんよ？」

「マズツたですか？」

「というか、この人確信してる？」

「トラアングルスペルなんて一度も使ってませんが……。」

「同じスクウエアだったり、上位のトライアングルなら話は別ですが。」

「はい、スクウエアです。」

「ばっちり該当してます。」

「ありがとうございます。」

「帰って良いですか？」

「……ここは私の家で、私の部屋です。」

「それに、貴女はどう考えても魔法を使い過ぎです。精神力が人より多いというのは、まだ良いでしょう。それでも、ラインのあなたがラインスペルをあれだけ打ち放題というのはどう考えてもおかしいでしょう？」

「……人より精神力が、かなり、多いのです……。」

「貴女がそう言うなら、そうしておきましょう。それでも、明らかに私より精神力が多いというのは無理があると言っておきます。」

「・・・アリガトウゴザイマス。」

「どの系統かは知りませんが、その歳でスクウェアというのは大したものです。」

「・・・ナンノコトデシヨウ?」

「次はルイズのことです。」

「・・・私の話は聞く気が無いんですね?

さつきから好き勝手に喋られています。

「魔法が爆発する。」

「そうです。」

「土と火を使えば私でも似た様な爆発は起こせますけど、コモンも出来ないルイズがそれを無意識にやってると考えるのは難しいですよね。」

「なるほどトライアングルの『爆炎』は使えるわけですね。」

「・・・スルーで。」

やっちゃんいましたよ

実際は水をHとOに分解して発火させるだけですけなんです。

いえ、『爆炎』も出来ませけど・・・。

『爆炎』よりも魔力消費が少なくて健康にも良いのです。

「家の子達は皆あなたに懐いていますから放っておいても貴女はルイズの面倒を見てくれるでしょうけど、あの子をお願いします。」

「頭を下げられても・・・。」

「私達ではあの子が何故コモンも使えないのか調べる事が出来ませんでした。だから、あの子が自分でそれを克服しようとした時は手

を貸してあげて欲しいのです。」

「言われずとも。」

「ありがとうございます。」

「……………」

……………この人ダレ？

この頭を下げてる人はダレ？

「所で、『烈風』のカリンの数々の逸話は本当なんですか？」

「大体は本当です。地上から竜騎士隊を全滅させたとかは流石に無理ですが。」

「ですよ。いくらなんでも……………」

私単独でも1・2騎ならいけるでしょうけど、竜騎士隊を全滅つてのは……………。攻撃が届きませんからね。

「マンティコアに乗っていましたがね。」

訂正。

この人やっぱりチートです。

「リリアさんはどの系統のスクウェアなのですか？」

「『水』ですね。」

「……………『爆炎』は火の2乗と土でしたね。」

普通に言っちゃいました。

あまりのチートっぷりに思考が停止していたとも言えます。諦めって肝心ですか？

「その年でスクウェアというのは稀に居ますが、それが万能型というのはおかしいですね。というか、有り得ません。『水』系統特化ならまだ分かりますが。『水』はスクウェア、対極属性の『火』を組み合わせたトライアングルスペル……。」

「ビツクリデスね。」

「リリアーナ……。」

声が……空気が冷たい……。

「どうなってるのか全部吐きなさい。今なら私に嘘を吐いていた事を赦してあげましょう。」

「……。」

「早くなさい。今話すのも後で話すのも同じです。痛いのは嫌でしょっ?。」

……どうしたものでしょうか。

どうせバレテルなら1度、最強クラスと制限無しで戦ってみるのも悪くない気がします。

痛いのは嫌ですけど……。

……1度やってみますか？

「さあ……。」

「この家なら、カリィヌさんにも勝てるかもしれないよ?。」

「それは……本気で言ってるのですか?この私に……。」

……?。

あれれ？

ひよっとして、怒ってらっしやる？

さっきの冷たい声は、演技ではなかった？

・・・ミスった？

「貴女のお友達も連れて来なさい。」

・・・逃げたい。

カリリーヌさんって沸点低かったんですね。

「それでは私、コーティ、ティアでいきますよ？」

「たった2体で良いのですか？」

「構いません。」

勝つのは無理っばいですけど、一泡吹かせてやりましょう。

『カリリーヌと？正気？』

『撃て、メドローア！！一撃必殺！！』

コーティ流石にそれはダメです。

まあ、証拠は残らないでしょうけど。

「やっぱり無謀でしたかね？」

『カリー又って相当強いよ？』

「でも、もう喧嘩売っちゃいましたよ？」

『コーティと私が前衛って所？』

「ティア……頑張って私達を守ってね。」

『頑張るけど……』

ティアの声に元気がありません。

……大丈夫ですよ？

パルシエンの防御力は最硬クラスです。

大丈夫です……多分。

「それじゃ、コーティと私がオフェンスで。作戦名『臨機応変』。」

『作戦名ですら無いと思う。』

気にしたら負けなのです。

……やっぱりチートだと思います。

私の『アイス・ウォール』『ウオーター・シールド』が『ウインドブレイク』1発で突破されました。

コーティが余波を受けてくれなかったら一撃でアウトだったかもしれません。

「魔法の同時使用とは、これはまた器用な事をしますね。」

「何ですか！その威力は！！」

「これが本来の威力です。自分に制限を掛けている15の娘に全力を出すわけが無いでしょう？」

「………それでもこれはあんまりでしょう？」

威力上がりすぎです。

メドロアの練習してなきや終わってましたね。

本来無理らしいですけど、魔法の同時使用って意外といけますよ？

セバスチャンは「魔法の同時使用は右手と左手でまったく違う絵を描くようなものだから無理な筈です。」って言ってましたけど、発想を変えましょう。

折り紙とかアヤトリって片手でやる方が難しくないですか？

二つの魔法で一つの現象ってイメージすれば意外といけます。

メドローアなんて、まんまそれです。

『火』『水』を同時に使って『メドローア』という一つの呪文にしてるだけですからね。

喋ってる最中もコーティが<火炎放射>で仕掛けてるんですが、避けられてます。

何歳ですか、貴女は。

全盛期は当の昔に過ぎ去ったでしょうに……。

「<神速><オーロラビーム>」

コーティが最高スピードで突っ込みますが、それは『フライ』で避けられました。

しかし、そのくらい予想の範疇です。

飛び上がった先には輝く1条の光を、更に

「ウル・カーノ・ジエーラ・テイル・ギョーフ」

炎を集め鳥を形作ります。

今はまだ未完成……というか、イメージした威力に全然追いついていませんが、スクウェアになったらどうにかしてやるのです！

「『カイザーフェニックス(仮)』」

カリーヌさんなら絶対<オーロラビーム>を避けます。だから、私は広範囲に火を撒き散らします。

これなら、避けた先にも炎が届きます。

<神速>で退路を限定し、<オーロラビーム>で体勢を崩し、『カ  
イザーフェニックス(仮)』で仕留めます。

・・・爆発。

空中で炎が弾けます。

仕留めるのは無理でも無傷というわけにはいかないでしょう。

傷？大丈夫です。

治療しますから。

この家・・・いえ、池には水の秘薬ならアホみたいにあります。

・・・煙が晴れた先には。

「どうなってるのですか？それは『火』の3乗ですよ？」

「・・・無傷ってのは幾らなんでも酷くないですか？」

「私で無ければ今で終わっているでしょうね。」

「どうやって防いだんです？」

「簡単な事です。空気を圧縮して壁を作り、熱が伝わるのを防いだ  
だけです。『エアハンマー』の応用です。」

「人の事を器用って言えませんかよね？」

「対極属性のみでトライアングルですか。益々有り得ませんね。」

「対極属性ではなく、私の系統は『火』と『水』ですからね。」

「……………」

少し考え

「……………信じたくはありませんが、信じましょう。」  
そう言いました。

「いきなり信じちゃうんですか？」

「対極属性単体でトライアングルというよりは、2系統という方が現実的です。充分非常識ですが。」

そう言ったカリィヌさんは直ぐに詠唱に入りました。

この詠唱は…………『エア・ストーム』。

「コーティ、竜巻が発生したら＜炎の渦＞。ティアは＜冷凍ビーム＞準備。」

……………デカ。

100mくらい上空までありますよ？

トライアングルスペルってここまで大きくなるんですか？  
やっぱりこの人チートです。

＜炎の渦＞が竜巻に纏わりつき、拮抗します。

中は相当の高温になってる筈です。

焼け具合は・・・上手に焼けましたー？

・・・カレー又さん死んじゃうんじゃない？

流石に焼け焦げたら治療は・・・無理。

「コーティ、ストップ！！カレー又さん死んじゃいます！」

『・・・不味い事した？』

『やっっちゃったね。』

コーティ・・・暢気に言わないで。

炎が消えたあとには

「戦いで相手に情けを掛けるのはオススメしませんね。」

誰もいなかった。

カレー又さんの声を最後に、私は意識を失いました。

「起きましたね。」

「……私の部屋？」

「そうです。因みに勝負は私の勝ちです。エステルには少し愚痴を言われましたが。」

「……どうやったんです？」

「『エア・ストーム』を使っていたのは私の『偏在』です。」

「……ああ、あのチートスペルですか。」

「何時の間に？」

「あなたの初撃を受けた時です。」

「……。」

「煙が晴れる前に？」

「ええ。一瞬だけ『フライ』を解除して、『偏在』。その後は空気を操り見えなくしたうえで、本体の私は上空からリアさんの背後へ。コーティも空気を纏っていたので私の匂いに気付かず油断した所に攻撃を喰らって気絶した、というわけです。」

『偏在』はチート性能なくせして詠唱が短すぎです。

バランスを考えて欲しいものです。

「やっぱり敵いませんでしたか。」

「ですが、充分でしょう。元とは言え隊長だった私が、たかだか15の小娘と幻獣2体程度に負けていればトリスティンの騎士隊の名折れです。」

「……。」

「とは言っても、あと1年もすれば3対1で勝つのは無理になるで

しょうが。」

「……そういえば、何で戦う事になったんでしたっけ？」

「リリアさんの魔法の腕が良すぎる理由です。それは、先程教えてくれましたからもう良いです。」

「……騙すつもりは無かったんですよ？」

「解っています。私でもルイズが同じであつたとしたら隠させたでしようから。」

「ごめんなさい。」

「もう良いのです。ただ……。」

「ただ？」

「もう1つ隠している事があるでしょう？」

「まだ何かありましたっけ？」

「あの幻獣達です。」

「……ばれてる？」

「貴女の連れているあの子達は、私が現役時代に調べた記録にありません。」

「……言わなきゃ、ダメですか？」

「ダメです。」

「その内『幻獣』のリリアーヌって名乗る事になると思います。はい。」

「解りました。リリアさん、ルイズをお願いします。」

こうして、『烈風』は爪跡を残して去っていきました。

41話 〽末期〽 (前書き)

\*注意

最初に貰ったブレスレットはネックレスになっています。

41話 く末期く

「……グス、うう……ぐす……。」

……誰か、泣いてるこの人を何とかして下さい。

先日は脅迫？まがいの事をされ、今日はその娘に泣かれています。

カリーヌさんには私が喧嘩売っちゃったのが悪いわけなんですけど……。

「エレオノール、家に来てずっと泣いてますけど何かあったんですか？」

この人忙しい筈なんですけど……。

「明日から……グス……魔法学院に行っちゃうんでしょ？」

「そりゃあ行きますよ。」

「だから、会いに来たの。これから会えなくなるから……。」

……この人最近末期な気がします。

私が悪いんですか？

私が甘やかしたのが悪いんですか？

「姉さんって呼ばないで！呼び捨てにして！」って言われてから何となく、この人本気なんじゃないかなあ？と思ってましたが……。

気分は恋人を残して戦場に向かう婚約者って所でしょうか？

「仕方ない事です。私だって一応卒業したって学歴は欲しいわけですから。」

「リリアはスクウェアなんだから意味無いじゃない。逆に教えてやれば良いのよ。」

因みに、スクウェアだってばれました。

というか、騙してるのに罪悪感を覚えたので正直に話しました。

カトレアさんとエレオノールにだけですけど。

先日はカーリヌさんにもばれました。

「そういうわけにもいきません。休みには帰ってくるんですから我慢して下さい。」

「でも……………」

この人もう26ですよ？

何ですか、この愛らしさは。

私は悪くないのです。

「何で、私がルイズじゃないの？」

……………訂正。

末期‘かも’じゃなくて確実に末期です。

治療方法？

……脳内会議で手遅れと診断されました。

「そんな無理なことを言っても意味が無いでしょう?」

「アカデミーじゃなくて、先生になれば良かった。」

アカデミー志望の人に謝ってください。

「主任研究員がそれじゃダメじゃないですか。しっかりして下さい。」

「……無理だもん。」

「そんなこと言われても困っちゃいますよ?」

「……。」

「今は頭撫でてあげますから3年間だけ我慢して下さいね。」

「……うん。」

今の体勢?

話の冒頭から私の胸に顔を埋めていますけど、何か?

場所は私のベッドの上です。

……こうやって甘やかしたのがいけないんですか?

「ひゃっ!」

「……。」

「いきなり胸を揉まないで下さいよ。」

「……大きいのがいけないの。」

確かに私の胸部はお母様譲りです。

どこに出しても恥ずかしくありません。

・・・露出趣味はないですよ？

「でも・・・良いの。私は揉む側だから。」

・・・末期ですね。

しばらくしてから気を取り直して、イスに座りました。

「これ、リリアにプレゼント・・・。」

「イヤリング・・・。ダイヤモンドですか？」

「そうよ。高かったんだから、大事にしてよね。」

「ありがとう、エレオノール。付けてくれますか？」

「勿論良いわよ。」

・・・学校にイヤリング付けて行くのは良いんでしょうか？  
ネックレスもありますし。

良いですよね。

文句は言われないうでしょう。

「似合いますか？」

「私が選んだんだから当然よ。」

エレオノールは胸を張ってそう言いました。

相変わらず胸は無いですけどね。

私は小さいのも好きです。

相手を愛せば大きさをなんて関係ありません。

「大切にしますね。」

「こっちはカトレアからよ。」

「それは・・・オルゴールですか？」

「ええ。あの子自分で作ったのよ？」

「流石、器用ですね。」

「リリアのおかげで前よりは良くなったから、無理はしてない筈よ。因みに、装飾は私も手伝ったのよ。」

カトレアさんは水の精霊にお願いしたら前より随分良くなりました。普通に生活するくらいなら大丈夫なくらいには。

シャワーズのアクアに水の精霊を一時的に同化させてヴァリエール家まで連れて行ったら、お風呂場でカトレアさんを水に包んで色々やってました。

私やお母様でも治し方が全く解らなかつたので最終手段で水の精霊にお願いしたのです。

こんな事なら、引き籠もつてた時に医学書も読み漁れば良かったと後悔しました。

いえ・・・今でも後悔しています。

カトレアさんには何かしら勘付かれているようで、気にしなくて良いと言われましたけれど・・・。

治療の対価は『アンドバリの指輪』。

クロムウエルなる人物が奪っていったらしいのですが、何処の誰とも解らないので目下捜索中です。

）。　　）。

「綺麗なメロディですね。」

聞いていると、自然と色々なものに感謝したくなるよなメロディでした。

カトレアさんは多才ですね。

「カトレアにそう伝えておくわ。」

「ええ、お願いします。」

いや、良い物を貰いました。

エレオノールにもカトレアさんにもいつかお礼をしなくちゃいけません。

「・・・そういえば、ルイズには挨拶しなくて良いんですか？」

「え？ルイズ？」

「はい。ルイズです。」

「あの子には今日オルゴールを取りに寄ったときにおめでとうとは言っただわよ？」

「……それだけ？」

「そうよ。しよっちゆう会ってるしね。」

「……因みに、今日会ったのは何日振りですか？」

「覚えてないけど2月振りくらいかしら。」

「……私は1月に1度は会ってる上に、10日前に貴女に会いま  
した。」

もう少しルイズとスキンシップ取りましょうよ……。

「もう少し何か言っただげたらどうです？伝えておきますよ？」

「私と代わりなさいって言っておいて。」

「……それは幾らなんでも。」

「それなら、早くコモンマジック使えるようになりなさいって言っ  
ておいて。」

「ルイズにも優しくしてあげましょうよ。爆発する原因をずっと調  
べてるんでしょう？」

「ルイズにそれを言わないでよ？」

「はあ、解ってますよ。」

私に対するテレの3%で良いですからルイズに向けてあげて欲しい  
です。

S i d e      ノエル

遂にリリアが魔法学院に行ってしまいました。

明日から私は誰と寝れば良いのでしょうか……。  
リリアのベットで一人寂しく寝ましよう。

今リリアはエステル様の所に行っているので私と二人きりです。

この場は非常に暗い雰囲気を漂わせています。

「エレオノールさん……。」

「ノエル……。」

「……はあ。」

エレオノールさんはある日、突然私にも普通に接してくれるようになりまし  
た。

それまでは、私に嫉妬していたのですけど……。

それ以降は、良いお友達です。

「リリアが行っちゃうわね。」

「行ってしまいますね。」

「3年間よ?」

「長いですね。」

「ノエルはどうするの?」

「どうするもこうするも、帰ってくるのを待ちますよ。」  
「リリアに恋人が出来たらどうするつもりよ。」  
「……有り得ない話ですね。」  
「どうしてよ?」  
「リリア、旦那様、エステル様、幻獣達。採点は王族以上に厳しいですからね。」  
「王族以上? どうして?」  
「これは秘密ですが、デュ・テリエを継ぐのはリリアです。理由は他にも色々ですが、魔法学院に通ってるような坊ちゃん程度では確実に落とされます。」  
「……本当に?」  
「間違いありません。」  
「……分かったわ。」  
「因みに、一番厳しいのはリリアです。」

S i d e o u t

お母様、レテイ、ノエルさん、エレオノールでお風呂に入ってるんですが、私が大人気です。

皆に代わる代わる身体を洗われています。

レティとお母様は普通に洗ってくれたのですが、後の二人は明らかに不要な事をしてきます。

・・・いえ、いつもの事ですね。

胸を揉まれるのは当たり前です。

後はキスされたり、舐められたり、背中に柔らかいものを押し付けられたり・・・。

はい。

いつもの事です。

これ普通です。

何もおかしい事はありません。

おかしい事が起こらないほうが、おかしいです。

ふう。

いつもの様に弄ばれました。

すっかり汚されちゃいました。

明日は遂に魔法学院に行きます。

おやすみなさい。

隣？

今日は5人で寝ています。  
流石にきついです。

## 42話 魔法学院

……学院？

どちらかと言えば、皆では？

有力貴族の子息子女を守るためでしょうが……。

イルとコーティも予想外だったのか、ポカンとしてますね。

連れて来れたのは、この子達だけです……。

お父様がダメだって言うんです……。

泣きましたよ。

昨日まで皆連れて行くつもりでしたから。

あの子達が目をウルウルさせて見詰めてくるんですよ？

抗えるわけが無いのです。

お父様に無理矢理引き剥がされるまでは……。

イルシオンは馬だから！！と、駄々を捏ねて学院に置いて貰う事にしました。

コーティは森の中に住むって言ってます。

その内、森の中にあの子達が住む場所を作る予定です。

お父様なんて知ったこつちやありません。  
来年には皆連れて来たいです。

荷物はメイドさん達に頼んで私はイルに乗って自分で来ました。  
馬車が苦手なんです。

お尻が痛くて……。

慣れてしまえばそうでも無いのですが、慣れるまで乗りたくありません。

437

「……お一人ですか？」

「ええ。私だけ先に来させて貰ったの。」

「失礼しました。お名前をお聞かせ願います。」

「リリアーヌ・デュ・テリエですわ、衛兵さん。」

「……確認しました。ようこそトリスティン魔法学院へ。」

「ありがとうございますわ。」

お礼を言ったら衛兵さんに驚かれてしまいました。  
貴族って、酷いですね……。

「そちらの幻獣は……。」

「許可は取ってあります。」

「失礼しました。」

「いえ。御気になさらずに。」

門を潜ると、メイドさんが待ち構えていました。

学校とは言っても流石は貴族用と言った所でしょうか。

佇まいからして、家のメイドさんの方が優秀なのが解ります。

家のメイドさんは、イタズラ好きなところ以外は非常に優秀なのですよ？

「お荷物をお預かりします、ミス・テリエ。」

「お願いしますわ。」

また驚かれました。

トリステインの貴族は本当に酷いですね。

学院は一面が芝生で、噴水まであります。

・・・無駄に豪華ですね。

「こちらがお部屋になります。」

ベッドはもう届いてますね。

それ以外の調度品は付属物ですから買い足すなり、買い換えるなりしましょう。

「案内して頂いてありがとうございますわ。」

「い、いえ。失礼します！」

「待って！」

「はい！」

「ミス・ヴァリエールかミス・モンモランシはもう着いているのかしら？」

「ミス・ヴァリエールは未だですが、ミス・モンモランシはお着きになられています。」

「そう、ありがとうございます。」

「失礼します。」

……あ、部屋を聞くのを忘れました。

まあ、その内会つでしょう。

学院内を散策しているんですけど……見られていますね。

気分は社交界ですね。

相手を見定めているといった感じの視線です。  
慣れてますけど。

「これは美しいお嬢さん。貴女に魅了されてしまった僕に名前をお聞かせ下さい。」

……薔薇を銜えた変なのに立ち塞がられました。  
マントの色からして、新入生みたいですけど……。

周りの人間が見定めている中、堂々と声を掛けて来たのは評価しますが……ただの馬鹿なのかもしれません。

というか……ただの馬鹿にしか見えません。  
打算とかそういうのは考えてないタイプっぽいです。

つまり……ただの軟派。

「あら、殿方から名乗るのが筋ではありませんか？」

「おお、これは失礼を僕は誇り高きグラモン家の一員、ギーシュ・ド・グラモン。」

「グラモン？グラモン元帥の所の4男坊ですか？」

「その通りですミス。」

「私はリリアーナ・デュ・テリエ。デュ・テリエ侯爵家の長女ですわ。」

「貴女が、彼の有名なミス・テリエ。今日は何と良き日でしょう。」

「あら、私は有名なのですか？」

「勿論ですミス・テリエ。社交界の華として名高いのです。」

「……それは言われてないと思います。

注目はされてましたけど。」

「それは光栄だわ、ミス・グラモン。」

「ですが、その様な噂よりも今の貴女は何倍も美しい。」

「お上手ですけど、ひよっとして誰にでも同じ事を言っているのではなくて？」

「それこそ、まさかです。」

「そうおっしゃるなら、そういうことにおきますわね。」

「これからお茶でも如何ですか？」

「申し訳ありません。友人を探しているです。」

「貴女ほどの人の友人と言うなら、その方もさぞ美しいのでしょうね。」

「ええ。あの子は私なんかよりも綺麗よ。」

「それはお会いするのが楽しみです。」

「ですから、お茶はまたの機会にね。」

「ええ、またの機会に。」

いきなり軟派されるとは思いませんでした。

あんなのばっかりなんてことは……無いですよね？

……不安です。

イルのところにも行ってまじょう。

「リリア！」

「あら、モンモランシー。さっきまで探してたんですよ？」

「さっきまで？」

「歩いてたら声をかけられちゃったからイルの所にも行くことと思  
つて。」

「私も行く。」

「じゃあ、行きまじょう。」

「……そういえば、イル何処に置いてきたっけ？」

「………門に入った所。」

「？」

「イルを放置したままでした。」

門の所に行くと、人だかりが。

あの蒼い炎はどう考えてもイルですね……。

「イル！」

呼ぶと、私を見付けてこちらに寄ってきました。  
人だかりの視線と一緒に。

『我のことを忘れていただろう？』

「・・・その角と炎の鬣たてがみ素敵ですよ。」

『・・・』

「そんな目をしないで下さい。ごめんなさい。」

「久しぶりね、イル。」

『モンモランシか。』

「・・・リリア、前から思ってたけど私って嫌われてる？」

「そんなことありませんよ。ね？」

『好きでも嫌いでも無いな。』

「・・・それって無関心？」

「・・・嫌ってないって。」

「そう？なら良いけど・・・。」

嫌ってはいません。

嘘じゃないです。

「あの幻獣彼女のか？」

「俺も欲しい。」

とかって声がちらほら聞こえます。

視線は私達に釘付けです。

とりあえず、移動しましょう。

イルを使い魔を置く小屋みたいなところに置いてきて私達はティータイムです。

「クラス分けはどうなるんでしょうね？」

「リリアと一緒に良いわ。」

「私もモンモランシーと一緒にだったら気が楽です。」

「……うん。」

モンモランシーが嬉しそうに笑ってます。

うん。

貴女は笑顔が似合います。

「入学式は明日ですけど、誰か他に知り合い居ますか？」

「私は居ないわ。」

「私も社交界で色々聞いた気がしますが、覚えてないですからルイズくらいですね。」

「エレオノールさんの妹の？」

「そう。それです。」

「会った事無いんだけど、どんな子？」

「……モンモランシー1つ言っておきますが、モンモランシーがエレオノールさんと知り合いというのは伏せて置いてください。」  
「どうして？」

「……何と言うか……。  
イメージが違うと言うか……。」

ルイズのイメージはツンなエレオノールですから……。」

「ルイズはエレオノールさんが怖い人だと思ってるので。」

「……確かに、怖い？人だけど。」

「私と一緒に居るときのエレオノールさんをルイズは見たことが無いんです。」

「……。」

「姉の威厳ってあるでしょう？」

「……そうね。」

これで、エレオノールの威厳は保たれますね。

きっと……おそらく……多分……大丈夫な気がします。

入学式。

Side 工口爺

今年も春の季節じゃのう。

初々しい新入生共が下に並んでおる。

年を取ると若者を見るのが楽しみの様なものなのじゃ。

入学式の主役は新入生全員なのじゃが、毎年その中で真に主役と言えるものが1人、2人おる。

今年は、超巨乳が1人に美巨乳が1人、そして貧乳が2人。

にしても、今年は当たり年かの？  
主役級が4人、他にも可愛いのが多いのう。

あの赤い超巨乳はツエルプストー、ピンクの貧乳はヴァリエール、  
翠の巨乳はテリエ、あの青い髪はシャルロット・エレヌ・オルレ  
アン、ガリアの青……か。

それにしても、例年なら主役級を張れる者があの4人のおかげでか  
すれておる。

他の者も意識せずにはおれぬようじゃしの。

……観察もこれ位にして、学院長の登場と行くつか。

わしを待っておるようだし。

「生徒諸君。諸君らは、トリスティン……、いやさー！」

とう！

「フル・ソル・ウィ・・グオ！」

詠唱が・・・首が・・クビが・・k u b i g a・・・。  
誰か、水魔法を・・・首が・・。

・・・・。

「諸君！ハルケギニアの将来をになう有望な貴族たれ！」

・・・・決まったぞい。

皆、わしの威厳に言葉が出ぬようじゃ。

気を取り戻した者が我先にと拍手をしておるしの。

S i d e o u t

・・・・学院長死んだのではないでしょうか。

先生方が集まっていますが・・。

あ……生き返りましたね。

……話が長い。

流石に長いですね。

……？

聞いたことがある声が……。

「ワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！あんたみたいな子がいるなんて驚いちゃうわ！」

「ラ・ヴァリエール？」

「よろしく。ちなみにあたしはキュルケ・フォン・ツエルプスト！お隣さんとお会いできるなんて光荣だね。」

「な、な、なんですってえ！」

「よろしくね。」

……私は他人です。

私はあの人たちとは関係ありません。

それにしても……ツエルプストですか、お得意様です。彼女とは仲良くしたいものですね。

「静かにしたまえ！」

案の定怒られました。

悪目立ちし過ぎですよ、ルイズ。

……ルイズともモンモランシーともクラスが別れちゃいましたね。

ルイズはイル、モンモランシーはシゲル。

私はソーン、見事にバラバラです。

キュルケが一緒です。

他にはタバサって子が居ますけど……あの子何歳でしょうか？

15歳じゃなくても学院に入れるみたいですね。

私は15にならなきゃ入れないって聞いてましたけど。

．．．．．キュルケ、とんでもない人ですね。

クラスの女の子から目の敵にされています。

恋人を奪われたとか、何とか．．．．。

とつかえひつかえやってるのは本当みたいですけど。

キュルケはどうでも良いのです。

いえ、良くは無いんですけど．．．。

何と言いますか．．．．．私は高嶺の花って思われてる感じで、キュルケはアレなので男子の視線が私とキュルケに集中してるんです。

そのおかげで．．．．．クラスの子に．．．．．。

完全にキュルケに巻き込まれました。

話しかけるタイミングを逸して未だに話しかけてすらないのに．．．。

そのおかげで私は一人ぼっちです。

「何よ、あのイヤリング!」

「あのネックレスもよ!」

「私達に見せびらかしてるつもりかしら!」  
とか、言われてます。

・・・キュルケの馬鹿・・・。

授業が終わってからイルヤコーティと戯れるのが唯一の癒しです。

・・・泣けてくるのです。

「モンモランシー、私は今度の『風』の合同授業で友達を作ります  
!!!」

「リリアは・・・私だけじゃ不満なの?」

「いえ不満とかじゃなく、キュルケのおかげで私にクラスの友達が  
居ないんです。」

「そういえば、男子の視線を二人で独占してるから目の敵にされて  
るんだったわね。」

「キュルケのせいです・・・。」

「それは無いわね。もしもミス・ツエルプストーが居なかったらリアー一人に集中するに決まってるから。」

「……そんなこと」あるわね。「……。」

「……。」

気が重いです……。

「今年の新入生は不作だ。」

……そりゃそうでしょう。

コモンマジックすら満足に扱えないのがたくさんです。

使えるといってもそれは文字通り、出来るだけ……ですからね。

周りの人は心外だ！って感じですけど……。

「入学書類を見たら、ほとんどがドットメイジではないか。ラインがやっと数名。トライアングルにいたっては皆無だ。どういうことだね？」

はい、私スクウェアです。

『土』のラインってことになってますけど。

しかし・・・トライアングルが皆無？  
少なくともキュルケかタバサのどっちはトライアングルだと思いますが・・・。

特にタバサです。

あれは、明らかに戦える人間の動きだと思つのですが・・・。  
佇まいがなんとなく・・・ですけど。

二人ともラインだったんですね。

少し予想外です。

それに、ラインがやっと数名・・・。

私、モンモランシー、キュルケ、タバサ・・・これで4人。

数名という言い方からして後3人か4人ですか・・・。

・・・本当にレベルが低いですね。

「全員まずは、『レビテーション』をやって貰う。これは風の基礎だ。出来なければ話にならない。」

・・・下手ですね。

少し浮いて落ちたり、全然浮かなかったり・・・。

私、モンモランシー、キュルケ、タバサは余裕です。  
後は名前を知らない人達。

あの中に数少ないラインが居るんでしょうね。

「ミス・テリエは『土』のラインのようだが、意外に上手いものだな。ミス・モンモランシも上出来だ。」

そう言ってギトーとかいう先生は別の人の所に行きました。

「ミスタ・ロレー又は流石だ。流石は『風』のロレー又だ。」

「……元気でですねえ。」

何時まで『レビテーション』やってるつもりなんでしょうか……。

「リリア暇ね。」

「そうね。」

「……私はモンモランシーと日陰で涼んでいます。」

ああ、和みます。

「『レビテーション』も満足にできない者が多いのに、教えても無

駄だと思つが仕方ないから『フライ』に移る。詠唱は解るな？やれ  
！」

「……さっきも思いましたが、あれは教えてるとは言いませんよ  
ね。

やれって言われて出来るなら、教師なんて要らないと思いますけど。

仕方ないのでやりましょうか。

「イル・フル・デラ・ソル・ウィンデ、『フライ』。」

「……」  
「……」

空中、しかも少し離れた距離でタバサと見詰め合ってます。

少しセーブしてますけど、私の『フライ』に付いて来れるとは……

この子絶対にラインじゃないです。

私の『フライ』は色々あって下手な『風』のトライアングルよりも  
上です。

「……トライアングル？」

頷かれました。

……嘘じゃないですか、ギター。

この調子じゃキュルケモトライアングルですかね？

「『ドット』にしてはなかなかやるではないか。」

下でギターが大きな声で言ってるのが聞こえます。

……あの教師馬鹿じゃないですか？

どう見たらタバサがドットに見えると？

「君達は、クラスが一番若い少女に負けて悔しくないのかね？ラインクラスの者は『風』の対極属性の『土』ラインメイジたるミス・テリエに負けて悔しくないのかね？」

……余計な事を。

また敵が増えるじゃないですか！！

……案の定、下に居る者は怒ってます……。  
ギター。

あいつ、何とかしないと……。

後日、タバサと誰かが決闘したらしいですが私は知りません。  
悪いのはギターです。

私を巻き込まないで下さい……。

43話 くアーデルハイトく(前書き)

降りてきたのでオリキャラ出します。

展開はやいと言っておきながら……。

#### 43話 くアーデルハイトく

色々あってお友達への道が遠くなりました……。

そう、ギターとかギターとかギターとか。

他にもギターとかギターとか。

モンモランシーのアドバイスもありまして、お友達になりやすい人は美少女だと言う事が解りました。

私がそれなりに美少女なので、美少女の方が友達になりやすいとか何とか。

というわけで、同じクラスの美少女に狙いを定めてみたわけです。

彼女は栗色の綺麗な髪をポニーテールにしている大人しい感じの美少女です。

清楚と言った方が良いでしょうね。

私の知らない人への対応をやんわりと、清楚な感じにしたのが彼女です。

身長は160センチちょっと、私はモンモランシーとほぼ一緒の166センチくらいです。

ええ、大人しい感じの美少女です・・・私の陰口を言ってる人に声を掛けるのに気が引けてるわけじゃないです。ホントです。

彼女には恋人が居るだとか、誰かに好意を寄せているだとかは聞いたことが無いので私にとってベストの相手です。キュルケ関係でトラブルになる要素がありません。

それに、彼女は数少ない『水』のラインです。魔法関係でも軋轢は少ないでしょう。

「ミス・ゲエテ、私もわたくし一緒してよろしいですか？」

「リィ・・・いえ、ミス・テリエ、どうぞ。」

・・・声の上擦ってます。

・・・嫌われてるんですか？

「ありがとうございます。」

「ミス・テリエは大変ですわね。」

「大変というわけではありませんが、クラスの子達にお近づきになれなくて困っていますわね。」

「ミス・テリエはお綺麗ですから、皆さんどう対応すれば良いのか迷っているだけですわ。」

カトレアさん程ではありませんが、なかなかのほのぼの感ですね。

「そつだと良いのですけれど・・・。」

「よろしければ、私わたくしとお友達になって頂けますか？」

「・・・え？良いのですか？」

これは予想外です。

向こうから友達になってくれるとは。

願っても無い事です。

「是非。リリアー又さんとお呼びしても？」

「私もアーデルハイトさんと呼んでも？」

「アーデルハイトで結構ですわ。」

「では、私もリリアー又でよろしいですわ。」

「私はリリアー又さんの方がお呼びしやすいのですが・・・。」

「それでしたら、それで結構ですわ。」

二人で上品に笑ってます。

・・・和みます。

美少女が二人でお茶していると注目を集めますが、そんな事は知ったこっちゃありません。

私にとって今大事なのはアーデルハイトです。

有象無象よりも目の前の美少女です！

「リリアー又さんは素敵な方ですから皆さんともすぐに仲良くなれますわ」

「仲介をお願いします・・・。」

「ええ、喜んで。」

アーデルハイトは綺麗な笑顔を浮かべて言いました。

「……良い人です。」

この人とても良い人です。

「アーデルハイトはミス・ツェルプストーの事をどう思ってたっしやるの?」

「私自身はゲルマニアの貴族だからと言ってミス・ツェルプストーを皆さんのように目の敵にするつもりはありませんが、他の皆さんは……。」

「……そうですわね。」

「ですがミス・ツェルプストーの様に……なんと言いますか、恋人をとつかえひつかえというのは……。」

「それは、確かに……。」

「それさえ無ければ、ミス・ツェルプストーも素敵な方ですから皆さんと敵対する事も無いと思うのですが……。」

「……キュルケの場合それだけじゃ無い気もしますが。」

「美しいお嬢さん方、私も一緒によろしいですか?」

誰ですか?この男は。

今はかなり邪魔なんですが……。

マントからして上級生っぽいですけど。

「申し訳ありません、ミスタ。今はこちらのリリアーヌさんと二人

でお話をしておりますの。」

・・・意外ですね。

アーデルハイトの印象からして、了承すると思ったのですが・・・。

私としては好都合ですけど。

「では、私ともお話をしていただけませんか？」

「申し訳ありません。またの機会に。」

男の顔が引き攣ってますね。

まさか、断られるとは思ってなかったという風です。

私もアーデルハイトが断るとは思ってなかったわけですが。

「・・・解りました。」

はい、サヨウナラ。

二度と来ないで下さい。

「アーデルハイトが断るとは思っていませんでしたので、意外でしたわ。」

「そうですね？せっかくリリアーナさんとお友達になれたのですから、他の方に邪魔をされたくはありませんもの。」

「そうですね。私も他の方に邪魔をされたくはありませんでしたから。」

「そう言って頂けると光栄ですわ。」

ああ・・・和みます。  
この人良い人なのです。

「使い魔小屋に居る蒼い馬はリリアーヌさんの幻獣だとお聞きしましたけど、そうなのですか？」

「ええ。よくご存知ですわね。」

「有名ですわよ？あれ程美しければ、皆さん欲しがりますでしょうし。」

「家にしか居ない種類ですから、珍しいのでしょうか。」

「デュ・テリエの幻獣は有名ですし。皆さん一度は見に行ったのではないのでしょうか？」

「・・・物好きですわね。」

「そういうものですわ。」

・・・アーデルハイトのおかげでクラスの女の子達と打ち解ける事が出来ました。

あの子、良い人です。

本当に、良い人です。

打ち解けると言っても打算的な感じはしますが……。  
敵対されるよりは遥かにマシです。

細かい事は気にしてはいけません。

クラスで孤立してないというのがそこそこ大事なんです。

「アーデルハイト、ミス・ツェルプストーとお友達になってみよう  
かと思っています。」

「……そうですか。」

「……。」

「私もご一緒致します。」

「お願いします。」

キュルケは……。

部屋ですかね？

「あら、デユ・テリエじゃない。何か用かしら？」

「こんばんは、と言うには少し早いかしら？ミス・ツエルプストー。」  
「そうね。微妙な時間だわ。それで？」  
「お友達になりたいと思って来たの。」

「……沈黙……？」

無反応はちよつと……。

「お友達つて言うのは、最近貴女と一緒に居るだけのアレ等と言うのかしら？」

「……何が言いたいんです？」

「貴女は他のトリステイン貴族とは違うと思っていただけ、所詮はトリステインの女ということかしらね。上っ面だけの付き合いをお友達というのなら、トリステインは随分個性的な付き合いをするのね。」

「……お友達戦線が逆効果に。」

「ミス・ツエルプストー、貴女の言う‘アレ等’には私も入っているのかしら？」

「ゲートも居たのね。どうかしらね？貴女が‘アレ等’に入っていないとしても私には関係の無い事だから。」

「……本気でおっしゃっているのですか？」

「悪いけど、本気よ。」

「……火花が見えます。」

アーデルハイトもキュルケも……臨戦態勢？

「リリアー又さん、お部屋に戻って頂けます？」

「・・・アーデルハイトはどうするの？」

「私はミス・ツエルプストーと少しオハナシがありますの。」

絶対お話しじゃないです。

おはなし決闘とかだと思えます・・・。

帰りましょう。

「・・・変な事はしないで下さいね？」

「ええ。解ってますわ。」

## Side キュルケ

何かと思えば、お友達？

笑わせてくれるわね。

表面だけは着飾るトリスティンらしい言い分ね。

あのリリアー又って子は綺麗だし、嫉妬だけの彼女達とは違つと思つてたけど、期待はずれも良い所ね。

「興味深いわね、そのオハナシとやらが何なのか。」

「ミス・ツエルプストー。他の阿婆擦れ共は好きに言ってくれて構いませんけど、私はリリアー又さんに関して本気ですわよ？」

「どうかしら、口だけならなんとも言えるものね。それにデュ・テリエも本気だとは限らないわよ?」

あら、雰囲気が変わったわね。

この子大人しそうだったけど、意外に沸点低いのかしら。

「ツエルプストー……撤回しなさい。今の言葉は許容できません。」

「あら、撤回しないならどうなるのかしら。決闘でもするの?この私と。」

「ええ。撤回出来ないのなら貴女を殺します。」

「殺す、ね、穏やかじゃないわね。」

「ですが、今は人が多いので今夜にしましょう。私は見世物になる趣味はありませんから。」

「あら、私は今からでも構わないわよ? 貴女の綺麗な髪が黒コゲになるのを見て貰うなら観客は多いほうが良いわ。」

「髪が黒コゲ? 貴女は何を言っているのですか?」

あら、髪だけじゃ不満なのかしら?

「私は撤回出来ないなら貴女を殺す、と言ったのですよ。貴女は髪だけで済ますつもりなのですか?」

今気付いたけど、この子……目が本気だわ。

「はあ……失敗したわね。」

「どうしました、ツエルプストー! 撤回する気になりましたか?」

「そうね、撤回するわ。ごめんなさいさいね、ゲーテ。」

「あら？意外ですわね。」

「だって貴女、目が本気なんだもの。本気の相手に言うてはいけない事を言ったのなら謝るわよ、私はまだ死にたくないの。」

「……。」

「私にも許容出来ない理由があるなら、私も命を掛けるけど。今回は私が一方的に貴女を侮辱しただけ、それなら私が謝罪するのが筋ではなくて？」

「ミス・ツエルプストーは意外と賢かったのですわね。あなたを見誤っていましたわ。」

「私もね。大人しいのかと思ってたけど、情熱的じゃない。」

「私はリリアー又さんと呼んで来ますわ。」

「待ちなさい。貴女、本当にあの子の事を『お友達』と思ってるのかしら？」

「この子、多分……。」

「あら？どうして解ったのですか？」

「貴女、本気過ぎるのよ。」

「そうですね。リリアー又さんには内緒ですわよ？」

「何処が好きなの？」

「全部でしょうか？最初見た時に雷に打たれたのかと思いましたが、話しかけてくれた時は、本当に嬉しかったです。」

「……まあ、恋愛は自由よね。」

「ええ。今の目標は抱き締めて貰う事ですわ。」

「……頑張ってね。」

「……お風呂と一緒に入れれば良いじゃない。背中を流してあげたら？」

「……無理です！そんなのまだ無理です！！裸の付き合いなんて、

絶対に無理です！」

「脱がなくても解るけど、あの子すごくスタイル良いわよ？お風呂で見たことあるけど。」

「i want to add a little more...」

あらあら、真っ赤になっちゃって可愛いわね。

Side out

#### 43話 くアーデルハイトく（後書き）

降りてきたので出しましたが、この子どうしましょう？最後まで生かしますか？それともこんがり大好きメンヌヴィルに……。

はい、アーデルハイトですが、リアと二人で居るのを邪魔されたくないのです。二人で話したいでなく。他の人間は邪魔なんです。

44話 〽決闘〽 (前書き)

他人視点の戦闘描写はやりにくい……。

#### 44話 決闘

「は、い、さつき振りね。」

「ミス・ツエルプストー、変わり身早くありませんか？」

「キユルケで良いわよ、リリアアヌ。」

「リリアで良いですわよ？アーデルハイトも。」

「私はリリアアヌさんと呼ばせて下さい！お願いします、しばらく慣らせて下さい！」

「……慣らせる？」

「いえ、あの……えっと……。」

「まあ、良いじゃないリリア。その子がそう言ってるんだから。」

「構いませんが……。」

この二人いきなり仲良くなっていますが、何があつたんです？  
怪しすぎるのです。

私の居なかつた30分くらいの間に何が……。

「アーデルハイト、何があつたのですか？」

「……いえ。」

「大した事じゃないわよ。誤解が解けただけ。」

「誤解……ですか？」

「そ、誤解よ。」

・・・誤解？  
ま、良いですね。

「仲良くなれたのなら構いませんが。」  
「というわけで、お友達になった時にするツエルプストー家の儀式をしましょう。」

Side      アーデルハイト

その様なゲルマニアはその様な儀式があるのですか？

ワインでも飲むのでしょうか？

「さつきはもうアーデルハイトとはやったから後は私とリア、リアとアーデルハイトね。」  
「アーデルハイトともやるのですか？もうお友達なのですけれど。」  
「ま、良いじゃない。ここは私の部屋だから、家の流儀に従ってちようだい。」

私とキュルケさんがもうやった？  
何か特別な事をしたでしょうか・・・？

「そうですね。ここはキュルケの流儀に従いましょう。」  
「私も構いませんが・・・。」  
「儀式とはどんなものなのですか？」  
「ハグよ。ハグ。」

・・・ハグ？

「それだけですか？」

「そ、後は一緒にお風呂ね。」

・・・お風呂？

「ハグは済ませたけど、お風呂は今日の夜ね。」

「・・・待つてください、キユルケさん。」

「何？アーデルハイトは不満でもあるの？」

「・・・私と抱き合うのは嫌ですか？」

いえ、嫌なわけありません。

寧ろ、ご褒美と言いますか、願ってもないと言いますか。

しかし、心の準備が必要といたしますか・・・。

「そんなことはありません！」

「そうですか？そう言っただけだと私嬉しすぎますわ。」

「ただ抱き合うだけじゃなくて、色々細かいルールがあるのよ？」

「どんなのですか？」

「背の高い方が、低い方を抱き締めるの。もう1つは、今後付き合いたいだけ抱き合うの。一生の付き合いにしたいなら20分とか30分くらいね。因みに私とアーデルハイトはそのくらいよ。」

「それじゃあ、私がアーデルハイトを30分くらい抱き締めれば良いのね？」

「そうなるわね。」

・・・マツテクダサイ。

マツテクダサイ。

お願いですから待って下さい。

『待って下さいキユルケさん！お願いします。今はまだ無理です！』

「そんな必死に迫ってこないで、それに声が出てないわよ？」

無理！

無理です！！キユルケさん。

「・・・そんな首を振りながら涙目になってもダメよ？」

「アーデルハイトは・・・やっぱり嫌ですか？」

「いえ、とても嬉しいです。本当です。本当に・・・嬉しいです。」

本当です。

胸の鼓動が止まりません。

だから、そんな悲しげなお顔はしないで下さい。

「先にやって良いわよ。夕食の後はお風呂ね。」

そんな、楽しそうに言わないで欲しいです。

今の私にはハードルが高すぎます。

「・・・キユルケさん・・・。」

「ほら、さっさとやりなさい。私のベット貸してあげるから。」

「あう・・・。」

「アーデルハイト。やりますよ。」

「・・・はい。」

覚悟を決めなければなりません。

顔が熱いです。

私の顔は間違いなく真っ赤になっています。

Side キュルケ

この子、思った以上ね……。

それに初心だわ。

顔が真っ赤になってるし。

リリアはやる気満々みたいだけど。

477

「（次はお風呂だから、頑張つて。今はあの子の身体を堪能しなさい。）」

「（……ハードルが高すぎます。）」

「（大丈夫よ。女の子同士なんだから。）」

「（そういう問題じゃありません。）」

「どうかしましたか？」

「それじゃ、私は外に出てるから終わったら呼んで頂戴。」

邪魔する程野暮じゃないしね。

………。

「離さない。」  
「……置いてかないで下さい。」  
「あの子待ってるんだから早くベットに横になりなさい。」  
「……(フルフル)。」  
「アーデルハイト、やっぱり……嫌？」  
「さっさと行きなさいー！」  
「……あう……。」「  
「しゅっくじゅっく。」「

Side アーデルハイト

二人きりにされてしまいました。  
こうなったら、覚悟を決めましょう。

「というわけで、アーデルハイト。」  
「はい！」  
「抱きますね？」  
「……お手柔らかにお願いします。」  
「嫌でしたら、そう言って下さいね？」  
「それだけは、絶対にありません。本当です。」  
「そうですか？じゃあ……。」「  
「はい。」

リリアー又さんの指先が触れただけで、身体がビクツと跳ねてしまいました。

不味いです。

予想以上に……いえ、予想以上に緊張しているというのは予想通りですが、予想以上というのが更に予想以上で……いけません、意味解らないことしか頭に浮かびません。

ああ……リリアー又さん。

とても柔らかいです。

それに……良い香りがします。

キュルケさんの言う通り、お胸が大きいです。

「えっと……どうですか？」

「とても柔らかくて、良い香りがします。」

「ありがとうございます。アーデルハイトも柔らかくて気持良いですわよ。」

「あの……私からも抱き締めて良いでしょうか……。」

「ええ、どうぞ。」

「ありがとうございます……。」

ああ、もう死んでも良いです。

寧ろ……このまま死にたいです……。

キュルケさん……ありがとうございます。

Side out

「終わったかしら？」

「キュルケさん。途中で相手が寝ちゃった場合はどうすれば良いのでしょうか？」

「……アーデルハイト、寝ちゃったの？」

「ええ。寝てしまいました。」

「はぁ……。」

「やっぱり、寝ちゃったらダメなのですか？」

「そんな事はないんだけど……。」

「……ん。」

「おはようございます、アーデルハイト。」

「……おはようございます？」

「そろそろ夕食ですから、食堂に行きませんか？」

「ひよっとして、私寝てましたか？」

「寝顔、可愛かったですわよ。」

「\* \$%#¥ 「

ええ、可愛い寝顔でした。

頬をツンツンするのは仕方ない事なのです。

お約束なのです。

「貴女、寝てどうするのよ!」

「……でも。」

「でもじゃない……!」

「……。」

「まあ良いわ。食堂に行くわよ。」

キュルケと並んで3人で夕食を食べていると、ジロジロと見られたりしましたが気にするのは止めましょう。

最も鋭く睨んでいたのはピンク髪の公爵令嬢だったりします。人を睨んではいけないと後で教えてあげなければなりません。今は放置です。

……翌日。

目の前の馬鹿をどうにかしてくれませんか？

マントを見ると3年っばいですけど、馬鹿さは色々と卒業してますね。

「僕のような、気高い貴族にこそあの馬は相応しいとは思わないか？」

「……」

「何、君がああ馬を大切にしているのは解っている。だからこそ、言い値を出そうじゃないか。」

「……」

「1000億エキュールかい？」

「……」

「それとも2000か？」

「……」

「何とか言ったらどうなんだ？」

「……」

「何、君が僕のような勇敢で気高く強い男に献上したいというのなら構わないのだがね。」

「……」

「『火』のトライアングルである僕がせっかく話しかけてあげているのに、新入生の分際でダンマリとは生意気じゃないか。」

「……100億エキュール。」

「ん？」

「100億エキュール。」

「八八八八馬鹿を言っではいけないよ。君は金の価値をわかっていないようだね。そんなにするわけじゃないか。」

「1000億工キユー。」

「……………」

「1兆工キユー。」

「…………君は僕に喧嘩を売っているのかい？」

「失せなさい、下種。」

「フハハハハ、慈悲深い僕だからこそ今の言葉を聞かなかった事に  
してあげよう。明日また聞いてあげよう。よく考えたまえ。」

あの馬鹿は何なんですか？  
本当に、あの下種は…………。

今日も来るとかほざいてましたが。

「…………リリアーヌさん？」

「何？」

「……………」

「…………リリア？」

「何？」

「…………何でもないわ。」

「……………」

「……………」

「やあ、答えを聞こうか。」  
「失せなさい、下種。」  
「八八八八、後悔するよ？」  
「喋るな。」  
「……僕を侮辱しているのだね？」  
「失せる。」  
「まあ、良しさ。」

二度と来るな。

「……リリア、大丈夫？」  
「何が大丈夫なのかを聞いているのか解りませんが、大丈夫じゃないです。」  
「……リリアー又さん、気を取り直して下さい。」  
「でしたらあの下種を排除しましょう。」  
「……リリアー又さん？」  
「そうしましょう。あれを捨ててくれば良いのよ。」  
「……リリア？」  
「さあ、奴を倒しましょう！」  
「……。」  
「では、あれに決闘を申し込んできます。」  
「待ちなさい。彼、私と同じトライアングルって言うてたわよ？」  
「それが、どうかしましたの？」  
「貴女、ラインでしょう？」  
「そういえばそうでしたね。で？」  
「怪我しちゃいけないから止めておきなさい。」  
「キュルケは、私がアレに負けると思ってるんですか？」  
「いいから止めておきなさい。」  
「……仕方ないですね。今回だけはキュルケに免じて大人しくしてましよう。」

「（何があつたの？）」「  
「（私は何も……。）」「  
「（とりあえず、さっきのアレよね？）」「  
「（おそろくは。）」「

ウル月、第2週、ヘイムダルの週の週末。

新入生歓迎会の夜、キュルケが脱がされました。

私もキュルケと一緒に犯人探しをしようかと思いましたが、キュルケが手を出すなど言うので、私は手を出さないことを決めました。これは、キュルケの戦いですから私が手を出すのはお門違いです。

キュルケは強いですから、怪我はしないでしよう。

私は私で探さなきゃいけない馬鹿がいたので、それ所じゃなかったとも言いますが。

新入生歓迎会の夜 昨日の夜 イルが攻撃を受けたのです。  
火魔法で攻撃を受けたので、イルに怪我はありませんでしたがそれ

は関係ありません。

「イル、命知らずの馬鹿を探してますから待って下さいね。」

『聞いた事のある声ではあったのだが、あまりに興味が無かったから覚えてないのだ……。』

「イルが気にする事はありません。私が処理しますから。」

『頼むぞ。』

必ず……。

「やあ、久しぶりだね。」

「……また彼方ですか。」

「いい加減そいつを僕に渡したらどうだい？」

『この馬鹿だな。』

「……これですか？」

『ああ。』

「馬鹿、表に出なさい。」

「……馬鹿？それは、僕の事を言っているのかい？」

「馬鹿意外にどこに馬鹿が居るのですか？」

「……良いだろう。君には1度力の差を解らせてやらなければならぬと思うていたんだ。」

「さつさと行きましよう馬鹿。」

「決闘だ。」

「わかりました馬鹿。」

「キュルケにタバサ？」

「あら、リリアじゃない。デートかしら？」

「馬鹿を排除するだけよ。」

「・・・それ？」

「・・・誰？」

「ええ。これが、馬鹿よ。」

「リリアの幻獣に手を出した男。」

「・・・そう。」

「二人は何をしてたの？」

「私達のほうは馬鹿におしおきを終えた所よ。」

「・・・誰かが吊るされてます。」

女の子は家のクラスの子ですが、男は・・・見たことあるような・・・  
無いような・・・？

「キュルケ、審判をお願いします。」

「・・・解ったわ。けど、怪我をしそうになったら止めるわよ？」

「その必要はありません。」

「安心したまえ、女の子にそこまでする気は無いさ。」

「・・・こいつ、どうしてくれようか。」

フフフフ、この感じでは壁を超えちゃいましたね……。

Side キュルケ

「 『火』のトライアングル。」

「 リリアーヌ・デュ・テリエ。」

大丈夫かしら、あの子。

相手は『火』のトライアングルなのに、あの子は『土』のライン……。

怪我をする前に絶対止めなきゃいけないわね。

名前も知らない馬鹿は詠唱をしているのだけど、リリアは何してない。

……あの子どういっつもり？

「 『ファイアー・ボール』」

火球が襲い掛かるが、リリアは回避したわ。

……今の動きは、まるっきり素人ではない？

あの子って戦えたのね。

「馬鹿、何故手を抜いてるんですか？馬鹿は馬鹿らしく全力で来なさい。」

「……フハハハツハ君は馬鹿だね。どうやら死にたいらしい。」

……なんで挑発するのよ!!  
あの子には悪いけど、止めましょう。

「……タバサ？」  
「……大丈夫。」

「何がよ？」

「彼女は……強い。」

……強い？

「確かに素人ではないみたいだけど、クラスの差はそれだけじゃ埋まらないわ。」

「……『士』のラインじゃない。」

「リリアが？」

「そう。」

「何でそんなことが解るのよ。」

「……私と近いレベルの風の使い手。」

「……。」

「……だから、大丈夫。」

「ちよつと、あの男トライアングルスペル！」

「ウル・カーノ・ジエーラ・テイル・ギョーフ」

「……リリアも？」

「……トライアングルスペル。」

「『フレイム・バースト』」

「『カイザーフェニックス』」

男のほうは5個の火球を作り出し、リリアの方へ放つたけど……  
全てが飲み込まれた。

リリアの作り出した、大きな火の鳥に……。

ぶつかる前に、結果が見えたわ。

リリアの炎は私の炎よりも明らかに、強い。

範囲、威力そのどちらでも勝てる気がしない。

私よりも弱いあの男にどうにかできる筈が無い……。

……男は。

「……………燃えてどっかに行ったわね。」

Side out

「逃げましたか。まあ、良いでしょう。」

「……………リリア。」

「審判ありがとね、キュルケ。」

「貴女……………『士』のラインって大嘘じゃない。」

あ、ちよつとイラツとしてましたから普通に炎使っちゃいましたね。

「……………ま、良いですね。」

「そうですね。」

「トライアングル？」

「スクウェアですね。」

「なんで『士』のラインなんて言ってるわけ？」

「……………面倒ことはゴメンですからね。」

うん。

嘘じゃありません。

「因みにさっきのは『火』の3乗のトライアングルスペルを『火』の4乗にして使ってみました。」

「そ……………。」

馬鹿のその後は知りません。  
向こうが避けてくれるなら願ったり叶ったりなのです。

44話 〽決闘〽 (後書き)

苦渋の決断で『フレイム・バースト』……。  
火のトライアングルスベルが爆炎しか登場して無いって……。

#### 45話 く風呂く（前書き）

Sideタバサは楽です・・・何も心理描写が要らないとも言える。今回はとりあえず、お風呂シーンを書いてみたかったです。

いつの間にか1200ポイント70万アクセスを超えてました。投稿だけにしかPCを使っていない弊害ですかね？  
基本携帯で見てるので。

因みに、予想外に伸びていたので恥ずかしくなっていたりします。

45話 く風呂く

Side タバサ

「いい加減覚悟を決めなさい！」

「無理！無理です！！そんなことしたら私死んじますから！！！」

「一緒に風呂に入るくらいが何よ！この前だって貴女が無理だって言うから、あの子と二人で入ったのよ？」

「むりですう（フルフルフル）・・・。」

「無理じゃない！お風呂でリラックス所か、隣でどんよりされてる私の身にもなってみなさいよ！」

「キュルケさんも私の身になってください・・・。」

「タバサ！」

「・・・肌が綺麗。」

「・・・知ってます。」

「・・・胸が大きい。」

「・・・知ってます。」

「・・・柔らかい。」

「・・・知ってます。」

「・・・背中を流してくれる。」

「・・・。」

「・・・気持ち良い。」

「・・・。」

「キスされた。」

「マツテクダサイ!!!」  
「嘘。」  
「……………」  
「今日一緒に行くわよ。」  
「後3年待つて下さい……………」  
「貴女だけ留年するつもり?」  
「…………無理ですう。」  
「聞かないわよ。」  
「あう……………」  
「…………観念。」  
「タバサさんまで……………」

Side 黒髪メイド

「誰か!裏にいるあの大きな幻獣は誰のだ!!!」  
「あれはミス・テリエに頼まれた幻獣ですが、どうかしたんですか?」  
「ミス・テリエ?デュ・テリエのお嬢様か!?」  
「そうですね…………マルトーさん、近いです。」  
「不味い、不味いぞ!」

…………マルトーさんが変です。

いつも快活な方なのですが、今は何かに怯えています。

「…………ミス・テリエならあの子に御飯をあげる時にこちらに来ますが?」

「……今まで会わなかったのは幸いか。」

「あの子凄いですよね。最近は使い魔用の小屋にいますが、前は壁を飛び越えて来てたんですよ。今でも自由に出たり入ったりしてますけど。」

「そんなこと解ってる!」

「……どうしたんですか?」

「俺はこの前、味も解らない坊主共への当て付けに料理の手を抜いたんだ……。」

「そうなんですか?」

「ああ。」

「……それで?」

「……バレたら殺される。」

「……え?」

ミス・テリエに?

ミス・テリエは貴族なのに私達にとても親切に接してくださる方なのですが……。

「不味いぞ……殺される。」

「マルトーさん?」

「ここは、お嬢様の夕食を豪華にしてご機嫌を取るべきか?」

「……?」

「シエスタ、リリアー又お嬢様の夕食には気合をいれるぞ!」

「……はい?」

リリアー又お嬢様?

マルトーさん、どうしたんですか?

「今日の料理の出来で俺の命運が決まる。」

「え？」

「もしも、怒りを納めてくれなければ……。」

ああ、解ってしまいました。

これは、ミス・テリエへの命を掛けた挑戦なのですね。

Side out

「何ですか？これ。」

「なんでリリアのだけそんなに豪華なの？」

「……羨ましい。」

「リリア又さんはお綺麗ですから。」

「アーデルハイト、何口走ってるの？」

「え？」

「綺麗だからってリリアにだけこんなことするわけ無いじゃない。」

「……言われてみれば。」

「……おかしい。」

……何かしましたっけ？

「後で聞きに行ってみるわ。学院でこれはダメです。」

「そうね、不公平だわ。」

「……（コク）」

食後。

さて、マルトーさんにも聞いてみましょう。

学院では会った事無いですけど、多分居る筈です。

「コーティもイルもちょっと待っててね。マルトーさんに話があるから。」

『マルトーとは誰だ?』

『前に屋敷に居たコックさんでしょ?』

「あ、やはりマルトーさん学院に居るんですね。」

『匂いはするよ?』

「流石は私の舌。美術品はまるつきり解りませんが。」

Side 黒髪メイド

「マルトーさん居ますか?」

「ミ、ミス・テリエ!あの子達の御飯ですか?」

「いえ、今日はちょっとマルトーさんに用があるのです。マルトーってコックが学院に居るでしょう?多分料理長だと思いますけど。」

ああ……ミス・テリエにバレてしまったんだわ。

マルトーさんが……。

「い、居ます。」

「じゃあ、呼んでくれますか？」

「……はい。」

ああ、マルトーさん居ないで下さい……。  
お願いします！

「マルトーさん、ミス・テリエが……。マルトーさんを名指しで……。」

「来たか……流石はリリアー又お嬢様。」

「マルトーさん、逃げてください。殺されちゃうなんて嫌です！」

「シエスタ……これは俺の責任だ。料理人として、避けちゃいけないんだ。」

「……マルトーさん。」

マルトーさん……死なないで下さい。

「……お久しぶりです、お嬢様。」

「久しぶりですねマルトーさん。やっぱりここで働いてたんですね。」

「はい。お屋敷を辞めた後、ここで料理長をやらせて貰ってます。」

「マルトーさんの味じゃないかなあ？とは前から思ってたんですよ。」

「お嬢様、流石です。」

マルトーさんは以前ミス・テリエのお屋敷で働いてらっしゃったんですか？

「それで、今日の夕食ですが。」

「気合を入れてみました。」

「……ここは学院ですよ？私だけ特別扱いと言つのは辞めて貰えますか？」

「……申し訳ありません。」

「領の学校の給食だって、皆同じお金を払ってるんですから一人だけ豪華だったらいけないでしょう？」

「仰るとおりです。」

ああ……ミス・テリエのお気に召さなかったようです。

マルトーさんは……。

「では、これからは他の皆さんと一緒にしておいてくださいね。」

「はい。」

「今日の御飯美味しかったです。ありがとうございます。」

「……それだけですか？」

「？」

え？

「いえ、何でもございません。」

「……コーティとイルの御飯貰えますか？」

「はい。直ぐに。シエスタ頼む。」

「あ、はい！」

マルトーさんは無事みたいです。

……良かった……。

ミス・テリエは先に外へ行かれました。

が

「あ、マルトーさん。この前の夕食手を抜いたでしょう？家の料理長に言っておきますからね。」

「……待つて下さい！！お嬢様それだけは！！」

「ダメですよ。弟子の成長具合をきちんと知らせてあげなくては。」

「師匠にだけは！！料理の手を抜いたなんて知られたら、俺の命が！！」

「それじゃあ、外に行で待つてますね。」

「お嬢様　　！！！！」

………？

「マルトーさん？」

「殺される……。師匠に、殺される……。」

「あの……マルトーさん？」

「手を抜いたなんて知られたら……。殺される。」

………。

「あ！早く準備をしましょう。」  
「そうです。」

私にはミス・テリエの幻獣さん達の御飯を用意するという仕事があったのでした。

「シエスタ……。」

「楽しいお仕事の時間です。」

「シエスターー！！」

Side out

料理長の明日は暗い。  
頑張れマルトー。  
負けるなマルトー。

「リリア、今日はアーデルハイトも一緒にお風呂に入るわよ！」

「え・・・本当ですか!？」

「ええ。あの子も遂に貴女と真のお友達になれるのよ。さあ、行くわよ。」

「行きます!！」

アーデルハイトは私とお風呂に入るのをずっと嫌がっていたのです。恥ずかしいとか色々言っていました。私と入りたくないだけなのではないかと、不安だったんです。

でも、遂に今日一緒に風呂です。

「人が居ませんね。」

「まだ時間が早いからよ。アーデルハイトが恥ずかしがるから仕方なくね。」

「タバサは？」

「あの子は本が読みたいから後で入るそうよ。」

「そうですか。」

「……あうう。」

「アーデルハイト、早く脱いだらどうですか？」

「私もリリアもとつくに脱いでるのよ？」

この子、そんなに自分のスタイルに自信が無いんですか？  
それなりに平均以上だと思いますけど。

「ほら。マント外しなさい。」

「アーデルハイトもスタイル良いですから、恥ずかしがらなくても良いですよ？」

「いえ、スタイルとかじゃなくて……。」

「……顔が赤いですけど、大丈夫ですか？」

……。

……近づいたら、逃げられました。

「リリア、貴女は先に行つてなさい。」

「……解りました。」

……やはり、ショックは大きいのです。

結構傷付きます。

S i d e      キュルケ

「リアの裸ばかり見てるからそうなるのよ。」  
「だって……。」  
「だってじゃないわ。早く脱ぐ！」  
「はい……。」

ああ、この子は……！  
じれったいわね。

「ほら、行くわよ。」  
「待って下さい、心の準備が！」  
「さっきまで散々見詰めてたでしょうが！」  
「いえ、見るのと見られるのでは違うのです。」  
「私には見られても平気なわけ？」  
「キュルケさんはただのお友達ですもの。」  
「……それは、それで何かム力つくわね。」

まあ、これが普通ね。

「来なさい。」  
「あつ。」

無理矢理連れて行きましょう。

「アーデルハイトもやっぱりスタイル良いじゃないですか。」

「・・・あの、そんなに見詰めないで下さい。」

「良いじゃないですか、私も裸ですし。」

貴女が裸なのが一番の問題なんだけどね。

・・・。

「広いお風呂に3人だけつても良いものね。」

「そうですね。」

「・・・。」

・・・。

・・・。

「・・・この子不味くない？」

明らかにおかしいわよ？

のぼせてる・・・？

はぁ・・・リリアばかり見てるからそうなるのよ。

「リリア、そろそろ背中流してあげれば？」

「そうですね、アーデルハイト行きましょう。」

「あ・・・はい。」

はあ〜良いお湯ね。

「あ、アーデルハイトこんな所にほくろがありますよ?」

「えっ何処ですか?」

「うなじの所です。」

「知りませんでした。」

「ひゃっ! リリアーヌさん揉まないで下さい!」

「背中を流す時のお約束でしょう?」

「ですが……。」

「アーデルハイトは美乳ですね。」

「あう……。」

「肌も白くて綺麗ですし。」

「あう……あううう。」

「はい、こっち向いてね。」

「は、はい。……リリアーヌさん。」

「どうしました?」

「あの、前を……隠してくれませんか?」

「見ても良いですよ?」

「あう……。」

「この泣きぼくろが色っぽいですよね。肌が上気してる上に目が潤んでますから余計に。」

・・・あの子、大丈夫かしら？

「ひゃあ！舐めないで下さい。」

「え？これもお約束ですよ？」

「絶対違います!!！」

「嫌でした？」

「いえ、嬉しかったですけど・・・。」

良いお湯ね。

BGMが百合百合しいけど。

・・・。

・・・。

「アーデルハイト、大丈夫？」

「私、死んでも悔いはありません……。。」  
「……。私もされたけど、貴女はグツタリしすぎね。」  
「……。キユルケさんもされたんですか？」  
「ええ。気持ち良かったわよ。異常に……。。」  
「……。。」  
「もしもよ？もし仮にあれと両思いになったら大変よ？」  
「……。頑張ります……。。」

S i d e o u t

## 45話 く風呂く（後書き）

既にアーデルハイトのキャラが崩壊してます。最初はクーデレにするつもりだったんですが……。

リリアとキュルケは豪快に脱ぎます。

ごめんなさい。

次回から話が進みます。

#### 46話 く夏休みく (前書き)

弟の名前がわからない・・・作中に出したような、出してないよ  
うな・・・。

知ってる人が居たら教えてください。  
探しても見つからないんです・・・。

## 46話 く夏休みく

「……さて、あいつは誰でしたっけ？」

「以前声を掛けられたような？ 掛けられてないような？」

「……ダメですね。」

「思い出せません。」

「ただ、これだけははっきりしているのです。  
奴は軟派野郎です。」

「さて、コーティあれは何点ですか？」

『7.3点。』

「理由は？」

『魔力はドットの並、顔はまあまあだけど、他は全部ダメ。きつと  
脳みそスツカラカン。』

「ボーダーは50点ですね。」

『モンモランシーのだから私はどうでも良いけどね。』

「そうはいきません。あの子に変な虫が付くと、私も関わる事になります。」

『燃やそう。』

「そうですね。燃やしましょう。」

「モンモランシー、それは誰ですか？」

「リアア！」

「撫でてあげますから私の質問に答えてくださいね。」

「うん。」

素直な子は好きですよ。

.....。

「ミス・テリエじゃないか。」

.....。

顔が蕩けてますよ、モンモランシー。

人前でそれはどうかと.....。

「モンモランシー、質問の答えは？」

「え、もう終わり？」

「後でまた撫でてあげますから今は質問に答えてください。」

「これはギーシュ・ド・グラモンよ。」

「ああ、これがグラモン家の四男坊ですか。」

「以前会ったと思うんだがね。」

「ちよつと黙っててください。」

「なっ！！」

「それで、これはモンモランシーの何ですか？」

「何って.....ただの知り合いよ。」

「アーデルハイトやキュルケと仲良くしてる間にモンモランシーに変な虫が付いているので、払いに来たんですけど、勘違いなら良いです。」

「ひょっとして、変な虫とは僕の事かね？」

「いえ勘違いでしたわ。初めましてミスタ・グラモン。」

「……二度目なだけどね。」

「あら、それは失礼をミスタ・グラモン。モンモランシー私達とあつちでお茶をしませんこと？」

「する！」

「では行きましょう。失礼しますわね、ミスタ・グラモン。」

「僕も一緒に良いかい？」

「申し訳ありませんミスタ・グラモン。変なむs・いえ、男性はご遠慮下さい。」

「今変な事を言わなかったかね？」

「そんなことはありませんわ、ミスタ・変なむs・グラモン。」

「リリア、ギーシュなんか放っておいて速く行きましょう。」

「そうですね。」

サヨウナラ変な虫。

その程度の実力でモンモランシーとイチヤイチャしようなんて100年早いのです。

「モモランシー良いですか？男の子は狼なんです。どうせ食べられちゃうなら強い狼に食べられちゃった方が幸せになれる。ですから、あんな群れに付いていけないくて最終的に餓死して死んじゃうような狼に食べられちゃうのはダメですよ？」

「わかったわ。」

「良い子ですね、撫でてあげましょう。」

「うん。」

変な虫の邪魔をしたり、タバサと仲良くなったり、アーデルハイトの敏感な所がわかったり、ルイズが「ツエルプストーと仲良くする・・・ゴメンナサイ、文句言ってゴメンナサイ。」と言ってきたり、爆破の原因は相変わらず不明だったり、スクウェア記念にメドロアを撃つてみたら込める魔力量は変わってないのに威力が上がっていたり、タバサと特訓したおかげで『風』がトライアングルになったり、コーティとバトルして5分くらい持つようになったり、アーデルハイトがエレオノールさんみたいになったりe t c . . .

色々あって夏休みになりました。

ええ、夏休みです。

……ですから、屋敷に帰ってきたわけです。

けど、私はまだ屋敷に入れなかつたりします。

ええ、熱烈に歓迎を受けています。

ポケモンにもグリフォンにも家族にも歓迎を受けました。

そう、受けまし‘た’。

そして、今はメイドさんに歓迎を受けているわけです。

因みに、順番が巡ってメイドさんの番になったわけではありません。一人のメイドさんが、全てを押しつけて私に抱き付いてるわけです。

ええ、ノエルさんです。

頬をスリスリされたり、キスされたり、胸を揉まれたり、胸を揉まされたり……。

人前でこんな事をされてしまったては、お嫁にいけな……婿を貰うんでしたね、そういえば。

お母様達や他のメイドさんは皆屋敷に帰っちゃいましたし、ポケモン達なんて空気を読んであげましたよ、みたいな暖かい目で去って行きました。

最後まで『リリアは私のだ〜！』って叫んでたコーティはイル

に＜催眠術＞で眠らされて引き摺られていきました。

「リリア、リリア」

「はいリリアですよ。寂しかったんですね。」

「うん。」

もうね、ギューーってされてますよ。

離してたまるか！と言わんばかりです。

私も会いたかったわけですけど、ここまでされるとちょっと気圧されます。

「リリア、もう一回チューしよ。」

「良いですよ。」

舌？

普通に入ってきてますが何か？

唾液？

まあ察してくださいって所です。

ノエルさんはテクニシャンです。

経験値ばねえのです。

私に特化しているとは本人の弁です。

人前でする様な事は無かったんですけど……ノエルさんも末期です。

治療する気も、治療させる気も本人に無いのが特徴ですね。

「……落ち着きました？」

「ええ、大丈夫よ。まだ足りないけど。」

「……。」

「屋敷に戻りましょう。」

戻れなかったのは、ノエルさんのせいですけどね。

「あら、もう終わったの？早かったのね。」

「お母様、流石に何か言う事は？」

「貴女が居ない間、ノエルはそれはもう凄かったのよ？」

「凄かった？」

「ずつつつと、どんよりして大変だったんだから。」

「……それで？」

「皆で相談して、ノエルはリアの愛人にしましょうって落ち着いたわ。」

「……もう良いです。」

「それはそうと、レティの魔法見てあげてくれる？『水』もラインになったの、『お姉様が帰ってきたら褒めて貰うの。』ってずっと

楽しみにしてたから。」

「11歳で得意系統の『風』だけでなく『水』までラインですか、レティも優秀ですね。」

「それに、あの子はダンスをリリア以上に一生懸命やるから教え甲斐があるわ。」

「……………そういえば、私ラインになったのはいつでしたっけ？」

「……………いつだったかしら？」

「6歳くらいにはラインだった気がしますが……………」

「……………気にしちゃダメね。」

「そうですね。」

10歳の時には苦手な『土』ですらラインになってましたから……………。

……………。  
いつでしたっけ？

「こつちへいらっしやい。」

お母様がちよいちよいつとします。

何でしょうか？

「どうしました？」

「ん〜、嫉妬かしら？」

「？」

「ほら、お母さんの胸に飛び込んでらっしやい。」

「では、失礼して。」

「はい、どうぞ。」

ふっふっふ、流石はお母様です。

私の身体はまだまだお母様に負けてますね。

色々と。

「リリアの身体は私譲りね。」

「そうですね。ありがとうございます。」

「どういたしまして。」

「良い匂いがします。」

「リリアもね。ノエルだけど……。」

「はい。」

「あの子の特別は貴女だから、きちんと解ってあげてね？」

「わかってます。私にとっても特別ですから。」

「リリアは包容力があるから、何人でも抱え込めそうね。一人だけじゃなくて。」

「……それって、私が浮気性みたいですね。」

「大丈夫よ。リリアなもの。」

「それはそれで……。」

何と言いますか……。

この微妙な表現しづらい気持ちはなんでしょうね。

夏休みも中盤です。

今日はノエルさん達を連れてクルデンホルフに出張です。

大公には私より2つ下の娘が居たのでレティも連れて行くかどうかと思ったのですが、当の娘が旅行中というので、レティはお留守番です。

何をしに来たかと言いますと、訓練です。

戦闘訓練ですね。

『幻獣』としての戦い方を身に着けましょってわけです。

しかし、適当な相手が居ません。

デュ・テリ工家の軍を使うのは、軍の方から「絶対に嫌です！」って言われました。

最初はヴァリエール公爵にお手伝いして貰おうと思ったのですが、夏休み前になってカリーヌさんから『戦い方を教えてあげましょって、お手紙が来ましたので選択肢から外しました。』

……仕方ないです。

『鋼鉄の規律』の体現者に喧嘩を売りに行くのは無理です。

最強クラスと戦ってみたいとか思ってた時期が私にもありました。

学院入学前に戦った時のカリーヌさんは「戦<sup>や</sup>る気のちょっと本気でした。」

でも今の私が『カイザーフェニックス』を使ったらあの人は間違いな「殺<sup>や</sup>る気の本気」になっちゃいます。

命は惜しいです。

そこで、やって来たのがクルデンホルフというわけです。

アルビオンを除外すれば、ハルケギニア最強と言われる竜騎士団があります。

訓練相手にはバッチリです。

トリステインとも縁深いクルデンホルフです。

王宮からは文句を言われたらしいですけど、クルデンホルフの戦力チェックをしてきますと言ったらマザリーニ枢機卿から渋々オツケーが出ました。

クルデンホルフ側としても、家の戦力チェックが出来て万々歳というわけですね。  
負けられません！

そんなわけで、やって来ましたクルデンホルフ！

ほぼゲルマニアです。

でも名目上はトリスティンと縁深き……。

「ようこそいらっしゃいましたミス・テリエ。」

「この度は私共の急なお願いを聞いて下さって感謝しますわ。」

「こちらとしても名高い、デュ・テリエの幻獣と訓練が出来ますか

ら。」

「では、ご期待に沿える様善処しますわ。」

「では、こちらへ。」

翌日。

向こうは幻獣を駆る騎士10組。

竜騎士じゃないのに私は怒り心頭ですけど、そこはグツと堪えて目の前の愚か者共をまつさt・・・叩きのめす事に集中しましょう。

こっちは私、コーテイ、ティア、アクア、エクレール（サンダース）、はまちゃん（ヤドキング）、ブレード（ハッサム）、アーロン（ルカリオ）、コスモ（スターミー）です。

空戦仕様じゃないのはあつちが竜騎士を出してこないからです。竜が出てこないのなら地面からでも充分です。

ブレードは飛べますし。

保険にエスパークタイプも入れてますけどね。

<念力>使って空でも戦れます。

「そちらはリリアーナ様も入れて9ですが、よろしいのですか？」

「ええ、構いません。逆にお聞きしますが、たった10組でよろしいのですか？」

「・・・それは、面白い冗談ですな。」

「フフフフ。」

「では、行きます。」

「最初は自由に動いて良いわ。普段の特訓の人数を増やしたただけだから。」

『はい』

「……………」

『弱!』×8

…………油断しすぎでしょう?

短く説明しますと……いきなりアクアが<水鉄砲>でメイジ4人を叩き落としティアが<オーロラビーム>連射でメイジの操るメイジの居ない幻獣3体を行動不能にし、エクレールが<10万ボルト>で相手1組と幻獣1体を行動不能にし、コーティが<火炎放射>で相手3組を行動不能にし、ました。

ここまで30秒くらいです。

私が出たことと言えば、コーティの「貰い火」発動だけです。防御はコスモがやってくれました。

この時点で操り手の居ない無傷の幻獣が1体、幻獣の居ないメイジが1人、無傷の1組。

そこから私が『カイザーフェニックス』をやって相手を倒しました。

「……………はあ。」

ブレイド、アロン、はまちゃんは何もしてません。

部屋を変えまして

「団長さん、弱すぎませんか？」

「油断しただけでしょう。あの程度で戦えなくなるような軟な鍛え方はしておりませんので。」

「……………そうは見えませんでしたけどね。  
水メイジが大慌てでした。」

「次は油断せずにして頂きたいものですわね。」  
「勿論です。」

「……………団長さん、そんなに拳を握り締めないでも良いでしょう？」

「次は私がお相手いたしますので。」  
「それは楽しみですわね。」

その後も、毎回別の人間と幻獣を用意してもらって5セット程同じ条件でやっただんですが、結論から言わせて……無駄足でした。

「次の機会には、きちんと竜騎士とやらせて欲しいものですわ。」  
「畏まりました。」

今会話してる相手？

クルデンホルフのメイドさんです。

団長さんはベッドの上です。

詳しく話を聞くと、用意して無かったらしいです。  
本当に舐められてたんですね。

………カーリヌさんをお願いしましょうか。

## 46話 〽夏休み〽 (後書き)

46話まで来たのに原作に突入してない。

このままじゃ原作前の方が本編より長くなるのでは?と思っています。

47話 くゴレムく (前書き)

メタゲロスの組成は、何ですか？

## 47話 くゴレムく

「ギーシュ、辞めといたら？」

「ミスタ・グラモン、お辞めになった方がよろしいと思います」

「……無謀」

「彼女が『土』のラインだとしても、譲れないこともあるのさ。女性相手に決闘を挑むのは僕の本意では無いがね」

「……はあ、解りました。『土』のラインとして戦いを教えてさしあげます」

「それでは、今夜ヴェストリの広場で待つ！」

ギーシュ貴女って人は……。

そんなにモンモランシーが欲しいのですか？

「受けちゃって良いわけ？」

「問題ないです。ギーシュ程度にはどうやっても負けません」

夏休み後半は、酷かったのです……。

カリィ又さんの所に行ったら……。

終盤には、あの人テンション上がりまくって「現役時代の血が騒ぐ！！」とかつて言っていました……。

もう行きたくないです……。

あの人怖すぎます。

そのおかげで、ギーシュ程度なら『ブレイド』でスパスパいけます。『青銅』なんて言ってるんですから、青銅のゴーレムでも使うんでしょう。

余裕ですね。

「そりゃ、そうでしょうけど……」

「今回はギーシュのステージで戦ってあげます。」

『ブレイド』で余裕ですが、今回はゴーレムで戦ってあげましょう。

「それで、彼方が勝ったらモンモランシーと自由にお喋りしたいので良いのですか？」

「その通りだ！僕がモンモランシーと喋っていたらいつも君に邪魔をされてるからね」

「まあ、良いでしょう。万が一彼方が勝てたら、ですけど」

「『青銅』のギーシュ、僕の青銅のゴーレムがお相手する。」

「いつも思ってたけど、彼方達はたかがドットで2つ名を名乗るなんて恥ずかしい事がよくもまあ出来ますね」

「何が言いたいのかね？」

「何が？そうですね、敢えて言うなら……身の程を知れ、でしょうか？」

「では、『土』のラインである君の2つ名は？」

「ライン程度の私が2つ名を名乗るなど、恐れ多くて・・・」  
「もう良いよ。行かせて貰う!」

・・・ほう、意外に優秀ですね。

ドットでゴーレム5体とは、相性が良いんですね。

「では、私も」

私のゴーレムはいくつか種類がありますが、今回はメタグロス類に  
しましょう。

モデルがいても姿形しか再現出来ませんが、ギーシュ程度には負  
けません。

特徴は浮遊出来る事です。

ボディはどうやって・・・エセダンバルです。

『土』もトライアングルになればもう少し硬度を上げれると思いま  
すけど。

真面目に錬金の特訓しますか・・・。

「・・・浮遊するゴーレムだって!？」

「ええ。この子強いですよ?」

「・・・だが、そちらは一体だ」

「では、2体目を」

次はメタングです。

メタングを2体作るよりも気持ち的に見て楽しいのです。

3段進化を並べるとちよつとした達成感です。

こうゆう、理由の無い満足感って魔法使うときに大事だと思いませんか？

「……2体目か」

「どちらか1体でも倒せたら、3体目を出してあげます。万が一にも有り得ませんが」

「それは僕のフルキュールのスピードを見てから言っただけか！」

「あら、意外と速いですね」

ええ、意外と。

ギーシュの戦闘力評価が3から5にアップですね。

まあ、所詮……フッフ、ですけど。

ベコン！！

「まずは1体……！」

「自分よりも硬い物を殴ったらどうなるかなんて火を見るより明らかでしょうに」

メタング型を殴ったギーシュのゴレムは私からしてみれば当然の結果として、ギーシュからすれば有り得ない結果として、弾き飛ばされました。

「そもそも硬度が段違いなのに、質量まで違うんですよ？私のゴレムが浮いていると言っても、これだけ実力差があれば当然の結果です」

私は何もしてないんですけど、ギーシュはバテバテです。

「まだやるんですか？そろそろ飽きて来たんですけど」

「まだだ！僕はモンモランシーのために負けるわけにはいかないんだ！」

「そろそろ精神力が切れるんじゃないですか？ゴーレムが3体しか維持できてませんよ？」

「それは君も同じ事だろう？君がラインで2体しかゴーレムを出していなくても、そちらは浮遊させているんだからね。ひよっとしたら、僕よりも……」

熱いですね〜。

勿論私は疲れていません。

カイザーフェニックスを1発撃つよりも全然楽です。

「……お風呂に入ってきて良いですか？」

「逃げるのかね？」

「倒していきますから安心してください」

「やってみるがいい！」

「わかりました」

ドカン！  
ドコン！  
ベコン！

はい終了。

青銅程度じゃこんなもんですよ。

お風呂、お風呂。

「なっ！！」

「モンモランシーと仲良くなりたければ、最低でもラインになってからですね」

「・・・クッ！」

「それでは、私はモンモランシーと一緒にお風呂に行ってきますね」

「なっ！！羨まs・・・じゃない、僕も行かせt・・・次こそ僕が勝つ！！」

「・・・」

ジトーーーーって目です。

自分でも解ります。

私の目はジトーーーーってしてます。

「そんな目で見ないでくれ！」

「・・・」

ジトーーーー

「つい本音が出ただけじゃないか！！」

「・・・うわぁ」

「男子なら誰でも思っ事さー！」

「・・・」

ジトーー

「モンモランシーだけじゃない！君だって学院の男からその服の下を見たいと思われているのさ！」

「うわっ……」

「君がいけないのだよ！その身体が……！ミス・ツエルプストーと並んでいた日には……くぁ……！」

「サヨウナラ、『覗き見』のギーシュ。」

「……くっ……！」

彼は軟派野郎ではありませんでした。

もっと悪いです。

モンモランシーに彼と目を合わせないよう言わなくては……。

男は狼……。

私はその言葉を理解していませんでした。

まさか、学院のおとこ……豚共がそんな目で見ていたなんて……。

今まではせいぜい、私の身体を見て興奮してる程度だと思っていたんですが……。

前からおとk・・・豚が歩いてきました。

「・・・・・・・・」

「ミス・テリエ、なんだその目は！僕を蔑むような目をして！」  
「・・・・・・・・」

これも常に私の裸を想像してんですかね…………。

「僕を馬鹿にしてるのか！」

「何でもありません、失礼します。」

明日からは、男共の視線を避けましょう。

この後、「なんだこの感覚は！これは…………興奮か！？興奮なのか！？」という雄叫びが響いたのであるが、誰の耳にも届かなかった…………。

また、冷静になったことで自分の口走った事を思い出し、如何ともしがたい状態になった薔薇男が居たそうな…………。

「アーデルハイト……今日は一緒に寝ませんか？」

「えっ！？これは夢？」

「今日は怖い夢を見そうなんです……。」

「イタツ……夢じゃない……。」

「構いませんか？」

「勿論です！さあ入ってください。はやく寝ましょう！」

「ありがとうございます。」

翌朝、アーデルハイト・ド・ゲータは寝不足だったとかなんとか・

47話 くゴレムく (後書き)

頑張れギーシュ！負けるなギーシュ！！

48話 〽再会〽 (前書き)

マチルダさんが出てくるだけの話です。

## 48話 〱再会〱

ちよつと諸事情あつて学院長に要求しに来たわけなんです、もう学院長とかどうでも良いです。

「学院長ちよつとこの人借りますね！良いですね？ありがとうございます」  
います

「ちよ、ちよつと待ちなさいどうしたんだね？」

「え？あゝ・・・私、美女が好きなんです」

「な、なんと！！それは真か！！・・・行ってしもつた」

さてさて、お部屋にきたわけです。

連れ込んだわけじゃありません。

ゆっくりお話するためにマチルダさんのお部屋にお邪魔してるのです。

「マチルダさん、無事だったんですね！」

ああ、この抱き心地はマチルダさんです。

「そうだよ。久しぶりだね」  
「・・・胸が大きくなってます」  
「会って言う事がそれかい？」  
「でも、大きくなってます」  
「リリア程じゃないさ。前に会った時はペタンコだったじゃないか」  
「そりゃ10歳でしたからね。今ではこの通りのナイスバディですが」  
「ま、私もなかなかのもんだけどね」  
「・・・他の方は？」  
「屋敷で働いてただけの奴らは無事だろうがね。私の家族はご存知の通りさ」  
「・・・マチルダさんだけでも無事で良かったです」  
「ああ。命があるだけでもマシだね」  
「何故ここに？」  
「仕事しなきゃ生きていけないからね。先日、偶々あのエロ爺にスカウトされたのさ」  
「エロ爺・・・何かされたんですか？」  
「尻を触るのは日常茶飯事だね」  
「フフフフフフフ」  
「怖いよ？」  
「いえ、大丈夫です。あの御髭少し長すぎると思いませんか？」  
「・・・」  
「ちよつと燃やしても構いませんよね？」  
「・・・そうさね」  
「こんな所で働くくらいなら家に来ませんか？」  
「ありがと。でもね、あんたの家にまで迷惑をかけるわけにはいかないさ」  
「そんなことありません！」  
「気持ちだけ受け取っておくよ」

「……解りました。でも、何かあったら直ぐに言って下さいね」?

「ああ。心配してくれてありがとうね」

「当然です。」

「……ありがとう、リリア。」

「どうしました、らしくないですよ?」

「妹みたいなのに久しぶりに会って感傷に浸ってるだけさ」

「では、マチルダ姉さんとも呼びましょうか」

「……!!」

「どうしました?そんなビックリして」

「いや、頑張らなくちゃいけない……と思っただけさ」

「でしたら、給料の良い家に来てください!」

「さっきも言っただろう?肅清された家の娘がデュ・テリエに居るなんて知られたらろくな事にならない」

「そんなの私には関係ありません。私はマチルダ姉さんと仲良しなだけです」

「あなたのそういう所、私はすごく好きだよ」

「面と向かって言われると照れますね……」

「でも、マチルダ姉さんは辞めてくれるかい?」

「どうしてです?」

「妹にこれ以上隠し事をするのは辛いのだ」

「……隠し事ですか?」

「良い女には秘密があるのさ。それに、今の私はロングビルだよ」

「……ろんぐびるさん……」

「そんな嫌そうに言うんじゃないよ。身分を偽ったほうが都合が良  
いんだからね」

「では、学院にサウスゴードってばらして家に鞍替えしましょう」

「辞めなって言っただろう?」

「では、二人きりの時はマチルダさんと呼びます」

「……ああ」

S i d e      マチルダ

リリアが魔法学院に入学するって事をすっかり忘れてたね。

それすら忘れる事があったってことなんだけどね……。

リリアが私の事を覚えていてくれたのは嬉しいし、デュ・テリエに  
来いって言うてくれたのは嬉しいけど、私はマチルダだけじゃな  
く盗賊だからね。

あの子には迷惑は掛けられないさ。

しかし、マチルダ姉さん……か。

テファにも隠し事をしてるし、リリアにまで姉さんなんて呼ばれた  
らこっちの身が持たないね。

「失礼します。」

「おあミス・ロングビル……その、ミス・テリエとの絡みは  
どうだったね？」

「……」

「ミス・テリエのあの身体とミス・ロングビルの身体がどうなったのかね？」

「・・・オールド・オスマン？」

「いや、皆まで言うな。わしの身が持たぬ」

「・・・」

「ミス・テリエのあの胸の揉み心地や身体のラインを教えてくださいだけで良いぞ」

「・・・（この、エロ爺が）」

「ミス・テリエがどんな艶やかな声を出したかも教えてくれると・・・」

「学院長・・・」

「それと、下着だけは必ず教えなさい！これは重要なことじゃ」

「・・・」

「あのミス・テリエがどんな下着を穿いているのかは学院中の男が知りたい筈じゃ」

「・・・」

「いや、ミス・テリエだけではないぞ？婚期を逃したとはミス・ロングビルの美しさは衰えておらぬから、ミス・ロングビルの下着m・

・・・ヘプロ！」

「誰が、婚期を逃しただ！このエロ爺が！！」

「そんなことで怒るから婚期をのぐくばあ！！」

「・・・デュ・テリエにでも行くこうかね。」

「お帰りなさい、マチルダさん」

「……どうやってここに？」

「学院の鍵なんて私からすれば無いのと一緒にですよ？」

「リリアだから許すけど、一応禁止だからね？」

「では、正規の鍵を下さい」

「……はあ、あんたは変わってないね」

「変わりましたとも。色々」

「そういうことじゃないよ。」

「じゃあ、どうゆうことですか？」

「そういうのは私みたいなからしたらすごく救われるのよ」

「今日のマチルダさんは年寄りっぽいですね」

「私はまだ若いっての！」

「知ってますよ？」

「……本当にあなたは変わってないんだね」

なんか、馬鹿にされてるような気が……。

「言いづらい事を聞きますが……」

「なんだい？」

「モード大公が肅清された理由です。マチルダさんはご存知ですよ  
ね？」

「……それを聞いてどうするんだい？」

「学院を卒業する時には無理矢理にでもマチルダさんを拉致するの  
で、理由を知りたいだけです」

「……拉致って」

「本気ですよ？絶対に連れて行きます」  
「・・・悪いけど、いくらあんだでも話せないね」  
「・・・解りました。でも、気が向いたら話してくださいね？」  
「気が向いたら、ね。」

とりあえず卒業後にマチルダさんをゲットですね。  
そこには突っ込まれなかったんで、オツケーなんでしょう。

「・・・何してんだい？」  
「え？」

「だから、なんで私がここに居るのかって聞いてるんだよ」  
「抵抗されたので」

「抵抗したから私を眠らせたのかい？」

「だって・・・久しぶりに一緒に寝ようかと・・・」

「・・・本当に変わってないね」

「あ、呆れてますね？絶対に呆れてますね？」

「そうだね。ノエルも変わらずかい？」

「・・・」

「・・・もう、なんと言うか・・・別人？」

「・・・言いづらい事を聞いたみたいだね」

「いえ、ノエルさんはもうマチルダさんの知ってるノエルさんじゃなくなってます」

「……どういことだい？」

「会ってみたら解りますよ……」

ええ。

別人です。

「きっと驚きますよ……きっと」

「仲違いでもしたのかい？」

「前の10倍くらい仲は良いですよ」

もうとんでもなく仲は良いです。

「じゃあ……ノエルが太ったのかい？」

「より一層綺麗になつてます」

「あれが、更に……ね」

「世の女性の理想ですね」

「私も一人妖精みたいなのを知ってるけど、ノエルはノエルで別の凄みがあつたね」

「私もマチルダさんも相当の美女と美少女ですけどね」

「その私達が言つんだからよっぽどなんだね」

「今度マチルダさんの知ってる妖精さんにお会いしたいです」

「気が向いたら、ね」

「またそれですか？」

「ごめんね、リリア」

ふむ……どうしたんでしょうね。

マチルダさんリサーチでもしますか？

……でも、人の秘密を勝手に暴くのは……。

何時か話してくれます……勘ですけど。

今日は私のベッドでマチルダさんと寝ました。

柔らかかったです。

48話 〽再会〽 (後書き)

マチルダさんは髭にあげません。

49話 く春の女神く(前書き)

ついに原作ですよ!

ついに原作ですよ!

大事なことなので2回言いました。

#### 49話　～春の女神～

夢を見ました。

私は一人、煌めく炎の中でお茶をしていました。

世界が朱色に染まる中、その中心で私は一人お茶をしていました。

人々は恐れ、駆け回り、懸命にその炎から身を守っていました。

しかし、炎は無慈悲にその勢力を拡大させ全てを飲み込んでいきました。

それでも、人々は炎を食い止める為に全力を尽くしました。

けれど、人々は余りに無力でした。

しかし、炎の眷属はその存在に歓喜しそれを迎えました。

全てを飲み込む炎は彼らにとっては神にも等しき者だったのだから・

・・・。

「ああ、お茶が美味しい」

『こっちのケーキも美味しいね』

『そうだな、我でもなかなか美味しいと思う』

「もう一個いる？」

『いる〜』

『我はもう要らぬ』

「皆さん元気ですね、あんなに走り回って」

いや、ほんと。

皆走り回って大変そうです。

無駄なのに。

「水メイジと土メイジは炎を消してください！急いで！！」

「リリア、あなたは何をしてるのかしら？」

「お茶です」

「あなたが原因でしょう？」

「私が原因と言われましても・・・」

「あなた土も使えるんでしょう？」

「そりゃ使えますけどね」

「アーデルハイトも火を消しに行ってるわよ？」

皆さんお分かりの通り、夢じゃないです。  
やっちゃんいました、テへ。

「……私は悪くないですよ？」

だって『サモン・サーヴァント』やっただけですもん。

「解ってるでしょ？ キュルケはトライアングルなんですから」

「まあ……ね。」

「消せてるいのは延焼部分だけ、炎の大元は全く消せてない」

「……そうね」

「あの炎が何なのか、僅かでも気付いてるのはキュルケと私、後は  
コルベール先生だけです」

「タバサは？」

「あの子はトライアングルでも『風』ですからね。炎の威力は解つ  
ても、あの炎がどれだけ規格外なのかは理解出来ません」

「私もお茶でも飲もうかしら」

「どうぞ。キュルケの分も貰ってますから」

「それ、いつ取ってきたの？」

「炎が辺りに散り始めてからです」

「……あれいつ収まるの？」

「さあ？」

「まあ……良いわ」

「タバサはどこいったんです？」

「あの子は風竜に乗って空に逃げたわ」

「キュルケのサラマンダーはなかなか見事ですね」

「間違いなく火竜山脈のサラマンダーね。一級品よ」

「その子は怯えてませんね」

「そうなのよ。どちらかと言えば炎に突っ込みたがってるわ。貴女

は私よりもあの炎について解ってそうだけど？」

「まあ、自分で召喚したわけですから」

「それで？」

「お察しの通り純粋な炎です」

「そこまでは解るわ。ツエルプストーの炎なんてあれと比べたら焚き火みたいなものね」

「そうではなくて、本当に純粋な炎の結晶です<sup>エレメント</sup>」

「どうゆうこと？」

「私にもよく解りません。感覚的なものです」

「……まあ良いわ」

さて、いつ収まる事やら

「あら、これ美味しいわね」

「でしょ？」

5分後

『リリア、呼ばれてる』

「そろそろですかね。行きましょう」

「いつてらっしや〜い」

「こんにちは。私はリリアーナと言います。あなたは？」

私が名乗ると、周囲の炎が全ておさまり一箇所に集まっていきました

た。

炎がおさまると同時に全ての視線がこちらへ注がれます。

次第にその炎は、鳥の形へと姿を変え・・・

あたかも神のような。

普段と同じこの広場が、神聖な場所であるような・・・。

誰もがその姿に見惚れ、場は静寂に包まれました。

『我を呼んだのは汝か？』

「ええ。貴方はファイヤーですか？」

『そうです』

「私と使い魔の契約を結んで頂けますか？」

『そのために来たのですから』

「我が名はリリアーヌ・デュ・テリエ。五つの力を司るペンタゴン。この者々に祝福を与え、我の使い魔となせ」

.....。

「終わりました。ミスタ・コルベール」

「よろしいです。ミス・テリエは『土』メイジではありませんでしたか？」

「実は私最近『火』系統の方が得意だったんです。」

「そうですね。しかし。それは・・・見たことの無い幻獣ですな」

『当然です、人間』  
「話せるのですか・・・？」  
「この子の事はこの辺にして、次の人の儀式を」  
「そうでしたな、興味深いですが・・・」  
「あっちへ行きましょう。私の友人を紹介します」  
『ええ、お願い』

自己紹介とか色々と終わりました。

この炎とか、触っても大丈夫なんですかね

「・・・そういえば、何と呼べば？ファイヤー？」  
『この子らと同じくリリアが名を付けて下さる？』  
「では・・・ペルセフォネ、『春の女神』というのはどうです？』  
『良いわね、気に入ったわ』  
「ではペルセと」

ファイヤーが来たら春って言われてますからぴったりですね。

その後はお茶の続きをしたんですけど、キュルケのサラマンダー

フレイルムって名付けたみたいです のテンションの上がりっぷりがやばかったです。

尻尾をブンブン振ってました。

加えて、ペルセの前で常に頭を下げていました。

更に、お茶の間他の人の『サモン・サーヴァント』が続いているのに注目が異常でした。

「あら、次はヴァリエールみたいね」

「ミス・ヴァリエール、大丈夫でしょうか……」

「『ゼロ』だしね」

「……不明」

「ルイズ……」

5分後

「何回やるつもりかしら」

「……」

「ルイズ……」

10分後

「宇宙の何処かにいる美しく(以下略)

」

「……平民？」

「……」

「……平民ですわね」

「……変態と同じ臭いがする」

「変態？」

「前に捕まえた変態」

「ジユリオ・チェザーレ……」

「それだ！」

「どうゆうこと？」

「解らないけど、ルイズとキスをしてから突然そんな感じが……」

「……なるべく関わらないようにしましょう」

『賛成』

でも、あの服は……。

明らかに、懐かしい生地な気がするんですけど……。

それに・・・ノートPC？

気になりますね。

後で見に行きましょう。

翌日、食堂にて

・・・ルイズ。

「ルイズ、流石にそれは無いと思いますよ？」

「だろ？君もそう思うだろ？」

「ダメよ！いくらリアに言われたからって躰はちゃんとしなきゃだめなの！」

「それは躰というよりも・・・」

「何よ！」

「ルイズの趣味に文句を言うつもりはありませんが、自分の部屋でやるならともかく、人前でやるのは・・・ひよつとして、人前でやるのが興奮するんですか？」

「そんなわけないでしょうが!？」

「え？そうなんですか？」

「当たり前じゃない！」

「そうだとっても・・・人前でやるのは」

「いいから放っておいて！」

「・・・解りました。もう、何も言いません。彼方も、頑張つて下さいね」

さようなら、ルイズ。

貴女のことには忘れません。

さようなら、ルイズ・フランソワーズ。

カリーヌさんには黙っていてあげます。

さようなら、ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエール。

カトリアさんでも許容範囲外かもしれませんが、貴女が満足なら私は何も言いません。

さようなら、ルイズ・フランソワーズ・ル・ヴァン・ド・ラ・ヴァリエール。

貴女は昔のエレオノール以上のDSです。

さようなら、ミス・ヴァリエール。

貴女のことには忘れません。

「それでは、また後でミス・ヴァリエール」

「は？」

「使い魔さんもまたいつか会いましょう」

「ちよつと待ってリリア！ミス・ヴァリエールって何よ!？」

「失礼しますわ、ミス。」

サヨウナラ、サヨウなら、さようなら・・・ばいばい、るいず。



49話 く春の女神く（後書き）

ペルセフォネは春の女神というのはアスラクラインより。

ようやく原作です。

50話 くフライパンく (前書き)

ウォーターサラマンドーって居るんでしょうか・・・？

## 50話 くフライパンく

錬金での金属加工技術と言えばゲルマニアである。

それはハルケギニアの一般常識であり、プライドの高いトリスティン貴族であろうと、そこに異を唱える事は出来ない。

中でも、剣を作らせればゲルマニアの錬金魔術師シュペー卿に勝る者は居ないと言われている。

そんなハルケギニア最高の金属加工技術で作られたフライパンで料理を習っていた少女は言いました。

そんな時代に生まれ、異界の知識を持っていたある少女は言いました、「このフライパン全然ダメ!!!」と……。

思えばこの一言が「料理人のステータスはフライパンで決まる」と言われるようになる最初の一步だった……。

金属加工技術はゲルマニアが最高。しかし、それはあくまで「魔法」での金属加工技術であり、魔法以外での金属加工技術が発達していないため、ゲルマニアが最高なのである。

3年ほど前にデュ・テリエ領で最高のフライパンはゲルマニア産ではなくなった、まだ数は少なかったが……。

「どうでした？そのフライパン」

「最高ですよ、お嬢様！これどうしたんですか？」

「家の領で作ったんですよ、マルトーさんは完成する前に辞めちゃいましたから知らないでしょうけど」

「……何で俺は辞めちまったんだ」

「最近ちよつと数を増やせるようになったんで送って貰ったんですよ」

「ありがとうございます、俺のために」

「いえいえ、これからもよろしくお願いします」

「はい！勿論です！」

「それでは」

フツフツフツフ、デュ・テリエ産のフライパンがハルケギニアを席卷する時代も近いですね。

まあ、元々家の領にはガーディヤデルビルが居ましたから火メイジなんか居なくても金属加工が出来る要素は揃っていたわけですから、問題は経験だけだったわけですが。

カオスの領域にまで到達するかもしれないスパコンで計算しました

からね、火メイジの感覚的な経験による金属加工技術が勝てるわけ  
ありません。

流石はスーパーコンピューター・メタグロス。  
3 体育てた甲斐があったというものです。

世界は私を呼んでいるのです!!  
ポケモン最高です。

幻獣が頑張ってくれてるわけですから、ロマリアによる異端認定の  
心配もありません。  
完璧です。

死角はありません!

仮にあるとすれば、製鉄だけですかね?  
領内にあるのだけでは足りませんから。

あのフライパンいくらで売ってやりましょうかね?

武器は外に売りません。

領内分だけです。

・・・防具だけは作っても良いかも知れませんがね。

でも、剣って高く売れるんですよえ・・・。

家で全て作れば、どんなに安くても一振り1000エキューは堅いのです・・・。

質が違ってます、質が！！

568

「お嬢様！」

「はい？」

「進級おめでとございます」

「ありがとうございます、マルトーさん」

さて、授業に行きますかね。

ミス・ヴァリエール、タバサ、キュルケ、モンモランシー、アーデルハイトが一緒です。

何か作為的なものを感じますね。

1年の最後に「変な虫」から「変な薔薇」にランクアップしたギースユも一緒ですけど……。

さっき近くで見たんですが、どう考えてもあのパーカーは化学繊維ですよ……。

ということは、彼は異世界から？

「皆さん。アクセシントがあったとは聞いておりますが、春の使い魔召喚は大成功のようですね。このシユヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

アクセシント？

何の事ですかね？

私じゃありませんよね？

「アクシデントってリリアよね？」

「キユルケさん、そんなこと言ってはダメですよ？」

「……間違いない」

「私じゃありません」

「それで、ミス・テリエの使い魔はどこです？」

「……」

「リリアの使い魔なら外ですわよ、ミセス・シュヴルーズ」

「……私じゃありません。」

ペルセはそこに居るだけで他の使い魔が萎縮しちゃいますし、人も見惚れちゃうので外です。

「後でお見せ下さいね。何でも神々しいまでの美しさだとか？」

「……」

「ミス・テリエ？」

「……わかりました」

「おやおや。変わった使い魔を召喚したんですね。ミス・ヴァリエール」

私達以外は笑ってるけど、人間を召喚するって笑って済むレベルの問題では無いと思うんですけど……しかも、異世界の人間。

「……やっぱり調べなきゃいけませんね。」

系統も不明。

カリィヌさんにも頼まれてますしね。

モンモランシーの使い魔はカエルのロビン。

キュルケはサラマンダーのフレイルム。

タバサは風竜のシルフィード。

アーデルハイトはオオサンショウウオを小さくして可愛くデフォルメさせたような謎の生物。

うわっ！って思ったんですが、アーデルハイトに連れられて図書館で脱皮した後の姿を見たら凄く可愛かったです。

もう、別の生物です。

産まれたときからその姿だったら私も抱き締められたんですが……。

サラマンダーの水バージョン、ウォーターサラマンダーらしいです。

早く脱皮して下さい……。

お願いします。

「では、授業を始めますよ。私の二つ名は『赤土』。赤土のシュヴルーズです。『土』系統の魔法をこれから1年、皆さんに講義します。魔法の四大系統はご存知ですね？ミスタ・マリコルヌ」  
「は、はい。ミセス・シュヴルーズ『火』『水』『土』『風』の四つです！」

「今は失われた系統である『虚無』を合わせて、全部で五つの系統があることは、皆さんも知っての通りです。その」

そういえば本来は五大系統でしたね……『虚無』。

ブリミルの系統でしたっけ？

ブリミル。

ブリミル。

ぶりみる 王家 ……。

……ヴァリエールって王の分家でしたっけ？

公爵ですから分家ですね。

……。

……この案は却下で。

面倒な気がします。

「では、お喋りをしていたミス・ヴァリエールに『錬金』をやってもらいましょう」

「先生、危険です！」

「危険？どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。ですが、彼女は努力家で座学も非常に優秀だと聞いております。さあ、やっごらんない。失敗を恐れている、何も出来ませんよ？」

「ルイズ。やめて」

「タバサ、アーデルハイト解ってますね？」

「・・・了解」

「勿論ですわ」

「では、私も合わせて三重障壁で」

ルイズの爆発は鬼ですからね。  
あれは・・・スゴイです。  
非常に凄いです。

「ルイズが杖を振った瞬間に」

「・・・(コク)」

「はい」

「『錬金』」

『ウォーター・シールド』

『エア・シールド』

『ファイヤー・ウォール』

ドッガーーーーン!!!!!!

何とか防げたみたいです。

私達は大丈夫です。

私達は……でも、他の人の使い魔達が爆音にビックリして暴れだしちゃいました。

キュルケのサラマンダーは火を吐くし、マンティコアが飛び上がり窓ガラスを叩き割り外に出ました。

……見間違いでしょうか？

今、カラスがへびに飲み込まれた様な……。

「だから言ったのよ！あいつにやらせるなって」

「もう！ヴァリエールは退学にしてくれよ！」

「俺のラッキーがへびに食われた！ラッキーが！」

……やっぱり食われたみたいですな。

ご愁傷様です。

「ちょっと失敗みたいね」

「……この惨状を、ちょっとの一言で済ませる貴女は大物ですよ。」

「学院長」

「ミス・テリエ、どうしたね？」

「『フェニアのライブラリー』の閲覧許可を頂きたいのです」

虚無の記述があるとすれば、あそこでしょう。

一般書籍には混ざってないでしょう。

「ほう。何故かね？」

「黙って許可を出して下さい、エロ爺」

「……君にはもう少し学院長への敬意を持って欲しいもんじやが」

「みす・ろんぐびる、へのセクハラを辞めたら持ちましょう」

「……まあ君なら良からう。卒業後は学院の教師でもやらんかね？」

「『火』の教師ならコルベル先生が居ますよ？」

「君はそれだけじゃなからう？」

「……何故それを？」

「爺の楽しみの一つは覗き見じゃ。毎日外で頑張っておるのう」

「見られてたんですか・・・気付きました」  
「君の治癒はトリステインでも1・2位を争うと思うてるのじゃが」

「申し訳ありませんが、私は家を継ぐつもりですので」

「残念じゃのう。数少ないスクウエアなんじゃが」

「スクウエアならミスタ・ギトーが居るじゃないですか。他はトライアングルで我慢して下さい」

「アレは君と違ってスクウエアなだけ、だと解っておるう？」

「いざとなったら、学院長が教えたらどうです？」

「ホッホッホ、老いばれに何を期待しとるんじゃね？」

「では、失礼します」

ヤル気無し・・・ですか。

このままじゃ学院は馬鹿製造機関で終わっちゃいますよ？

何を探したら載ってますかね？

とりあえずは・・・ブリミルの魔法についてですかね。

「ミスタ・コルベール？」

「ミス・テリエ？ここは閲覧禁止ですぞ？」

「学院長には許可を頂きました。ミスタは何を？」

「ミス・ヴァリエールの使い魔について調べていたのです」

「それは……『始祖ブリミルの使い魔たち』？」

……これに載ってたら最悪ですね

「……載ってたんですか？」

「ええ、ありました。彼は『ガンダールヴ』です。私はこれから学院長へ報告に行ってきますので失礼します」

……ガンダールヴ。

「……最悪ですね。ルイズが『虚無』」

ああ、面倒なことになる以外の未来予想が出来ない……。

## 50話 くフライパンく（後書き）

スーパーコンピューター・メタグロス。

メタグロスはスーパーコンピュータ並みの知能を持っている（公式設定です）。

火の温度から、熱する時間まで何でも計算します。

51話 くガンダールヴく（前書き）

ギーシユは原作より優秀です。

まあ、所詮ラインですが

## 51話 くガンダールヴ

S i d e    ギーシユ

あの平民のせいでケティとモンモランシーを泣かせてしまったではないか。

ああいう時は気を利かせたまえよ。

・・・平民如きにそんなことを期待するのも無理な話だったな。

これがもし、リリアに知れたら・・・。

平民で気晴らしでもしておかなければやってられないね。

まあ、僕としても平民如きに決闘を申し込むなんてみっともないことをしてしまっただから、彼が尻尾を巻いて逃げると言っのなら許してあげない事も無いんだけどね。

来たか。

流石平民。

僕との力量差も解らないらしい。

「とりあえず、逃げずに来たことは、誉めてやるつもりじゃないか」  
「誰が逃げるか」

「しかし、君には勇気と無謀は違うということを教えてあげよう」  
「はっ！お前みたいな気障野郎に負けるわけねえだろうが」

「そうか……。では、始めようか」

観客も待っているのですね。

行こうか、ワルキューレ。

「な、なんだそりゃ！」

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね？」  
「て、てめえ……」

「言い忘れたな。僕の二つ名は『薔薇』。薔薇のギーシュだ。君には僕のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

リアに僕の未熟さを思い知らされたから、一度は二つ名を名乗るのも辞めようかとも思ったが……。メイジのクラスなど関係なく誇れるものが僕にはあった。

それが……。『薔薇』。

この一年で僕は成長したのさ。

『青銅』ではなく『薔薇』。

それが僕、ギーシュ・ド・グラモン！

「行くぞ！」  
「えっ？」

前と同じ青銅のゴーレムだとしてもその構成、スピード、制御数は今までとは違う。

「げふっ！」  
「なんだよ。もう終わりかい？」

メイジに喧嘩を売っておきながら、この程度か。

「ギーシュ！」

「おおルイズ！悪いな。君の使い魔をちょっとお借りしているよ！」  
「いい加減にして！決闘は禁止じゃない！」

「平民と貴族の決闘が禁止されているわけではないよ」

「そ、それは、そんなこと今までなかったから……」

「意外だね。君がそんなにその平民に固執するなんて」

「自分の使い魔が、みすみす怪我するのを、黙って見ていれるわけがないじゃない！」

それも、そうか。

一応使い魔だったね、平民だけど。

「誰が怪我するって？俺はまだ平気だったの」  
「サイト！」

「……へへへ、お前、やっと俺を名前で呼んだな」

「わかったでしょう？平民は、絶対にメイジに勝てないのよ！」

「……ちょ、ちょっと油断した。いいからどいてる」

心意気は買っがね。

君では僕に勝てないよ？

「おやおや、立ち上がるとは思わなかったな……。手加減が過ぎたかな？」

「寝てなさいよ！バカ！どうして立つのよ！」

はぁ……。弱い者虐めは好きではないのだがね。

「やるだけ無駄だと思うがね」

「全然効いてねえよ、お前の銅像弱すぎ」

……。はぁ、強がりも過ぎると惨めだよ？

しかし……。その強がりがどこまで持つか、見物だね。

「お願い。もうやめて」

彼に言いたまえよ、ルイズ。

僕はもういつ辞めても良いんだよ？

「終わりにするかい？」

「……。休憩だ！待ってる！」

……。はぁ。

意地を張り続けるのも大変だろうから、僕から辞める機会を作ってあげよう。

「これ以上続けるなら、その剣を使いたまえ。取らないなら一言いたまえ。ごめんなさい、と。それで手打ちにしよう。」

「………剣を取るか、平民。」

「ここまで頑張るとは僕も思っていなかったよ。素直に驚いているよ、見事だ。」

その根性だけでなく、まだ動けることもね。

しかし、フラフラじゃないか……何!?

僕のワルキューレを切り裂くか!?

「やるじゃないか、平民!こちらも本気でやるつか!」

「へえ、たった10体で良いのかよ?」

「来たまえ!」

くそつ、速い。

僕のワルキューレとは段違いか。

しかも、一太刀で2体か……。

こうなれば、一体が足止めしてる間にもう一体で!

・・・無理か！  
速すぎるぞ、平民！！

「こんなもんかよ、貴族様よ！」  
「まだ6体居るさ」

たった6体・・・。

あと5・・・4・・・3体。

「もう少なくなってきたぞ？」  
「チツ！」  
「後1体！」

・・・彼が最後の一体に切りかかったその時、一面が炎に包まれた。

## Side out

「何の騒ぎですか？」  
「ん？平民とギーシユが決闘してるんだよ」  
「平民？・・・へえ速いですね」

「ああ、人間ってあんなに速く動けるんだな」

「残り6体ですか」

「初めは10体だったんだぜ？」

一応成長しましたからね。

一応。

不本意ですが。

去年ラインになりやがりました。

まあ、ゴーレムはまだ青銅を使ってるみたいですが。

「それで、何で決闘なんて始めたんです？」

「ギーシュがモンモランシーと1年の子に二股かけてたらしいよ」

「……二股？」

「ああ。あいつ手が早いからな」

「……本当に手が早いですね。」

あのムシ……。

いい度胸ですね……本当に。

「ウル・カーノ、『発火』」

私の発火は既に擬似火炎放射レベルです。

コーティヤイルの炎と比べれば全然ダメですけど。

「さて、ギーシュ・ド・グラモン？」

「邪魔すんなよ！」

「リ、リリア・・・？」

「私が怒っている理由はわかりますか？」

「いや！あれは誤解なのだよ？」

「後一体なんだ、後にしろよ！」

「彼方は黙っていなさい！ラナ・デル・ウィンデ『エア・ハンマー』」

「

煩いです。

彼は吹っ飛びました。

・・・強すぎましたか？

周りが「あの平民死んだんじゃないか？」とか言ってますが、私は知りません。

そもそも、ムシのせいでボロボロでしたから、仮に死んだとしてもトドメを刺しただけです。

それに、私がムシと話しているのに彼が邪魔をしてきたのがいけないんですよ？

過失は99：1：0でムシ：彼：私です。

「さて、ムシ？これでゆっくりお話が出来ますね」

「あ、ああそ、そ、そうだね」

「それで？」

「ちよつとケティと馬で遠乗りをしただけさ」

「ほう」

「……」

「ゴーレムを出しなさい」

「いや、待ちたまえ……僕はさっきまで彼と決闘をしていたのだよ？」

「はい？何か文句でも？」

「いや……では、やるうか」

ムシも成長しましたがね。

でも……まあ、所詮ラインです。

「『ファイアーボール』！」

「なっ！何故君の『ファイアー・ボール』で僕のワルキューレが！」

「言いませんでしたっけ？私、実は『土』メイジじゃないんですよ？」

ギーシュのゴーレム如き軽く溶けますよ。

「馬鹿な！僕は『土』メイジ以外にゴーレムで負けていたと言っのか！？」

「さて、ムシ？」

「……待ってくれ」

さて、炙って上げましょう。

「ギャー……」

モンモランシー、平和は守られましたよ。

Side オスマン

「……………」

「オールド・オスマン、あの平民ギーシュには勝ってしまいましたな」

「うむ、ギーシュには……………」

ミス・テリエには……………流石に勝てなんだか。

「平民のあんな動き見たことがありません、やはり彼は『ガンダールヴ』」

「うむむ……………ミス・テリエに勝てる平民であれば間違いなく『ガンダールヴ』じゃろうが……………」

「彼女は『土』メイジとしても非常に優秀でしたが……………それに先程の『エア・ハンマー』の威力。あの平民20mは吹っ飛びました。しかも、青銅のゴーレムがドットスペルで溶けましたぞ?」

「うむ……………」

「彼女こそ何者ですか?『土』『火』『風』を自由に扱うなど聞いた

たことはありませんぞ?」

・・・『水』もなんじゃがの

「・・・ミス・ヴァリエールの使い魔じゃが」

「おお、そうでしたな。現代に蘇った『ガンダールヴ』、これは世紀の大発見ですぞ?」

「しかしのう・・・ミス・ヴァリエールが呼び出したのじゃろう?」

「ええ、そうです」

「彼女は・・・優秀なメイジなのかね?」

「・・・どちらかと言えば、無能と言いますか・・・」

「じゃろう?」

「・・・はい」

「それに、王室のボンクラ共に『ガンダールヴ』などと与えるわけにはいかん。戦でも起こすに決まっておる。君も命のやり取りは望む所では無かるう?」

「・・・そうですな」

・・・ふう、未だ昔の事を吹っ切れぬか・・・『炎蛇』よ。

「学園長の深謀には恐れ入ります」

「この件は他言無用じゃ」

「は、はい!」

「勿論ミス・ヴァリエールにも・・・の」

「そう言えば・・・ミス・テリエに話してしまいました」

「・・・彼女なら大丈夫じゃろ」

「『フェニアのライブラリー』の閲覧許可をお出しになったとか?」

「おお、出したぞい」

「何故です?あそこは、教師以外は閲覧禁止ですのに」

「彼女は優秀じゃろう?」

「座学ではトップですな。それに、先程の様子では実技でも手を抜いていたのでしょうか」

「彼女の腕前は現時点で大半の学院教師よりも上じゃ」

「それは、いくらなんでも・・・」

「君よりも・・・じゃよ。嘗て『炎蛇』と呼ばれたお主ですら彼女には勝てぬよ」

「・・・スクウエアなのですか?あの年で」

「わしが言ったと彼女に言うでないぞ?」

「・・・では何故お話に?」

「彼女の使い魔・・・見たじゃろう?」

「・・・ええ。」

「あの使い魔の炎、君は消せるか?」

「・・・あの幻獣一体で戦争が出来るか?」

「学院に居る間だけでも、彼女を守るにはいくらか知っておいてもらわぬといけぬ」

ま、彼女はコッパージェ君の手に負えるとも思えぬが。

S i d e o u t

51話 くガンダールヴく (後書き)

サイト？保険医が頑張ったんじゃないんですか？

52話 く乙女く (前書き)

久しぶりに書いてたら勝手にわからなかったという……

52話 く乙女く

決して燃やさず、決して楽をさせずにギッシュを炙り続けて約10分、キュルケあたりは私の魔法制御のレベルの高さに驚いています。

これってかなり難しいのです。

この学院で出来るのはコルベール先生くらいじゃないですかね？

あの人は相当出来るはずですよ。

「ちょっと！何してくれんのよー！」

「今忙しいので邪魔しないで下さい」

あっ！

制御ミスりました・・・。

・・・。

ギーシュがぐったりしちゃいました。

「はあ、この程度で気絶してしまうとは情けない。」

「こんなんじゃモンモランシーを任せるなど出来る筈ありません。」

「私の使い魔ブツ飛ばして」

しかし、ギーシュ意外に成長してますね。

あくまで「意外」と。

所詮ラインですが。

「聞いてんの!？」

「ですから邪魔を……ってミス・ヴァリエールですか。何か？」

「そのミス・ヴァリエールっての辞めて下さい……。お願いします」

「……はあ。それでなんです？ルイズ」

「私の使い魔どうしてくれんのよ!」

「は?」

「は?じゃないわよ!気絶してんじゃないの」

「ボコボコにしたのはギーシュです。文句はギーシュが起きてから言っして下さい」

「……でも、気絶させたのはリアじゃない」

「それよりも、彼の治療しなくても良いの?」

「そうだったわ!」

全く。

あの子は優先順位というものをきちんと把握しなくちゃダメですよ?

‘ギーシュ’にあれだけボコボコにされたんですから私に文句を言う前にする事があるでしょうに。

……でも、水の秘薬くらいなら譲ってあげても良いですね。うん。

それくらいしてあげても良いでしょう。

私の過失は0ですが、貴族として持たざる者の治療をするのは当然ですね。

看病してる間にルイズが教えてくれたのですが、彼はヒラガサイトと言っらしいです。

字は解りませんがね。

ルイズ曰く彼は自称異世界人、自称高校生、自称日本人……

……日本って何処？

2日後

マチルダさんのお部屋訪問中です。

「そういえば、グラモンの坊やとヴァリエールの使い魔が決闘したんだって？」

「明らかに素人の少年がルーンだけであそこまで戦えるんですからガンダールヴってのも本当みたいですね」

「ガンダールヴ？」

「ええ。ガンダールヴです。ブリミルのあれですね」

「……………」

「……………血の匂い？」

「マチルダさん。脱ぎなさい」

「は？」

「脱ぎなさい」

「ちよっ……………待ちな！」

「問答無用です。とりやっ！」

「……………これはあれですか？」

「良いではないか……って言うべきですか？」

「……………やっぱり」

「……………」

「どじしたんです？…これ」

「これはちよっと傷が深いですね。」

せつかく綺麗な肌なのに勿体無い。

「ちよつと副業をね」

「……何も聞かないでいてあげますから、治療をします!」

「大丈夫だよ」

「何も聞かないであげます」

「……大丈夫だから」

「何も聞かないであげます」

「……頼むよ」

「はい」

……そういえば、サイト君に水の秘薬を……

「水の秘薬が無くなったので、無しでやります」

「……というよりリリアがやるのかい?」

「それでも治癒魔法はエキスパートです」

「……まあ良しさ」

「傷が深いので、バカみたいに魔力を込めます」

私レベルになれば、秘薬さえあれば腕すらくつつけることも出来ま  
す。

秘薬が無くとも、このくらいの深さならなんとかかなります。

「ただ、1つ問題が」

「……言ってみな」

「秘薬無しでも傷は良くなるんですが、他にも色々よくなるんです」

「色々?」

「文字通り、色々です」

「例えば？」

「……性的に気持ちよくなるとか」

「……遠慮しとこうかね」

「大丈夫です私も手伝いますから」

一人でやつても良いのですが、二人でやればもっと良いです。

「ちょっと待ちな！手伝うってどういうこと!？」

「勿論マチルダさんが術後一人で解消するというのなら一人でやつてもかまいませんが？」

「……」

「ですが、私も手伝ったほうが気持ち良いですよ？」

「あんたレズ？」

「そんなことはありません。最近どっちもいけるようになっただけです！」

「そっちの方が問題でしょうが!！」

「そんなことはありません！普通の人よりちょっとだけ守備範囲が広いだけです!!」

「……一人でやるから良いよ」

「楽しさ2倍ですよ？」

「そういう問題じゃないっての」

「まあまあ、そんなに気にせず。イル・ウォーター・デル『ヒーリング』」

「ちよっつ!!」

「……ふぁ」

顔を赤くしている美女が一人。

「あう・・・あふあ」

もじもじしている美女が一人。

「フフフフフ」

「・・・まつふえ、ふふああ」

自分の指を噛んでいる美女が一人。

いけません、そんなおもいきり噛んでは怪我をしてしまいます。

「・・・なんというか、こう・・・のってきませんか？」

「ああ・・・うあ・・・ふあ」

目が蕩けている美女が一人。

「さて、治療は終わりましたから。よくなっちゃったのを納めませうね〜」

「ひとりです・・・できるから・・・」

「下も脱ぎ脱ぎしましょうね〜」

楽しいのはこっちからなのです!!--!!

「・・・グス・・・うあ・・・グス・・・リリアに・・・汚され  
た・・・ぐす」

・・・マジ泣きですか？

「マチルダさんって乙女ですか？」

「・・・」

おもいつきり睨まれました。

非常に・・・怖いです

「大丈夫です。私も乙女ですからね」

「・・・グス」

「・・・それじゃ、失礼しますね」

しかし、あれじゃいき遅れちゃいます。

私が一肌でも二肌でも脱ぎましょう!!

だから、睨まないで・・・

明日は実家に帰って水の秘薬を貰ってきましょう。  
それが良いです。

マチルダさんに会わずに済みますしね。

「……ノエルさん？」

「なあに？」

非常に可愛らしいのですが、流石に邪魔……

今、私達がどんな常態かと言うと、美女が美少女に前から抱き付いて歩くのを邪魔している図です。

そのため移動はフライでやっています。

恋人同士でもこれはやらないと思いますよ？

お姫様抱っことかならまだしも、ノエルさんともなれば私に身体を擦り付けてますから。

「……どうしたのだ？」

「何も聞かないで下さい……」

水の精霊すら戸惑ってますよー!!

ノエルさん自重！

「何も聞かずに精霊の涙を下さい・・・バケツ一杯分」  
「・・・わかった」

精霊さんに水の秘薬を貰いました。

水の精霊は通常の3倍速くらいで湖に帰っていきました。  
・・・悲しい。

しかし、これでマチルダさんが何度怪我をしてもバッチリなのです！

ストックは大事ですね・・・。

ノエルさんが一通り満足した後、私はお父様に呼ばれました。

外は真つ暗です。

因みに帰ってきたのは朝です。

何をしていたか？

察して。

ノエルさんは体力が尽きて夢の中とだけ言っておきます。

意外かもしれませんが私の方が体力あるんですよ？

「リリア、以前頼まれていたクロムウエルという人物についてなのだがな……」

「何かわかりましたか？」

「……アルビオンで内乱が起きているのは知っているな？」

「そりゃ知ってますよ。偵察も送ってますしね」

「……反貴族派のトップの名前がクロムウエルと言っらしい」

「……」

「……」

……。

「そういえば、お父様クロムウエルについて何か分かりましたか？」

「反貴族派のトップがクロムウエルらしい」

「冗談ですよ？」

「残念ながら本当だ」

・・・

「お父様クロムW「反貴族派のトップだ」……………」

眩暈が…………

何故そんな面倒な奴が持つて言ってるんですか!!

「マジですか？」

「マジだ、残念ながら」

「……………悪夢ですね」

「どうするつもりだ？」

「……………行くしかないでしょう」

「アルビオンにか？」

「ええ」

「止めても「無駄です」……………だろうな」

あれを戦争指揮してる人間が使うとか最悪の組み合わせです。

碌なことにならないのは火を見るより明らか……………というか、反乱軍の異常な拡大スピードってアンドバリの指輪が原因……………？

そつだとすると、完全に後手に回ってますね。

寧ろ、もう詰んでる？

……………王宮に知らせるべき？

まあ良いですね。

気にしちゃ負けです。

53話 くエルフく (前書き)

リリアってこんなキャラだったっけ？

53話 くエルフゝ

「イル！彼方ならいけます！！」

『いくら我でも無理だ』

「彼方なら解る筈です！」

『いくらなんでも無理だぞ？』

「学院に行くときは大丈夫だったじゃないですか！」

『あの時は我も初めから一緒に居たからだ。今回とは違つ』

「コーテイ……………」

『リア……………』

『お主ら調子に乗りすぎだ』

「……………どうしましよつ」

『……………どうしよつ』

何故こうなったのか？

事の発端は3時間前

「ツバサこの辺りで降ろしてください」  
『はいはい』

ああ、急降下されると、奇妙な浮遊感が……風魔法を無視するレベルでの急降下。

所詮メイジの力なんてそんなもんですよね、ハハハ。

「……ゆっくり降ろしてっいつも言ってるのに……。」

『さっきは言われなかったよ？』

「察してよ……。」

『えっと……ごめんなさい？』

「……うゝあゝ」

あゝ無理……ちょっと休憩

羽がフワフワで良かったです……。

• それにしても実家から、アルビオンまで半日もかからないとは……

「ツバサに乗って来ると流石に速いですね。流石はピジヨット。前に舟に乗って来た時とは大違いですね」

『私はこれからどうしましょうか？』

「飛んで移動すると目立つちゃいますからね。んんん好き勝手して下さい。何かあったら呼びますから」

『では、好きに飛んでますね』

「いつてらっしゃい」

「……私が乗ってないとスピードが5割増しですね。」

10秒くらいしか経って無いのにもう見えなくなっちゃいました。

さて、魔力を込めまして……

「コーティは何処かな〜と……居た、こっちへいらっしゃい」

呼びたい相手を見つけると頭の中で豆電球が光ります。

初めてやった時は頭の中が眩しいというよくわからない苦しみを味わいましたからね。

ゲートが形成され、光のゲートをくぐってコーティが出てきました。

この魔法本当に便利です。

実家とアルビオンを繋いで魔力消費はコモンスペル並だなんて。なんと良心的な魔法でしょうか。

向こうが寝てると見付からないという欠点はありますけどね

『お待たせ、リリア』

「いえいえ。それじゃ行きましょう」

『どっちに行く?』

「なんとなくあっち」

『レッツゴー!』

「ゴー!」

あっちに何かあるのか?

知りません。

旅は気分任せて放浪するものです!

それからは「全力疾走!」『ヤッホー!!!』「キヤー」『とりゃー』と……久しぶりにアルビオンに来てはっちゃけてたんです。

……今思えばこれがいけませんでした。

「どこ何処?」

『ちあ?』

「………地図」

「コーティに巻きつけてある荷物の中から地図を……地図を……  
……地図を……ありました。」

『わかる?』

「ここ何処?」

『山?』

「……どの山?」

『……さあ?』

「……」

『……』

「……イルを呼びましょう!」

『イルなら地図が読めるもんね!』

「呼びましょう!今すぐ!」

さあイル速くゲートを潜って来てください!

『……どうしたのだ?』

「ハイ地図!ここ何処ですか!?」

『君なら解る!』

『……』

「……」

『……』

冒頭に戻る。

要するに、迷子ですね。

魔法学院に行くときは迷子になり、'かけ'しましたが、その時は地図と睨めっこしてたらイルが現在地を角で現在地を教えてくれたのです。前の世界でも地図さえ見れば私は迷子になったことはありません。

地図さえ見れば……。

『いくらなんでも、いきなり森に呼ばれて地図を見せられても現在地は解らぬぞ?』

「……無理?」

『当然だ』

『……無理?』

『当然だ』

「『どうしても?』」

『無理だ』

「……困りましたね、どうしたもんでしょうか。」

『……とりあえず、適当に走って町か家を探すのが良いだろう』

「そうしましょう」

『それじゃ行こう』

『我が前に行く。お主らは後ろだ』

「……はい」

『……ごめんなさい』

イルに怒られました。

私とコーティが二人だけで居るとイルはたまに冷たくなります……

グスン。

走る事20分。

とりあえず下山しました。

コーティと二人で風が気持ち良いね〜とか言ってなきややってられ  
ません。

だって、目の前のイルの背中がユラユラしてるんです。  
いつもの炎じゃないんです……。

明らかに怒ってます。

20分後

『……家?』

「こんな所に家ですか?」

こんな人里離れた所に家があるとは……。

世捨て人ですかね？

それとも霞かすみを食べる仙人でも住んでるんでしょうかね？

……結構大きいですね。

世捨て人が一人で住むには広すぎでしょうに。

「二人はここで待っていてくださいね」

さて、どんなお爺ちゃんが住んでるんでしょうかね？

「こんにちは」

「はい」

………仙人というよりも妖精？

胸が……

耳が……

肌が……

髪が……

声が……

「何か御用ですか？」

特に耳がキュートですね。

眺める 舐める  
啄ばむ 触る  
話す 逃げる

「頂きます」  
「へっ？」

肩を掴みまして

「あくん・・・かぶ」

「ひゃあっ！なんで！どうして!?!？」

「ふおれふあひふあいふお・・・（これは意外と）」

「そのまま喋らないで」

「ふえふふふえふふあ（エルフですか？）」

「何っ!?!？」

「はひはにふえふふふあふおふふいふえす（確かにエルフは脅威です）」

「え？え？ひひゃ」

「ご馳走様でした。」

「おそまつさまでした？」

「・・・」

「・・・」

「エルフ？」

「えっと・・・はい。でもでも！私怖くないですから大丈夫ですよ」

「はあ・・・では右耳も頂きます」

「え？はい、どうぞ」

以下略……

「それで、貴女は何者ですか？」

「えっと……私はティファニアです」

「私はリリアー又です」

「……」

「……」

「あの……どうして耳を？」

「いえ、美味しそう？だったのだからちょっと舐めてみました」

「えっと……どうでした？」

「意外といけましたね」

「ありがとうございます」

「いえいえ結構なお手前で」

「……あの、私の事怖くないんですか？」

「どうしてです？」

「だって……あの私エルフですし」

「耳がエルフですね」

「みんな怖がりますし……」

「いえ、私エルフさんには始めて出会うので」

「……そうですね。私もお母さん以外のエルフには会った事  
ないですし」

「ところで……その胸は本物ですか？」

「……やっぱり変ですか？」

「変と言つよりも、素晴らし過ぎてごめんなさい？」

「ごめんなさい……」

「いえ、ティファニアが謝らなくても」

「ごめんなさい」

「そういえば、何してるんですか？」

「一応、孤児院をやっています」

「子供が居ませんか？」

「今は外に行ってますから」

「ティファって呼んでも？」

「構いません。リリアー又さん」

「私はリリアで」

「リリア・・・さん？」

「はい？」

「あ、いえ呼んだだけですから」

「ティファはなんでこんな所に？」

「私を助けてくれた人がここを用意してくれたんです。私は町中に

は住めませんから・・・」

「町に住みたいですか？」

「・・・住みたくないと言えば嘘になっちゃいますけどね」

そんなに悲しそうに言わないで下さい。

せつかくの可愛い顔が台無しです。

「家に来なさい！」

「えっ？」

「家に来なさい！」

「でも・・・子供達も居ますから」

「なら、子供達も連れてきなさい！」

「・・・ごめんなさい」

「なんで!？」

「私が居るときつと迷惑をかけちゃうので」

「エルフだから？」

「それも・・・ありますけど」

「エルフってのはどうでも良いです。他の理由は…」  
「……………ごめんなさい」

結局説得には失敗しました。

『随分遅かったな』

「うううううううう 夢破れてきた所です」

『リアア、大丈夫？』

「もう嫌だ…………… 帰る……………」

『……………は？クロムウエルはどうするのだ？』

「知らないもん」

『じゃ帰ろうねリアア』

「……………うん」

帰宅しました。

53話 くエルフく（後書き）

方向音痴じゃないですよ？

本当にただ地図を見ないだけです。

54話 く住居く(前書き)

メタゲロスの名前は……

## 54話 く住居く

クロムウエルの事を無視し、アルビオンから帰国するとお父様が「ちよつと来てくれ」と言われ、連れて行かれた先は工房でした。

そこに並んでいたのは鉄の塊。

正確には鉄の棒。

現在のデュ・テリ工領最大の悩みは人口の増加なのです。しかし、ハルケギニアの住居というのは基本的に平屋・・・土地に限りがあるのなら上に積むしかありません。

しかし、ハルケギニアの建築技術だと2階建てにすると値段が跳ね上がってしまいます。3階建て以上にすれば桁が上がります。値段が跳ね上がると如何にデュ・テリ工領民といえどもちよつと手が出ない・・・しかし、私達からしてみれば何時の日か確実に訪れる住居問題に手を打つためになんとしても現状よりも安く仕上げるようにしなければなりません。

安く仕上げようと思っても、現状では2階建て以上の建築物を造ろうとすれば、長く、丈夫で、まっすぐな柱が多く必要になります。そのため、トリスティンで2階建て以上の建物というのは例外なく住居の数倍の広さが必要になります。住居の広さでそれをするとな家の中が柱だらけになってしまいます。

そこで出てきたのが鉄筋です。

鉄筋なら柱の数は少なくて済みますし、将来的には安く仕上がる筈です。

もつと前に金属加工技術を確立してくれていれば良かったのですが、ハルケギニアの文明が余りにもお粗末過ぎて先代『幻獣』の2000年前でそんなもんが認められる筈がありません。

「金属加工をいつかやれ！」とは書き残してあったのですが、家の使用人軍団は生活に密接に関係しないものは基本的に後回しなので、学校とか都市整備計画とかにばかり熱意を注いでいたというわけ……。

そんなわけで私が金属の素晴らしさを解らせて研究させ、スーパーメガグロスコンピュータを導入？し、最近になってフライパンや包丁が領内に普及してきたというわけです。

「メルキオールどんな感じですか？」

『硬度八問題ナイガ、仕損力多過ギルナ』

「と言うことは、問題は長さですか？」

「ソウナルナ」

……今でも料理器具などの小さい物は職人さんの努力で失敗は少なくなりましたが、ここまでの長さの物はやはりこれから期待ということですかね。

「……あ、お父様。言うの忘れていたのですがアルビオン王家は近い内に落とされます」

「……理由は？」

「ツバサが空から見ただけでも、王軍でない勢力が明らかに上回っているとのことですよ」

「難民が出る……か」

「そうなりますね。準備しておかなければ大変な事になりますよ」

「マザリー二枢機卿には言っておくべきだろうな」

「アルビオン側の国境沿いの領に警告と準備をさせるように言うておいてください。鳥の骨だのなんだのと文句は言うてしょうが心構えが出来てるか出来てないかだけでもかなり違う筈ですよ」

「解った。家の領の備蓄を放出する準備もしておくべきだろうな」

「……反貴族派は共和制を唱えてるんですよ？」

「そう報告を受けている」

「……マザリー二枢機卿にだけ王家が危ないと言っておいてください。アホ貴族共が知ったらこっちから大規模な援軍を送りかねません」

「聖地奪回だのなんだとも言っているようだが、そうなると向こうから仕掛けて来るかも知れんぞ？」

「その時はその時ですが、こっちから仕掛けたのでは確実に負けまです。向こうにはアンドバリの指輪がありますから、仕掛けるなら超短期決戦しかありません。しかし、トリステインだけでは長期化するのとは明らかです」

「厄介だな。死者でも軍隊に出来るというのは」

「あれは人間が持っている良い物ではありません。破壊するか、水の精霊が持っているのが最善ですよ」

生命の冒流です。

死んだのに転生した私が言うのもアレですが……。

「お父様、職人さん達に『なんとかして』って言うといして下さい。メルキオール、バルタザールとカスパーと協議しておいて下さい。

そして職人さん達が悩んでも悩んでもどうにもならない時は助言を「

『了解シタ』

甘えちゃダメですからね。

職人さん達には自分達で育って貰わないといけませんからね。

メタグロスは頭が半端なく良いので文字さえ教えれば筆談が出来ます。

完璧です。

学院に帰って来ました。

……授業中ですけど、疲れたので部屋に行ってましよう。

「……あ、マチルダさん」

「ロングビルですわ」

「こんにちはミス・ろんぐびる」  
「それで何です？また私を好き勝手弄くり回す気ですか？」  
「・・・まだ根に持つてるんですか？」  
「そんなことはありません」  
「そういえば、アルビオンに行つて来たんですけど妖精さんに会いましたよ」  
「・・・妖精？」

マチルダさんが訝しげに私を見て来ます。  
未だに根に持つてる目です。

非常に心苦しいのですが、反省してないので気にしちゃ負けです。

「金髪で胸が大きくてキラキラ輝いてました。後、耳g・・・じゃなかった、とりあえず綺麗でした」

「へえ・・・」

「あの子すつごく良い子だったんです。孤児院で子供達の世話をし  
てて、健気で・・・連れ帰ろうとしたら断られちゃいましたけど」

ああ・・・泣けてきます。

「しかも、その孤児院を支援してくれる良い人が居るらしくて・・・  
もう感動でした」

「・・・名前は？」

「ティファニアです」

「・・・リリアちゃん、ちょっとこっちへいらっしやい？」

マチルダさんが私の手を取って歩き出したのですが・・・

どしました？  
なんか怖いですよ？

マチルダさんの部屋へ連れて行かれ、マチルダさんはドアを閉め、  
ロックを掛け、サイレントを掛け……

「さて、詳しく話を聞こうか？」

「……どしました？」

「キリキリ吐け！」

「へ？へ？へ？」

何故？

どうして？

私何か言いましたか？

「ティファニアの耳がどうなってたかを言ってみな」

「普通の耳でしたよ？」

「嘘だね。とがってたろう？」

「……何故？」

「あの子を支援してるのは私だからさ」

「……それは……なんと……都合主義……」

「それは良かったです。ティファニアを説得して家に来るように言  
つてくれませんか？」

「……正気かい？」

「何か問題でも？」

「……問題だらけだろう」

「エルフだからですか？」

「それもある」

「……何故支援を？」

「……」

ほう……だんまりですか？

「さぁ……キリキリ吐きなさい」

「……」

「また治癒魔法かけますよ？」

「……妹みたいなもんだよ」

「ほう……妹ですか。何故？」

「これは秘密なんだがね、誰にも言っんじゃないよ？あんたを信頼して言っんだから」

「それは光栄ですね。マチルダさんの恥ずかしい秘密を教えてくださいるなんて」

「私のじゃない。アルビオン王家最大の秘密さ」

「……そこまで大きくなるんですか？」

「あの子はね、モード大公の娘だよ」

「それは、また……」

「それで、エルフの親娘をかばった者共は粛清されました……つてわけだよ」

「……ややこしい事になってますね。まぁ、良いです」

「まぁ、良い？」

「アルビオン王家はその内途絶えるでしょうから、真相は闇の中です」

「……なんだって!？」

「アルビオン王家は近い内に確実に落ちます」

「……本当かい？」

「ええ。共和制を唱える反貴族派が王軍を潰します」

「……不味いね」

「ええ、非常に不味いです。今の内に家に避難すべきだと思います」

「……トリスティンはどう動く？」

「どう動くも何も、おそらく全く実情を把握していない筈です。マザリーニ枢機卿に警告はするようお父様に言っておきましたが、全て後手に回るでしょう。トリスティン貴族の腰はかなり重いですよ」

「……あの場所は人里から離れてはいるんだけどね」

「無意味でしょう。共和制になれば領地解体のために土地調査が始まるでしょうから見付かっちゃいます」

「……私が説得するしかないね」

「それが一番でしょうね」

「今回の仕事が終わったら厄介になるかもしれない」

「はい。こき使ってあげます」

「それは、大変だね……」

「ええ。頑張ってください」

部屋には二人の笑い声が響いていたが、話の内容は非常にディープであった。

54話 く住居く (後書き)

原作でアンリエッタがルイズに言うまで誰もアルビオンの状況を把握してないとか国家戦略としてどうなんでしょうね？

55話 王都 (前書き)

サイトのおかげで時間がかかりました。

しかも結局サイトの登場シーンはほとんどカットと……

55話 王都

ガンダールヴである平賀才人はギーシュ・ド・グラモンとの決闘から4日後に目覚めた……どこかの世界よりも目覚めるのに時間が掛かった理由はゴーレムが強かったためか、翠の侯爵令嬢が思いつきり魔法をぶっ放したからなのかは定かでは無いが、彼は目覚めた。

才人は気障な薔薇男を最後の最後まで追い詰めた所までは覚えていたのだが、その先をまったく思い出せないでいた……。

「こんにちはサイト君」

「えつと……誰？」

「私はリリアーナ・デュ・テリエ、解りやすく言えばルイズのお友達です」

「ああ、あなたが薬を出してくれた人か。ありがとう」

「いえいえ、貴族として当然の事をしたまです」

「……この子何も覚えてないんですかね？」

だとしたら、好都合です。

エア・ハンマーでブツ飛ばしたのはちょっと反省していたりします。あそこはスリープ・クラウドで落とすべきでしたね。  
アハハハハ。

「ギーシュに最後やられちゃったのは残念でしたね」

「やっぱり俺、あいつにやられたのか……。誰も俺が気を失った理由を教えてくれないから」

「……皆黙っててくれたんですかね？」

「最後油断しちゃったみたいですけど、それさえなければきっと勝ててましたね」

「結局負けたんだから意味ねえよ」

「そうですね」

「励ますかどつちにしてくれねえ？」

「動きはまるつきり素人でしたけど動きだけは早かったですね」

「……」

「一応褒めてるんですよ？」

「……どうも」

「……サイト君の視線が下がりました。」

視線の先は……。私の胸。

モロ凝視ですね。

次いで足元へ、腰……。また胸へ。

まあ、仕方ありません。

私のボディは胸の大きさこそキュルケに劣りますが、それ以外はキュルケに負けてませんからね。

まあ、お年頃の少年が見とれるのは仕方ない事です。ええ、仕方ない事です。



「お姉さまも竜使いが荒いのね〜自分で寝る場所作れなんて、でもシルフィは良い子だから頑張るのね〜」

「……………」

「るるるるるる〜きゅいきゅい」

……………まあ、喋る竜くらい居ますよ。

ペルセだつて普通に喋ってますし、私バイリンガルですし。

「シルフィード器用ですね」

「るるるる！？」

「どうしました？」

「シルフィは喋ってないのね！お姉さまに怒られるのね！」

「じゃあ喋ってないということにしておきますね？」

「お願いなのね！シルフィの御飯が無くなっちゃうのね！」

「それでは、私は何も見ていなかったと言う事で」

「解つたのね、シルフィは誰にも会ってないのね」

「それでは、頑張つて下さい」

「バイバイなのね〜きゅいきゅい」

しかし、韻竜ですか……………。

やっぱり絶滅してなかったじゃないですか。

誰ですか？韻竜が絶滅したなんて言ったのは。

数日後

そんなこんなで、昨日パーカーを買ったんですが……解析出来ない。

細か過ぎます。

とりあえずこれは固定化掛けて倉庫行きですね。

油田見付けて誰かが気合入れて解析するまでポイツチヨですね……。

この世界は資源管理についてザルです。

漁業にしろ漁獲高の制限もありませんし、風石は地面に埋まりまくってますし……見つけてしまえばこっちのものです。

地中の風石はハガネール君が銜えて来てくれます。

なんか地中にいっぱいあるらしいですよ？

家の領外の地面も掘ってるらしいですけど、私は知りません。

知らないんですから対応できません。

これは情報不足による悲しいすれ違いです。

我等が商船の原動力になってます。

もうウハウハですよ？

まあ、油田に関しては今見つけても私が生きてる間に利用出来るとは思えませんが……。

しかし、目下最大の悩みはブラジャーです。

あれはどうにかしなくちゃいけません……前回よりもスタイルが心持ち……ええ心持ちですとも……良いので将来垂れちゃうのが心配です。

前はそこまで心配してませんでした……ブラジャーがあったからですよ？

異論は認めません。

決して貧しかったわけではありません、美乳だったと自負しております。

大きさだけが全てではありません。

しかし、開発は命じてあるので私に出来る事はありません。

「そんなに熱心にそれを見られてますけど、何をなさってるんです？」

主人が遊んでくれなくて寂しくて死んじゃいますって感じの子犬のような目をしていたアーデルハイトが意を決して、といった風に話しかけてきました。

「金の卵ってやつです。まあ、これが実際に金を生むのは何百年後でしょうけど」

「でしたら、私とお茶でもいかがですか？」

「虚無の曜日にすることがお茶しかないってのは寂しいですね・・・

」

「私とお茶をするのはご不満ですか？」

「そんな目をしなくても良いでしょに」

なんと言いますか・・・目がですね・・・もう・・・あれです。

私そんなこと言われたら生きていけませんって目をしてます。

私が相手をせずにコーティ達と遊んでるときのエレオノールやノエルさんと同じ目です。

何時の間にかアーデルハイトもこの領域に来ちゃったんですね・・・。

・・・家の屋敷広いから一人や二人増えても問題ありません。

アハハハ。

まあ、私の身体は1つしか無いわけですが・・・スキルニルを手に入れれば・・・。

「はあ、い、貴女達も暇ならお出かけしない？」

「キュルケ、ノックをしましょうね？」

「いいじゃない私達の仲でしょ」

「親しき仲にも礼儀ありと言いますよ？」

「そりゃ、私だって貴女達が二人つきりで人には言えないことをしてるなら謝るけど」

「キュルケさん！まだそんなことしてません！！」

「……まだ、ですか。  
まあ、アーデルハイトが私の事を好きだったことは解ってますけどね。」

「それで、何処に行くんです？」

「とりあえずシルフィードに乗って」

「タバサは外からですか……貴女達も少し常識に則って行動して欲しいですね」

「貴女に言われたくないわね。貴女がこの中で一番逸般人いっほんじんじゃない」

「ですから、私は常識的に行動する一般人だと言っているでしょう？ねえ、アーデルハイト」

「リリアさんは個性的で、とても素敵ですわ」

「ほら。アーデルハイトもこう言ってます」

「その娘はリリアが世界で一番だから聞くだけ無駄よ。なんでも良  
いから行くわよ！」

「はあ……行きましょうか」

「はい、付いて行きますわ」

出発して十分程経過した頃、リリアが何処に向かっているのかと聞いてもキュルケはそれをはぐらかし続けていた。キュルケからしてみればサイトとルイズを追い掛けているだけなのだからその行き先が解らないので当然なのだが……。

「結局何処に行くんです？この方向からしたらトリスタニアでしよ  
うけど」

「秘密よ。トリスタニアかもしれないし、トリスタニアじゃないか  
もしれないわね。それに、アーデルハイトはずっと空の上に居たほ  
うが幸せよね？」

「へっ？そこで私に振らないで下さい・・・」

現状がどうなってるかと言えば、竜と言っても幼生であるシルフィ  
ードの上は狭いので、

リアー又がアーデルハイトを後ろから抱えているという状況であ  
る。彼女がどう思っているかは顔が赤くなっていることからしてみ  
ても言わずもがな・・・である。

当然ながらリアー又はそれを承知でアーデルハイトを抱き締めて  
いる。

暇なのでアーデルハイトの肢体をまさぐったり、耳に息を吹きかけ  
たりと・・・確信犯である。

「しばらくは空の上だからリアに可愛がって貰っていなさい」

「・・・はい」

アーデルハイトも、自分の気持ちがタバサやキュルケ、他にもモン  
モランシー等にはバレバレなのは百も承知であるからしてそれを隠  
そうなどとは全くしていない。

というか、リアにばれている時点で誰にばれようが一緒だと本人  
が思っているだけなのではあるが・・・。

更に10分後

「それにしても・・・暇ね」

「トランプ持って来てないの？」

「持ってきてるわけじゃないじゃない。急いで出てきたんだから」

幼竜の上と言うのは、暇を潰すには最低の場所である。

基本的に何をするにしても面積が足りない。

お茶など問題外である。

トランプ等は風を制御しているので可能だが、持ってきていないのでは仕方が無い。

タバサは常備している本を読んでいるのだが、キュルケは暇で暇でしょうがない。

イチャイチャしている二人が現状に不満を感じているかどうかは・・・

・察しろ。

一方はとても幸せそうで、もう一方はそこそこ暇を潰せているとだけ言っておく。

「それにしても、相変わらず臭いですね」

なんで王都がこんな状況なのに放置しているんだか……衛生にするってことを知らないんですかね？

大通り 家の通りはこの倍くらいありますけど にまで臭ってくるとか、ホント……ダメ。

「街が全然臭わないなんて貴女の所だけよ。ま、デユ・テリエから人を派遣して指導してもらってる筈だからツエルプストーもその内臭わなくなるでしょうけど」

「私まだ、リリアさんのお家へお邪魔した事ありませんわ。夏休みにお邪魔させてくださいね？」

「勿論。しかし……トリスタニアまで攻め込まれたら既に終わってるのにトリスタニアをこんな無駄に複雑な造りにする意味あるんですかね？絶対に産業の発展を妨害してます」

「都市開発計画だっけ？あんなもの作ってるのはデユ・テリエだけよ。前、お父様に進言してみたけどそんなモノが今から出来るわけがないって言われたわよ？」

ツエルプストーはある程度発展してますから、街を作り直そうと思ったら相当気合入れてやらなくちゃいけませんからね。

現状ではそれをする気にはならないでしょうね。

「キュルケの所は、厳しいでしょうね。今から作り直すには発展しすぎてますから……ってルイズ？」

「あら、ルイズさんですわね」

「何処！？」

「あそこですけど」

キュルケは前方に見える二人を追いかけていつちゃいました、タバサはそれに付いて行きました……。

……。

「えっと、二人になっちゃいましたね」

「はい。二人つきりですね」

「嬉しそうですね、アーデルハイト」

「それは仕方のない事です。キュルケさんもタバサさんも大切な友達ですけど、リリアさんは別格ですから」

「……正面から言われると照れますね」

「好きです」

……この娘は、私にどうしろと？

「何処に行きましょうか？」

「何処へでもリリアさんに付いて行きますわ」

「勘違いされそうな言動ですねそれは」

「勘違いだと思えますか？」

なんだかなあ……。

「面白い話をしてるわね。私に詳しく教えてくれないかしら？」

……へ？

「……何故ここに？」

「あら、私がトリスタニアに居たらおかしい？」

「誰ですか、貴女は？」

「私？私はエレオノール・アルベルティーン・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「ということは、貴女がルイズのお姉さんですか？私はアーデルハイト・ド・ゲーテ。リリアー又さんのお友達ですわ」

「おちびはどうでも良いのよ。さつき貴女面白い事言ってたじゃない？」

「そんなこと言いましたか？私はただ、自分の気持ちを素直に表現しただけですが」

・・・何この空間。

これが噂の修羅場ってやつですか？

「このネックレス、リリアに貰ったの。私の一番の宝物よ。リリアのイヤリングは私がプレゼントしたものだしね」

エレオノールはそう言って、態々アーデルハイトに見せびらかすように蒼い宝石の付いたネックレスを大事そうに触った。当然アーデルハイトがそれを許容できる筈も無い。しかも、以前リリアはアーデルハイトに「このイヤリングは大切な人に貰ったんです」と言っていたのだ。絶対に許容出来ない。エレオノールは街中で不愉快な事を口走っていたアーデルハイトの言を許容できるはずもなく・・・。

「フフフフ」

「フフフフフフフ」

「フフフフ」

不気味な笑い声その場に響いた。

貴族の喧嘩　これが例え平民同士の喧嘩であつたとしても人々は恐れおののいたであろうが　に巻き込まれるのを恐れた交通人がそそくさとその場を離れた事を叱れるだろうか？  
いや、叱れる筈はない。

「「リリア（さん）！」」

「はい！」

「説明しなさい！」

「説明して下さい！」

「……こちら、エレオノールさん」

「さつき聞きましたわ」

「……こちら、アーデルハイト」

「もう聞いたわ」

「……えつと、何処かゆっくり話せる場所で」

「そうね、じゃあ家に来なさい。アーデルハイトとやらも来るわよね？」

「望む所です」

「……空が青いですね。」

「アハハツハ……はあ……。」

所変わってトリスタニア内ヴァリエール邸。

「で？」

「なにか？」

「それで？」

「それが何か？」

「何が？じゃないでしょう？」

「私に言われましても困りますわ」

「良い度胸してるじゃない」

「……あ、知ってる天井だ。

アハハハハ。

「リリアこっちへいらっしやい」

「はい……」

エレオノールの膝の上で小さくなっているリリアーヌ。  
リリアーヌを抱き締めて満足げなエレオノール。

「フフフフフ」

顔は笑っているが、目は笑っていないアーデルハイト。  
背後からリリアーヌに頬ずりしているエレオノール。

「喧嘩売ってるんですか？」

「何時もやってることだけど？」

「フフフフフ」

「私、昨日‘も’リリアさんにお風呂で背中を流して頂きましたわ  
「あら？」

「エレオノールさんちょっと痛いかな？なんて……」

「本当かしら？」

「本当ですわよね？」

「……ホントウです」

「あらあら」

また力が強くなったかなあ……。

「フフフフ」  
「それじゃ、今からお風呂に入りましょうね」  
「今からですか？」  
「不満でもあるの？」  
「いえ、ありません。」  
「私もご一緒して良いでしょうか？」  
「家のお風呂狭いから二人までしか入れないの。残念ね」  
「ヴァリエール家の別邸のお風呂に二人しか入れないなんてお笑い  
ですわ」  
「何？家を馬鹿にしてんの？」  
「あら、恋愛にお家の事情を持ち出すなんて無粋ですわよ？」  
「ゲーテの長女は愛し合ってる二人の時間を邪魔するほど気が利か  
ないのね」  
「愛し合っている？リリアさんそうなのですか？」  
「えっと・・・まあ、はい」  
「では、私の事も愛して下さいね？」  
「・・・はい」  
「ノエル以外に私の前で浮気？」  
「ノエル？」  
「あら、ノエルのことも知らないのにリリアに愛して下さいなんて  
笑わせるわね」  
「・・・私はリリアさん個人の事だけで良いのです」  
「そんなんじゃない、デュ・テリエに住めないわよ」  
「デュ・テリエに住む？ヴァリエール家はとうするつもりです？」  
「ヴァリエールなんてルイズにでもあげるわ。私は要らないし」  
「私だってゲーテの家督なんて要りませんわ」

疲れる。

・  
・  
・  
・  
・  
今日って休みですよね？

55話 王都 (後書き)

ハガネールって何処まで潜れるんですかね？

後半は勢いで書いた。

後悔はしてない。

妹と弟（前書き）

リアルが急がしくて大変でした。

今回は息抜きですね。

## 妹と弟

産業スパイをぶつとばせ〜

幻獣部隊で撃退だ〜

尋問するなら水メイジ〜

自白薬ならお母様〜

魅了薬ならお姉様〜

金貨がいっぱいざっくざっく〜

……物騒な歌を歌っている美少女が一人。  
彼女の名前はレティシア・デュ・テリエ

好きな人はお母様とお姉様

尊敬する人はお母様とお姉様

好きな事はお金稼ぎ

そりが合わない人は弟のジヨエル

彼女はエステル、リリアーヌが大好きである。

彼女曰く「目標はお姉様」である。  
そのお姉様は「目標はお母様」である。

仲が良いのは当然であろう。

その反面、弟とはそりが合わない。  
理由は簡単。

「価値観の相違」……である。

ジヨエルはデュ・テリ工家の性質を色濃く引き継いでおり、お金の興味が無い。

逆に貴族らしからぬ、質素を美德と考える変わり者である。

一例として、街に行き1ヶ月10エキユー生活をする。

……質素なのか、何らかの修行者なのか判断に困る時もあるのだが。

レティシアは姉に毒さ「……姉に似てお金儲けの楽しさを知り、大拡張した地下室ですらエキユー金貨が溢れかえっているのを見るのが大好きである。

そりが合うわけがない。

姉弟であるから、避ける事も出来ない。

しかし、ジヨエルは姉が大好きである。

何故なら革新的なアイデアでデュ・テリ工領を更に発展させてきた

ためであり、物造りを続け、更に多くの人により良い暮らしをして貰うためには、利益が必要であるという姉の「建前論」を信じ、姉の本質を「誤解」しているためである。

「誤解」していない妹は姉を尊敬し、姉のようになっていてだけ……。

12歳と10歳。

姉や両親に似て魔法の腕も優秀なのだから、子供らしく殴りあいなり、魔法合戦なりして解りやすく喧嘩をすれば良いのだが……この二人姉に似て無駄に賢い。

リリア曰く「どっちは結婚しても領に残ってくれないかな？私の代わりに面倒な領主の仕事を……」である。勿論、二人には言っていない事であるのだが……。

「姉上はまた無駄な物を」

レティシアが手に持っているのは大粒と言う程ではないが深い青色の宝石ラピスラズリである。

ジヨエルは無駄だと言うが、それは弟の様な変わり者だからであり、レティシアの様に貴族の子女であれば宝石の一つや二つ12であったとしても持つていて全く不思議ではない。

それに、この宝石は……。

「文句でもあるのかしら？」

「僕程度には解らない意味のある物なのですか？」

「喧嘩売ってるのね？買っわよ？」

「良いでしょう。今日は何にしますか？」

「文化でも数学でもなんでも良いわよ。私の方が年上だし、優秀だから」

腹の立つ事に事実であるため、ジョエルには反論出来ない。

この家の様に知識を充実を当然であると考えている家の場合2年という時間は少々の才能だけでは埋めきれない差が存在する。

自分は才能溢れる10歳だと両親も執事もあの姉様すらも言ってくれるが残念な事に、この姉上も才能溢れる12歳なのである。

・・・非常に不本意であるが、それが事実だと認めざるを得ない。

「では今日は文学を」

この二人の喧嘩は基本的にペーパーテストである。ただし、召喚獣は出ない。

「良いわよ。ジョエルは最近図書館に入り浸ってるみたいだし」

「よく知ってますね。」

「弟の事ぐらい把握してるわよ」

「そうですか」

「これを無駄な宝石と言った以上容赦しないわ」

「随分とその無駄な宝石に御執心ですね」

「当然でしょ？なんたってこれはお姉様へのプレゼントだもの。私が自分で加工してプレゼントするの。きっとお姉様は喜んでくれる

わ、ああ楽しみ」

何を想像しているのかは知らないが、蕩けているレティシア。まあ、自分の身体を抱きしめている事から姉に抱き締めて貰っているのだろう。

反面、ズビシツとヒビでも入ったかのように固まっている弟のジョエル。

「……………」

沈黙。

「ああ……お姉様」

恍惚。

少年は、姉へのプレゼントを無駄な物と言ってしまったためにフリーズ。

少女は、姉へのプレゼントで幸せな将来を夢見て。

「……………姉上にしては素晴らしい宝石の使い方ですね」

弟が一時的とは言え自らの主義をあっさり投げ捨てた瞬間であった。

「そう？私にしてはってのは余計だけど、自分でも素晴らしい使い道だと思っわ」

「姉様の誕生日は二月先だったと思いますが」

「何？ジョエルはお姉様へのプレゼントの手を抜こうってわけ？」

「そうは言ってますせん。姉上は気合が入っているなと思っただけです」

「そうね。ジョエルの100倍くらい」

「……忙しいので姉上の相手はまた今度」

「そう。私も忙しいからまた今度にしましょう」

「ええそうしましょう」

「フフフフ」

「ハハハハハ」

この二人、そりが合わないだけでなくひょっとすると仲が悪いのかもしれない。

姉弟と書いてテキと読む。

……ちょっと違うか？

少年が向かった先は姉に関して最も詳しい人物。尊敬する姉が最も信頼する人物。

「ノエルさん！」

「どうしたの？ジョエル君」

「姉上の誕生日プレゼントの準備をしていますか！？」

「当然でしょう？私はプレゼントを渡した時から来年のプレゼントを考えてるわ」

「……彼女に聞くのは無駄な事であったのだが、姉に負けた悔しさでそれに気付く余裕は無かった。」

「……流石ですね」

「フッフ、ありがとう」

「因みに、何を？」

「秘密」

「……ノエルさんの馬鹿

！！」

「あの子も相変わらずね」

走り去っていく背中を見て微笑ましい気持ちになるノエルであった。

妹と弟（後書き）

自白薬って違法でしたっけ？

魅了薬は・・・バレなきやOK！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8976j/>

---

幻獣の主

2010年10月9日21時31分発行